
未来のきみへ

安弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来のきみへ

【Nコード】

N3722U

【作者名】

安弘

【あらすじ】

天川隆人は身体が小さく控えめな性格の男子で目立つこともなく、いるのか？いないのか？さえ分からないどちらかと言えば存在感の薄い子供であった。それがイジメの対象となり、児童達のストレス発散の捌け口となっていた。唯一の味方は幼馴染の白鳥実花。彼女だけが隆人の救いだつた。ある日、隆人をイジメグループから守ろうとした実花に惨劇が起こってしまった。床一面血だらけになり動かなくなった実花。すべての原因は隆人に押し付けられてしまう。逃れられない現実にすべてを諦めようとする隆人。しかし彼に

待っていた未来は酷く絶望的なものであった・・・。

イジメの対象

うん、僕は君に伝えたいことがあるんだ。そう 君に……。

だから……生きていく。

ぼく……僕らは生きていくよ。

君に伝えたいことがあるから……。

「ここは……どこだろう？真っ暗だ。あれ……？」

辺りは真っ暗で何も見えない。地面に立っているのか、浮いているのかさえ分からない。だがタカヒトの周辺だけは妙に明るい。この時、タカヒトは自分が死んだと思っていた。しかしここがどこなのか？タカヒト自身全くわからない。何処？天国？地獄？

「まあ、いいや……別に急いでいないし……。」

これほど能天気な死人？はいない。まあ、こんな感じだから人道では苦勞したのかもしれない。タカヒトは自分が物語の世界に入り込んだと思っ少し嬉しかった。タカヒトにとって今まで生きていた場所以外なら何処でも良かったのである。真っ暗な世界を歩き続けると光輝く世界へ希望のある世界へ行けるといっそんな物語を読んだことがある。タカヒトはそんなことを考えながら道をまっすぐ歩いていく。まあ、まっすぐといっってもタカヒトがなんとなく選んだ方向に進んでいるだけなのだけれど……。どれ位の時間歩き続け

たのだろつか？光輝く世界など何処にもなく、どこまでも真っ暗な世界だけがタカヒトを包み込んでいた。

「どこまで行けば・・・ここを出られるんだらう？」

現実？はタカヒトの考えているほど甘くはなかったようだ。暗闇の世界で恐怖感に押し潰されそうなタカヒトは唇が真っ蒼になっていく感覚を初めて知った。急に走り出したタカヒトは背後から何かがやってくる恐怖に襲われていた。

「ゼエ、ゼエ、ゼエ、ハアハアハア・・・」

息苦しくなったタカヒトは立ち止まり振り返った。もちろん背後からなにかが追いかけてきているわけでもなく、安心しきったタカヒトは足に激痛を感じた。走っている最中には気づかなかったがどうやら挫いてしまったらしい。それでも辺りの風景はまったく変わってはいなかった。恐怖と痛みに涙が溢れてくるが、ここには手を差し伸べてくれる人も優しく声をかけてくれる者もない。

タカヒトは足の痛みを我慢しながら再び暗がりの中を歩きはじめた。それからしばらく歩いていると遠くにひとだまのような、なにかが見えた。暗闇に突然現れたそれにタカヒトはここが光輝く世界ではなく、とてつもなく恐ろしい世界であると連想した。

「どっ、どっしょう・・・。」

オロオロしながら辺りを見渡すが隠れる場所もない。恐怖感いっぱいタカヒトは腰を抜かしてその場に座り込んでしまった。ひとだまが次第に大きく近づいてくると同時にタカヒトの恐怖心も大きくなっていく。目を閉じて両手で頭を抱えたタカヒトはすべての終わりを悟った。

「キツ、キキキキ」とブレーキ音が響くと八つのタイヤのついた乗物がタカヒトの目の前で止まった。わりと大きめのワンボックスタイプの乗物で【とくべえのくいしんぼう】とボンネットにペイントされてある。ライトの眩しさに手で目を覆うタカヒトは腰を抜かして動く事も出来ず、その乗物を見つめることしかできなかった。タカヒトの目前で止まった車は数分程経ったであろうか？中から老人が降りて来た。

「おお？これはめずらしい。狭間に子がおるわい！・・・お主、名前は？」

白髪で鼻の下に白い髭を生やしている老人は甲高い声で驚いた。白いコックコートの着こなし見るからに料理人ようだが、その老人はタカヒトの頭から足の先までマジマジと見ている。その瞬間、タカヒトの脳裏には学校で聞いた事がある【変質者出沒】という言葉が頭を過ぎった。更に見つめてくる老人に怯えながらもタカヒトは答えた。

「えっ？ぼつ、ぼくは・・・あのお・・・タカヒト・・・っています。」

「わしはとくべえじゃ！それはそうとタカヒトや、腹は減ってはおらぬか？」

わしの自慢のパンでもどうじゃな？」

満面の笑顔でとくべえは乗物の中に入っていった。中でジューサーをまわし、それをグラスに注ぐと、とくべえは特製ジューサーをタカヒトに渡した。

「元気が出るジューサーじゃ。飲みながら待っているのじゃぞ。す

ぐに用意するでの。」

とくべえは再び乗物の中に戻り釜に火を入れた。発酵させておい
たパンを取り出すと釜で焼き始めた。こんがり焼けたいい匂いが
辺りに広がるのをタカヒトが特製ジュースを飲みながら待っている
いや、待っているのではなく、もし逃げたら何をされるかわからな
い。タカヒトの経験上？ここは大人しく指示に従ったほうがよいと
考えた。しばらくするととくべえはニコニコしながら乗物を降りて
きた。手に持ったバスケットには表面がこんがり、中はフワツとし
て見事に焼き上がったパンが入っている。目の前の焼きたてのパン
を見たタカヒトのお腹が「グウ〜」と鳴ると笑顔のとくべえはタ
カヒトにバケットを手渡す。タカヒトは恐る恐るそれを受け取った。
香ばしい匂いが広がってくるバケットを見つめるとさきほどまでの
恐怖など吹っ飛んだかのようにタカヒトから笑顔が見られた。

「わっ、おいしさそう。ちょっとおなか減ってたんだ。いただきま
あ〜す。モグモグ・・・！！おいしい！こんなおいしいパン食べ
たことないよ！」

「そうじゃろ、そうじゃろつて。このパンはわしの自慢の一品じゃ
からのあ〜。」

とくべえは自慢げな表情を見せた。タカヒトがパンを食べている
間中とくべえはパンに対する情熱とうんちく延々と語っていた。パ
ン職人のアツイ知識を披露しているのだが、タカヒトはパンを食べ
るのに夢中でほとんど話を聞いてなかった。

「うまかったか？・・・ところでタカヒトよ。これからどうするの
じゃっ。」

「どうするって・・・」

手にしたバケットをジツと見ているタカヒトにとくべえは神妙な面持ちをした。正直タカヒトは今自分がどういう状況に置かれているのか？全く理解していない。無理もなかった。タカヒトは気がついた時にはこの暗闇の場所にいたのだから。そしてとくべえという人物に出逢い「どうする？」といきなり質問されたタカヒトが答えることなど出来るわけもなかった・・・。

「何、やってんだよ！のろまあゝ。」

「かつ、返してよ！」

教室の片隅で体育の時間に着るはずの体育着を取られた男子は訴えるように言った。数人のイジメツ子はキャッチボールのように体育着の入った袋を投げ合ってはからかっている。イジメツ子のひとりだけが体育着を袋から出して二階の教室から窓の外に投げ捨てた。ゆつくりと体操着が校庭に落ちていくのをイジメツ子達はゲラゲラと笑っている。するとそこに担任の先生が入って来た。

「遊んでないで早く校庭に行きなさい！隆人くん、何やってるの？早く着替えなさい！」

先生に怒られると数名のイジメツ子は逃げるように教室を出て行った。隆人も一階に落ちていった体育着を取りに独り階段を下りていく。急いで体育着に着替えて校庭で行われているドッチボールに合流するとニヤニヤしたイジメツ子達がヒソヒソと会話をしている。嫌な感じがした隆人はビクビクしながらコート内に入るとすぐにイジメツ子の標的にされてボールを当てられ続けた。授業が終了すると泥だらけの体育着の入った袋を持ってトボトボと隆人はひとりで

下校していった。

「オラ、隆人！」

イジメっ子のひとりが背後からそつと近づいていくと隆人の背中に飛び蹴りした。うつ伏せになって地面に倒れこみ苦悶の表情をすする隆人の姿を見て彼らはゲラゲラ笑う。イジメっ子達は何事もなかったように笑いながら倒れ込んだ隆人を気にすることもなくその場を去っていった。

隆人の学校生活はいつもこんなものだった。小学校六年生の天川隆人は身体が小さく控えめな性格の男子だ。勉強がほかの子より出来るわけでもなく、運動がほかの子より出来るわけでもない。自立することもなく、いるのか？いないのか？さえ分からないどちらかと言えば存在感の薄い子供だ。それがイジメの対象になった原因なのかもしれない……。

ある日の放課後、家に帰ろうと下駄箱を開けると靴がなくなっていた。必死になって靴を探すと近くにあったゴミ箱の中にそれはあった。そしてまた別の日、国語の授業の時、机の中から教科書を出そうとすると指に刺さる感触に驚いた。ゆっくり取り出してみると教科書が破かれていた。さらに「バカ アホ 生きている価値なし」と落書きまでされていた。度重なる暴力にはもちろん集団無視もあった。

小学生は無邪気で残酷なものかもしれない。隆人は涙を流しながら誰もいない放課後の教室で教科書の落書きを消しゴムで消して、セロハンテープで破れた部分をなおしている。別に隆人が誰かを傷つけたりしたわけでもない。ただ、おとなしくしていただけ……隆人は何故自分が苛められているのかが全く分からなかった。

「もう嫌だ……なんで僕ばかりこんな目に遭うんだ！」

涙を流し破れた教科書を不器用ながらもセロハンテープでなおした。夕暮れの帰り道、隆人は後ろがいつも気になる。背中を蹴られないか？「バカ」と書かれた貼り紙を貼られないか？そんな事を気にする毎日だった。首に吊るした鍵で玄関のドアを開けると真っ先に隆人は二階に駆け上がる。ランドセルを降ろしてベッドに座るとお気に入りの本を取り出す。

ホツとする隆人だけの時間だ。誰もいない自分の部屋でおやつを食べながら物語本を読みその空想の世界に浸る。今読んでいるのは竜と戦士の物語だ。隆人にとって唯一の楽しみは誰からも危害が加えないこの瞬間だけだった。

タカヒトのいた世界

「なんの因果かわからぬが主は狭間におる。それで……。」

とくべえは淡々と話を始めた。もちろんタカヒトには何を話しているのか、最初は全く理解が出来なかった。タカヒトが生きていた世界を人道と呼び、ほかに天道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道などから構成されてこれらをまとめて六道と呼ぶ。人道に人間が生きてるようにほかの世界にもそこで生まれ生活している者達がいる。狭間とはすべての世界を繋げる鎖のようなものであるがいつでも繋がっているわけではなく、繋がったり途切れたりを繰り返しているらしい。どうして狭間が存在しているのかはとくべえにもわからなかった。本来死んだ者は狭間を通らずに別の世界に堕ちるようになっていくが稀に狭間に堕ちる者がいるとのことだった。

「よく分かんないよ。テンドウとかジンドウとか……何のこと？」

とくべえはタカヒトの隣に座るとゆつくりと語った。天道とは人間の言ういわゆる神様の世界、修羅道は血で血を洗ういくさだけがすべての世界、畜生道は獣や物の怪の世界、餓鬼道は死を待つ世界、そして地獄道は六道の中でもっとも業の深い世界である。タカヒトは真剣にとくべえの話を聞いていたが突然のことですべてあまりに大きすぎる話になかなか理解出来ない。

「ううん……あまりよくわからないけど、狭間ってどこにも属さない場所なんだね。」

それでどうすれば戻れるの？」

「戻る？タカヒトは人道に戻りたいのか？」

「戻りたい・・・あれ？戻りたいって・・・なんでここにいるんだ？」

「戻りたいって・・・何処に・・・僕は戻るつもりなんだろう？」

タカヒトが戻りたいと願う場所はどこなのか？タカヒトがこの狭間に墮ちるキツカケとなる事件は彼がまだ人道にいるときに起こった。

「五味先生・・・まだですか？はやくしてくださいね。」

「はっ、はい！すっ、すみません！」

隆人の担任教師の五味は頭を下げ続けた。彼女は今年入ってきたばかりの新任の教師だ。学校を変えていこうと夢を抱いて教師になったわけだが現実が違う。いや実を言うと彼女はこの学校が教師生活の最初だったわけではないのだ。この学校へ来る前に別の学校へ行っていたがその学校をやめている。理由は体調を崩した為である。そのように児童やPTAには伝えたが実際は重度のうつ病に悩まされていた。当時、五味先生はその学校で四年生を担当していたが進学校であったために親からの進路に関する問い合わせが異常に多かった。電話での対応も多かったが学校に児童の保護者が乗り込んでくることもあった。五味先生は校長と共に対応に当たったが彼女は保護者が帰ったあと校長に頭を下げていた。五味先生は世間で言う要領の悪い人だった。教室での保護者と児童との三者面談があった日のことだ。一日八名の児童との面談をこなさなくてはならないのだが彼女は・・・。

「先生、聞いてよ！うちの馬鹿息子ときたら・・・。」

「は……はあ……。」

「先生は結婚なされてないから子供の気持ちとかわからないかもしれないうすけどね。」

私の教育方針としては……。」

「えっ……ええ、そうですね……。」

「先生！うちの子はどんな事をしてもあの進学校のT学校に願います！」

「……。」

保護者の子供に対する愚痴、教師相手の自分勝手な教育論、雑談、成績を考慮せず無理な有名学校への合格希望など保護者の一方的な相談に振り回され面談をこなせなくなっていた。五味先生は保護者や管理職の教師・同僚の教師から出来損ないのレッテルを貼られ苦しんだ。

「まったく、五味先生は段取りと言うか……要領が悪いですな！」

「ほんと、私などあの人の尻拭いばかりしてますからね！」

「がっはっはっはっ、まあまあ、先生方そう言わずに！」

五味先生もあれでも頑張っているんだと思いますよ！たぶんね。あっはっはっはっ。」

周囲の五味先生への態度は児童にまで伝わり児童すら五味先生の

言う事を聞かなくなっていた。まさに学級崩壊である。その頃、国による教育改革が提唱され新学習指導要領が発行された。現場の教師への負担はさらに重くなり五味先生は夜遅くまで教育指導に関する文書作りに追われていた。五味先生には教師の教育能力向上プランも適用されて自身の教育に関する論文も作成しなければならなかった。教科指導、児童指導、校務分掌や雑用、学校行事の準備、管理職からの叱咤、保護者からの罵声、同僚の教師からの無関心、無協力、児童からの無能者扱い・・・心も身体も次第に衰退して心身崩壊のもと学校を去ることとなった。

「お父様・・・私はもう教師には・・・」

「学校のほうには私から説明してある。おまえも兄の立場を考えなさい。」

五味先生がうつ病となり入院してから三年の歳月が過ぎていた。病状もすっかり良くなり五味先生は退院していた。五味家は兄が教育委員会に勤めて若くして管理職に就いているエリート。父親は国立大学の名誉教授で学校教育論を唱える著名な人物であった。五味先生は学校とは関わらない仕事に就くつもりでいたが父親と兄がそれを認めない。五味先生はもう一度教師にさせられてしまいその学校が隆人達の通う学校だったのだ。

「五味先生・・・まあ、いろいろ聞いてはおるが宜しくお願いますよ。」

校長は五味先生の教育能力を通知にて把握はしていたが教育委員会の決定には逆らえず五味先生を学校に受け入れた。こうして五味先生は教師生活を再スタートさせたわけだが以前と違い進学校ではないこの学校では五味先生を悩ませる保護者はあまりいない。新学

習指導要領が普及してかなり経つたので教師達の負担も以前と比べると落ち着いていた。ただそれでもまったくないというわけではなかった……。

「五味先生！隆人君が苛められてるみたいです。」

「えっ？……イジメ？」

隆人と同じクラスの白鳥実花が職員室にいる五味先生に報告していた。

「わっ、分かったわ。すぐに行くから……。」

実花を教室へ帰したが五味先生はその場を動かなかった。新学習指導要領により教師の児童へ対する体罰が禁止されている。口だけで言うて言うことを聞く児童だけではなく以前は手をあげたこともあった。しかし新学習指導要領により手をあげれば教師が罰せられるのである。児童にもいつのまにか新学習指導要領の内容が伝わり教師が手をあげなくなると知るとその行動はどんどんエスカレートしていった。担当するクラスには五味先生と同じ位の身長の子が大樹という児童がいてイジメっ子のリーダー格である。五味先生は大樹を恐れていた。前の学校での数々の負担、恐怖感が大樹と重なったのである。それを悟られないように自分では行動していたつもりだった。しかし大樹は頭のいい児童で五味先生の自分への態度を察していた。その上で大樹は自分を筆頭とするクラス造りを始める。どんな生態系でもそうだが天敵さえいなければその生物は増え続ける。五味先生の経験不足と恐怖感が強者と弱者を作り上げ大樹を筆頭とするクラスの児童が隆人をいじめる構図が出来たのである。

「おい、隆人 ちよつとこつちに来いよ！」

「えっ？・・・うつ、うん・・・」

放課後になると隆人は大樹達に呼ばれて男子トイレに入っていた。服を脱ぐように指示されたが隆人はそれを拒絶した。激怒した大樹が隆人の腹部をおもいきり蹴りつけると体重の軽い隆人は簡単に壁へ吹っ飛んでいった。

「ふうっ・・・ゲホツ、ゲホツ・・・」

息も出来ず、下腹部をおさえ苦悶の表情をする隆人を見て大樹はゲラゲラと笑った。大樹はそのまま水道の蛇口をひねるとホースから出てくる冷水を隆人に浴びせた。ズボ濡れの隆人は逃げるようにトイレの個室に入っていくと大樹達は笑いながらトイレから出ていった。誰もいなくなったトイレでしばらくの間、隆人は激痛で立ち上がることが出来なかった。大樹達がいらないことを確認すると下腹部をおさえながら階段をのぼっていく。隆人は濡れた服を乾かそうと夕日が傾くまで屋上にいた。

「そんなに濡れて何かあったの？」

「ううん、なんでもないよ。遊んでたらつい・・・」

隆人の父親は彼がまだ二歳位の頃、病気で他界していて母親は女手ひとつで隆人を育てていた。そんな母親を心配させるわけにはいかず隆人はいじめられていることを黙っていた。家に帰ったときも濡れた理由は釣りをしていたら石につまずき転んだと言い訳していた。

それから一週間ほど経ったある日のことだ。当初より予定されていた学校の行事で隆人達は修学旅行に行くのだがその事前教育として

日帰りの研修が行われることになった。自立心を高める事を目的としてクラスでグループを作りグループ別に研修地へのルートを決めて行動するレクレーションがあった。この行事を提案したのはPTA会長であり、国会議員の白鳥一郎である。

「白鳥先生・・・いくらなんでも子供達だけで行動させるのは危険ではないでしょうか？」

「ん？校長・・・私の教育方針に間違いでもあると？」

「いえいえ、そういうことはありません。」

学校としてはリスクが多く取り止めたかったのだがPTA会長でテレビ出演でも話題の国会議員である白鳥の言動は絶対であり校長や教師達は言いなりとなるしかなかった。レクレーションの当日、校庭に集まった児童や保護者、学校関係者を前に白鳥議員のスピーチは学校中に響き渡っていた。その声が響き渡る校庭で隆人は大樹と同じグループとなっていてこれから始まるであろう恐怖に怯えていた。白鳥議員の長いスピーチは終わり各グループが校庭を出て研修地を目指していく。最初の頃は大樹のグループもほかのグループと同様のルートを歩いていたが誰にも悟られないようにルートを変更していくとほかのグループと離れて大樹のグループは単独行動になった。

「おい、隆人。これ持てよ！」

大樹は辺りを見渡してニヤリと笑みを浮かべると自分の持つていた荷物を隆人に押し付けた。それを見たほかの三名の男子も次々と荷物を押し付けた。五人分の荷物を持つのはかなり辛かったがそれを嘲笑うように大樹達は軽々とした様子で隆人の前方を歩いていた。

「あゝあ かつたりいゝなあゝ・・・おい、隆人早く着いて来いよあゝ！」

大樹の罵声に続いてほかの三名の男子も罵声を浴びせる。隆人も必死に着いて行こうとするが小学生の力では五人分の荷物はあまりにも重すぎた。

「なんか喉が渴かねえ？」

大樹が言うと一人の男子が隆人に近づいてきた。

「隆人、ジュース買うから財布を出せ！」

「嫌だ！このお金は病気の母さんが昼間のご飯代にくれたんだ。」

隆人の母親は仕事の無理が重なり今、病気で床に臥せている。母親は朝と夕方の食事を隆人に用意しているのだが昼間だけはお昼の弁当代にお金を渡していた。しかし隆人は少しでも母親への負担を減らそうと昼間は食パンのみで貰った金を貯め込んでいた。何かあったらお金がいるという隆人なりの母親へのいたわりがあったのだろう。そんな隆人から強引に財布を奪い取ると自動販売機でジュースを買い四人はゴクゴクと飲みほした。

「プハアゝ・・・うめえゝ！」

大樹はタクシーを止めると皆で乗り込んだ。小学生だけでタクシーに乗る事に運転手も困惑したが大樹の巧みな言葉にすっかり騙された運転手は研修所へと車を走らせた。もちろんこのタクシー代も取り上げた隆人の財布から出された。タクシーを降りると研修所に

は誰もいなかった。一番乗りであったのだがほかのグループが来るまでの間、大樹達は退屈だった。暇な時間を有効に使おうと大樹達は暇つぶしに隆人を苛めた。ここで言う暇つぶしとは大樹達にとつてであり隆人にとっては苦しみそのものである。

「やめて！やめてよ！」

季節は秋であったが肌寒い時期だった。研修地の建物近くの小川で隆人はびしょ濡れになっていた。大樹の命令により三人の男子は隆人に水を掛け続けたのだ。隆人がどんなに嫌がっても男子達は大樹に怯え水かけを止めようとはしなかった。

「おい、お前らどけ！いくぞ、オラ！！」

嫌がる隆人を見て興奮した大樹は隆人に向かって走り出しプロレスの真似をして飛び蹴りをした。小柄で体重の軽い隆人はその衝撃で小川を滑るように飛んでいった。

「ズサアアア・・・うつ、い・・・たい。」

背中や足を小石のゴロゴロした川底に打ちつけた隆人は痛みに顔をゆがめた。擦り切れた皮膚から血が流れそれは川の流れと共に流されていく。それでも大樹のイジメは加速していく。小川で倒れ込んでいる隆人の髪の毛を掴むと川底に頭を押し付けた。息が出来なくなりもがいている姿を大樹は面白がって隆人の顔を川底より再び持ち上げた。

「オラオラ、どうした！ギブアップか？」

「ゲボツゲボツ、やめ・・・やめて・・・よ・・・」

か細い隆人の声に大樹の行動は更にエスカレートしていく。力任せに大樹は隆人の頭を川底に押し付けては持ち上げる行動を続けていく。次第に隆人の顔色が蒼くなっていくとほかの三人の男子はその大樹の姿に恐怖した。隆人がグツタリしだした頃、女子達の声が聞こえてきた。

「大樹君、実花達が来たよ！」

ひとりの男子が声をかけると大樹は舌打しながら隆人の頭を放した。実花はグループの女子達と話しながら歩いていると研修地の近くの小川で大樹達がいるのを見つけた。そして実花は大樹の近くで隆人が倒れているのを発見した。小川のほうへ走っていく実花は意識を失っていた隆人に駆け寄った。

「隆ちゃん！どうしたの？・・・大樹！隆ちゃんに何をしたの？」

「何もしてねえよ！隆人が足を滑らせて倒れたんだ。なあ、みんな！そつだよな？」

「そつだ。隆人が勝手に転んだんだ！」

大樹の問い掛けに三人の男子達は声を揃えて言った。実花はその言葉をまったく信じてはいないがとにかく隆人の容態を心配して教師達を呼びに研修地まで走っていった。すぐに教師達が駆け寄ってきて隆人を車に乗せて病院へ連れていく。大樹は隆人が足を踏み外して小川に落ちたと説明する。五味先生はパニックに陥りながらもほかの教師の協力もあってなんとかレクレーションを終わらせて児童達を下校させた。その日から隆人は打ち身と高熱にうなされて一週間ほど学校を休んだ。

いじめの末路

「隆人・・・本当に大丈夫？まだ、休んでもいいんだよ。」

「もう、大丈夫だよ。遊んでて転んだだけなのに母さん心配しすぎだよ。」

笑顔の隆人は玄関を閉めると学校へと足を進めた。正直学校には行きたくないが母親を心配させまいと無理をしていた。トボトボと学校の門をくぐり廊下を歩いていく。廊下では皆楽しそうに話をしている。タカヒトのことなど誰の目にも止まらないようだ。教室の中に入っていくと隆人の机には花瓶が置いてあった。白い菊の花が一輪だけ。辺りを見渡すとみんながクスクスと笑っている。隆人はため息をついてそれを片付けていると女の子がひとり近づいてきた。隆人の唯一の味方であり白鳥議員の一人娘の白鳥実花である。

「隆ちゃん、手伝うよ。」

実花は机の上の花瓶を持ち上げるとハンカチで濡れた机の上を綺麗に拭いていく。

「ありがとう、実花ちゃん。」

「隆ちゃん、いつもいいなりにならないで嫌だったら嫌って言わないと駄目だよ。」

実花は隆人にそう促したが大樹の報復が怖くてどうしても言い返す事が出来ずにいた。隆人も心の中でその事について考えてはいた。

（実花ちゃんの言う通りだ。これじゃあ、いつまでたつても状況は変わらない。）

隆人と実花が花を片付け終えようとした時イジメっ子の集団の中からひとりの大柄の男子が出てきた。大樹である。このクラスのリーダー格で身長がタカヒトより20センチ高く体格もいい。今年のわんぱく子供相撲で優勝した彼の将来は「横綱か！」と大人に期待されている。西小の大樹といえばこの地域の小学校の男子で知らない子供はいない位だ。もちろんこのクラスはおるか学校の全児童の中で大樹に逆らう児童はいない。

「せつかく用意したのに何すんだよ。元にもどせ！」

「こんなことして何が楽しいの？」

実花が激しい口調で言った。クラス委員長をしている実花から見ても大樹の行動は目に余るものがあつた。しかし大樹にはクラスの児童はおるか教師の五味までもが逆らえずにいる。そして今隆人に対するイジメも判っていた。正義感が強い実花は今のクラスの現状を黙ってはいられなかつた。

「隆人！これ気に入ってるよな？おまえのためにわざわざ用意したんだからな！」

大樹は隆人に近づいて行くと見下しながら鼻息荒く言った。それは逆らつたらただではすまさないぞ！と言わんばかりの表情だつた。隆人は怯えながらも状況を変えたいと考えて声は小さいがなんとか拒否をしようと心に決めた。

「あのね・・・大樹君・・・僕は・・・もう・・・」

隆人が意を決して言おうとすると大樹はそれらを一掃するように激しい口調で叫んだ。

「おまえに決める権利なんかないんだよ！」

クラスの空気は一瞬にして凍りついた。大樹の顔は恐ろしい表情をして隆人は蛇に睨まれた蛙のように身動きとれない。いや隆人だけではない。クラスにいたすべての児童の身体が凍りついていたのだ。ただひとりを除いては……。

「いいかげんにしてよ！」

花瓶を持った実花は隆人を守るように大樹と隆人の間に割って入った。隆人が精一杯の抵抗を見せたのだから実花も懸命になって大樹から隆人を守ろうとした。実花の行動にクラスの凍りついていた一部の女子達が声をあげて抵抗してきた。女子の小さな抵抗だったが大樹には不愉快である。いままですべてを思い通りにしてきた大樹にとって実花を中心とした女子の抵抗は彼の理性を失わせるのに十分だった。

「うるせえ、歯向かうんじゃないねえ！」

実花の行動に顔を真っ赤にして怒り狂った大樹は実花から花瓶を取り上げるとそれを実花に投げつけた。「ゴツ！」と鈍い音がすると同時に実花はうずくまりそのままうつぶせに倒れると頭から流れた血が教室の床に広がった。児童達は何か起こったのか理解できずに静まった時間が流れたが次の瞬間その空間は悲鳴でいっぱいになった。

「きゃああああ〜！！」

実花の周りには女子児童が集まり意識もなく倒れている実花の名前を泣き叫びながら数名の女子児童が叫んでいた。悲鳴を聞きつけた五味先生が教室に走り入ってきた。五味先生の目に映ったのは床が血だらけになりその中心に意識のない実花が倒れていた姿だった。

「どうしたの？実花ちゃん！しっかりして。何があったの？」

五味先生は驚き慌てたがほかの教師達も駆けつけてきてすぐに救急車を呼び実花は病院へ運ばれていった。教室では大樹が泣きながら教師に説明していた。隆人が急に暴れて実花に花瓶を投げつけた。もちろんそれが嘘だということはクラスのすべての児童は分かっていた。だが児童達は大樹に逆らい報復に遭うのが怖かった。大樹を恐れ顔が青ざめている子供、シヨックと自己嫌悪で泣き止まない子供達。何もわからないでいる教師達は子供達をなだめながら下校させた。ただ独り隆人を残して・・・。

「隆人くん！なんであんな事したの？」

五味先生の罵声が響く職員室で隆人は数人に教師に囲まれていた。どうやら大樹の思惑通りに隆人がやった事になっているらしい。何とか説明しようとするがしどろもどろの隆人の話など聞くわけもなく教師達は話合いをする。今後の自分達について。そこへ病院から電話を受けた教師のひとりが「白鳥実花の意識が戻らない」と蒼ざめた表情で言った。動揺する教師達の所へ校長室から校長先生がハンカチで顔の汗を拭いながらやってきた。校長先生は教師達からこの経緯を聞きだした。

「まずいことになった。白鳥実花といえば父親は白鳥議員。PT

Aや教育委員会、マスコミが心配だ。あと一年で定年なのに・・・五味先生なんてことをしてくれただんだ！」

「申し訳ございません。申し訳ございません！校長先生」

校長先生は声を荒げた。顔は赤くなり吹き出る汗をしきりに拭いているがハンカチはグツシヨリ濡れている。五味先生の顔は蒼ざめていて頭を下げ続けた。どんなに五味先生が頭を下げ続けても校長先生の怒りは収まらずその怒りは加速していった。そこへ教頭が走って職員室に入ってきた。服装は乱れいかにも形振りかまわず来ましたと思わせんばかりの姿だ。この教頭は非常に頭が切れる男だ。無能な校長の推薦がないと自分が次期校長にはなれないと考えて校長に嫌々ながら従っている。

「校長！PTAと教育委員会の根回しは済みました。マスコミも大丈夫です。

ただ、議員のほうは・・・」

「おお、そうかね！さすがは教頭先生だ！」

教頭の一言に校長は安心した。校長先生には教頭の魂胆などわかる訳もなく自分を助けてくれる優秀な人材だと思っていた。校長がただひとつの問題について対策を練っているとそのたったひとつの問題がやってきた。

「これはどういうことだ、校長！何故、私の娘なんだ！」

体格がよく背もスラツとしている男性が怒鳴り込んできた。高額なスーツを身にまといているが顔はものすごい形相をしている。校長先生は濡れたハンカチで汗を拭いながら挨拶をする。この時の校

長先生の頭の中では保身と言い逃れの言葉を探していた。

「これは、白鳥先生……ご足労願いました。」

「御託はいい。理由を言え！」

白鳥議員は意気込んでいるのは無理もなかった。一人娘が怪我をした上、意識不明の状態で病院にいるのだから。校長先生は今回の事件についての首謀者と被害を受けた実花の事を白鳥議員に話した。白鳥議員は校長先生の話聞きながらも近くに立っている首謀者の隆人を睨み続けていた。隆人が実花を傷つけたのではないが職員室の異様な空気に隆人は自分が実花を傷つけたような錯覚を起こしていった。校長先生の話が終わると白鳥議員は激怒した表情で隆人のもとへ近づいて睨みつけた。

「貴様がうちの実花を……。校長！今回の件の対処はわかっているだろうな！」

白鳥議員は顔を真っ赤にして隆人を睨み付けながら怒鳴り散らした。しかるべき処置を取ることを約束すると校長先生を始め、教頭やほかすべての教師達は白鳥議員に頭を下げ続けた。白鳥議員は隆人を再び睨み付けると職員室を出て行った。

「これは困った。いや、もしもの事があれば私の職歴にキズが……
五味先生、ちゃんとしてくださいよ！」

校長は教頭を連れて校長室に消えて行った。これからのマスコミなどの対応相談らしい。頭を下げ続けた五味先生は疲れ切った表情で椅子に転げ落ちるように座った。そして立ちすくんでいる隆人を

睨みつけると職員室中に響くくらいの大きな声で叫びだした。

「隆人くん！なんてことしてくれたの！先生に迷惑かけてそんなに楽しいの？・・・
もういいから早く帰りなさい。はやく、出てって・・・出て行け！
！」

ヒステリーを起こした五味先生の口調は次第に激しく厳しいなっていく。その後、頭を抱えて苦しそうな表情をする。五味先生を心配してほかの教師達も五味先生をかばいだした。この空間で憎しみや憤りの視線が一気に隆人を襲った。教師達の視線に居られなくなった隆人は後退りすると逃げるように職員室を出て行った。

隆人は逃げるように職員室を出て行く。いや逃げるようではなく逃げたのだ。ただ怖かった。自分のせいにさせられたのも怖かったがそれ以上に実花の意識がないのに教師達は自分の保身ばかり考えていることが恐ろしかった。隆人には教師達が見えなかった。

人の形をした別の何かに見えていた・・・。

それがとても怖かった。走った。ただ走った。辺りはもう真っ暗で秋とはいえ夜は冷え込んでいる。寒空の中隆人はただ独り走っていた。汗だくになり足はもつれその場に倒れこんだ。涙と埃まみれの隆人の身体は冷え切ったアスファルトにより少しずつ体温を奪われていく。

「もうどうでもいい・・・。」

そんな思いが隆人の頭をよぎり冷え切ったアスファルトの上に寝そべっていると実花の顔が隆人の脳裏に入ってきた。

「実花ちゃんのところ・・・会って謝まるんだ。」

隆人はゆっくり立ち上がるとズボンの埃を払って涙を拭くと病院を指した。時計はすでに九時をまわっていて病院に着いた時には白い巨大な建物は暗く静まり返っていた。その空間は異質で隆人は急に怖くなった。

「なんか怖い。化けとか出てこないよね？もし出てきたらどうしよう？」

でも実花ちゃん・・・。」

そう自分の心に言い聞かせると隆人は少しずつ前に進んだ。病院の窓やドアはすべて閉じられていたがそこにひとりの職員らしき人物が出てきた。その人物はそのまま駐車場へ向かうと車のトランクを開けて何かを探していた。病院へ入るドアは開いている。隆人は辺りを注意しながらそのドアから病院内に入ることに成功した。しかし病院は広く実花がどこの病棟にいるか？何階にいるのかも分からなかった。

「どうしよう・・・どこの病棟に実花ちゃんいるんだろ？」

病棟内中を歩き回ったが実花のいる部屋は見つからない。隆人は歩き疲れてその場に座り込んでしまった。座り込んでいると隆人の方に向かってくるライトの光が見えた。どうやら巡回の看護師のようだ。

「誰か来る！」

そう思った隆人は近くにあった長椅子の下に潜り込んだ。ライトの光はどんどん近づいてきた。それはふたりの看護師で実花の容態

について話をしていた。

「実花ちゃんの容態はどうでしょう？」

「意識がないので何とも言えないけど心配だわ。身体はほとんど無傷なのにね。」

ふたりの看護師は話をしながら隆人の前を通り過ぎていった。音を立てずに看護師が通り過ぎるのを待っていると思いきもよらず実花の情報を得ることが出来た。

「実花ちゃんはおっちだ！」

そう思った隆人は長椅子から出て看護師の来た方へ向かった。【白鳥 実花】と書かれたネームプレートはすぐに見つけた。個室のようだが【面会謝絶】と書かれてある。隆人はノブを回すとドアをゆっくり開いた。ビニールのカーテンがベッドのまわりを覆っていてベッドの上には実花が寝ていた。実花の頭は包帯で巻かれ酸素マスクが取り付けられている。腕には点滴の注射針が刺さり青ざめた表情をした実花に意識はない。

「……………」

ただ人形のように横たわっている実花を見て言葉を失った。隆人はいろいろな想いを頭に巡らせながらこの場に辿りついた。謝罪の言葉もたくさん考えた。だが実花の姿を見て頭が真っ白になってしまった。恐怖に身体は震え後ずさりするとビニールカーテンが身体に巻きついていた。

「うわあ……………」

恐怖を振り払うようにビニールカーテンから離れるが立ち上がる
ことが出来ない。震える手足を使い四つん這いの姿で這いずりなが
らドアノブにしがみつく。歯がカタカタと音が鳴り汗がダラダラと
流れてくる。もう一度実花の姿を見る勇氣はなかった。ベッドの上
に寝ていたのは実花には見えなかった。ドアノブをまわし転がるよ
うに廊下に出た。心臓の鼓動音は激しく息切れもした。

「ハアハアハア・・・苦しい・・・息が・・・出来ない・・・」

廊下の窓から外を見ると普段の光景が恐ろしいものに見えた。震
える身体を抑えながら廊下を歩いていくと向かいの病棟にポツリポ
ツリと明かりが見えた。巡回中の看護師が戻ってきた。目を大きく
見開いた隆人は靴を脱いで靴下姿になると素早く廊下を走り階段を
降りていった。

「ゼエゼエゼエゼエ・・・」

隆人は無言のまま病院を出てきたが涙はずっと止まらなかった。
外に出ると雨が降っていた。それは隆人の涙を隠すように降り続い
た。秋の雨は次第に激しく降るとそのうち雨は季節外れの雪に変わ
った。隆人の身体は冷え切っていたがそれは身体だけではないよう
だ。

「嫌だ・・・何でこんな辛い目ばかりに遭うんだ。苦しい事ばっ
かりじゃないか。」

生きていても何も良い事なんか無いんだ。

生きるのが辛い・・・もう嫌だ！苦しみだけの人生を生きていく
のはもう・・・」

ただ一人雪の夜空を歩き続けた。気温はどんどん下がり辺りは白一色に染まっていた。気が付くと昔よく遊んでいた公園に辿り着いた。ブランコにすべり台、砂場が妙に懐かしかった。

「ここでよく遊んだっけ。あの頃は楽しかったなあ〜・・・なんでこんな事になっちゃったんだろう？」

ここは昼間では子供達でにぎわう公園だが雪の降る真夜中の公園には誰もいるわけはなかった。公園の中央には人工的に作られた小さな丘があった。その中にはコンクリート管が埋められてトンネルのように子供達が行き来できるようになっている。隆人は土管の中に入り込んで座った。そんな悲しみと絶望だけが支配した空間に一匹の子犬が紛れ込んできた。

「おまえも独り？」

子犬は寄り添うように隆人の傍らに来た。抱きかかえた子犬をよく見ると子犬の身体は痩せ細りたくさんのキズ跡がある。その姿を見たときに隆人は子犬に自分の姿を見た。

「おまえも僕と一緒になんだ。だったらずっと一緒にいる？僕なんだか眠くなつて・・・」

何時間位そのコンクリート管の中にいたのだろうか？タカヒトは子犬を抱きしめたままずっと座り込んでいた。

「お〜い、タカヒトお〜」

「どこにいったんだ？そっちはいたか？」

「いや、こっちにはいない！どこにいったんだ！」

しばらくすると遠くのほうから呼び声が聞こえた。隆人が帰って来ないことを心配した母親が近所の人達の助けを借りて搜索をお願いしていたのだ。たくさんの人達の隆人を呼ぶ声が聞こえてきた。しかし隆人にはその声は聞こえないようだ。子犬も隆人の頬を舐めているが何の反応も無かった・・・。

戻る理由

「戻らなくてもいいかな・・・戻ったっていいことないし。」

「まあ、主がよければいいんじゃないが・・・しかし歯車は変わるが
のお。」

「歯車？・・・歯車ってなに？」

「主はひとりで生きている訳ではないということじゃ。主は両親
の愛があったからこそ生まれた。そのまた父母もタカヒトのおじい
さんやおばあさんがおったから生まれたのじゃ。つまり主は両親が
いたから祖父祖母がいたから存在しておる。」

「そんなのあたりまえだよ。」

「では主がいなくなる事で主の子供や孫はどうなる？」

「子供や孫ってぼくはまだ小学生だよ！」

「いずれは成長して大人になる。好きな相手も出来て家族を作る
かもしれん。もしくは世のためになる何かを発明するかもしれん。
誰かを助ける存在になるかもしれん。人の世とはそういうひとりひ
とりの歯車によって成り立っておるのじゃ。じゃから役に立たない
【いらぬ人間】などおらんということじゃ！」

「でも・・・僕なんか役に立つなんて・・・思えないし・・・」

「戻る・・・理由はなさそうかの・・・。」

「・・・。」

戻る理由・・・隆人には思いつかなかった。たとえ戻ったとしてもまた大樹達に苛められる日々が続く。それに唯一の味方であった実花を傷つけてしまったことでもはや隆人を助けてくれる者は誰もいない。そんな世界に戻ったところで隆人に希望などあるわけがない。

「さて食べ終わったバスケットを返してくれるか。片付けたいんじゃない。」

タカヒトはとくべえにバスケットを返そうとした瞬間ある光景が頭を過ぎった。バスケットを受け取るうしているとくべえだがタカヒトは一点を見つめながらバスケットを離そうとしなかった。

「タカヒトや・・・？」

「とくべえさん・・・お母さんはどうしてるの・・・僕のおかあさんは？」

お母さんは身体を壊して寝ているんだ。どうしているのか知ってる？」

「細かいことはわからんが・・・子供を失って悲しまない親はいないじゃろつな。」

タカヒト、バスケットを返してくれ。」

「あつ、うん・・・。」

バスケットを受け取るとくべえは片付けだした。鼻歌を歌いながら軽快なステップで清掃をしている。片付けが終わりその場を去ろうとしたとくべえにタカヒトが言った。

「とくべえさん・・・僕が戻るって言ったら・・・助けてくれる？」

「戻る理由が見つかったかの？」

「お母さん・・・きつと、悲しんでいると思う。お父さんが居なくなつてからずっと頑張ってきたんだ。僕までいなくなつたら・・・それにお母さん身体壊しているし、僕が助けないと誰もいないから・・・だから。」

「だから？」

「だから・・・僕、戻りたい！戻ってお母さんを助ける。それに・・・」

「それに？」

「それにミカちゃんのことも気になる。なんていうか・・・わからないけどミカちゃんが死んだとは思えないんだ。意識はなかったけど・・・かならず会える気がするんだ。もう一度会ってちゃんと謝りたい。守れなかったことを謝りたい！」

「謝つたところで許してくれるか分からんがのお。」

「それでも・・・たとえどんなことが待っていたとしてもお母さんを助けるのは僕しかいない。ミカちゃんだつてずっと僕が看病す

ればきつと良くなるはずなんだ！とくべえさん、どうすれば戻れるの？」

「そう急くな。どうすれば戻れるのかは正直わからん！どこに行くのかもじゃ・・・この狭間は常に動いておる。人道へ繋がっているかと思えば次の瞬間には人道の繋がりは切れておる。すぐ戻れるかもしれない永久に戻れんかもしれない。まあ、いずれにしても行動せねば願いは叶わん！これを持っていくがよい。本来は渡すモノではないのじゃが今回は特別じゃ。」

とくべえは二つの水筒を取り出すとタカヒトに見せた。それは赤い液体の入った水筒と青い液体の入った水筒だった。赤い液体の入った水筒を徳の水筒と言い、青い液体の入った水筒を業の水筒と呼んだ。不思議がるタカヒトにとくべえは説明を始めた。

「タカヒトよ！人は・・・いや、すべての者は何の為に生まれるか知っておるか？

すべての者は業を処理する為に生まれるのじゃ。人道・・・つまり人間界に生まれた者はそれだけで罪人なのじゃ。」

「えつ、なんで？僕は罪人なの？」

更に疑問の増すタカヒトにとくべえは説明を続けた。六道は上段から天道・人道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道と構成されている。例え天道に生きていたとしても業を溜め込み寿命を終えたとその魂は業の量に相当する世界に生まれ堕ちる。魂には前世の記憶は全くないが業だけは受け継がれる。堕ちた世界で業は受け継がれる訳だがそれを消化して天命を終えれば堕ちた世界より上段の世界へ転生出来る。もし消化出来なければ更に下段の世界へ堕ちていくらしい。つまりとくべえの説明だと狭間にいるタカヒトも業を消化し

ていけば人道に戻れる可能性があるのだと言っ。

「ううーん、やっぱり分からないよ。」

「仕方がないの。ならば実際に見せてやろうかのお。わしの肩につかまるのじゃ！」

「えっ、肩に？なんで・・・うわああああ~~~~」

タカヒトはとくべえの肩に触れると一瞬にして見たこともない空間に飛ばされていた。トンネルのようにも見えるが何色にも見えない渦巻きにも見える。そのトンネルを進んでいる？落ちている？それすら分からないがとくべえとタカヒトはその先へ向かっていった。

「振り落とされるでないぞ！ここは時空の流れの中。落ちたら何処にも戻れぬぞ！」

タカヒトは落とされないようにとくべえにしつかりとしがみついていると時空の流れのトンネルを抜けて見た事がある世界に辿り着いた。そこはタカヒトが生きていた世界、人道であった。ビル郡を見下ろしながら空中を飛んでいるとくべえにしがみついているタカヒトはキョロキョロと辺りを見渡しているがそこは全く知らない場所であった。たくさんの人達が行き来していてビルの谷間を飛んでいるがとくべえとタカヒトの姿には誰も気づかれない。どうやらほかの人々には見えないらしく皆、一生懸命に仕事をしている。

「霊体となっておる我々に誰も気づくことはなかるう。まあ、いわゆるお化けと呼ばれる存在じゃな。さてタカヒトに見せたい人物がおる。あれじゃ！」

とくべえの指さす方向にはひとりの男がいた。この地域でもっとも高いビルの最上階でその男は高価そうに見える革製の立派な椅子に腰掛けていた。男の名は佐伯 源次郎と言つて若干三十五歳でありながら都心に複数のビルを所有する不動産王である。沢山の資料に目を通して常に電話をしている姿は忙しそうだった。佐伯は椅子から立ち上がると窓の外を眺めた。その瞬間タカヒトは見られたと感じて目を覆うがもちろん佐伯から見えるわけではない。部屋に部下らしき人物が入ってくると佐伯は椅子に座りなにやら会話をしているようだ。

「出来ればそうしてほしいのだが……おまえに任すことにする。頑張ってくれ！」

佐伯が声を掛けると部下は一礼して部屋を出ていった。すると別のドアから女性が入ってきて佐伯に笑顔で何かを言っていた。佐伯は若くしてこの地位まで昇りつめた成功者つまり徳の量が多い者だった。この男の前世、つまり前の魂の持ち主は高等な住職であり例え自分が損しても苦しんでも他の者の為に懸命に働いた人物であった。故にその住職の魂を受け継いだこの男には生まれつき徳の量が他の者よりも多く生まれ出でてから今までたいした困難もなくすべてのことがうまくいっていた。金、女、仕事……すべてが思い通りとなった。なぜなら徳の量が多いからであり彼自身は己の力と過信しているが実際は彼ひとりの力ではなかったのだ。

「今度の犠牲者は彼なのね？」

「ああ、ヤツには大変稼いでもらった。だが知りすぎた。始末しておかなければな！」

佐伯は受話器を取り上げると誰かと話をしていった。話の内容は夕

カヒトにはよくわからなかったのだが最後の言葉だけは理解できた。佐伯はこう言ったのだ。

殺していつもの場所に処理しておけと……。

「とくべえさん、あの人何をする気なの？」

「どうやら自分の部下を殺すようじゃな！ まったく……

どうして人間ってヤツは幸せを失う方向へと歩むのじゃろうかのお
」。

この時見たとくべえの横顔はとても悲しそうな表情だった。しばらくするととくべえはタカヒトを連れてまた時空の流れの中へと入っていった。タカヒトが時空の流れを見つめると先ほどの部下の男が何者かに殺されているシーンがまるでドラマのように見えた。しかしこれは現実の出来事なのである。次にとくべえが時空の流れから出た場所は葬式場だった。

「ここは何処……あれってお葬式？」

「そうじゃ、先ほどよりも数十年ほど経ったかのおく……ホレ、見てみい！」

タカヒトが葬儀場を見つめると遺影写真には年老いた佐伯が写っていた。開いた口の塞がらないタカヒトにとくべえはゆっくりと説明を始めた。タカヒトにとっては一瞬の出来事であるが現実の人道の世界では数十年ほどが経っていた。佐伯はその後、更に実績を上げて会社の規模も大きくなり続けていった。しかしそれは佐伯が他の邪魔な存在をすべて蹴落としていったからである。不動産王として君臨していた頃、佐伯の身体は病魔に侵されていた。

「ワシの・・・会社を・・・ワシ・・・」

病院のベッドの上で佐伯は死んでいった。そして今、葬儀が行われているがそれは佐伯が死んでから実に一ヶ月ほど経っていたのだ。それは佐伯の死があまりに突然で医師の診断からも事件性があると解釈されて警察が事件解明に動いていたからであった。この後に数十名の男女が捕まるのだがその中にある時佐伯の傍にいた愛人の姿もあった。葬儀の最中に遺影の上になにやらボンヤリと浮かんでいるモノがあった。

「ねえ・・・アレ何？なんか浮かんでいるように見えるけど。」

「アレか。あれは魂じゃ。」

「たっ、魂！」

タカヒトが驚くのも無理はなかった。とくべえの話では人道や他の世界で死んだ者はその直後、肉体より魂が離れるのだがしばらくはその場に留まるのだという。そして迎えにくる者を待っているのだと語った。

「迎えにくる者?????」

「・・・時期に来るじゃろうて。」

「おのれえ、このワシを裏切りおつてえ。」

この恨みはらさずにおくべきかあ~~~~!!.....お前らは誰だ?」

「えっ、僕達の姿が見えるの?」

「それは当然じゃろうな。同じ霊体なのじゃから見えて当然じゃな。」

霊体となった佐伯の魂はタカヒト達を異常なほど警戒していた。警戒が憎しみと殺意に変わった頃、怨念化した佐伯の魂はタカヒト達に襲い掛かってきた。白装束は乱れ、鬼の形相をした佐伯はもはや成仏できない悪霊であった。

「おのれえゝ殺してやる！」

「うわああああゝ とくべえさん！」

怖がるタカヒトに対してとくべえは冷静だった。佐伯の魂がとくべえに襲い掛かる瞬間、佐伯の魂に黒い塊が襲い掛かった。黒い塊に取り押さえられた佐伯の魂は身動きも取れずに地面に押し付けられた。

「なつ、なんだ？・・・オガツ、やめろ！離せ！があああああああゝゝ！！！！」

佐伯の魂は黒い塊に覆われていくとその場から消えていった。何が起こったのか全く理解出来ないタカヒトはとくべえの顔を見つめた。とくべえはニッコリと笑みを浮かべると口を開いた。

「案ずる事はない。あの者はデット・キャリーに連れて行かれたのじゃ。」

デット・キャリーとは言わば死神と呼ばれる存在である。肉体を離れ魂のみとなった存在はほんのひととき肉体の頭上にいる。いや

待っていると言ってもいい。デット・キャリアはその魂のもとに現れ魂の業の量により次に向かう世界へと魂を連れていく。

「佐伯の魂はもちろん地獄行きじゃろうな。」

狭間に戻ったタカヒトはしばらくの間、徳の水筒と業の水筒を眺めながら考え込んでいた。とくべえもそれを分かっていたからか、車の中にある厨房を片付けて掃除をしている。とくべえが釜の掃除をしているとタカヒトが業の水筒を持って走ってきた。

「消化していけばって減らすって事？中の水みたいのを捨てればいいの？」

あれ？この水筒・・・蓋が開かないよ？あれ？」

「ほっほっほっ、業の水を捨てることは不可能じゃぞ。」

業の水筒の蓋を開けようとしているタカヒトにとくべえは言った。

「どうすれば減らせるの？」

「業を減らすには業を処理するしかない。つまり辛い目に遭うしかないのじゃ。」

「辛い目？辛い目なら沢山・・・遭った・・・よ。」

「それはごく一部じゃ。すべての者は生きている間にすべての業を処理せねばならんのじゃ。主が辛いと感じたのは一生のうちほんの一部のことじゃな。」

「あんなに・・・あんなに辛い目にあっただのに一部だったの？」

「ほれ、よく見てみい。現に業の水筒は溜まったままじゃ。」

業の水筒を見つめるタカヒトにとくべえは業を減らす方法を伝えた。もつとも業を減らす一番良いのは死ぬこと。ただし自殺は無効でありここで言う死ぬとは天命をまつとうすることである。次に大病に遭う。次に大事故に遭う。その次がひもじい思いをすることとなっている。これらの災いはもちろん自分で作るのではなく災いに遭遇してしまうという意味である。自演自作の行為はすべて無効となる。

「ちよつと待って・・・自殺って自殺するとどうなるの？」

「与えられた命を放棄する行為・・・自殺はもつとも重い業じゃ。どの世界・・・天道にしようが餓鬼道にしようが関係なく一気に地獄道のもつとも深い場所に墮ちる。業の深い者が逝く、六道の中でも最も深き場所。業火と苦しみだけが支配する世界じゃ！」

タカヒトは驚愕した。もし自分が自殺をしたら地獄道に墮ちていたのかと・・・この狭間にいるということはタカヒトは自殺したわけではないのだと自分に言い聞かせていた。ただタカヒトは自分がどうしてここに来たのか？正直わかっていない。

「とくべえさんは・・・行ったことがあるの？」

「もちろんじゃ。ワシのパンは地獄道でも評判がいいので。」

得意になってとくべえは答えた。そしてタカヒトも地獄へ行く可能性があると伝えた。とくべえの話によるとこの狭間は六道すべての世界に繋がっている為、ここを出ればどの世界に行くのかわか

らないからだと説明してくれた。タカヒトは自分が何故、この狭間にいるのかをとくべえに質問した。少し考えた後、とくべえは語り出した。

「それはわからん。じゃがここにいるのは事実じゃ・・・
そしてどうするかもお主次第じゃな。」

「・・・僕、行くよ。前にいかなきゃ、何も始まらない！」

「そうじゃな。まあこれから先うまくいくかどうかなんてことは誰にも分からない事じゃ。じゃが、幸せや成功というものは行動した者のみが勝ち取るものじゃからな。」

とくべえは満面の笑顔を見せた。幸せや成功が簡単に手にはいるとはタカヒトも思っていない。しかしとくべえの言う通り行動しなければなにも手にはいらない。人道へと戻る決意をタカヒトは心に刻んだ。

旅立つ者へ

とくべえは業の水筒の説明を終えると徳の水筒の説明を始めた。誰しも苦しい事だけでは生きてはいけない。徳の水筒を使うことによつて物事を好転させる事が出来る。無論、通常はそんな事は出来ないのだがタカヒトの今後の事を考えたとくべえが徳と業を具現化すると液状にして水筒に入れた。とくべえはタカヒトに徳の水筒と業の水筒の説明を続けた。

「説明はこれくらいでいいじゃろう。あとはその徳と業の水筒がお主に行くべき方向を示してくれるじゃろうて。それとお主に案内役を授けなければの。」

「案内役？」

これから進む世界を独り旅するのは危険である訳だし行き先もわからない。そこでとくべえはそれらの条件をクリアする水先案内人を紹介した。そうとくべえは紹介したがタカヒトにはどこに案内人がいるのか分からなかった。案内人の姿をキョロキョロしながら探したが見当たらなかった。

「とくべえさん、どこにもいないよ。」

するととくべえの後から小さい影が見えた。それはバスケットボール位の大きさでどう見てもとんとう虫そのものだった。

「うわあゝ、なんてデカいてんとう虫だ！」

驚愕したタカヒトはてんとう虫に恐る恐る近づいた。マジマジと

てんとう虫を見て驚いているとそのてんとう虫が言葉を発した。

「てんとうむし・・・それは何だ？」

「えっ！・・・わっ、喋った？」

言葉を話すてんとう虫にタカヒトは腰を抜かしてその場に座り込んだ。てんとう虫はタカヒトにここが人道とは違う事そして自分は畜生道からやってきた事を話した。タカヒトはその話を聞きながら自分に言い聞かせるように納得していく。とくべえは二人の話を聞いていると何かを確信したかのようにニコニコして言った。

「まっ、そういうことじゃな。それじゃ仲良くの。タカヒトよ、この旅でお主にとつての大切な何かが見つかるの良いの。ではふたりともよき旅を。」

とくべえはタカヒト達に笑顔で別れを告げると車に乗って去っていった。そしてタカヒト達を見下ろすように上空に浮遊している人物がいた。茶色の厚手のマントを前にかき合わせ、深々とハット帽をかぶっている人物だ。

「タカヒト・・・旅立ちを祝福する。」

そう言い残すとハット帽をかぶっている人物はその場から姿を消した。とくべえもいなくなりその場に残されたタカヒトは何をすることもなくただ呆然としていた。それからひとときの間、タカヒトはどうすればいいのか分からずに佇んでいててんとう虫が声をかけた。

「・・・いつまでそうしている。」

「僕、どこにいけばいいのか分からなくて……。」

「進むしかないな！ひたすら前に。」

てんとう虫の言葉にタカヒトは戸惑ったが少し考えた後、意を決して歩き始めた。暗い闇の中をタカヒトとてんとう虫はただひたすら歩き続けた。正確にはタカヒトが飛んでいるてんとう虫の後を歩いていた。タカヒトとてんとう虫の間には沈黙が広がる。その沈黙に耐えられなかったタカヒトがてんとう虫に声をかけた。

「ねっ、ねえ……名前、なんていうの？」

「……。」

てんとう虫は沈黙したままだ。その瞬間で会話が終了した。暗闇を歩き出してどれくらい経ったのだろうか……。再びタカヒトとてんとう虫の間では沈黙が広がっている。深く沈んでいくような闇の世界に会話でもしていないとタカヒトの精神は押し潰されそうになっていた。

「僕は……なんて呼べばいいの？」

「……。」

タカヒトは不安そうにしかも少し泣きそうになっていた。下を向き落ち込んだ様子でタカヒトは歩いている。少しの沈黙の後、タカヒトの落ち込んだ姿を見てたてんとう虫が初めて自分から口を開いた。

「てんと・・・そう呼ばれている。」

「てんとって言うんだね。なるほど、てんとう虫だからてんとかよろしく、てんと。」

うつむいていたタカヒトが顔をあげて喜んだ。タカヒト自体ものすごく不安だった。唯一の味方であるてんとと何とか仲良くなるうとしていたのである。タカヒトは自分から友達を作ったり、遊んだりするタイプではない。実際友達と呼べるのはミカぐらいだった。初めて自分から友達を作ることが出来てタカヒトの喜びはとても大きなものであった。もちろんタカヒトが一方的に友達だと思っただけでありてんにはそんな気があるのかはまったく分からない。ぎこちないものの会話が途切れないようにタカヒトは必死に喋っている。そんなやりとりをしながら歩いていると遠くのほうから小さな一寸の灯かりが見えてきた。

「てんと・・・なにかあるよ。出口かな？」

タカヒトはその一寸の灯かり目指して走り近づいていく。明かりを抜けると急に眩しくなり、タカヒトは目を覆った。目が慣れた頃辺りを見渡すと大きな大木が立ち並ぶ森が広がっていた。キョロキョロしているタカヒトにてんとうが冷静かつ静かな口調で言った。

「どつやら、着いたようだな。ここは・・・畜生道だ。」

畜生道の者と対抗すべき力

「畜生道？でも、ここって・・・」

そこは森林のようで木々は生い茂りどうみてもタカヒトが人道で見えていた世界と変わらなかつた。タカヒトは自分のいた世界に戻つたのではないかと錯覚するほどであつた。その事をてんとに確認してみた。

「ここは紛れもなく畜生道だ。」

「でも・・・。」

「信じる信じないはおまえの勝手だがあれを見てもそう言えるか？」

畜生道であることを信じないタカヒトにてんとはある方向を見つめた。その方向には地を這うバツタのような生物がいたがバツタと呼ぶにはあまりに大きい。全長は一メートルほどで眼は恐ろしいほど赤く光っていた。どうやら食事中的のようだが何を食べているのかは見えなかつた。タカヒトがジツと見つめて観察するとその大バツタが食べているものは大バツタそのものだった。

「バツ、バツタがバツタを食べてる！！」

大バツタの共食いを目撃したタカヒトは大声をあげて驚いた。大バツタはタカヒト達の存在に気づいたらしく食べるのを止めた。眼を光らせて昆虫とは思えないほど鋭い牙からは共食いしたバツタの体液だらうか・・・滴り落ちていた。

「えさ・・・う・・・まそ・・・うだ。」

共食いをしていた大バツタがタカヒトのほうにゆっくりと向かってくる。てんとはタカヒトに小声でこの場から逃げるように促す。だが現実にはありえない生物が言葉を発していることにパニックを起こしたタカヒトは動く事が出来なかった。まさに蛇に睨まれた蛙のように動けなくなったタカヒトはその場に腰を抜かしてしりもちをついていた。

「おい、何をしている？早く逃げるぞ！」

混乱しているタカヒトはてんとの必死の呼び掛けにも全く反応を示さない。動く事も出来ずに涙をためながら大バツタが近づいてくるのをただ見ていることしか出来ない。鋭い眼光をした大バツタはジリジリと間合いを詰めた次の瞬間、タカヒトに飛び掛った。大バツタは消化液を垂らしながら鋭い牙でタカヒトの肩に噛み付いた。牙はタカヒトの肩に食い込んで肩の骨まで達していく。

「あつ・・・わああああ〜　痛い！痛い！　わああああああ〜！！」

いままで経験したことのない激痛と恐怖にタカヒトは発狂にも近い声で泣き叫ぶ。大バツタは六本の足でタカヒトの手足を押さえ込むと身動きが出来ないようにする。大バツタはタカヒトの肩を砕き始めるとタカヒトの叫び声は更に増した。あまりにも騒々しい叫び声に大バツタは噛み付くのを止めた。

「う・るさ・・・い。ゆつ、ゆつく・・・りた・・・べ・れな・・・い」

大バツタは肩から牙を外して叫び声をあげるタカヒトの頭に噛みつこうとした。この瞬間、タカヒトの目には大バツタの牙が少しずつ近づいてくるのをまるでスローモーションを見るかのように見えた。自分はこのまま大バツタに頭を噛み砕かれ死んでいく・・・とそんな思いが頭の中を駆巡っていった。

「うわああああ、いやだああああ。やめてえええ助けて！お母さん！
死にたくないよ！嫌だああああええええええ！！！」

恐怖にタカヒトは混乱している。冷静に考えてみればタカヒトはすでに死んでいるような存在である。だがタカヒトはそんなことは忘れていた。ただ死にたくなかった。大バツタがタカヒトの頭を噛み砕こうとしたその瞬間、てんとうが大バツタに体当たりした。

巨大な体格の大バツタは体当たりしてきたてんとを跳ね返したが大バツタも体勢を崩して押さえていたタカヒトの手足を離れた。タカヒトの身体はほんの少し自由になった事を確認したてんとはさすが叫んだ。

「タカヒト！徳の水筒を、赤い液体を飲め！」

突然のてんとうの叫び声はタカヒトの耳にも届いた。だが依然混乱しているタカヒトはオロオロしているだけだった。てんとはタカヒトに飛んで近づくと腰に吊るしてある徳の水筒を示した。

「はやく飲むんだ！」

訳も分からず言われた通りに徳の水筒を取り出すとそれを一口飲んだ。次の瞬間、タカヒトの身体は急激に金色に輝きだしていく。

「なっ、何これ？」

金色に輝く自らの身体にタカヒト自身が驚いていると体勢を整えた大バツタは再び捕獲態勢になった。大バツタは金色に輝くタカヒトを異常に警戒しているが食欲に勝てるわけもなく再び飛び掛り金色タカヒトに覆いかぶさると肩に噛み付いた。

「おっ？・・・かめ・な・・・い？オイ・・・喰い・・・たいのに・・・」

悪夢を思い出したかのように金色タカヒトは肩を噛み付かれ泣き叫ぶが驚くことに痛みはまったく感じていない。それは大バツタにも同じ事が言えた。タカヒトの肩を喰い千切る事が出来ない現状に大バツタは戸惑っていた。

「よし、効果が現れている。タカヒト、イーターを押し退けるのだ！」

てんとの言ったイーターとはこの大バツタのことで彼らはこの畜生道で生息している肉食系昆虫種である。

「そんなこと出来る訳ないよ。」

「早くしろ、時間がないんだ！」

「そんなこといったって・・・」

金色タカヒトは困惑しながらもイーターを押し退けようと両手で押すと先ほどまでどんなにもがいても身動きすら取れなかったイーターの身体が羽毛の布団を持ちあげたかのような感覚で押し退ける

事が出来た。金色タカヒトに押し退けられたイーターの身体はフワリと浮きあがるとふっ飛んで大木の方に激突した。

「バガツ・・・ゲフツ！お・・・きが・・・ちかく・・・ゲゴバツ！」

次の瞬間、その大木が折れてイーターは下敷きになった。すぐに大木を押し退けるがさすがのイーターも無傷ではなく手足はガクガクして立ち上がることが困難な状況だった。その間にもタカヒトの身体の金色は少しずつ薄らいでいく。

「おい、逃げるぞ。走れ！！」

タカヒトを包む金色の変化を見落とす事も無くてんとは逃走を促すとその場から飛び去っていく。タカヒトも慌てて後を追っていった。金色が完全に消えたタカヒトは走りながら後ろを振り返るがイーターが追撃してくる気配はなかった。

「はあはあはあ、何なのあれ？いきなり襲い掛かってくるし、身体は光るし、わけがわからないよ。肩、噛み付かれるし、痛くて、痛くて・・・あれ、痛くない？ん？肩がなんともない・・・なんで？」

タカヒトの肩は血も止まり噛まれた痕も無くなっていた。不思議がるタカヒトにてんとは飛ぶのを止めると近くの岩にとまった。そして何故タカヒトの身体が金色に輝き出して巨大なイーターを押し退ける事が出来たのか？というタカヒトの疑問に答えた。

「それが徳の水筒の能力だ！」

徳の水筒とは【徳】つまり幸運そのものであり徳を取り込めば一時的に運氣があがる。身体は金色に輝き運氣以外に傷ついた身体も体力も元に戻る。力はみなぎり、何よりすべての事がうまく良く様になる。しかし徳の効力は長くは続かずに金色の輝きを失った時、元に戻り力や運氣も元に戻るとてんとは説明した。

「一瞬かあゝ・・・じゃあ、もつと飲んだらどうなるの？」

「運は持続するが反動も大きい。長い旅だ。徳の使いすぎはきついぞ！」

てんとに言われてタカヒトは水筒を眺めた。徳の水筒はほんの少しだけ量が減っていてそれを見たタカヒトは言われた通り大切に使うと思つた。この畜生道にはイーターのような魔物が沢山存在している。もちろん人の心などなく何処から襲い掛かるか分からないので十分気をつけるようにとてんとはタカヒトに伝えた。

「うん、分かつた。助けてくれありがとう」

「・・・でもあのまま戦っていたら勝てたんじゃない？」

「おまえ・・・ゲームか何かと勘違いしてないか？徳の水筒は無限ではない。それにここで死んだらおまえには後がないんだぞ！」

「後がないって・・・どういうこと？」

実はタカヒトは人道で死んだ存在だがこの世界でも生きている存在ではない。つまり狭間に堕ちた時点でそれぞれの世界のどこにも存在していないということになる。どこの世界にも存在していないと言ふ事はもし六道の世界のどこかで死んだ場合、六道よりも更に遠い場所【無空間】へ飛ばされ戻る事も許されない彷徨う存在とな

る。

「彷徨う？そこからは出られないの？永遠に？」

「そうだ。そしておまえが元の世界、つまり人道に戻るにはおまえの持つ業の水筒をすべて消費するしか方法がない。」

歩きながらタカヒトはいろいろな事を質問して、てんともそれを解かり易く説明してくれた。狭間の事や畜生道の事が少しずつ分かる様になったタカヒトはてんとお礼を言った。てんとはタカヒトの顔を見ると喜びもせずは無表情のまま言った。

「気にするな。わたしはきみの案内役だ！」

パピオン国

タカヒト達が歩きだしてどれ位経ったのだろうか・・・目の前にデカイ大樹木が立ち並んだ場所に到着した。太い枝がたくさん生えていてその中心には葉っぱで覆われた巣らしきものがあつた。タカヒトが目を凝らして観察すると巣の中で何かが動いている。イーターの存在を思い出したタカヒトは急に怖くなって動揺したがタカヒトを制止させるとてんとは巣を観察した。

「いや、違うな・・・あれはパピオンの巣のようだな。」

てんが観察していると巣から一匹の飛行系昆虫種が出てきた。それは体長八十センチくらいの人型の生物で背中にはトンボのような羽が生えている。頭の触覚と羽以外はほとんどタカヒトと同じような姿であつた。片手に槍らしき武器を持っているパピオンはタカヒト達の頭上をグルグル飛び回って異常なほど警戒している。

「何者だ！ここは我々のテリトリーだぞ。早急に立ち去れ！」

パピオンは手に持っている槍のような武器をタカヒト達に向けて威嚇する。タカヒトは怖がっていたがてんとは動揺もせずパピオンにテリトリーに侵入する気は無い事を伝えた上でイーターから逃れてここに入ってしまった事を伝えた。それを聞いたパピオンはグルグル飛び回るのを止めるとふたりをジッと見つめている。

「イーターだと！あれから逃げ延びたというのか？これからどうするつもりだ？」

槍を突き出しながらもパピオンはてんとに問い掛けた。てんとは

少しの沈黙の後に何処へ行くかは全く決めてはいない事とそして自分達は狭間からこの畜生道へ導かれた事を伝える。それを真剣に聞いていたパピオンは地上に降り立つと槍を収めた。

「威嚇した事を謝罪する。ぜひパピオン族の国王に会ってほしい。」

パピオンの眼差しに偽りが無いと判断したてんとはタカヒトを連れてパピオンの巣へと向かっていった。パピオンの巣は大樹木の高い所に存在していてそこまで登るのは不可能だった。

「いいぞ、下ろしてくれ！」

タカヒト達と一緒にいたパピオンが大樹木の上に向かって合図をすると上の方からゴンドラのような乗り物が降りてきた。パピオンはゴンドラに乗るように促すとタカヒトはてんとの後を追って恐る恐る乗り込んだ。ゴンドラは少しずつ上昇していくと森の壮大な風景が見えてきた。遠くの方まで森が続き心地よい風がタカヒトの顔を優しく包み込んだ。タカヒトがパピオンにゴンドラがどうやって動いているのか質問するとパピオンは得意げに語り始める。

「このゴンドラはゴンドラ係と呼ばれる者が昇降を操作している。動力は滑車と呼ばれる中心を固定した円盤の溝にロープをかけてもう一方に重りをのせて昇降させている原始的なものだ。我らは飛行系昆虫種であるから必要はなくほとんど使用はしていない。主に客人用だ。」

ゴンドラがパピオンの王国入口に到着するとゴンドラ係が笑顔で迎えてくれた。ゴンドラを降りたタカヒト達は導かれるまま王国の中へ入っていった。王国の中は意外と広く、いくつかの部屋らしき

空間がある。タカヒトがキヨロキヨロして見渡しながらパピオンの後について行くと天井がほかの部屋よりも高く広い空間の部屋が目の前に広がった。その中央には椅子と呼ぶにはあまりにデカく重々しい椅子があり老人らしき人物が座っていた。その人物がパピオンの国王だとタカヒトにもハッキリ分かったのだがその表情は疲れきっているようだ。

「・・・待っていたぞ。ワシはパピオン国王、オリザベス十八世である。」

老人は椅子から立ち上がるうとしたがよろけてしまい立ち上がることもままならない。

タカヒト達と一緒にゴンドラに乗ったパピオンが急いで国王に近づくと国王の手を取り椅子に腰掛けさせた。しばらく会話をするとほかのパピオンを呼び国王は別の部屋へと支えながら歩いて行った。国王を見送るとパピオンがタカヒト達に近づいてきた。

「国王はお疲れなので私が話をしよう。私はデオルト・ムア・デイクイドと言いつこの国で兵士長をしている。そして・・・」

「ちよつと待って・・・なんの話？待っていたって何のこと？」

「なにをいつている？おまえ達は勇者なのだろう？」

「何を見て勇者と思うんだ？」

タカヒトとデオルトの会話にてんが話を割って入ってきた。いきなりパピオンの国王に会わされて勇者と言われて疑問に思つのは当然のことである。デオルトはそんなタカヒト達にこのパピオン国にある言い伝えを話した。

害敵により国が傾くとき、東方より異国の者が訪れて害敵を一掃する。

今、この国はイーターにより莫大な被害を受けている。そこへ勇者タカヒト達が来たというわけだ。タカヒト達を勇者だと思い込んでいるデオルトに困惑しているとはこの国の状況を理解する為に少し時間がほしいと要望した。少しの沈黙の後、デオルトは部屋を用意してあると言って兵士にふたりを送迎するように命令した。兵士に促され用意された部屋に入るとタカヒトは小声だが強い口調で言った。

「なんであんな嘘ついたの？僕達は勇者なんかじゃないよ！」

「ああでも言わないとここを追い出されていたらどう。いまからイーターの森へ引き返したいのか？とりあえず食物もある。今日はここで休息を取ろう。」

てんとはテーブルの上にあつた食べ物を食べ始めた。タカヒトは嘘をついた事に後悔していたがてんとの食べている姿を見て空腹には耐え切れずにテーブルの上の食べ物に手を出した。

見たこともない食べ物であったが全部食べきり満腹になったタカヒトは久しぶりにフカフカのベッドへ倒れ込むと深い眠りについた。畜生道での初めてのやすらぎに深い眠りについた頃、この国を支える大樹木の周りには沢山の赤い眼が光っていた。

「おい、タカヒト！起きろ！！」

翌日になるとてんとの叫び声にタカヒトは目を覚ました。昨日からのあまりにも現実離れした状況に置かれていたタカヒトの疲労は

ピークに達していて久しぶりの安眠に朝になってもなかなか起き上がることが出来なかった。やっと起き上がった寝ぼけ眼のタカヒト。

「ううん・・・もう朝？ご飯の時間？」

「それどころじゃなさそうだ。イーターの大群が押し寄せてきた。逃げるぞ！」

「！ ええええ！ 襲ってきたって逃げるの？戦うとか・・・」

「戦う？外を見る。あれを見てもまだそんなこと言えるのか？」

寝ぼけ眼のタカヒトは目を擦りながらテクテクと歩いて行くと窓の外を見た。そこには重なりあう様にイーターの大軍が大樹木にまとわりついていた。その異様な光景を見たタカヒトは驚いて腰をぬかした。じきにこの部屋まで来る可能性があるかとタカヒトに伝えると急いでテーブルの上にある徳の水筒と業の水筒をまとめて逃げる準備をした。動揺するタカヒトにすでにイーターがこの巢の内部に入り込んでいる事をてんとは伝えると動揺は更に増していく。

「ええええ！どうしよう、どうしよう？どうする？ねえ、てんと！てんとつてば！」

「そんなに慌てるな！タカヒト、深呼吸してまずは落ち着くんのだ。」

「そつ、そんなこと言ったって・・・」

深呼吸？スウー、ハア〜・・・スウー、ハア〜・・・。。。」

「……それでいい。いいか、タカヒト！動揺したら負ける。落ち着いて考え行動することが勝機に繋がるんだ！」

今のタカヒトにはてんとの言葉を信じるしかなかった。ほんの少しだけ落ち着きを取り戻すとてんとの考えを聞いた。この部屋に居るべきと当初てんとは考えたがイーターがじきこのフロアに来る可能性が高い。まずは安全の確保を最優先させるということで上の階へ行くことになった。てんとは万が一を考えて事前に王国の隅々まで部屋の配置や通路を確認していた。上の階には小さな複数の部屋が在りそこなら巨大なイーターも入ることが容易でないと考えた。ドアを開けて外を確認するがイーターはいなかった。てんとはタカヒトを連れてドアを開けると一気に上の階へと向かった。

一方、タカヒト達の居た部屋の下の階では……

「ゲガ……もう……飽きた……な……」

「ゲウ……ア・キタ……」

二匹のイーターがもぞもぞ動いていた。暗がりのフロアでイーターの足元には複数のパピオン兵が横たわっていたがピクリとも動かない。当初イーターの侵入に複数のパピオン兵が総攻撃を仕掛けたが返り討ちにあっていた。パピオン兵の半分はすぐにイーターの餌となり残りは遊び道具となっていた。生きながら羽をもがかれ苦しみ恐怖を感じながらパピオン兵達は死んでいく。二匹のイーターは命令により作戦を遂行しているわけだが元々イーターは下等生物である。本能のまま喰らい満腹になれば暇潰しに遊ぶのである。二匹のイーターは動かなくなつたパピオン解体の遊びに飽きると部屋を出て上の階へ向かう。辿り着いたフロアには何も無いことを確認すると更にその上のタカヒト達のいるフロアへ登っていく。

「ここはなんなの？」

タカヒト達の入った部屋は麻のような袋が至るところに積み重なって歩いて歩くことは出来るが身動きはあまり出来ない。そこはどうやら食料庫のようだった。辺りを見渡して不安になったタカヒトはどう行動していくのか、てんとに聞こうと口を開くとてんとはタカヒトの口を塞いで静かにするように合図した。ふたりが黙り食料庫が静まり返ると廊下側からなにやら声が聞こえてきた。それはパピオンではなく獰猛なイーターの声だ。

「ゲガ・・・ドウ・・・スル・・・ハグレタ・・・らしい・・・ゾ」

「はぐれた？・・・！！ドビラ・・・におう・・・うまそう・・・なに
お・・・いだ」

獰猛な二匹のイーターがタカヒト達のいる食料庫のドアに近づいてきた。一匹のイーターがその凶暴な爪でドアを引っ掻き始めるとバリバリとドアを切裂いていく。次の瞬間、イーターが巨大な身体でドアに体当たりして押し破った。勢い余ったイーターの身体はタカヒト達の足元近くまで滑ってきた。薄暗い食料庫の中でイーターの凶悪な赤い眼だけが光っている。

「ゲガ・・・エ・・・サ・・・」

「うわああああ~~~~！」

突然の出来事にタカヒトは大声で叫びだしたが冷静に状況を見定めていたてんとはイーターと逆の方向にあるドアへタカヒトを連れて逃げた。タカヒト独りだけだったのなら確実にイーターの餌となっていたであろうがてんと冷静な判断能力により餌になる事は回

避できた。

体当たりをしたイーターはすぐに起き上がるとタカヒト達の逃げた隣の食料庫のドアに再度体当たりをしてきた。その食料庫から更に隣の食料庫へと逃げていくタカヒト達をドアに体当たりしながら押し破り追ってくるイーター。しかしその突進力は体当たりを繰り返していくうちに次第に衰え始めた。

「ゲガ・・・エザアア・・・」

逃げながらもイーターの状態を冷静に観察していたてんとうが逃げるのを止めた。次のドアを開けようとしていたタカヒトのドアノブをまわす手が止まる。

「どうしたの、てんと？早く逃げないとイーターが来るよ！」

てんとは逃げてきた食料庫のほうへ向かってそのドアを開けるとそこには体当たりを繰り返していたイーターが傷だらけになって倒れていた。どんなに巨大な身体と凶暴な爪をもつていようと木製の分厚いドアに体当たりを続ければ身体への衝撃もかなりのものになる。イーターの知能の低さがてんと達に勝機を与えた。しかし瀕死のイーターの後をもう一匹のイーターが近づいてきた。そしてその瀕死のイーターの頭をいきなり噛み砕いた。薄暗くてタカヒトにはよく見えなかったが確かにイーターがイーターを喰らっている。それはまさに共食いであった。瀕死のイーターであるがその硬い甲殻をいとも簡単に噛み砕いていくイーターの牙はとてつもなく恐ろしい。

「なんで？仲間とかじゃないの？」

「どうやら仲間意識はないらしいな。逃げるぞ！タカヒト」

タカヒトはてんとに言われるままドアノブをまわすと隣の部屋へ逃げていった。逃げた部屋は粉っぽくタカヒトが入った瞬間にゴホゴホと咳き込むほどだった。いままでの食料庫と違って石積みされたその部屋は何に使うものかは分からないが小麦粉のような白っぽい粉が床に沢山散らばっていた。

「どうしよう・・・もう逃げれないよ。駄目だよあゝ。」

「諦めるな・・・むっ、これは！よし、タカヒト！ここでヤツを迎え撃つ。そこに沢山積んである袋を破いて中の粉を撒き散らすんだ！」

「えっ、なんで？それより逃げない！」

「生き残りたいのだから？ならば言う事を聞け！早くしろ！」

てんとはタカヒトに積んである粉をすべて撒き散らすように指示した。一瞬戸惑ったが今はてんとに従うしかない。タカヒトは言われるまま積んであった袋を床に投げ捨て粉を撒き散らしていく。一方、共食いを終えたイーターは赤い眼を光らせながらタカヒト達の向かった部屋へと動き始めていた。元々部屋中が粉っぽかったが更に撒いた粉で部屋中が白くぼやけた。

「煙いよ・・・ゴホッゴホッゴホッ・・・てんと早く逃げないと・・・」

「もう遅い！諦めたほうがいいぞ！今、喰ってやる！」

聞いた事のない声にタカヒトはドアのほうを見つめるとはっきり

とは見えなかったがイーターがドアを開けてタカヒト達のいる部屋に入ってきた。ゆっくりドアを閉めるとイーターの眼だけが赤く光っている。てんとはゆっくり目を動かすとイーターの入ってきたドアの反対側のドアノブに鍵がついているのを確認した。てんとはイーターに悟られないようにタカヒトに近づぐ。

「合図をしたら奥の部屋に逃げ込むのだ……。」

小声で伝えるとタカヒトはうなずく。ゆっくりドアに近づいてドアノブをまわすと音を立てずに開ける事が出来た。撒いた粉の影響で粉っぽくモヤけた空間が広がريーターからはタカヒト達の動きが見えなかった。タカヒトがドアを開けるのを確認したてんとはイーターに問い掛けた。

「ちょっと待つてくれないか！聞きたいことがある。」

「なんだ？命乞いか？その願いは聞き入れられんな！」

「なぜ短期間に言葉を覚えた？さつきとは言葉使いが全然違うのはなぜだ？」

「そんな事か。言葉を覚えたわけではない。我々は魂を喰らうことで力と能力を増していくのだ。ここまでなるのにパピオン数匹喰らったがな！むっ、もう一匹の臭いが無くなったな。逃がしたのか？くっ、くく……無駄なことを！」

イーターが話している隙にてんとはタカヒトに奥の部屋に入るように指示した。そしてタカヒトはすでに隣の部屋へ脱出していた。てんとも開けておいたドアの前に立ちイーターに話しかけていた。

「それを聞きたかったのだ。その急激な能力の上だった原因をな
！」

そう言い残すとてんとは開けてあるドアからタカヒトのいる部屋に移動した。ドアを閉めると鍵をかけて更にタカヒトと共に奥の部屋へと逃げていく。タカヒト達に逃げられたイーターは激しく怒り赤い眼は更に鋭く光った。イーターはドアに体当たりしてドアノブをまわしたが鍵がかかっているので開かない。

「おのれえ〜！こんなドアなど噛み砕いてやる！」

怒り狂ったイーターは鋭い牙を光らせるとドアノブに噛みついた。鉄製のドアノブとイーターの牙が接触して火花が散った瞬間、部屋中が炎に囲まれた。

「ゴガアアアアア〜！！！！」

断末魔をあげながらイーターの身体は瞬時に焼き焦げた。部屋は一瞬にして黒くすすけて何も残っていない黒い部屋と化した。

「わあっ、何？何の音？」

タカヒトが急ぎ走っているときいきなり地響きが起きて足もとが揺れた。タカヒトはてんが何かとんでもない事をしたのだらうと問い掛けてみた。

「粉じん爆発だ。密閉された場所で可燃性の固体微粒子が空気中に浮遊して一定の条件が整ったところに発火が発生すると爆発燃焼する。」

「ふう〜ん……」

話は聞いたがタカヒトには何の事かさっぱりわからなかった。だがてんとうが凄いということだけは分かった。部屋から部屋へと走っていくと突き当たりの部屋へ辿り着いた。いままでの部屋と比べてかなり小さいが天井付近には喚起口がいくつもあった。

「ほかのイーターとの遭遇も予想される。襲撃に遭った場合に備えて喚起口へ逃げ込める準備をしておけ。それまでの間、しばらくここで休息をとる。」

ほんの束の間の休息であったがここまで来れたのはてんとうのおかげである。てんとうの優れた判断力と決断力のおかげだった。タカヒトはてんとうの顔をジッと見ていた。

「ねっ、……ねえ、てんとうはいったい何者なの？なんでも知っているけど……」

「何でも知っているわけではない。タカヒトよりいろいろ経験しているだけだ。」

最終捕食者

「デオルト、勇者殿はどうした？ 戦っておるのか？」

「もちろんでございます。勇者殿と我が騎兵団はイーターと交戦中にございます。国王は安心してここで御休みくださいませ！」

デオルトと国王そして数名の兵士は王の奥にあるレンガで覆われた隠れ部屋に居た。そこは襲撃にあつたときに逃げ込む部屋であるがこのまま籠城していてもパピオン軍に勝機は無い。だが国王の命だけは守りたいという想いがデオルトの決断を鈍らせていた。国王を残して自ら戦場に向かうべきか、それとも国王と共にいるべきか。イーターとの交戦状況も分からずにいる自分が兵士長としての情けなかった。しかしデオルトは国王と共にいることを選んだ。たとえ兵士達を見殺しにしても。

イーターとパピオン騎兵団の戦い・・・それは戦いとは呼べなかった。イーターの一方的な殺戮と晩餐である。本能のまま喰らうイーターと兵士長がない統制が無く士気の低下した騎兵団。パピオン兵士は次々に倒され喰われていく一方、イーターの能力は次第に高まっていく。数百万ともいた騎兵団はいまではその半分いやそれ以下に減ってしまった。それと反比例するようにイーターの能力は上がっていく。パピオン騎士団が壊滅しかけていた頃デオルトのもとに傷ついた独りの兵士がやって来た。デオルトの足元に倒れ込んだ兵士はかすれる様な細かい声でデオルトに状況を報告していく。

「デオルト様。もはや我が騎兵団は総崩れ。」

イーターの勢いは止められずれここへも・・・ガフツッ！！」

そう言い残すと兵士は役目を終えたように力尽き絶命した。騎兵

団の壊滅はパピオン国の崩壊と繋がっている。デオルトはこの敗戦は自分が原因であり兵士達はその犠牲者であると後悔している。唇を噛み締めながら国王の元へ向かっていくと騎兵団の壊滅とパピオン国の崩壊と涙ながらに伝えた。国王の周りにいた残り少ない兵士達も報告を聞くと膝を落して涙を流す。しかし国王は涙を見せることもなくデオルトや兵士達を励ました。

「仕方あるまい・・・デオルト、私にかまわずに残った兵士達を連れて逃げる。」

「！なっ、何をおっしゃっているのです。国王を置いてなぜ私が・・・」

「デオルト、おまえが最後の希望。皆を連れて逃げよ！そしてこの国をまた一から築き直せ。」

国王の言葉にデオルト達は涙を流し大声で泣いていた。この畜生道の世界で数少ない知識を持つ飛行系昆虫種の国が崩壊する。そんな現実を受け入れなければならないデオルト達の悲痛な叫び声が部屋中に響いていた。

「ちよつと、押さないでよぉ。暗くて前がよく見えないんだから！」

一方、タカヒト達は空調ダクトの中にいた。隠れていた部屋にイーターが数匹入ってきた為に彼らは決めていた逃走ルートを進んでいる。幸いイーターには気づかれずタカヒト達は喚起口に逃げ込むことができた。狭い空調ダクトの中を這い蹲りながら進んでいくがいつこうに出口が見えなかった。しかも空調ダクトは真つ暗な為タカヒトは頭をぶつけては小声で文句をいいながら進んでいく。どれ

くらい進んだのだろうか・・・小さな灯りが先のほうに見えた。

「てんと！灯りが見えるよ。出口かな？」

不安がっていたタカヒトの心が進むスピードを速くさせて小さかった灯りも次第に大きくなってきた。灯りに近づくと網らしき柵がしてある。柵から下のフロアをタカヒトが覗くと広い部屋が広がっていて国王とデオルト達の姿が見えた。皆の無事な姿にホツとしたタカヒトが柵を外そうとした瞬間、大きな爆発音と共にレンガの壁が壊れ飛び散った。衝撃によりタカヒト達のいるフロア上部の喚起口にまで灰色の煙が届いた。

「ゴホツゴホツ、煙いよ・・・何なの、いつたい？」

タカヒトがその煙を振り払うように手を左右に振っている下のフロアでは崩れたレンガの上を長くデカイ影がニヨロニヨロと動いていた。煙が収まるとそこには硬い殻で覆われ全長五十メートル位はある昆虫がいた。脚数が数え切れないほどあり頭部には鋭い牙を持っている。甲殻類で沢山の脚を持つ生物をタカヒトは人道で見たことがある。その姿はまさにムカデだ。

「デカイ・・・あんなムカデ見たことない。」

イーターが小さく見えるほどの巨大ムカデは頭部を持ち上げて部屋中を見下ろすと国王の姿を確認した。ニヤリと笑みを浮かべて巨大ムカデは頭部を国王に近づけた。とぐるを巻いて威嚇する巨大ムカデに護衛兵達が槍を突き出して攻撃態勢を整える。

「こんな所に居やがったのか。国王、捜したぜ！」

まったくイーターどもはほんっと役にたたねえ！さて少し小腹

が減ったか……。」

巨大ムカデは素早い動きで護衛兵達に喰らいつくと一瞬にして飲み込んだ。国王から少し離れた位置にいたデオルトは何の反応も出せずに仲間が巨大ムカデの腹の中に入っていくのをただ怯えながら見ていた。巨大ムカデは再び顎を開くと兵士達の持っていた槍や鎧を吐き出した。ドロドロの液体塗れになった鎧や槍が国王の目前にいくつも積み重なった。

「まずい……まあいい。本来の目的は国王、おまえだ！」

「さあ、おまえの持つ紫玉を渡して貰おうか！」

「デノガイドよ……私は紫玉を持つてはおらん。もしあるのならすでにおまえに渡しておる。私とて紫玉を守る為に国を潰そうとは思わんからの。もうわかったであろう。ここにはそんなものはない。イーター達を引き連れて帰ってくれ。このままでは国が壊滅してしまう。」

デノガイドは辺りを見渡すと続々とイーター達が部屋に入って来てそれらは国王やデオルトを囲むように集結していく。イーター達がこの場に集結しているという事はそれだけパピオン兵士達が命を失っているということになる。確かに国王の言うようにもはやこの国のすべてはデノガイドとイーターに支配されているようだった。

「そうだな。ここには紫玉は無さそうだ。しかしイーターどもの空腹を満たすことは俺には出来ない……実際なところ、この国がどうなるかと知ったことではないんだよ。腹が減れば喰らうし、暇なら壊すだけだ！」

「この畜生めが！」

デノガイドは国王のほうを睨むとそのまま顎を開き捕食体勢にはいる。そこに恐怖を押し殺したデオルトが国王を守る為にデノガイドの前に立ち塞がると剣を取り出して叫びながら突っ込んできた。

「おまえごときに虫けらに何が出来る。弾き飛ばしてくれるわ！」

デノガイドはその巨大な身体で体当たりするとデオルトは簡単に弾き飛ばされた。激しくレンガの壁に打ち付けられたデオルトは手にした剣を離し冷たい床へと落下していく。床に叩きつけられたデオルトはピクリともしない。デノガイドは再びとぐるを巻いて国王を睨みつけるとその大きな顎で国王に喰らいつきそのまま飲み込んだ。しばらくするとデノガイドの身体が一回り大きくなる。イーターと同様に魂を喰らう事により能力を増していくようだ。デノガイドの牙や爪は更に鋭くなり攻撃能力が著しく上がった。

「実に素晴らしい。紫玉などもうどうでもよいわ！このみなぎる力はどうか！」

この力さえあればこの世界で私に匹敵するものなどおらん。

最終捕食者として豊富な餌に囲まれる素晴らしい未来が開けた瞬間だ！」

デノガイドはその能力を試すように尾っぽを振り回すとレンガの壁をいとも簡単に叩き壊した。その破片がイーターに激突して数匹が死んでいったがそんなことは関係なかった。強力な能力を手に入れたデノガイドは床に倒れてピクリとも動かないデオルトを見下ろした。今のデノガイドにとってデオルト一匹を喰らったところで対して変わりはないだろうとイーターを引き連れてその場を立ち去っていった。だが餌に有り付けていない数匹のイーターは去っていくデノガイドには着いて行かずに部屋に残っている。なにやら話し合

いをしているようだ。

「よし……ほかの……部屋に行こう　まだ……喰える餌・
・残ってる」

「喰える……」

「ギギ……ガ……」

部屋に残ったイーター達は相談を終えるとそのまま部屋を後にした。デオルトのように死んだ餌よりも生きている新鮮な餌を喰らいたいらしくデオルトには見向きもしなかった。喚起口から様子を伺っていたてんとはイーター達が部屋を出て行くのを確認するとデオルト救出作戦に取り掛かった。

「早くデオルトを助けるぞ。ほかのイーターに見つかる前にな！」

小さな洞窟とモグラ

デノガイドやイーターのいなくなった部屋は静まり返っていた。タカヒトは目の前で起こった出来事にショックを受けている。

「タカヒト・・・おい、タカヒト！」

てんが何回か名前を呼んだがタカヒトの耳にはなかなか届かなかった。やっこのことでタカヒトは我に返るとてんを見つめた。

「てんと・・・今の何なの？ あんなデカいムカデ見たことないよ。」

国王はどうなったの？ 僕達これからどうなるの？」

「デノガイドとか言ったな。国王は喰われたらしい。しかもそれによってデノガイドは攻撃能力を更に高めたようだ。それよりデオルトはまだ生きている。助けよう。」

「うん・・・でもまたデノガイドやイーターが来たら？」

「助けるのか、助けないのか、君が決めればいい！ どうする？」

しばらくの沈黙の後、タカヒトは真っ直ぐてんを見つめる。

「デオルトを助ける！」

しかしそうは言ったもののタカヒトにはどうやってデオルトを救出するか考えが思い付かなかった。てんがフロアを見渡すとパピオン兵が持っていたらしいロープを発見した。タカヒトにこの場で

待っているように伝えるとてんとは柵の間を外して羽根を広げると降下していく。フロアに落ちていたロープを掴みその一方をデオルトの身体に巻き付けて結んだ。ロープのもう一方を持ち上げるとタカヒトの元に戻ってきた。

「よし、タカヒト。このロープを引っ張るのだ！」

てんとはタカヒトにロープを手渡すとタカヒトは力いっぱいロープを引っ張り上げる。デオルトの身体はどんどん引っ張られるとそのまま喚起口まで引き込んだ。巻き付いたロープを取るとタカヒトはデオルトの様子を伺った。デオルトは気絶をしているだけで身体にダメージはそれほど無さそうだ。

「デオルトは大丈夫みたいだね。それでこれからどうするの？」

「ここから少し戻ると二手に分かれる道がありその一方は外に繋がっている。一旦、態勢を整える為にここから脱出する。」

タカヒト達は喚起口から来た空調ダクト内を戻るとてんと言った通りに二手に空調ダクトが分かれていた。来た空調ダクトとは別の空調ダクトに進むと一寸の明かりが見えてパピオン国を抜け出す排気口へ出る事に成功した。排気口から大樹木を降りていく際、タカヒト達は沢山の動かなくなった騎兵団の兵士達を至るところで見かけた。

パピオン国を支えている大樹木には当初タカヒトが見た沢山のイーターは一匹もいなかったが大樹木を支えている地面にはパピオン国の騎兵団の兵士達が息もせず倒れていた。それは兵士達の身体で地面が見えないほどである。パピオンの身体は引き千切りられ見るも無残な姿をしていた。大樹木の枝に数十匹のパピオンが垂れ下がっていた。

「なんなの！昨日まで一緒にいたパピオンが・・・うつ、ぶつ、げほっ！」

あまりにも壮絶な光景にタカヒトは膝を地面につくと胃の中のものをつき出した。恐怖と絶望のすべてをつき出すように苦悶の表情を浮かべながら・・・しばらくその場から動けないタカヒトを座らせるるとんとはどこかへ飛んでいった。すべてをつき出してゲツソリしたタカヒトにてんとは食糧庫から戻ってくると薬草を練った飲み物をお椀に入れて持ってきた。

「これを飲め。しばらく休む事にしよう。」

てんのお椀を受け取るとゆっくりとそれを飲んだ。てんとはタカヒトとデオルトの様子を見ながらも辺りを警戒していた。ヤケに静かであったが時折吹く風が死臭を連れてくる。いたたまれなくなつたタカヒトはなんとか立ち上がるとデオルトを背負つた。

「もう行こう・・・てんと。」

「大丈夫なのか？」

タカヒトがうなずくとてんとは浮遊して先を進んでいく。壊滅したパピオン国を脱出するとタカヒト達は西の森へ向かって歩いていた。そんなタカヒト達を大樹木の頂上から眺めている人物がいた。茶色の厚手のマントを前にかき合わせ深々とハット帽をかぶっている人物だ。

「逃げることは悪いことではない。命さえあれば次がある。」

命さえあれば必ずチャンスは訪れるものだ。」

静かな大樹木に風が吹くとハット帽をかぶっている人物は消えていった……。

「ハアハアハア……」

タカヒト達はなんとか命を繋ぎとめる事に成功していた。パピオン国から西へと向かっている途中でイーターに遭遇した。しかし気づかれる事もなく森まで走って逃げる事が出来た。てんとは飛びながらも何かを探しているようで急に止まるとそこには小さな洞窟があった。

「とりあえずここに身を潜めるぞ！」

洞窟の入口はかなり小さくてタカヒトが身をかがませないと入れない位だった。その為イーターは入ることが出来ない絶好の場所でもある。デオルトを洞窟の奥へ連れて寝かせるとタカヒト達も少し休むことにした。イーターとの戦いに加えデノガイドの襲撃でタカヒトの疲労はピークに達していた。

疲労による睡魔に襲われたタカヒトはウトウトしていると洞窟の入口付近にずんぐりむっくりした何かがつっすら映った。タカヒトは目を擦りながらジツとそれを見つめると大きさが100cmくらいのモグラのような生物が立っていた。タカヒトの顔が急にサア〜と蒼く引きつる。それとは対照的にてんとは生物に対して攻撃体勢をとった。

「おまいらは誰だが？うん、そこに寝てるのはデオルトでねえか？
いつたいなにさ、あつただが？」

「えっ！デオルトの事を知ってるの？」

モグラのような生物はヒョコヒョコ近づいてくるとタカヒトはいままでの出来事をすべて話した。てんとは最初、警戒をしていたがモグラが話を黙って聞いている姿を見て攻撃体勢を解除する。タカヒトの話を聞き終えたモグラのような生物は少しの間考え込んでいた。

「話さ、わがったが。そんなことがあったがね。国王様まで・・・

まあデオルトの姿さ見ればなんとなくわかるだが・・・とにがくここさも危ね!

ここにもイーターさ来るがに。ささっ、奥の部屋さ来るが。着いて来るが!」

モグラのような生物はヒョコヒョコと洞窟の奥へと歩いていくが洞窟はさほど大きくなく行き止まりになっている。ところが一番奥に着くとモグラは砂を掘り始めた。掘り出していくうちにモグラのような生物の身体が少しずつ見えなくなる。タカヒトは心配になって穴に近づいていくと突然ヒョッコリとモグラのような生物が頭を出した。

「ついて来るが!」

不安な表情を浮かべながらもタカヒトはデオルトを連れててんと共にその穴に入っていく。タカヒトは這いずりながら穴を抜けるとその先には広い空間が広がっていた。

タカヒトはその広い空間を見ながらゆっくり穴から這い出るとモグラのような生物は入ってきたその穴を埋め始めた。手でパンパンと砂埃を振り払うと得意げにモグラのような生物は言った。

「これでここがわからなくなったが。はやぐ横にさせておまえ達も休むが。」

デオルトを近くにあった土のベッドに寝かせた。恐怖の連鎖と逃走した負い目・・・いろいろな感情が入り乱れる不安定な精神状態の中でタカヒトはモグラのような生物すら信用出来ない状況だった。警戒心を保ちながら土のベッドの上に座っていたのだが気がついたら眠ってしまった。どれ位眠っていたのだろうか・・・タカヒトはベッドに横になっていてハッと我に返り目を覚ました。

「僕、眠っちゃったんだ。」

タカヒトがてんとこの姿を見るとさすがに疲れが溜まっていたのだろう、椅子の上で眠っていた。とりあえず命の危険はなさそうだと感じたタカヒトはデオルトの方に目を向けるとぼんやりしながらも目を開けて意識を取り戻していた。

「デオルト！」

タカヒトはデオルトに声を掛けた。最初はタカヒトの声に反応をさほど示さなかったがデオルトは少しずつ意識をハッキリとさせていった。

「デオルト、大丈夫？気分はどう？」

「うむ、・・・私は大丈夫だ。国王は？我が王はどこにおられるのだ？」

キョロキョロと周りを見回しているデオルトにタカヒトはいままでのことをすべて話した。するとデオルトは激しく動揺して肩を震

わせるといきなりタカヒトの胸ぐらを掴み涙ながらに怒鳴り出した。

「こつ、国王がなぜ・・・私はこれからどうすればいいのだ！なぜ？なぜ助けてくれなかった？お前達は伝説の勇者ではなかったのかあゝゝ！」

ベッドから落ちると床にひざまずき声を震わせテオルトは泣き叫んだ。その姿を見てタカヒトは声を掛けることも出来ずただ立ちつくんでいた。その様子を見ていたてんとはテオルトに近づいていく。

「確かに我々はおまえの望む勇者ではない。しかしあの歴大な数のイーターとデノガイドとか言う化物相手に騎兵団は壊滅・・・もし我々が勇者であったとしても勝てはしなかっただろう。しかし大切なのはこれからだ！おまえがどうするかによってこれからのすべてが変わるはず。今は休むことが先決だ！身体を休めて回復してから皆で計画を練ることにしよう。」

てんとの言葉にテオルトは少しずつ冷静さを取り戻した。モグラのような生物もテオルトに「てんとの言う通りにするべきが」と促すと涙を拭きテオルトは落ち着きを取り戻した。

「グラモ・・・そうだな。タカヒト殿、さきほどは見苦しいところを見せてすまなかった。私は少し休ませてもらうことにする。」

ベッドに戻り横になったテオルトはかなり疲労が溜まっていたらしくすぐに眠りついた。

その姿を見たグラモはタカヒト達にも休むように促した。タカヒトもテオルトの隣のベッドに横になるとさきほどの警戒心などまったく無くなりすぐに深い眠りについた。てんとはテオルトとの関係を

聞こうとするとグラモはグーモ一族とパピオン国の相互協力関係を語った。

長い間、グーモ一族はこの畜生道で畑を耕し生活してきた。だがイーターによる畑の破壊行為にホトホト困っていた。そんな時デオルト達パピオン騎兵団の助けもありイーターの襲撃は無くなっている。その結果、畑で収穫した作物の一部をパピオン国に提供してイーターの襲撃から守ってもらおうという関係が成り立っていたわけだ。グラモは短い手を降り上げて興奮気味に語ったが話を割るようになって口を出した。

「イーターの凶暴さは騎兵団の力では対抗できないのではないかな？」

「もちろんだが！イーターの強さは圧倒的だが。それでも当時のイーターは相当頭が悪かったけえ。わてら畑耕してる時にイーターが襲撃に来たら待機していた騎兵団が攻撃するんだが。もちろんイーターには通じないんがイーターは怒って騎兵団を追いかけいくんやが。」

ずっと追い掛けて行ってバカなイーターは迷子になるんだが。そんな事を繰り返していたおかげでなんとか作物を作る事が出来たんだが。・・・まあそれもデノガイドがくるまでだがね。」

「デノガイドの出現か・・・」

「いつの頃からか・・・どこから来たのか？わからないだがデノガイドがこの地に現れてからイーターの能力が急激に変わったが。その頃から騎兵団による攻撃もイーターには通じなくなってる。グーモ一族の畑地は荒らされ続けていったが。その結果、我らグーモ一族はパピオン国王の考えに従い地中に潜り作物に更に力を入れていったがね。」

「地中に潜る？」

「明日、皆に見せたいものがあるが。今日はもう眠る事にするが。」

「グラモはあくびをしながら部屋の片隅で横になって眠りについた。ベッドの方に目をやるとタカヒトが安心しきったように眠っていた。その姿を見たともしもとりあえずの平穩に安心しながら床についた。」

「タカヒト！朝だが、起きるが！」

次の日の朝、タカヒトはグラモに起こされた。目をこすりながら奥の部屋へと歩いていく。寝ぼけ眼でグラモの後を歩いていくと目の前にテーブルいっぱいのお食べ物が見えた。そのテーブルの周りにはグラモに似た体型のモグラが大小合わせて十五匹いた。ビツクリしてすっかり目を覚ましたタカヒトはグラモに問い掛けた。

「皆、グラモの仲間だが。」

得意げにグラモは言った。すでにデオルトもてんとも席についていて皆、タカヒトが来るのを待っていた。あまりにもそっくりなグラモの仲間の顔を見ながらタカヒトは用意された席に座る。

「みんな揃ったが。それでは・・・いただきますが！」

「いただきますが！」

タカヒトが口にした食べ物は人道で食べたことのある米によく似ていた。グラモに問い掛けてみるとそれはご飯と言った。同じ食べ

物に驚いたがグラモが言うにはこれはパピオン国の農務大臣から教わったものをグーモ一族が改良した物らしい。タカヒトは確かにパピオン国で変わった米らしきものを食べたことがあった。改良されたご飯はタカヒトに人道での記憶を蘇らせていった。その時は何も考えずにただ食べていたご飯がこんなにおいしく穏やかな気持ちになれるとは思ってもいなかった。人道での思い出を思い起こすようにタカヒトはご飯を嚙締めながら食べていた。

地下都市計画

朝食を終えてタカヒトとてんと、それにデオルトはグラモに連れられて下の階に続く階段を降っていた。グラモが言っていた見せたモノを見に行くらしい。朝食をとった部屋とタカヒト達の眠った部屋は一本の通路でつながっていたがその間には下へ降りる階段があった。今その階段を降りているのだが、タカヒトは奇妙なことに気がついた。ここは洞窟の中で本来、光など全く届かないはずだが常に周囲が明るく洞窟とは思えないくらい明るい。

「ねえ、グラモ。なんでこんなに明るいのか？」

「それはわてらグーモー族がパピオン国王に教わった技術だが。」

グラモの先祖は地中に穴を掘っては餌を見つけそれを糧にして生きていた。ある時グラモの先祖の一匹が誤ってイーターのいる地上へ飛び出して喰われ掛けたらしい。偶然そこを通りかかった当時のパピオン国王オリザベス三世と騎兵団に助けられたのが出会いの始まりであった。

オリザベス三世とグラモの先祖は言葉こそ通じなかったが気持ちだけは互いに通じるものがあつた。オリザベス三世はパピオン国の建設大臣と農務大臣にグーモー族の繁栄に力を入れるように命令した。グーモー族はそれまで小動物を狩るケモノのような暮らしをしていたがその日を境に少しずつ変わっていく。狩りをするだけの生活から田畑を耕し作物を得るようになった。穴を掘るだけの環境から構造物を造り出すことや光の届かない洞窟にこの地方の山岳地に咲いている光花を収穫してそれを土に混ぜて壁に塗りつける事により明かりを作り出せる光花壁という工法なども教わつた。歳月が経ちパピオン国の建設大臣と農務大臣も国に帰り、その後は地上でグ

「モー族の独自の文化を築いていくようになったがそれでも歴代のパピオン国王との会話を欠かすことはなく常に敬意を示していた。

「そうか・・・私も知らない事が国王とグラモ達との間にあったのだな。」

「そうなんだ・・・でもなんでグラモがそんな事知ってるの？」

「なんでって・・・ワシがグーモー族の長老だからが。」

「えっ・・・長老！・・・そうだったんだ。」

グラモとはグーモー族の言葉で偉大なという言葉らしくその名を名乗れるのは一族の中でただ一匹だけらしい。長老であるグラモはパピオン国王と常に会話を行っていたらしくこれから行くところはその集大成らしい。狭い洞窟の階段を話しながら降っていくとタカヒトの目の前に巨大な空間が広まった。洞窟とは思えないほど明るく、いやそれ以上に物凄く高いビル群が立ち並んでいた。タカヒトが暮らしていた隣の町にも高層マンションやショッピングモールなどあったがそれらよりもはるかに巨大な建設物だった。一部はまだ建設中らしく足場が組み立てられていてその上をグーモー達が行ったり来たりと仕事をしていた。

「グラモ・・・これは一体・・・」

グーモー族のあまりの変貌ぶりに驚きを隠せないデオルトはグラモに変貌ぶりを問い掛けた。グラモは一時の沈黙の後に口を開いたのだが話は数十年前にさかのぼる。

「国王様！何かあったただが？急に呼び出したりしてビックリする

が！」

国王オリザバス十八世に呼び出されたグラモはパピオン国の王の間に通されていた。国王はグラモとふたりつきりになると話を始めた。ここ近年、イーターの襲撃が一段と増していた。デノガイドの出現によりイーターも知恵をつけて騎兵団の作戦をことごとく潰している。このままではパピオン国の崩壊もそう遠くないと国王は嘆いていた。

「そこでワシは地下都市計画を開始しようと考えておる。それにはグラモ！おまえの力が必要なのだ。頼む、手を貸してくれないか？」

地下都市計画とはパピオン国王が立案・計画していたものでイーターやデノガイドの襲撃を免れる為の第二のパピオン国建設計画である。パピオン国の技術者によりグーモ一族は陽のあたる地上に出て繁栄を遂げた。パピオン国王は自国の技術とグーモ一族の力が合わされば地下都市も可能だと考えていた。

「ええだが！先祖代々のグーモ一族は国王様にはたいそう世話になったのだが。わてらで良かったら協力するのだが！」

「グラモよ・・・恩にきる。」

こうして地下都市計画は始まったのである。パピオン国からは技術者が集まり測量と設計を行った。グーモ一族は有り余る筋肉を使って労働に励むと開拓が始まった。タカヒト達が朝食を取った部屋は当初の地下都市開発工事の工事打合せ兼休憩場であった。

開拓当初は岩盤などに当り作業に遅れが発生したがもつとも困難だったのは地下水であった。穴を掘るにつれて地下水が流れ込んで

きて溺れかかったグーモーもいた。技術者の測量とグーモー達の努力により地下水を生活水路に変換することが出来た。苦しい現場であったがパピオン国の技術者達とグーモー達は自分達の未来を守る為に一生懸命に働いた。開拓と水路の確保それに地下都市を覆う巨大なシエルターの建設などで十三年という歳月がかかった。

巨大なシエルターが出来上がったその後に建物の建設に着工していったわけだがその頃のグーモー達はパピオン国の技術者達の指導により建築に対する技術力が著しく向上していた。安心したパピオンの技術者達はグーモー達に建設を任せて自国へと帰って行ったのだった。

それから更に数年が経ち、今では当時では想像がつかないほどの大都市が出来上がりつつあるグーモー達が地下都市の建設竣工にあたりパピオン国民の受入れ準備をしていた矢先に今回のデノガイド襲撃が起こったというわけである。ところでタカヒト達が朝食を取った部屋だが当時の工事打合せ兼休憩場は今では唯一この地下都市への入口であり最近まではパピオン国への使者の待機場とイーターの行動偵察隊の作戦室となっていた。タカヒトが朝出逢ったグーモー達はイーター行動偵察隊のメンバーであったのだ。

「わてら一族は地下から地上へ出てまた地下へと戻るだけでそれでもパピオン国の最先端技術をこの都市開発に費やしてくれた国王様や技術者の皆に感謝してるだが。もっと早くに建設が終わっていたら多くの命を失わなかった・・・そのことが悔やまれるだがね。」

「我が国王はそこまで考えられていたのか・・・。」

デオルト、おまえが最後の希望。

皆を連れて逃げよ。そしてこの国をまた一から築き

直せ！

デオルトは国王の最後の言葉を思い出ししては涙を浮かべこの大地下都市を眺めていた。デオルトが国王を守る事だけを考えていたように国王もまたデオルトやパピオン国民、それにグーモー族の事を常に考えていた。デオルトは「この国をまた一から築き直せ！」と言った国王の真意がこの地下都市の事だと理解した。タカヒトが遠くの建設中のビル郡を見ていると一匹のグーモーがこちらに気がついていたらしく走ってきた。グーモー族では割と体格がいいほうで腹がポテツと出ていた。

「長老！久しぶりでねえか！元気にしてただか？」

グラモと体格のいいグーモーは抱き合って喜んでいた。グラモはそのグーモーをドミンゴと紹介してこの地下都市建設の最高責任者であると説明した。ドミンゴは最高責任者として地下都市建設に全力を尽くしてグラモはパピオン国とのイーター防御戦線に力を入れていた。そんなふたりが会うのは久しぶりであった。元々幼馴染であったふたりは話が盛り上がりいつまでも話し続けた。

「いんやあゝ楽しいだがねえ。」

仕事に行き詰っていたせいか、実に盛り上がったが！」

「・・・行き詰っていたが？」

ドミンゴは地下都市の進行状況を話してくれた。パピオン国の技術者達がいた頃は作業も順調でありこの地下都市を支える複層シエルターもすでに完成している。複層シエルターとは地下都市を覆っている構造体のことで土圧やデノガイドの脅威から守る為に作られ

たパピオン国最高技術の結晶でもある。

「複層シエルターは最強の盾で破られることはないと言ったが！」

「最強の盾か・・・」

興奮気味に話をするドミンゴにてんとは冷静に地下都市を覆っているシエルターを眺めていた。この複層シエルターの完成には数十年の歳月がかかっている。技術者の苦悩とグーモー族の努力が実を結んだのだが複層シエルターの完成と同時に技術者達はパピオン国に戻っていった。図面や施工法はドミンゴ達にも理解出来ていたのですんなり作業が進むと思っていたがそれが過信だった。

「構造計算にかなり手こずっているがね。」

ドミンゴはグラモ達を工事現場事務所へ連れて行くとテーブルの上に行くつもの図面を並べて地下都市建設の困難さを語り始めた。建物の構造計算で数字がうまく合わない箇所がいくつかあり計算が嫌になるとドミンゴはばやいていた。タカヒトも図面を眺めていたのだがさっぱり理解が出来なかった。もちろんグラモもデオルトもわかる訳もなく皆途方に暮れていた。

「あれ？てんとは？」

タカヒトはてんとはいなくなっている事に気がつくやデオルトに問い掛けた。デオルトもグラモもてんとはいなくなっていた事には全く気がついていなかった。

「そこいらをぶらついているだがね。心配ないがね。」

ドミンゴは工事現場事務所で鉛筆を額に押し付けて構造計算を考
え込んでいるとてんとうが部屋に入ってきた。

「あつ、てんと。何処に行つてたの？心配したんだよ。」

「周辺調査だ。それにタカヒトに心配されるほど私の能力は低く
は無い……」
何かあつたのか？

「うん、実はね……」

タカヒトはてんとに構造計算でドミンゴが苦勞している事を話し
た。それを聞いたてんとはテーブルの上にひるがっている図面に次
々と目を通すとタカヒトに指示をして紙と鉛筆を用意させた。タカ
ヒトはてんとに言われた通りに紙に計算式を書き記していくとドミ
ンゴに紙を渡した。

「ドミンゴと言つたな。これならどうだ？」

タカヒトから受け取つた紙を見るやドミンゴはテーブルの図面と
てんとの紙を何度も繰り返し見ていた。しばらく考え込んで自ら
も計算を始めた。目を真ん丸くして納得したようにドミンゴはてん
とを見つめた。

「これなら出来るがね！ ありがとうね、てんとどん。いっやあ
〜 この計算が出来なくて建設がストップしていただがよ！」

「そうか……それは良かった。」

ドミンゴは各担当監督員を集めると計算した図面を見せて工事に
取り掛からせた。各担当監督員は作業員を集めると静まりかえって
いた建設中のビル郡は一気に活気づいていった。デオルトもグラモ
もてんとに感謝していてその姿を見たタカヒトは自分が褒められて
いるように誇らしかった。てんとはこの地下都市に到着すると独自
に構造体の調査を行っていた。それはもちろん戦いになった場合の
地形確認の為であったのだが今回は別の意味で役にたったのである。

てんとは構造計算という高度な学力を持っていたことにタカヒト
は驚いた。しかしよくよく考えればてんとはいままで数多くの困
難から守ってもらった。てんとはタカヒトの想像をはるかに超え
るほどの学力と経験があるのだろうと改めて理解した。

てんとの頭脳とドミンゴの統率力により地下都市は更に安定と進
化を遂げていった。

一方、地下都市計画を知ったデノガイドは自ら築いた砦の最上部
の部屋で笑みを浮かべながら次なる作戦を遂行しようしていた。

「そう、うまくいくかな。成長から成熟・・・そして衰退・・・
それがすべての理だとは思わんか？」

地下都市の壊滅

「いいだが、その調子だが！」

ドミンゴの歓喜の声が響き渡るほど地下都市は急激に発展していった。建設途中だったビル郡もそうだが、水理計算と図面をタカヒトに書かせた事で作業がスマートになり上下水道などのライフラインも施工速度が以前よりもグンと速くなった。

地下都市の工事工程が改善されて工事も終盤に差し掛かろうとしていた頃、一匹のグーモーが血相を変えてグラモの元へ走ってきた。そのグーモーは以前タカヒト達が出逢ったイーターの行動偵察隊の一匹であった。

「グラモ、大変だ！デノガイドの砦から砲撃が始まるだが！」

「ドゴル！それはホントだが？」

グラモの前まで来ると両膝をつき息を切らせながらドゴルは話を始めた。ドゴルはイーターの行動偵察隊の一員であり、おもにデノガイドの砦付近の偵察にあたっていた。最近イーターの行動が妙に静かであったためにドゴルは危険を冒しながらもデノガイドの砦へと近づいていった。そこでドゴルは巨大な砲台を見てしまった。

「ドゴル、それはおかしいだが！」

いくらデノガイドの知能が高まったとしても砲台を造れるわけがないだが！」

「ちょっと待ってくれ、グラモ。もしかすると・・・いや、やはりそうだ！」

デオルトはドゴルが見た砲台は実在する可能性があると言った。デノガイドやイーターに対抗する為にパピオン国の技術者達が巨大な砲台を造る計画を立案していた。最強の攻撃力を誇る砲台を造るその計画は最強の矛計画と呼ばれていたがそれらはまだ砲台の部品の一部と図面があるだけで完成には至ってはいないはずである。なぜ砲台が完成しているのか？また誰が完成させたのか？分からずにデオルトは考え込んでいた。

「デノガイドが技術者を捕獲していたらどうなる？」

「てんと殿・・・まさか！」

「ありえない事ではない。パピオン国の技術者捕獲そして砲台の部品と図面の略奪・・・最強の矛計画完成の可能性はかなり高いな。奴らの持つ砲台最強の矛と地下都市の複層シェルターの最強の盾・・・どちらが最強なのだろうな？」

デオルトは技術者が裏切る事は想像出来なかったがてんとは弱みを掴まれている可能性もあると伝えた。理由はどうであれ最強の砲台が完成しているのは事実でありこの地下都市を狙っているのも現実であった。てんとはドミンゴに地下都市の構造体の図面を集めるように指示しすべての作業員に地下都市を囲む構造体の壁の補強を進めるように促した。慌ただしくドミンゴ達が補強作業に追われている時、皆では砲撃の準備がパピオン国の技術者達により行われていた。

「さて、砲撃を開始しようではないか。パピオン国の技術者諸君、準備はいいかね？」

「こつ、これが終われば我々の家族を返してくれるという約束は本当だろうか？」

「約束？・・・もちろんだとも。家族とお前達の安全は保障しよう。」

皆から地下都市付近を見渡せる場所に砲台は設置されて技術者による調整もすでに済んでいた。技術者の見守るなかデノガイドが自ら狙撃手となり標準を地下都市付近の森に定めた。セイフティレバーを解除してトリガーを引くと砲台から轟音が鳴り響いた。次の瞬間、緑色一色だった森が一瞬にして炎上した。そして炎がおさまるとそこに茶色の大地のみが広がった。

「なんと恐ろしい、あの兵器をなんのためらいもなく使うとは・・・

私達は渡してはいけない相手に渡してしまったのかもしれない。」

デノガイドが笑みを浮かべながら次々と砲撃を繰り返している姿をパピオン国の技術者達は怯えながら見ていた。技術者達が持てる頭脳をすべて駆使して造り上げた悪魔の兵器なのだがその破壊力と恐ろしさは誰よりも彼ら自身が一番理解していた。それだけに何の躊躇もなくトリガーを引き続けてすべてを破壊していくデノガイドが悪魔のように技術者達には見えたのかもしれない。デノガイドの砲撃した場所は地下都市の頭上にあたる位置だった。森は焼き吹き飛ばされ地面はえぐれ陥没していた。それは地下都市が崩壊したことを表していた。デノガイドはパピオン国の地下都市壊滅を確信するとトリガーを引くのを止めて狙撃席から離れた。恐怖に身を屈んでいた技術者の一人が意を決して立上るとデノガイドを引き止めた。

「やつ、約束通りに家族と我々を解放してもらおうぞ！」

「お前達は実によくやってくれた。約束とは何のことだ？お前等の家族はすでにイーターどもの腹の中。お前等ももはや用済み・・・おい、喰ってもいいぞ！」

「？なっ、何を言って・・・来るな！来るな！ぎゃああゝゝ！」

イーター達が取り囲むと技術者はその鋭い牙の餌食となっていく。引き千切られる肉の音、そして恐怖が加速していく悲鳴・・・それを聞きながらデノガイドはこの世界の王として君臨する喜びを噛み締めていた。皆から見下ろすと地下都市のある地上の森はすべて焼き尽くされ地面は陥没していた。巨大なクレーターを創りだしたデノガイドは世界の王としての初めての仕事に満足している。

「デノガイドめ！やってくれる。」

「どうやら最強の矛の勝利のようだな。タカヒト、無事か？」

「うん・・・なんとかね。皆は？」

タカヒトは辺りを見渡すとデオルトやドミンゴは埃まみれにはなっていたが無事な姿を確認した。てんとの機転とドミンゴの統率力によりデノガイドの砲撃による衝撃を何とか食い止めることができた。しかしそれも完全ではなくビル郡の一部崩壊は免れなかった。デノガイドによる次期砲撃に対する警戒と対応準備の為、てんととドミンゴを中心として復旧に取り掛かり始めた。

「急ぐが！イーターの襲撃があるが！」

「班別に復旧箇所を決めるだが。Aチームはビル郡の修復だが、

Bチームは道路亀裂の復旧を急ぐだが、Cチームは・・・」

復旧は数日かかりタカヒトもてんとともにグーモーター達も疲労がかなり溜まっていた。そこへドゴル達イーター行動偵察隊が報告に来た。デノガイドはすでに地下都市が崩壊したと思いい込んで追撃はないとの事だった。しかし不安は拭い切れない為、最低限の復旧だけは終わらせようとグーモーター達は力を振り絞り復旧を急ぐ。

「タカヒト、コンクリートは温度管理と段取りが重要がね。」

タカヒトはドミンゴと共にコンクリートの打設作業に取り掛かっていた。デノガイドからの追撃に備えてシエルター層の復旧が最優先だった。ドミンゴの指導によりタカヒトはコンクリートポンプから圧送されてくるコンクリートを流し込む作業を手伝っていた。すでに鉄筋や型枠は組まれてコンクリートの配合もなされていた。ドミンゴの手際の良い段取りにタカヒトは多くを学ぶ事が出来た。タカヒトはコンクリート打設を行うのに内部振動機を使っていた。

「タカヒト、内部振動機を引き抜く時に穴が開いてるが。気をつけるが！」

「タカヒトは素人がよ。ドミンゴは少し厳しいがよ。」

「甘いが！基本が肝心だが。ビシビシ指導していくが。タカヒト、覚悟するが！」

ドミンゴの指導は厳しくタカヒトは叱咤された。ガミガミ小言を言い終わるとドミンゴが段取りの為にその場を離れた。

「タカヒト、気にすることないがよ。親方は口が悪いのが欠点だ

が。」

心配したグーモー達が声を掛けてきた。親方のドミンゴは普段は優しいが仕事に関してはかなり厳しいらしい。でもそれはタカヒトの成長を考えての事だから気を落とす事はないと慰めた。グーモー達の優しさでドミンゴの深い想いが伝わったタカヒトは懸命に仕事に打ち込んだ。打設作業も一段落して最後のコテを使っての仕上げをしているとドミンゴが近づいてきた。

「なかなか上手がよ。タカヒトは才能があるがね。」

「ホント？僕こういうの初めてなんだけど、なんか物作りって楽しいね。」

ドミンゴは笑顔を浮かべるとその場を去って別の段取りを行う準備に取り掛かった。一緒に作業をしていたグーモー達は笑みを浮かべている。嬉しくなったタカヒトは汗をかきながら懸命に作業を続けた。皆の努力のおかげで地下都市の復旧も八割方終了した為デオルトは休息を取ることを提案した。久しぶりの休みにグーモー達は皆で楽しく食事を取り風呂に浸かって身体を休めた。タカヒトもグーモー達と一緒に風呂に浸かり疲労を落として部屋に戻った。

「あれ？てんと、まだ仕事してるの？お風呂は？」

「まだだ・・・これを終わらせたら行くつもりだ。」

「大変だったけど楽しかったね。僕は皆で物事に取り組むの初めてだったし・・・」

疲労が溜まったせいもタカヒトはベッドに倒れ込むとそのまま深

い眠りについた。てんとは眠っているタカヒトに近づいていくと布団を掛けてまた仕事に戻った。ぐっすりと眠りに入ったタカヒトは初めてミカの夢を見た。暗闇の中ミカの声だけが聞こえる夢を。

「タツ、タカちゃん？タカちゃん何処？私はここだよ！助けて、お願いタカちゃん！」

「ミカちゃん？どこにいるの？ミカちゃん？・・・ミカちゃん」

カウンターアタック

「おい、タカヒト起きろ！タカヒト！！」

「ん？・・・あれ？ミカちゃんは？」

「何を寝ぼけている！はやく用意をしろ！」

「用意って・・・なんのこと？」

寝ぼけているタカヒトにはてんこの言っている事が理解出来なかった。目を擦りながらてんこの後をテクテクと歩いていくとデオルト達がテーブルを囲んで話し合いをしていた。タカヒトがテーブルに着くとなにやら作戦らしき話が聞こえてきた。デオルトが作戦の役割分担について話を進めるとタカヒトとてんこの名前が出てきた。何の事か分からないタカヒトは慌ててデオルトに問い掛けた。

「ちよつと待って！作戦ってなんなの？ 役割って？」

「作戦とはもちろんデノガイドへの反撃作戦のことだ。皆で話し合った結果、我々が生きていくにはどうしてもデノガイド、イーターの殲滅が必要不可欠なのだ。その後で王国の復興を行うと皆で話し合っただけ決めたのだ。しかし我が騎兵団は壊滅して膨大な数のイーターを相手に到底勝ち目は無い。」

そこで少数での奇襲攻撃を行うことになったのだ。もちろんグラモ達グーモ一族が協力してくれる。てんとは協力してくれると言ったのだが・・・」

「僕、知らないよ！・・・あつ、もしかして夜遅くまでてんが

してた仕事って。」

「その通りだ！確かにこれは危険な任務だ。

彼らを見捨てこの場を去ることも我々は出来る。どうする？」

「どうするって・・・見捨てることなんて出来っこないよ。」

「さすがタカヒトだが！頼りになる男だが！」

グラモが喝采をあげるとグーモー達も大声を上げて喜んだ。それだけ皆が不安な想いをしているのはタカヒトにも伝わってきた。巨大なデノガイドと膨大な数のイーターを相手にするのだからそれも仕方のないことなのかもしれない。彼らは勝算のほぼないと等しい戦いをすることを強いられるのだ。

「いかに恐怖に打ち勝つかがこの戦いのポイントだ。」

てんとはこの時そんな事を言った。いままでのタカヒトにはそんな経験は無い。恐怖に打ち勝とうともせずいつも逃げてばかりだった。タカヒトだけなら逃げられる事も出来るがデオルトやグーモー達は逃げる事は出来ない。戦いに勝利して平和な生活を勝ち取るしか道がないのだ。

デオルトはタカヒトとてんと、それにドミンゴやグーモー達に役割を次々と伝えていった。てんとはデオルトの考えた作戦を分析しながら再度役割について皆に事細かく説明していた。てんとの説明を聞いている最中、デオルトは先の戦いでのパピオン騎兵団の壊滅が頭を余儀っていた。

（もしかしてまた私は同じ事を繰り返そうとしているのではないか？）

復興、復讐、逃避・・・いろいろな思いがデオルトの心を苦しめた。正直この場から一番逃げ出したいのはデオルト自身なのかもしれない。苦悩に歪む表情をしているデオルトに説明を終えたてん트가近づくとボソボソと何か喋った。その言葉を聞いたデオルトはハッとするてんとを見て笑顔を浮かべた。デオルトが作戦を練り皆で準備を行うその作戦はいたってシンプルだった。作戦の標的はデノガイドのみ・・・。

作戦を遂行する前日の夜、ゲーモー達が戦いの準備をしている頃タカヒトはひとり地上に立って夜空を見ていた。ドゴルの言う通り地上にはイーターは一匹もない。辺り一面、緑に覆われていた森も今では茶色の地表面だけの姿になっていた。夜空に輝く星を見ながらタカヒトは夢で見たミカのことを考えていた。

「あれはなんだったんだろ？ただの夢？ううん、違う！あれはたしかにミカちゃんだった。ミカちゃんが何処かにいるんだ。きつとそうだ。僕に助けてって言うていたし。」

何処にいるかも分からないミカの事をタカヒトは心配している。デノガイドとの戦いを前に自分が生きて戻れるかどうか分からないにも関わらずミカの事を心配している。タカヒトは心のどこかでミカが近くにいるのではないかと感じていた。この戦いが終わればミカに会えるかもしれない・・・。

翌朝になると予定通りに作戦は決行された。デオルト率いるタカヒト・てんと・グラモの特攻野郎アルファ・チーム、ドゴル達イーター行動偵察部隊のベータ・チーム、先発隊としてドミンゴと工事作業員のサイクロン・チームはすでに作戦を実行していた。

「それぞれの任務を遂行して打倒デノガイドだ。諸君の健闘を祈る。いざ出陣だ！」

デオルトの出陣の号令と共に特攻野郎Aチームとイーター行動偵察Bチームはデノガイドの砦がある荒れ果てた地ルインズへと歩を進めた。ルインズの遙か手前でふたつのチームは別れ互いが作戦準備入った。その日は準備に追われる為に突撃は夜明けとともに行う事となっていた。

荒れ果てた荒野ルインズの中心に高くそびえ立つ砦がある。外部からの侵入は容易でいつでも入れるのだがそれは入ってくる者がデノガイドやイーターにとって餌でしかないからである。つまり自分達が襲われるとはデノガイドもイーターも考えたこともないということになる。しかし今イーター達は襲われている。大量の石の雨が砦目掛けて降ってきたからだ。突然の襲撃に砦のイーター達はパニック・パニック・パニック。その攻撃はドゴル達イーター行動偵察Bチームによるデオルトの作戦の一部であった。

よくしなる二本の木に枝を網の目を張り巡らせて大量の石を敷き並べる。木をしならせてから一気に開放することで大量の石を飛ばす原始的なものだ。しかし効果できめんで飛んできた大量の投石が砦を守っているイーターの身体に深く突き刺さっていくと悶絶しながら次々と力尽き倒れていった。

「何事だ！」

「デノガイド様、何者かに攻撃されています！」

「何だと！世界の王と知っての無礼か・・・砲台の準備をしろ！殲滅してくれるわ！」

デノガイドに指示された通りにイーターは砲台席に座ると標準を合わせて砲撃を開始した。轟音と共に砲弾が射ち込まれると直撃はしなかったものの爆風で数匹のグーモー達が吹っ飛ばされた。

「しつかりするが。起きるが！」

倒れて動かなくなったグーモを救出しよう別のグーモが声を掛ける。しかし続けて砲弾が射ち込まれると恐怖におののき右往左往しては逃げ回っていた。

「ギツギツギツ、死ね、死ね、死ね……??なんだ、これは？」

砲台席で砲撃操作を繰り返しているイーターは目の前のパネルにオーバーヒート警告ランプが点滅していることに気づいた。イーターはそれが何か理解できずオーバーヒートを気にすることなく砲撃を続けた。投石を繰り返していたBチームであったが今では砲撃に逃げ惑うのが精一杯だった。イーターの砲撃が続く度に砲台の温度はあがっていく。

「ギツギツギツ、死ね、死ね、死ね……なんだ？ヤケに熱いゾ?????!?!?!」

爆音と共に砲台が大爆発を起こした。砲撃していたイーターは原形をとどめることもなく灰と化す。最強の矛と呼ばれていても撃ち続ければ高熱が発生する為クールダウンが必要になる。しかしイーターにはそれを理解するだけの学習能力はなかったようだ。砦内での爆音はデノガイドにも伝わった。

「何事だ？」

「ギツ、ギツ、砲台爆発！砲台爆発！」

「バカが！砲台ひとつも使いこなせないのか！」

デノガイドはイーターの無能さに落胆しながらも次の作戦に取り掛かった。砲撃がなくなるとグーモー達は再び投石を開始する。その結果、砦の被害が増して戦況はデノガイド側が劣勢となっていく。それと同調するかのようにデノガイドの怒りも増していく。砦から戦況を確認したデノガイドは襲撃に対して意外にも冷静な判断を下した。イーター達に大量の石が飛んでくる方向を確認させると同時に反撃するように命令する。そしてイーター達は大量の石を避けながらその先にいたドゴル率いるイーター行動偵察Bチームを発見した。

怒り狂ったようにドゴル達に攻撃を仕掛けるべく向かっていくイーター達。ドゴル達は投石を続けるが石の軌道を読んだイーター達に当たる事はなかった。接近するイーター達とドゴル達との距離がどんどん縮むがドゴル達は逃げようとしなない。立ちすくんだ？諦めた？それとも・・・ドゴル達は近づいてくるイーター達に懸命に投石攻撃を続ける。

「ギー、ギー、ギー、喰ってやる！」

「ムダだ！投石はあきらめろ！軌道はすでに読んでいる。お前らの負けだ！」

投石をかわしイーター達が次々と近づいていく。怒りに目を赤くさせた数百いや数千匹のイーターの群れはドゴル達との距離を縮ませていく。先頭を走るイーターとの距離が100m・・・50m・・・30mと近づき先頭の一匹のイーターが顎を開き鋭い牙を見せて飛び掛かった次の瞬間、地面が激しく揺れ落ちた。地面が落ちるというありえない現象にその地面を走ってきた数千匹のイーターは成す術もなく落ちていく。

「ゴギヤアアアア~~~~」

「ウガアアアア~~~~」

ドゴル達に飛び掛ろうとしていたイーターさえも足場を失いドゴル達を見上げながら深い穴に落ちていった。どれくらい落ちていったのか？落ちていくイーターの視界に地面が迫ってくるグシャツと激突した。強固なイーターの甲殻は粉々に碎け、ドロドロした体液を辺りに撒き散らしていた。粉々になったイーターの上に運良く着地したイーターが数百匹いた。落下の衝撃にヨロヨロになりながら少しづつ震える手足で動こうとしたイーターは頭上を見上げると落ちてくる岩石にグシャツと押し潰された。すべての岩石が落ちると岩の間からイーターのドロドロした体液と残骸が見えてきた。

その穴の大きさはドゴル達のいる所を中心として半径がデノガイドの砦まで扇を描くように広がっていて深さは底が見えないほど恐ろしく深い。向かってきたイーターは数千匹・・・もちろん一匹も生きてはいないだろう。ドゴル達が喜び喝采をあげていると近くの地面からドミンゴの工事作業Cチームが這い出てきた。

「やったただが！やったただが！」

この勝利はてんとの考えた作戦が与えた。作戦決行の数日前からドミンゴと工事作業Cチームは地面に空洞を掘り続けるという大掛かりな土木工事を行っていた。彼らの掘削量は想像を絶するものだった。エッサラホツサラ、エッサラホツサラと地上から深さ1mくらいのところには巨大な穴を掘り更にその下に何層も同じように空洞を掘っていた。

勢いよく襲い掛かってきた数千匹のイーター達が薄い地面の上に到達した瞬間、重みに耐え切れなくなった地面が陥没して掘りあがっていた空洞に落ち薄い地盤の上に落ちた。更に下の空洞へと何層

も陥没を繰り返しながら巨大な穴をイーター達自ら造り上げた。イーター達は巨大な穴に落ちて一番下層の地面激突した瞬間、頭上から大小さまざまな岩が覆い被さり自ら圧迫死に導いていった。BチームとCチームは巨大な穴を造りあげた事に喜びいつまでも歓喜の声を上げていた。

「何事だ！この大揺れは？」

「デノガイド様！我がイーター軍は壊滅状態です！その数は数千
！！」

「何だと？おのれえ〜おい、ギガイーターにやつらの殲滅を命
じる。殺せ！」

殺戮部隊 サンギガトン

タカヒト達特攻野郎Aチームはイーターが墜落死した巨大な穴の反対側から砦近くに辿り着いていた。砦の中心にデカイ塔がそびえ立ち周囲には土で出来た巣らしきものが複数あるがイーターはいない。どうやらすべてのイーター達はドゴル達の討伐へ向かったようだ。歓喜の声は砦まで響いてデオルトは作戦が成功したものと確信した。

「このままデノガイドのいる塔の最上階へ向かうぞ。」

デオルトがタカヒト達に告げると塔内部へ歩を進めていく。

「おまち！」

塔内部へ潜入しようとした瞬間デオルト達を呼び止める声があった。辺りを見渡したが姿はなくそびえ立つ塔を見上げると三つの影が見えた。すべてのイーターは作戦に引つ掛かり塔の中にはデノガイドしかないものと確信していたデオルト達には痛恨の一撃であった。何故ならデノガイド以外を相手にするのは戦力の低下に繋がるからである。デオルトの額からは冷たい汗が流れ落ちる。

「何者だ！」

「何者？よくぞ聞いてくれました。いまこそ正体を明かすとき！
いくわよお〜とぅ〜とぅ〜クルクルクルツ、ハアア〜！！」

砦から勢い良く前回転しながら飛び降りてきた三つの影がタカヒト達の進路をふさぐように着地した。太ったイーターと細く長いイ

ーター。それにちょっとオネエっぽいーターだ。ーターとしては珍しく二足歩行の昆虫種であった。

「ワイはイタ太郎お〜〜！」

「ミイはイタロスう〜〜！」

「そしてわたしがギガーター！三人揃ってハイ、殺戮部隊サンギガトン！！」

着地と同時に三匹のーターは名を名乗ると機械体操のような決めポーズを取った。いままでと違う展開にタカヒトは言葉を失い、ただ呆然としていた。オネエっぽいーターはそんなタカヒトを見て笑みを浮かべて喜んだ。

「きつ、決まったわ！お前達の動きを止めるほどの衝撃だったよ
うね・・・」

もしかしてアンコール希望かしら？」

「いつ、いや・・・結構です。」

「それは残念ね・・・まあいいわ。私達、殺戮部隊サンギガトンに出遭ったのが運の尽きね！私達の強さは普通じゃないわよ、まさに女王の強さよ！」

「あのお〜・・・質問です。女王の強さって何ですか？」

女王の強さが分からないタカヒトは何気に質問してみた。ギガーターはそんなタカヒトのけなげさを気に入ったらしく説明を始めた。

「いいわ、説明してあげる。まずこの太つちよいのはイタ太郎と言ったただのデブではないわ。伝説のカブト虫カブくんを投げ飛ばした事が一度だけあるわ。そのパワーは圧倒的よ!」

「伝説のカブト虫って知らないんだけど・・・。」

「んっ、何か言った?次に紹介するのが紳士的に見えるイタロスよ!イーターの中で最も細く、細さでは誰にも負けないわ。」

「・・・それって強さ?」

「あと・・・最後に私がいるじゃないの!そう私が女王よ!えっ、女王の強さは何かって?ふん、決まってるじゃない!この美貌、このスタイル、そしてこの頭脳よ!えっ、頭脳って頭がいいのかって?当然よ!さあ、かかってらっしゃい!最強奥義サンギガアタックを見せてあげるわ!」

「最強奥義サンギガアタック??」

なんとなくカッコいい言葉にタカヒトは瞳をキラキラ輝かせた。サンギガアタックとはサンギガトンの必殺技らしくこの技を喰らったら地獄へ一直線と豪語する。しかしこの技は最後の技だから今は出せないと言った。

「私達が敵に追い詰められて、追い詰められて最後の最後に出す逆転技よ。」

それでも身振り手振り在必死にサンギガトンが説明している姿は滑稽でタカヒトは笑ってしまうのを必死に堪えた。

「!!! その子供! 目を潤まして……はっ! もっ、もしかして恋ね!

私の美しさに見惚れて……そして恋をしたのね!」

「えっ? ……いや……」

「きつ、貴様! ギガイーター様に恋とは許さんぞ!」

「あのお〜 そうじゃなくて……」

「この野郎お〜!!」

イタ太郎とイタロスは息荒くタカヒトを睨みつけると一瞬にしてタカヒトの前に接近してきた。真っ赤な眼をした二匹は鋭い爪をタカヒトの首元に突きつけた。その瞬間、タカヒトに戦慄が走る。てんと達は成す術もなく二匹の接近を簡単に許してしまったのだ。イーターの頂点に立つ最強戦士サンギガトンを甘く見ていた。タカヒトが殺されるといふ最悪の状況が脳裏を過ぎる。てんとはタカヒトを守るべく飛び向かっていくが二匹のイーターを止めたのは意外にもギガイーター本人であった。

「おまち! ……お前達の気持ちはわかるわ。でも恋は自由よ。そう恋は自由そして……お前達の私への想いは痛いほど分かるわ。でもこの子供の想いも分かるの。そう、あなた達は恋のライバルであり、友でもあるのよ!」

ギガイーターは涙ながらに両手を挙げてやさしく語った。それを聞いたイタ太郎とイタロスはタカヒトの首元から鋭い爪を離すと下を向き少しの間二匹に物事を考えている沈黙の時間が流れた。数分

ほど経った頃、イタ太郎は顔をあげると何かが吹っ切れたように口を開いた。

「恋のライバル、そして友・・・ワイは負けへんで！」

「悪かったな。今度、飯でも喰いながらギガイター様について共に語ろう！」

「・・・うつ、うん・・・」

イタ太郎とイタロスはタカヒトと手を取り合った。それは恋のライバルとしてタカヒトを認めた瞬間でもあった。恋のライバルは少ないほうがいいに決まっているがライバルに打ち勝ってこそギガイターとの愛情が深まるとイタ太郎とイタロスは確信した。もちろんタカヒトにはその気は全くないのだが二匹が盛り上がっている以上、水をさしてはいけないような気がしてとりあえずイタ太郎とイタロスに合わせてみた。そんなイタ太郎とイタロスとタカヒトの男同士の友情にギガイターは涙を流していた。

「いいわ～～男の友情、そして恋の戦い。その中心にわ・た・し。うう～～～ん最高！」

わたしって輝いてるわ！さあ、わたしを奪い合いなさい！・・・あつ、そうそう、こんなところで自分に酔っている場合じゃないわ。お前達行くわよ。あんた達も早く行きなさい。私達はデノガイド様に楯突こうっていう輩を退治しに行くところなの。まったく困ったちゃんだわ。

あつ、それと世界中の男が私を狙っているからのんびりしてられないわよ。あなたもがんばりなさい。」

ギガイターはタカヒトにウインクするとイタ太郎とイタロスを

連れて立ち去っていった。取り残されたタカヒトに冷たい風が追い討ちを掛けるように吹いた。少しの沈黙の後、同情するようにデオルトがタカヒトの肩をポンツと叩くと先に塔の中へ歩いていった。グラモもてんとも無言でデオルトの後を着いていくとその場にはタカヒトがひとり取り残された。

「ちょっと！僕、あんなのヤダよ！ミカちゃんがいるんだもん、絶対に嫌だ！」

あれ（サンギガトン）がなんだったのか？タカヒト達にはよく分からなかったがとりあえず回避出来たという事で塔へ潜入していった。塔内は静まりかえっていたが一匹だけイーターがトボトボ歩いていた。どうやら出遅れたらしくフロアをうろろしている。

「てんと、どうする？イーターがいるよ。なんとかしないと先へは進めない。」

てんとはフロアを見渡して少し考え込む。

「グラモ、イーターが這い上がれない位の穴を気づかれずに掘れるか？」

「もちろん可能だが。」

グラモはキョロキョロと辺りを見渡すと穴を掘り始めた。物凄い速度で掘っているが鈍感なイーターはグラモにまったく気づかず、相変わらずウロウロしている。

「出来たが！」

グラモが頭をヒョコツと出すとイーターがスッポリ入る位の穴を掘り終えた。てんとはデオルトにウロウロしているイーターをこの穴まで引き付けるように頼むとデオルトはイーターの前に向かって飛んでいく。

「お・・・えざ・・・」

デオルトに気づいたイーターは追いかけてくるがさすが出遅れたイーターだけに動きが鈍くいつまで経ってもデオルトに追いつけず穴まで辿り着かない。遅い割に息切れだけは異常に激しく穴の存在すら分らないほど疲れきっていた。デオルトが穴の上を飛び越えてイーターの近づいてくるのを待っている。

「オギヤアアアア〜」

グラモが掘った穴の存在には全く気づかずイーターはそのまま落ちた。穴に落ちたイーターは激しい息切れと動悸に起きあがることも出来ずうずくまっていた。

「成功だな。先を急ごう。」

「ねえ、てんと。このイーターはどうするの？」

「放っておけ。大丈夫だ、死にはしない。」

岩の一階フロアには何もいないことを確認すると階段をのぼりタカヒト達は二階を目指していく。その頃、殺戮部隊サンギガトンは数千匹のイーターが落ちた巨大な穴を歩いていた。ゴツゴツした岩場の下には数え切れないほどのイーターが潰れていてピクリともしない。長い間歩いたせいかなサンギガトンの疲労はピクに達してい

た。

「ギガイーター様、どこにもいません！」

「そんなことはないわ。必ずいるわ。捜しなさい。ところでイタロス！特徴は？」

「はっ、特徴はグーモ族とパピオンそれに浮遊している生き物と子供の四名です。」

「デノガイドに逆らう不屈きな奴らね。はて？何処かで会ったよ
うな……！」

ギガイーターの脳裏にタカヒト達の姿が浮かんだ。そしてギガイーターは怒りに震えた。イタ太郎とイタロスを騙し、その上ギガイーターのプライドをズタズタに傷つけたタカヒト達を許せはしなかった。イタ太郎とイタロスを引き連れて激怒したギガイーターは皆へと引き返していく。

反撃 サンギガトン

タカヒト達は二階へ向かう階段をのぼっていくが周りは薄暗くジトジトしていた。二階のフロアにはイーターは居ないらしくデオルトは皆を止めた。

「これより対デノガイド作戦決行する。」

デオルトは皆に伝え二手にわかれる事にした。デオルトとてんとで塔の外から最上階を目指してタカヒトとグラモで階段から最上階を目指す。最上階のデノガイドに挟み撃ちを仕掛けるのがこの特攻野郎Aチームの作戦である。作戦の内容と合図を確認した四名は二手にわかれタカヒトとグラモが三階を目指し階段をのぼろうとした。

「おまち!!」

タカヒト達を呼び止める声がフロアに響いた。振り返るとサンギガトンが立っていたのだが相当疲れている様子だった。タカヒト達が攻撃体勢と整えサンギガトンの攻撃に備えるとギガイーターが片手をあげて呟いた。

「ちょっとタイム・・・休ませなさい・・・疲れているんだから。」

5分経過・・・

「待たせたわね!この私を騙すとはいい度胸だわ!
いくわよあ~~~~と~~~~クルクルクルッハア~~~~!!」

「ワイはイタ太郎お〜」

「ミイはイタロスう〜」

「そしてわたしがギガイター！三人揃って殺戮部隊サンギガトン！ハア〜」

以前と同様に空中に飛び上がり前回転を繰り返して着地するとサンギガトンは決めポーズをとった。しかし以前とは少し決めポーズが違うようでその事をタカヒトが問い掛けた。

「いくつか決めポーズのパターンがあるわ。そうしないと飽きちゃうでしょ。」

「ふう〜ん。そうなんだ。教えてくれてありがとう。」

「これはご丁寧にも・・・」

ギガイターとタカヒトがお辞儀をかわし挨拶を済ませたところで・・・

「まったくデノガイド様に楯突く輩がお前達だったとは！ここで出遭ったが運の尽きよ！まあ前も会ったけど。イタ太郎、イタロス。いくわよ最強奥義サンギガアタック！」

「ちょっと、待って！」

「坊や、命乞いは一切受け付けないわ。」

「ううん、そうじゃあないよ。あのさあ〜・・・必殺技って最後

に使うんじゃないの？普通最初には使わないんだよ。ヒーロー戦隊なんでしょ？ヒーロー戦隊は最初ピンチになってから最後に必殺技で勝つって決まっているんだよ。」

「ヒーロー戦隊・・・なんていい響きなの！ヒーロー戦隊サンギガトンいいわあ〜それ！そうね、ヒーローたるもの最初はピンチで最後に決めるのね。そして勝利の美酒に酔う。素晴らしいわ。よし、イタ太郎、イタロス最初はピンチよ。さあ、あんた達攻撃しなさい！」

サンギガトンは納得した上でタカヒト達に自分達がピンチになるように攻撃するように伝えるとその場に座り込んだ。恐る恐る確認するようにタカヒトは言った。

「ホントにいいの？」

「もちろんよ！さっさとやってちょうだい。」

その言葉を聞いたタカヒトはフロアの端にあった石の塊を持ちあげるとイタ太郎の頭上目掛けて思いっきり振り下ろした。するとイタ太郎の頭から大量の血が流れた。続いて槍を構えたデオルトの鋭い槍術でイタロスは八つ裂きされた。更にテントの体当たりでイタロスの首の骨が折れた。グラモのメガトンパンチにギガイターの顔が腫上がっていく。

10分後・・・

「ねっ、ねえ・・・そろそろいいんじゃないのかしら？」

「まだ十分しか経ってないよ。普通は二十分までピンチなんだよ。」

「ギガイターは顔を腫らし元の顔がどうなっていたか分からなくなっていた。イタロスは首と右足が折れて立つ事もままならない。イタ太郎に至っては緑色の血で身体が染まっていた。」

「そつ、そうなの・・・仕方ないわね。さあ、やってちょうだい。」

20分後・・・

「サンギガトンはもはや立つこともままならぬくらいに叩きめられていた。ギガイターの顔は二倍以上に腫上がっている。イタロスは首と右足それに左肩が外れていた。イタ太郎は緑色の血が目に入り状況が全く分からない。」

「もう・・・いいわね・・・いつ、いくわよ・・・サンギガ・・・」

「ちよつと待って！最強奥義サンギガアタックってどんな技なの？」

「最強奥義サンギガアタックはイタ太郎とイタロスがギガイターを持ちあげてそのまま相手に投げる技だと答えたがタカヒトがわからない様なそぶりを見せた。」

「・・・分かつ・・・たわ・・・実演・・・する・・・わ。」

「そうと言うとギガイターは倒れこんでいるイタ太郎とイタロスを無理やり起こした。ギガイターを先頭にイタ太郎とイタロスはその背後に配置すると三角形の隊形に並んだ。イタ太郎とイタロス」

はギガイターの足を持ちあげ必殺技のポーズを取った。か細い声でギガイターが掛け声をあげた。

「いつ、いく・・・わよ・・・最強・・・奥義、サン・ギガ・・・アタツ・・・ク！」

ギガイターは予行練習のつもりだった。だが伊タ太郎は大量の血を流してほぼ意識はなく力いっぱい投げた。イタロスは右足が折れていた為にギガイターを投げる方向を誤りギガイターは勢い良く壁に飛んで激突した。砕けたレンガがギカイターの頭上に崩れ落ちた。ギガイターは起きあがれず沈黙している。

「ギガさま、ギガさま！どうされましたか？」

おい、伊タ太郎！お前の投げ方が悪いからこうなったんだぞ、コラー！」

「なっ、なんやと！おのれが悪いんやろが！ちゃんとしいや！」

いがみ合っている二匹の怒りはエスカレートして殴り合いになった。足腰は震え立つ事もまならない二匹はそれでも殴り合いを止めようとはしない。そして伊タ太郎の渾身の右ストレートとイタロスの快心の右フックが互いの顔面にヒットすると双方は崩れるようにその場に倒れこんだ。

サンギガトン撃破！！

「とりあえずサンギガトンは倒したようだがタカヒト、徳の水筒を使ったのか？」

「ううん、てんと言われた通り最後の切り札と思って使ってい

ないよ。」

「そうか、サンギガトンの天然か。まあ、うまく行ってよかった。では先を急ごう。」

「二手にわかれていよいよデノガイドとの戦いだ！」

徳の水筒を使わずにタカヒトがサンギガトンとの戦いを切り抜けた事にてんとは驚いた。まさかタカヒトがこのような切り抜け方をするとはい思っても寄らなかつたのだ。どうやらタカヒトにはてんにはない変化に対する対応力が備わっているようだ。

てんとそんなことを考えながらも次なる作戦遂行を行っている。当初の作戦通りにデオルトとてんとは塔の外から最上階を目指しタカヒトとグラモは階段から最上階を目指していく。薄暗い階段をのぼるとタカヒトとグラモは最上階まで何事もなくすんなり辿り着いた。

「これは水爆弾だ。この爆弾を使ってデノガイドを倒す。」

「爆弾？こんな小さな板でデノガイドが倒せるの？」

「実演して見せよう。」

不思議がるタカヒトにデオルトは笑みを浮かべ実演をすることにした。地下都市内で開発途中の何も無い場所にタカヒトを連れてくるとデオルトは板の端を切り取りそれを岩に貼り付けた。岩の大きさはタカヒトの身長より少し大きいほどだ。貼り付けた板をデオルトはドミンゴに借りたハンマーで叩くとすぐにその岩から離れた。貼り付けた白板はハンマーの衝撃を受けてから少しずつ黒くなり真っ黒になると同時に爆発した。煙が消えかけると岩は粉々に砕け散り跡形もなくなっていた。

「びつくりしたあゝ。あんな小さな板のカケラであの岩が粉々になるなんて！」

これならデノガイドを倒せるかもね。」

「.....」

タカヒトが希望に胸を躍らせるのとは逆にデオルトの顔は少し曇った。実はこの水爆弾には致命的な欠点がある。もともとグーモ一族が荒れ果てた荒野を開拓するために使用しているもので今のよう
に岩に貼り付けハンマー等で衝撃を与えることで数秒後に爆発する。
デノガイドに水爆弾を貼り付ける距離まで近づき衝撃を与えてから
数秒後の爆発までのタイムロスが伴うのである。つまりデノガイド
に気づかれず貼り付けてから衝撃を与えなければならぬのだ。そ
の上デノガイドの甲殻は異常に硬く甲殻と甲殻の間の可動部や繋ぎ
目を破壊しないとデノガイドは倒せない。

しかも水爆弾は水イモリのフンと赤土で出来ているのだがこの時期水イモリは捕獲できない。現在残っている水爆弾は二枚だけなのだ。

「二枚かあゝでもどうするの？デノガイドが貼らしてくれるわけないし。」

「無論、誘導作戦しかないだろうな！」

デオルトの作戦はAチームが砦に辿り着いたらデオルトとてんと砦の外から飛んで最上階へ向かう。一方タカヒトとグラモはデノガイドの正面に立ち注意を引きながらデオルト達がデノガイドの背後から近寄り水爆弾を貼り付け爆発させるといふものだ。

「そんなにうまくいくかなあゝ。」

「今からそんなこと言うてどうする、タカヒト！」

恐怖に怯えフロアに座り込んでいるタカヒトの脳裏にあの時の光景が流れこんだ。勇敢に特攻していくグラモの姿を見てタカヒトはなんとか立ちあがるうとするが足が思うように動いてくれない。恐怖がタカヒトの身体を完全に支配していた。距離が近づいていくグラモはデノガイドにとつては餌が近づいて来ているという認識しかなく大きな顎を開けて餌が来るのを待っていた。

「いくどおゝ！いち・にいゝゝのゝゝそおれゝゝ！」

叫び声と同時にグラモはデノガイドの手前で直角に曲がって走り過ぎた。デノガイドはその行動に困惑していると窓からてんと達が砦内に侵入してきた。てんとは手に水爆弾を持ってデノガイドに気

づかれないようにゆっくりと近づき分厚く硬い殻と殻の間に水爆弾を貼り付けた。

「そんな作戦が私に通じるとでも思ったのか？やれやれ、なめられたものだ。」

「!!!」

次の瞬間てんとの動きが止まった。恐ろしい殺気を感じて見上げるとデノガイドの眼にてんとが映っていた。すべてお見通しだったデノガイドに対して蛇に睨まれた蛙のようなに動けなくなっただてんと。てんとの瞳にデノガイドの尾がスローモーションのように近づいてくるとてんとの身体はフロアの端まで飛んでいった。

「てんと!」

てんとは意識が薄れていく中タカヒトの叫び声だけが聞こえた。聞こえていたその声もだんだん小さくなりてんとは完全に沈黙した。恐怖に支配されていたはずのタカヒトは我を忘れて走っていた。てんとに近づこうとしたその前にデノガイドが割り込むように立ち塞がる。

「先ほどまで恐怖に怯えていたお前が何をするつもりだ？」

お前は何も出来ない。誰も救えない。非力で弱い存在だろ？」

「タカヒト、逃げるだが！逃げるだが！」

デノガイドの後でてんとは倒れている。デノガイドと対峙しているタカヒトの遙か後方からデオルトとグラモが懸命になって叫んでいた。

「タカヒト、作戦は失敗だ！態勢の立て直しを行う。撤退をするぞ！」

ふたりは叫んでいたがタカヒトは逃げようとはしなかった。タカヒトはフロアの天井に頭が届くほど恐ろしい相手デノガイドと対峙している。

「ダメだ、恐怖のあまり身体が動かなくて逃げ出せないのだ。」

「タカヒト、逃げるが！逃げるがよ！」

デオルトとグラモの必死の叫び声にタカヒトは依然反応を示さなかった。この時、復旧活動を行っていた時のてんととの会話がタカヒトの脳裏に過ぎった。地下都市の復旧をしていた頃、その日の分の修繕工事を終えると夕食を取り疲れきったグーモー達はグッスリ眠った。疲れてはいたが眠れずにタカヒトは暗闇のビル郡を眺めていた。

「眠れないのか？」

そこへてんとが近づいて来た。ふたりは暗くなったビル郡を眺めている。地下都市は常に明るいわけではなく夕食を終える頃には暗くなるようになっていた。それは生物としてのバイオリズムを狂わせないようにパピオン国の技術者達が考えたシステムである。暗いビル郡を見てタカヒトはミカが入院している病院のことを思い出していた。しばらくふたりの間に沈黙が流れたが珍しくてんとからタカヒトに人道の世界の事やいじめについて問い掛けた。

「えっ、いじめ？・・・辛いよ。皆が無視したり、殴られたり・・・」

ほんとに辛くて苦しいんだ！逃げ出したかった……」

「逃げ出せば済む事ではないのか？」

「そんな簡単には無理だよ。引越すわけにもいかないし

お母さんが心配するから言うわけにはいかないし……」

「言っている意味が全くわからないな。」

逃げ出したいのに逃げ出せない。危険を回避するために何より自分の命を最優先に生きてきたてんとは理解する事など出来ない。誰かの為に自らが犠牲になる。そんな考えで生きていけるほどてんとの生きてきた世界は甘いものではなかったのである。

「そうだけど……逃げてばかりじゃ駄目でしょ？」

「無論だ。命を賭けて行動すべき場合もある。その時は逃げるわけにはいかないな。」

「それってどんな時？」

「おまえにも守りたい何かが見つかるはずだ。その時が逃げられない時だろうな。」

非力なタカヒト

てんとは依然沈黙している。タカヒトの姿を固唾を呑んで見つめているデオルトとグラモ。そしてタカヒトの目前にはデノガイドがいる。デノガイドはとぐるを巻きながらタカヒトの頭上に鋭い牙を近づけていく。

「逃げないのか？それとも足がすくんだか？まあ、どちらでもよい。おまえもあそこにいるのも喰らってやろう！」

「……ぼくもてんともお前に食べられはしないし逃げるつもりもない！

僕がお前を倒しててんを助けるんだ！」

「グアハハハ、倒す？非力なおまえがこの私をか？」

「非力なぼくがお前を倒すんだ！ぼくは痛いのも怖いのも嫌いだ。でも逃げない！てんとは僕が助けるんだ！」

「……世界の王に口が過ぎたな。殺してくれよう！」

餌にすぎないタカヒトが倒すと言っていること自体がデノガイドの自尊心を傷つけた。鋭い牙見せるように顎を開けて威嚇するデノガイドの眼にタカヒトが徳の水筒を取り出して一口飲む姿が映った。徳の水筒を再び腰に吊るすとタカヒトの身体はデノガイドが眼を細めるほど眩しく金色に光りだしていく。

「光れば強くなるのか？そのまま喰らってやろう！」

デノガイドはその鋭い牙を光らせると地上に立っている金色タカヒト目掛けて襲い掛かった。この時の金色タカヒトには襲い掛かってくるデノガイドの動きがスローモーションのように見えている。金色タカヒトはスツと身体を動かすとデノガイドの攻撃をいとも簡単にかわした。勢い余ったデノガイドはフロアに顎をブチ当てた。そのまま崩れるように甲殻に包まれた身体が倒れこんだ場所には金色タカヒトが立っていた。

「はあああああ〜」

突き出した金色タカヒトの右拳がデノガイドの硬い甲殻にヒビをいれた。デノガイドの甲殻はイーターのそれより数倍の強度を誇るが右拳の衝撃はデノガイドの内臓に伝わっていった。デノガイドが今まで味わった事のない激痛にフロア中を這いずりまわっている。そしてその姿を金色タカヒトが見下ろす。

「ガハアア！・・・おのれえ〜この私を見下すとは・・・小僧があああ〜」

体勢を立て直して顎を開くと再び金色タカヒトに襲い掛かる。しかしすべての攻撃がスローモーションに見える今の金色タカヒトにとってデノガイドは怖い存在ではない。襲い掛かってくる鋭い牙を簡単にかわした金色タカヒトは瞬時にデノガイドの懐に入り込むと甲殻部分でない腹部に力を溜めた渾身の一撃を与えた。

「グガアアア・・・ガアア〜！！」

デノガイドの身体はフロア端までフツ飛んで砦の壁に張り付いた。一方的にデノガイドが倒される姿を見たデオルトとグラモはその戦いの状況を理解する事が出来ない。それもそのはずである。この世

界で最強のデノガイドはパピオン騎兵団を壊滅に追いやったイーターを束ねる最強肉食系昆虫種である。気の弱いタカヒトがそんなデノガイドの攻撃をかわし、しかもダメージを与えるなど夢にも思わなかった。

「デオルト！はやく、てんとの救出を！」

金色タカヒトの言葉に我に返ったデオルトは周囲を見渡して状況を把握した。グラモと共にてんとの救出する為フロアの端まで走ってんとの様子を確認する。意識がなかったものの鼓動は聞こえた。

「タカヒト！てんとは大丈夫だ！」

「てんとを連れて僕の後ろに集まって！」

「わかったが。デオルト、行くだが！」

てんとを抱きかかえるとデオルトとグラモは急いで金色タカヒトの後に走っていった。フロアの端に吹っ飛んでいったデノガイドは意識を取り戻すが状況を理解する事が出来ない。最強の肉食系昆虫種であるデノガイドはいままでにない強き相手に戸惑っている。それはイーターより遥かに小さく牙すら持っていない非力な存在に倒されているからだ。戸惑っているデノガイドの姿を見据えて金色タカヒトは吐き捨てるように言葉を浴びせた。

「非力なデノガイド・・・ケリをつけようか！」

「？・・・こつ、小僧！・・・おのれえ〜！！！」

デノガイドは怒りに身体を奮わせていた。この状況が長く続かな

いことは金色タカヒトだけが知っている。徳の水筒の効力は一時だけ・・・効力を失えばいつもの非力なタカヒトに戻ってしまう。だがデノガイドを相手にタカヒトは冷静だった。人道のイジメっ子達より恐ろしい相手を前に冷静に状況を分析して行動している。今は恐ろしいという感情はなくタカヒトはてんとやデオルト達を守ることだけを考えていた。デノガイドの甲殻は想像以上に硬くどんなにタカヒトが徳を使っても甲殻を貫くのは無理だということは分かった。

ではどうする？どうすれば倒せる？・・・やはり水爆弾しかない！

そう考えた金色タカヒトは周囲を見渡す。水爆弾のひとつはデオルトが持つていてもうひとつはデノガイドの分厚く硬い殻と殻の間に貼り付いている事を確認した。徳の水筒の効力は切れかけている。金色タカヒトは一か八かの勝負に出ようとしている。

「時間はもうない・・・一か八か勝負だ！」

金色タカヒトはデオルトの位置を確認すると瞬時にデオルトの持つている水爆弾を奪い取り、振り返り様にデノガイドに向かって飛んでいくとデノガイドの目前で立ち止まる。デノガイドも金色タカヒトに対し頭を低くして金色タカヒトの目線の高さに身をかがめる。これがデノガイド最強の攻撃体勢だ。デノガイドは金色タカヒトを強者と認め自らの最大の攻撃体勢をとったのだ。それはデノガイドにとっても生き残りを掛けた最後の攻撃だった。

これは双方にとって最後の攻撃であり勝負は刹那で決まる。互いが一歩も動かさずに対峙している。デオルトとグラモは固唾を呑んで状況を見守っていた。

「小僧!！」

沈黙にシビレを切らし先に動いたのはやはりデノガイドだった。低い体勢から一気に金色タカヒトとの間合いを詰めるとその鋭い牙で襲い掛かる。

それは刹那の出来事だった・・・

紙一重で鋭い牙を避けた金色タカヒトはデノガイドの背中に飛びついた。デノガイドは振り払おうと懸命に身体を動かすが金色タカヒトは振り落とされないように耐える。金色タカヒトは前の攻撃でヒビの入った甲殻を見つけると割れた箇所には水爆弾を貼り付けた。

「はあああああああゝゝ!！」

振上げた右拳を思いっきり振り下ろすとデノガイドの身体はまたもフロアの端まで吹っ飛んだ。デノガイドの激突で壁が破壊され粉塵があがる中、デノガイドの激怒した罵声が響き渡った。

「ガハツ、ゴガアゝゝ 小僧!！」

壁にめり込んだ身体を起こして反撃に転じようとデノガイドが立ちあがった瞬間、胴の部分が黒く光り爆発した。金色タカヒトの渾身の右拳により衝撃を受けた水爆弾が爆発したのだ。更にてんとうが貼り付けた水爆弾も連鎖的に爆発すると硬度を誇った甲殻を持つデノガイドの身体は半分引き千切られた。フロアの端で上半身だけのデノガイドが這い蹲りもがいている。

「ゴカア、ゲバア、ゲバア・・・こつ、こんな・・・はずは・・・」

デノガイドは顎から血を吐き、千切れた胴体からは内臓が飛び出してもはや戦闘不能状態だった。そして金色の輝きがなくなったタカヒトはデオルト達のもとへ走っていく。真っ先に心配したのはほんとの容態だった。

「気絶しているが大丈夫だ・・・タカヒト、あの金色の輝きは何なんだ？」

「うん・・・後で説明するよ。それよりこの砦を早く脱出したほうが良さそうだよ。」

「そうだが、タカヒトの言う通りだがね！」

デノガイドはすでに戦闘不能で動くことも出来ない。もはや生きることにも適わないだろう。作戦を完遂したタカヒトはてんとを背負うとデオルトとグラモと共に砦の脱出を開始していく。

龐大なる力を持つ者

「！！きつ、貴様等！何の真似だ？この私に喰らいつくとはどういふことだ！」

砦から脱出すべく階段をおりようとしたタカヒト達は悲鳴を聞き振り返るとデノガイドが複数匹のイーターに囲まれていた。グーモ一族の作戦に壊滅的な被害を受けたが数少ない生き残りのイーターが砦に戻っていた。そして瀕死状態のイーターにとってデノガイドを喰らう事は生き残る唯一の手段である。デノガイドの下半身には数匹のイーターがすでに喰らいついて、餌にありつけなかった残りのイーターがデノガイドの上半身に近づき飛びついてきた。飛び出した内臓に数匹のイーターが我先にと鋭い牙で喰らいつくと同時にデノガイドの悲鳴がフロア中に響きわたる。

「ゴカア〜〜、やめろお〜！このデノガイド様がこんな、こんなことが！ウギヤ〜〜やめろお！やめてくれえ〜〜 たっ、助けてくれえ。ウワア〜〜ゲガア！」

イーターはデノガイドの内臓を喰らいながら内部をくり貫くように喰らい進んでいく。イーター達がデノガイドの脳に達するまでのわずかな時間・・・デノガイドは激痛と恐怖を味わいながら死を迎えなければならなかった。

「まさに畜生の世界だが。早く脱出するだが・・・！！！」

その恐ろしい晚餐の光景にタカヒト達は急いで階段をおりる。だが階段をおりた先にも数匹のイーターの姿がありタカヒト達は急いで引き返す事となった。引き戻ったフロアには見るも無残なデノガ

イドの肉片が辺りに散らばっていた。もはやこのフロアに残った餌はタカヒト達だけのようだ。複数匹のイーターがヨダレを垂らしながら彼らを取り囲んだ。フロアの中央にタカヒト達、そしてその周囲には複数匹のイーターが取り囲む構造が成り立っていた。もう一度、徳の力を使おうと決意したタカヒトは徳の水筒の蓋に触れたが蓋は回らない。戸惑うタカヒトに餌を求めて複数匹のイーターが間合いを詰めてきた。

「どうしだが？さっきのアレになれないのだがあ？」

「それが・・・水筒の蓋が取れないんだ！徳の力が使えない！！」

「そげなこつあるだがか！！」

グラモは絶叫にも近い声をあげて右往左往している。タカヒトは必死になって徳の水筒の蓋を開けようとする。徳の力以外でこの絶望的な状況を回避すべき方法はタカヒトにはない。複数匹のヨダレを垂らしたイーター達に囲まれている状況にデオルトは死を覚悟すると水筒の蓋を開けようとしているタカヒトの肩をポンつと叩いた。

「タカヒト・・・君達のおかげで本来の目的であるデノガイドは倒すことが出来た。やはり君達は勇者であったのだな。後はグーモ一族がイーターの残党狩りをしてくれると確信している。我々は決して犬死では無い！」

「・・・そうだが、タカヒトは一生懸命戦ったがね。ワシらもよもういったが・・・
もういっぺん、かかあの飯が食いたかつだがねえ〜！！」

デオルトの言葉を聞き、グラモは死を受け入れた。グラモは諦め

て座り込むと最後の願いを叫んだ。デオルトは笑みを浮かべ複数匹のイーターに囲まれている状況で床に膝をつき覚悟を決めた。数匹のイーターが我先にと言わんばかりにふたりに襲い掛かった。その瞬間、タカヒトの脳裏に学校でミカがタカヒトをかばって床に倒れこんだあの光景が重なった。

「嫌だ！もう大切な人を失いたくない！！」

タカヒトの心の叫びが、皆を守りたいという想いが強まった瞬間、デオルトの身体が紫色に光り輝いた。それと同時にタカヒトの周囲が暗闇に包まれるとデオルトもグラモもそれにイーター達も誰もいない空間が広まっていた。状況を理解出来ないタカヒトは暗闇の空間をキョロキョロと見渡している。すると紫色に輝く炎が目の前にひとつ見えた。タカヒトはその輝きに吸い込まれるように近づいていくと炎は更に輝きを増した。

「私を呼んだのはおまえか？」

「えっ、喋った？炎が喋った??」

タカヒトが驚いて腰を抜かすと炎は自らを庞大なる力を持つ者紫玉と名乗った。タカヒトの大切な者を守るといふ心の叫び声に長い歳月の間の封印から開放されたと語る。だが封印を解かれたことに紫玉は嘆いていた。紫玉の力は絶大。故にこの力を得た者は殺戮、強奪、破壊とありとあらゆる罪を重ねていく。その事を常に嘆いていた紫玉は二度とこの世界に現れないようにパピオン国王に頼んでデオルトの中に封印されていた。それからの紫玉はデオルトの意識の深いところでずっと眠っていたらしい。無論デオルトはこの事を知らず国王だけが唯一紫玉の存在を知っていたのだ。

「そうか！デノガイドの捜していた紫玉はデオルトの中にあつたんだ……」

紫玉、僕達を助けてください。このままだと、皆が殺されてしまふ。」

「もしお前が私の力を受け入たいのなら契約を交わそう。だがこの力を己が欲望に使い罪を重ねれば死を受け入れなくなるほどの業がお前に降り掛かるがそれでも良いのか？」

「皆を助けることが欲望かなんて僕にはよくわかんないけど……それでも業が降りかかって僕も皆を助けたい！」

力の使い方間違えれば業が降り掛かる。紫玉の力がどのようなものなのか？正直、タカヒトには紫玉を使いこなす自信は全く無かった。しかし皆を助けられるのなら今はその力がほしい。どちらにしても紫玉の力がなければイーター達に喰い殺されるわけで選択の余地は無かった。自分の身に何が降り掛かろうと皆を助けたい。心の整理がついたタカヒトは真直ぐしかも素直な表情で紫玉を見つめた。

「僕は君と……紫玉と契約を交わします。」

その言葉を聞いた紫玉はタカヒトの目の前から消えた。すると辺りを包んでいた暗闇も消えて数匹のイーターがデオルトとグラモに飛び掛る前の囲まれていた状況に戻った。時間が少しだけ戻ったようだ。紫玉は消えていく際タカヒトに一言伝えた。

（契約を交わした。しかし忘れるな。己が欲を望めば破滅に向かうことを。）（紫玉）

タカヒトの目の前で数匹のイーターがデオルトとグラモにギリギリと近寄ってくる。目を閉じて覚悟を決めたデオルト、頭を抱え恐怖に怯えるグラモ。

「むっ、無念！もはやこれまでか・・・タカヒト、ここまで共に戦ってくれたことに礼を言う。ありがとう。」

「もういっぺん、かかあの飯が食いたかったがねえ〜！」

タカヒト達を囲む複数匹のイーター達は餌を目の当たりにして少しずつ距離を縮めていく。デオルトもグラモもすでに逃げるのを諦めていた。てんとは依然沈黙していた。その姿を見たタカヒトは三人を守るようにイーター達の前に仁王立ちした。この時タカヒトの心は皆を守りたいという想いでいっぱいだった。

「僕の中の紫玉よ！みんなを守る力を・・・僕に力を貸してください！」

大声で叫んだタカヒトの身体が紫色に輝き始めると髪の毛と瞳が紫色に変わりデオルト達はその変貌ぶりに驚いた。いつもとは違う落ち着いた表情の紫タカヒトは両腕を広げるといくつもの小さな紫色の炎が周囲を覆うように現われた。次第に紫色の炎が薄らぐと紫色のピラミッド状の角すいが姿を見せた。右手の人差し指を頭上にあげると紫タカヒトが口をひらいた。

「アレスト、ターゲット・ロックオン！」

紫タカヒトを中心として複数のアレストと呼ばれる角すいは円周上にイーターを包み込むように配置された。角すいの尖端部をイーターに向けてアレストはただ浮遊している。アレストの数はイーター

ーの数をはるかに上回っていてその歴大な数のアレストをイーターは警戒している。だが食欲には勝てずイーター達は顎を開くと鋭い牙を鈍く光らせて紫タカヒトに襲い掛かっていく。その瞬間、紫タカヒトは頭上にあげた右手の人差し指を水平までおろした。

「紫玉理力 アルティメット・アタック！」

紫タカヒトの身体から眩しいほどの輝きが発せられると動かずに浮遊していたアレストの尖端から紫色の細い粒子砲が放出された。その粒子砲がイーターの身体に触れると次第に溶け出して断末魔をあげながら死んでいく。その後、円周上に配置されたアレストは分散していく。

数体のアレストが円周上に回転していくといくつかの小さな円形を形成していく。再び粒子砲を放出しながら円周上を高速回転すると紫色の円盤状の粒子砲刃がいくつも形成された。紫色の粒子砲円盤刃は硬い甲殻に覆われたイーターの身体をいとも簡単に斬り裂いていく。紫色の粒子砲円盤刃に斬り裂かれていく同族の姿を目の当りにしたイーター達は食欲よりも恐怖が勝り、我先にその場を逃げようと必死に砦の窓から外へ出ようとした。その騒ぎ声に気絶していたてんとが目を覚ました。

「ムツ……あれは……紫玉……か？」

「てんと殿、気がつかれたか！……あれは一体？」

「紫玉……六道に存在するソウルオブカラーの一つ。なぜタカヒトが？」

砦の窓から飛び降りたイーターは転落死、フロアを逃げ回っていたイーターもアレストの追撃に斬り裂かれていく。畜生道で最も多

く生息していた肉食系昆虫種のイーターは紫玉の膨大な力により一掃され絶滅した。それを確認したかのようにアレストはその場から消えると紫色に輝いていたタカヒトの身体も本来のタカヒトの姿に戻った。フラフラした身体で周囲を見渡したタカヒトは戦いが終わりデオルト達の無事を確認すると意識を失いその場に倒れこんだ。

「タカヒトよ・・・歴大なる力の使い方を誤らないことだ。」

塔を見上げながら茶色の厚手のマントを前にかき合わせ深々とハット帽をかぶっている人物は振り返るとその場から去っていった。

「タカヒト！タカヒト！しっかりしろ、タカヒト！」

気を失ったタカヒトにはデオルトやグラモの呼びかけに何の反応も示さなかった。てんとは周囲を見渡すと想像を絶する光景に戸惑っていた。自分の知らない間に何が起こったのか？デノガイドの残骸にイーターの斬り裂かれた姿はすべてタカヒトによるものだ。気絶しているタカヒトを見つめてこれから起こる想像も出来ない現実にてんとは不安を隠せなかった。

戦いの終わりと旅立の朝

「うっ、うん……ここは……？」

「目を覚ましたか？安心しろ。ここは地下都市だ。」

「……てんと？……良かった……怪我はなかったんだね。」

皆を脱出したデオルト達は意識の無いタカヒトを連れて地下都市に戻っていた。皆で意識を取り戻したてんとは簡単な手当で回復したがタカヒトは意識の無いまま五日間も眠っていた。紫玉を使うということはタカヒトの精神力と体力を相当奪い取るということだろうか。意識を取り戻したタカヒトにてんとは紫玉の事を問い掛けてみた。

「紫玉のこと知ってるの？」

「ああ、しかしなぜタカヒトが紫玉を……いつ得たのだ？」

困惑気味のてんとにどうやって紫玉を手に入れたのか？タカヒトはデオルトの深い意識の底に紫玉が封印されていた事などすべてを話した。てんとは話を聞きながら考え込んでいると部屋のドアを開けてグラモが入ってきた。看病しているてんに飯の仕度が出来たことを伝えに来たのだがタカヒトが目覚めていたことに驚いた。

「おう？タカヒトおー！起きだか？腹減ったが？飯作ってあるからはやく来るだが！」

「うん、わかった。てんと、ご飯食べに行こ。僕、お腹空いちや

ったよ。」

タカヒトはお腹をさすった。さすがに五日間も何も食べていないとかなりゲツソリしている。ベッドから降りる足取りもフラフラしていてタカヒトはグラモに寄り添いながら部屋を出た。この時、腰に着いている業の水筒が赤く色着いていることにタカヒトは気付いていない。食堂に到着するとデオルトとグーモ達がタカヒトの登場を喜んだ。デオルトは立ちあがるとグーモ達にタカヒトとてんを紹介した。

「さあ、英雄達の登場だ！」

デオルトはタカヒトを椅子に座らせるとグーモ達にデノガイドとの死闘や複数匹のイーターとの戦いについて熱く語り今回の作戦成功はタカヒトとてんのおかげだと称えた。しかしテーブルの上のご馳走を前にしてデオルトの話が止まらない事にイライラしていたグラモは立ちあがると声を荒げた。

「硬い話は後にするだが。タカヒトも腹減ってるし、はやく食わしてやるだが！」

「……オホン！でっ、では、今回の作戦の成功と皆の勝利に乾杯！」

「乾杯だが……！」

グーモ達は奪い合うようにテーブルの上のご馳走を食べていく。デノガイドとイーターがいなくなったお陰でグーモ達は山で山菜を取ったり川に行つて魚を釣つて来たりすることが出来るようになった。ご馳走も今まで以上に豪華になったのはそのためだ。ご馳走

を食べるデオルトもグーモ達も楽しそう。タカヒトも久しぶりの食事を楽しんだ。宴会も中盤に差し掛かった頃デオルトはタカヒトとてんとに今後の事について話を始めた。

「タカヒト殿、てんと殿。今回は本当にありがとう。デノガイドとイーターの討伐に成功してやっと平和を手に入れる事が出来た。国王や騎兵団の皆も浮かばれる……。私はこの地下都市でグラモ達と一緒に暮らすことにした。私も国を失ったし、それにデノガイドを倒したとはいえ、またいつ外敵が現われるか分からない。そのためこの地下都市をひとつの国として創りあげていかななくてはならない。これはグラモ達と相談して決めたことだ！」

「ふ〜ん、じゃあデオルトは国王？」

「いや、私は国王の器ではない。ただもう二度と国を失いたくないだけだ。」

「いいでねえが！デオルトが国王で。みんなもいって言うてるだよ。」

デオルトの話にグラモが割って入ってきた。グラモはグーモ一族を率いている長老だが一族と国とでは規模が違いすぎて自分の力量では無理があると考えていた。その点、デオルトなら皆をまとめてこの地下都市をひとつの国として創り上げる事が出来ると思っっている。その考えをグーモ一族に問い掛けてみると誰ひとり反対する者はいなかった。

「デオルト国王、デオルト国王！」

それを聞いたデオルトは涙を浮かべ椅子から立ちあがると話を始

めた。

「ありがとう。この国が立派に立ち上がり、国王が必要になったら……」

私も国王に立候補しよう。今はそれより国創りが先決だ！」

「国王に立候補だがあゝ……なんかデオルトらしいがね。」

デオルトの謙虚ながらも国を想う前向きな考えにグーモ達は心を打たれた。楽しい時間は続き、歓喜をあげてワイワイしながらテールブルの食べ物と争うようにグーモ達は食べていた。するとデオルトは食事をしているタカヒトとてんとのもとに近づいてきた。

「タカヒト殿、てんと殿、ここに残り一緒に国創りを手伝ってはくれないか？」

突然の呼び掛けにタカヒトは食べるのを止めた。国創りという大きな目的に少し戸惑っているのと今まで何も語らずに沈黙していたてんとが口を開いた。

「デオルト、それは無理だ。我々がここにいられる時間はそう長くないのだ。」

デオルトもタカヒトもてんとが何を言っているのかわからなかった。てんとはタカヒトの腰に吊るさっている赤く色付いている業の水筒を指した。

「この業の水筒が真紅に染まった時、私達はどこか別の世界へ飛ばされてしまう。」

この色付きだと明日には飛ばされそうだ。」

そんな事があるとは全く知らずに赤くなっている業の水筒を手に取り眺めていた。

「そうなんだ。どこに行くんだろう・・・アレ？業の水の量、少し減ってない？」

「様々な困難に遭遇した為に業が消費されたのだらう。」

何処に行くのかもいつ行くのかも曖昧だがこの世界からいなくなる事だけは確かだった。てんとの話を聞いてそれまでの愉しかった雰囲気が一瞬にして寂しさに包まれた。グーモ達はいつまでもここにいるようにタカヒトとてんとを引き止めるように言葉をかけていた。タカヒトが困った顔をしているとデオルトがグーモ達をたしなめた。

「致し方あるまい！それより皆でふたりの新たなる旅立ちを祝福しようではないか！」

タカヒトとてんとの良き旅立ちと我々の国創りに乾杯！」

「乾杯だが！！！」

その後も最後の宴会は続いて愉しい時間を皆で過ごした。タカヒトとてんとが部屋に戻った時にはグーモ達は酔い潰れていたる所で寝ていた。部屋に入りベッドに腰掛けたタカヒトはニコニコしてかなり嬉しそうだった。

「楽しかったね。僕あんなに楽しいの初めてだった。ねえ・・・てんとつてばあ〜。」

「タカヒト・・・おまえに言っておかなければならない事がある。今後についての事だからよく聞くのだ。徳の水筒と業の水筒・・・つまり徳と業はバランスによって成り立っている。得の使いすぎは業の嵐を生みだす事がある。デノガイドとの戦いでは最悪の事態は免れたが、徳の急激な使用はタカヒトの身体に想像以上の負担をかけるのだ。これからはソウルオブカラーである紫玉を使つての戦い方を中心にする事だ。それと六道の世界にはいくつかのソウルオブカラーが存在する。それらを見つけ今度の戦いに活かしていくのだ。」

「ちよつ、ちよつと待つてよ！戦いつて・・・ほかの世界でもあ
るの？」

六道は天道・人道・修羅道・畜生道・餓鬼道・地獄道から成り立
つている。これから向かう世界は畜生道より深い位置にある。つま
りデノガイドやイーターなどは比べものにならない強力な魔物達
がほかの世界にはゴロゴロいる。どちらにしても業を消費しないか
ぎり人道へ戻れる可能性はないのだからこの世界以外の修羅道・餓
鬼道・地獄道へは確実に向かうであろう。てんとの話聞いてデノ
ガイド以上の強力な魔物に遭遇するかと思うとタカヒトは急に気分
が重くなった。

「尚更ソウルオブカラーの力が必要になる。さて、明日は早い。
もう寝よう。」

「うん・・・分かった。はあ～～・・・先は長いなあ～～。」

暗い部屋でタカヒトはなかなか寝付けなかった。隣のベッドでは
てんとが熟睡している。ベッドから起きあがり窓から外を眺めると
暗いビル郡にいくつかの灯りが灯っていた。夜中になつても一生懸

命働いているグーモがいてしばらくの間タカヒトはビル郡の灯りを見つめていた。

母親に、そしてミカに逢うために歩き始めた道のみではあるのだがデオルトやグラモ達と別れなくてはならないことがタカヒトの心にわだかまりを残していた。タカヒトにとってミカ以外で初めて友達と思える仲間達に出会うことできた。大切な友達を失うことはタカヒトが二度目に味わう悲しい別れとなる。ビル郡の灯りが消える頃、タカヒトの頬から涙が流れていた。眠っているてんとに心配させないように布団の中に潜り込むと声を殺しながら涙を流した。

「いい朝だが。旅立ちにはもってこいの朝だが。」

朝を迎えると業の水筒は真紅に近づいていよいよ旅立ちの日となった。デオルトやグラモそれにグーモ達がタカヒト達の見送りに仕事の手を止めて来てくれた。グラモは涙ながらにタカヒトの手を握り締めるとグラモの家族が作ってくれた弁当を渡してくれた。

「ありがとう。グラモ達も身体を大切にね。国創りがんばってね。」

グラモが涙を拭いているとデオルトが近づいてきた。これからの旅に必要であろうとてんとに数種類の薬草を渡した。そして次にタカヒトのもとへ来たデオルトが首にかけていたペンダントを外すとタカヒトに渡した。それはデオルトがパピオン国王から授かった物で黒い石がついているペンダントだった。

「えっ！・・・大切な物でしょ？貰うわけにはいかないよ！」

「私の大切なペンダントを大切な親友に受け取ってほしいのだ！」

「でも……」

「タカヒト……おまえがデオルトの親友なら受け取るんだ。」

「……わかった。デオルト、ありがとう。大切にするよ。」

親友から受け取ったペンダントをタカヒトは首に着けると腰についている業の水筒が真紅に輝きだした。その場にいた誰もが眩しさに眼を塞ぐ。真紅の輝きはタカヒトとてんとを包み込むように球体を創り始めていく。

「タカヒト、時間だ！」

「うん、デオルト、グラモ、それにグーモの皆！ありがとう……皆、元気だね！」

真紅の輝きが更に増すと球体はタカヒト達の身体を包み込んだ。真紅の球体に包まれたタカヒト達にデオルトやグラモ達の言葉は聞こえなかったが別れと感謝の言葉を叫んでいることだけはわかった。真紅の球体の輝きはデオルト達が目を覆うほど強烈なものになり、それが収まるとタカヒトとてんとはその場から消えていた。

死を待つ者

畜生道の世界から消えたタカヒト達は山にいた。いや正確にはそこは山ではない。見渡す限り様々な大小の金属らしきガレキが無造作に置かれてそれらが山を形成していた。タカヒトはここがどの世界なのかをてんとに問い掛けた。少しの沈黙の後てんとは口を開いた。

「ここは餓鬼道・・・死を待つ世界だ。タカヒト、あれを見る。」

タカヒトはてんとの指さした方向を見つめるとガレキ山のふもとに黒い塊が数体置かれていた。人の石像にも見えたがそれらは明らかに声をあげて呻いている。生きている石像を見てタカヒトは腰を抜かすほど驚く。生きている石像に震える指をさし向けて口をパクパク動かしているタカヒトにてんとは冷静に語りかけた。

「そうだ・・・あれが死を待つ者達だ！」

タカヒトは驚きながらも恐る恐るその石像に近づいていく。石、鉱物、溶岩の塊・・・表現はいくつもあるがそれが生きているとはとても思えない。呻き声をあげていなければ誰もがそう思うだろう。てんとは数体ある黒い塊のひとつの上にとまると心の声が聞こえてくる。前世での記憶が残っているらしく黒い塊はてんとにありのままを話した。

ある黒い塊の生きた人生・・・

黒い塊は元々、人道の世界に生きる者だった。彼女は他人を騙し陥れては金を手にすることをこの世の至福と感じていた。彼女の生

い立ちはそれほど貧しくはなくただ遊ぶ金ほしさに他人を騙すようになつていく。最初は万引きなどを行っていたがリスクが少なく金額の多い結婚詐欺に変えていく。頭の切れる彼女はパソコンを使うと会ったこともない男性とのやりとりを次々交わしていく。生い立ち・家族の不幸・自分の環境などから始まり、時に怒り・悲しみ・喜びを伝え相手との親密性を増していった。彼女は巧みな話術と心理学に長けて様々な性格を使いわけては人達を騙し続けた。

「男なんてバカばかり。こんなので騙されるなんて単純だわ！」

彼女の通帳には毎日多額の金額が入金され続けた。自分は楽をして騙して金をむしり取る。その金を使つて彼女は毎晩、高級車を乗り回しては豪遊に明け暮れていた。最初はただ、遊ぶ金ほしさに始めた詐欺だったが次第にその魔力にのめり込むようにエスカレートしていく。

彼女は騙しのテクニクを駆使していくつもの恋愛サイトを立ち上げていった。無論それらは無知な人々から金を巻上げるだけの手段でしかなかった。以前にも増して彼女は多額の金を手にする事が出来るようになる。まさに仕事をこなしていくかのように売上をあげていつしか人の手を借りなくてはならないほど利益をあげていった。彼女は数名の女性を集めて事業を拡大させていく。彼女達は更に売上を増していくのだが良い事ばかりが続くほど人生は楽には出来てはいないようだ。集めた女性の中に彼女を妬む者がいた。その女性は彼女の作り上げてきたサイトの実態と彼女の情報のすべてをサイト利用者に伝えた。人はのっている（幸運）時は悪いことは起きない。しかしそれは落ち目（不幸）の時に一気にやってくる。

「あつ、ははは 最高！こんな最高の人生はないわ。騙されるバカどもに乾杯！」

仕事を終えた彼女はホテルのカウンターバーで高級なワイングラスを口に出している。突然、背中に熱い感覚を感じたが彼女は気にすることなく喜びの美酒に酔いしれていた。意識が遠のきカウンターのテーブルに顔を埋めると睡魔に襲われた。

「・・・眠くなったわ。酔ったのかしら？・・・寒気も・・・」

「あつ、愛子が悪いんだ。ぼつ、僕を騙すから！」

倒れたグラスからワインが流れテーブルを濡らした。うずくまっていた彼女の脇腹は真っ赤に染まり血が床の絨毯に滴り落ちる。その背後にはナイフを握りしめている中年の男が立っていた。

「どうやら殺されたことには気づいていないようだな。」

「えっ、どういこと？」

「ホテルのバーで刺されたんだ。」

内部事情を暴露されたことで騙された人々の知るところになつてな！」

てんとは続けて語りだした。彼女は元々業より徳の多い魂であつたらしい。それは彼女の前世が業を消費して徳を積む行いをしてきた為だと語った。しかし彼女はその徳を人を騙し続けることに使い騙された人々の恨みを買うことにより業を増やしていく。徳を使い果たした彼女にはそれまで増やしていった業が一気に押し寄せてこのような結果になった。しかし殺されても彼女の業はなくなつたわけではなくこの餓鬼道で彼女は動くことも出来ずここで死ぬまで呻き

続けなければならない。

「死ぬまで?・・・ねえ、てんと。じゃあ刺した人はどうなるの?」

「騙されたからと言って他人を恨めばそれだけで業が増す。さらに他人を傷つけたなら尚更だ! いずれ刺した者達もここか、更なる深い世界へ堕ちる事になる。騙された者は自分の持っていた業を消費しただけのこと。他人を恨まずそれを受け入れて生きていけばいいのだがな。」

「そうなんだ・・・ねえ、彼らはいつになったら死ぬの?」

「死は天が決めること! それに従い待つだけだ。これはどの世界でも同じ事だ。」

さて、向こうのほうに町らしき建物がある。行こう!」

至る所にいくつもの黒い塊が存在してそれらと辺り一面のガレキの山を見渡しながら歩いていると人型の亜人種が一匹近づいてきた。その亜人種はトカゲに似てタカヒトより小さく、細い体であった。手には折れそうな棒を持ち何故か怒った表情をしている。するといきなり罵声をあげてきた。

「おい、おまえら! どこから入りやがったね? この盗人野郎!」

「盗人?・・・僕は盗人じゃあないよ。」

「違うね? お客様とでもいいたいね!」

「その通り、私達は客だ!」

てんとの強気の発言に動揺したその亜人種はタカヒト達をじつと見渡す。タカヒトの足から頭まで見渡すとなにかを確認したようで急に笑顔になった。両手をすり合わせ頭を低くしたその姿勢はまさに商人であった。

「いらつしやいませ！今日は何を御求めになさりますかね？

いやいや最近盗人が多くて疑ってしまっただね。ごめんね。」

店の主人は額の汗を布で拭きながら言い訳をした。ガラクタにしか見えないが見渡す限りすべての物が商品だと主人は自慢げに語っていた。てんとは商品の説明を聞きながら町のほうへ行きたいことを伝えると店の主人は少し顔を曇らせた。少しの沈黙の後に主人は町について語りだしたのだが次第に主人の顔が険しい表情になっていくのをてんとは見逃さなかった。

町はアイスフィールドと呼ばれるところにありそこに鬼王と呼ばれる支配者がいる。鬼王は奴隷を使いアイスフィールドに近代独立国家オメガを建立したらしい。アイスフィールドの周りにはスクラップフィールドと呼ばれるガラクタの山々が覆っている。スクラップフィールドはハンターと呼ばれる二足歩行のトカゲの姿をした獰猛な亜人種がいるらしい。アイスフィールドの鬼王とスクラップフィールドのハンターは長年対立しており戦闘は未だに続いているとのことだった。

「話はわかった。ひとつだけ質問がある。何故このスクラップフィールドであんたは襲われず、商売が出来るのだ？」

「何故って・・・それは私もハンターだからね。」

主人は牙を見せてニンマリと笑った。ハンターは爪と牙を持つ獰

猛な亜人種と聞いていたが目の前にいるのは痩せ細った身体にボロボロの牙、鋭い爪を持たないタカヒトが押せば倒れそうな亜人種だった。タカヒトは思いつきり懐疑の目で主人を見つめた。

「うっ、疑ってるね？まっ、まあ、しょうがないね

・・・ハンターにもいろいろなタイプがいるってことね。」

「・・・それよりあそこにある機械は何？なんかゴツゴツしてかっこいい。」

目を輝かせたタカヒトはスクラップの山を指さした。そこにはところどころ壊れてはいるが二足歩行型のロボットが横たわっていた。主人は得意げに説明を始める。ドライブスーツと呼ばれる戦闘用のオメガ製兵器でかなり旧式だがまだ使えるらしい。変形が可能で乗ることも出来ると力説した。オメガの廃棄場で処分されているところを盗んできたと自慢げに語っていた。現在のオメガ兵は最新型を使用している。旧式よりスマートでパワーもあるらしくオメガ兵の全部隊がすでに装備を完了しているらしい。

「旧式はスクラップ品だからほしければくれてやるね。」

主人は言った。タカヒトは目を輝かせて熱望すると主人が続けて言った。

「しかしこのドライブスーツを起動させるには燃料石が必要ね。」

「燃料石とはどのようなものだ？」

てんとうが燃料石について聞くと主人は燃料石について話をする。

この世界で原動力を必要とするすべての機械は燃料石を使って動い

ているらしい。いろいろ話すと主人はタカヒトの持つ弁当を見つめた。その表情に気づいたタカヒトは持っていた弁当を取り出した。

「一緒に食べる？」

「いいね？ いやあ〜催促したみたいでわるいね。いい匂いがするね。」

主人はテーブルとイスを用意するとタカヒトは弁当を広げた。よだれを垂らす主人は嬉しそうに両手をあげた。タカヒトは主人の食欲に驚かされたがこの餓鬼道に来て初めて笑うことができた。その後主人は腰の痛みを訴えるところとは薬草をタカヒトに調査させて主人の腰に塗った。気持ちよさそうに主人はうっとりしている。

「こんなに安らいだのは初めてね。あんた達は神様ね。言う事をなんでも聞くね。」

主人から情報を得たタカヒト達はスクラップフィールドを離れて近代独立国家オメガへ向かって歩いていく。てんとはこの餓鬼道の世界を頭の中で整理しながら飛行していた。燃料石は名前こそ違えど六道の世界のどこにでも手に入る石で火を起こすのに使われているものだ。ハンマーなどで衝撃を与えると少しづつ熱を放ち火が発生する。しかしこの世界で生きる者には燃料石など必要ない。この餓鬼道は死を待つ者だけの世界。この世界に生きる者は何も生まず、何も壊さず、ただうずくまるだけ・・・ただ死を待つだけ。自らこの世界で罪を犯せば更なる下界へ墮ちる。何かを作ろうにもこの枯れた地では何も育たない。故にこの世界で生きる者は希望を忘れ絶望を胸に待つのだ。餓死するかそれともハンターに襲われるかを。ハンターはこの世界に最初からいる先住民であり二足歩行で鋭い爪と尖った牙を持つ獰猛な亜人種だ。ハンターは燃料石など使わない。

餌を見つけたら捕らえ喰うだけだからだ。しかし共食いはしない。ハンターは獰猛な亜人種だが仲間意識が強く一族の繁栄を第一に考えている。獰猛なハンターと死を待つ者だけの乾いた世界。ここはそういう世界のはず……。

てんとはこの餓鬼道がなぜこうも変貌したのかをずっと考えていた。アイスフィールド、近代独立国家オメガそして鬼王。それらがこの世界が変貌したキーワードとなるであろう。てんとの知っている餓鬼道とは明らかに違う。この餓鬼道の変貌の原因と因果関係があると考える鬼王の正体をてんとは知りたかった。

この先に火の山と呼ばれる山があり、この餓鬼道では燃料石はそこでしか取れないらしい。今その燃料石を巡って近代独立国家オメガとハンターとの間で争奪戦争が勃発している。ハンターは火を使うことはほとんどないが近代独立国家オメガはハンターを駆除するために大量の燃料石を必要としている。燃料石を使用してハンターの生きていけないアイスフィールドを展開してテリトリーを増やしているのだ。自分達の居場所を失うわけにはいかないハンターは燃料石の取れる火の山を占領してアイスフィールドの展開を阻止している。

「てんと、あれが火の山かな？」

タカヒトが指さした方向には巨大な火山がそびえ立っている。草木の生えてない山肌が見えて山の頂は常に炎を吹きマグマが流れている。あまりもの暑さに汗を拭ったタカヒトは辺りを見渡すと山頂の周辺は黒い雲が常にドンヨリ広がっていて恐ろしい光景を描いていた。火の山付近にはハンターが出没する可能性が高いと言われた事を思い出したてんとは襲撃に備えながら歩く事をタカヒトに伝えた。てんとに言われタカヒトは辺りを見渡したが草木も生えてはならず身を隠すところはない。急に不安になったタカヒトはオロオロするとてんとに寄り添うように歩いていく。そんなタカヒトを相手

にせずにてんとは周辺の異常な気配を感じとっていた。少し離れた高台から数匹のハンターがふたりを見下ろしていたのだ。眼光を光らせ爪を立て、ハンターは獲物の捕獲を待ち構えていた。

「タカヒト、くるぞ！」

「えっ？・・・うわあっ！なにアレ？」

高台から数匹のハンターが足爪を地面に食い込ませながら急な斜面を滑降してきた。タカヒト達の目の前に到達すると手足を地面につけて四つん這いの格好をとったハンター達は獲物の様子を伺っている。敵味方・強者弱者の判別をしているらしく微動だにしない。タカヒトは蛇に睨まれた蛙のように一步も動けずに固唾を呑んだ。どれくらいたつたのか・・・ハンターはゆっくり地面から立上ると二足歩行の体勢になった。中腰の体勢で鋭い爪の生えた両腕を前に構えたハンターは獲物の捕獲態勢になった。

「・・・どうやら、やる気らしいな。逃げるぞ！」

てんとはスツとその場を離れると飛んでいった。取り残されてビツクリしたタカヒトは急いで後を追いかけていく。タカヒト達の行動に一瞬呆然としていたハンターはすぐに後を追いかける。ハンターは二足歩行から四つん這いの四足歩行に態勢を変えると速度が著しく増してタカヒトのすぐ後まで近づいてきた。

「駄目だよ、てんと！もう追いつかれるよ。紫玉使わないとこのままじゃ・・・」

「・・・」

てんとは飛ぶのを止めてその場に浮遊するとハンターの方をクルツと振り向いた。ハンターはその行動が理解出来ずに立ち止まるとまた距離を保ちながら様子を伺っている。息を切らしているタカヒトにてんとはソウルオブカラーについて語りだした。

「タカヒト、結論から言っただけ紫玉はこの世界では使えない……いや伝わらないと言ったほうが正解かもしれないな。」

ソウルオブカラーはその名の通り魂のことであり力を持った魂の総称でもある。つまりソウルオブカラーにも心や感情があるということである。ソウルオブカラーは共鳴した（認めた）相手からの心の声が届いた時にその能力を与える。逆を言えばソウルオブカラーに心の声が届かない場合、力は得られないと言う事になる。

六道の世界のどこでもソウルオブカラーの力を得られるわけではなくソウルオブカラーと所有者の心との共鳴が通じない環境には必ず共鳴亀裂が起こっている。餓鬼道ではタカヒトと紫玉との間に共鳴亀裂が発生しており、紫玉にはタカヒトの心の声が届かず能力を与えることができないのだ。

「共鳴亀裂？……それじゃあ、徳の力を使う！」

タカヒトは徳の水筒をじっと見つめた。ふたりのやりとりに痺れを切らしたのか、ハンターは二足歩行になると牙を剥き出しにして捕獲態勢に入った。タカヒトも水筒を手に掴み戦闘準備に取り掛かろうとするがてんとに制止された。

「徳の力は最後の切り札だ。ここで使う事はない。」

「じゃ、じゃあどうするの？逃げるの？あれから逃げ切るのは無理だよ。」

凶暴なハンターを目前にして紫玉も徳の水筒も使わず逃げ切れるわけがないとタカヒトはオロオロしている。そんなタカヒトの姿を見て、てんとはニヤリとした。

「逃げはしないが徳の力も使わない。タカヒト、おまえは私が見ただの案内役だと思っているのか？見せてやろう、戦い方というもの。緑玉よ、その静かなる力を示せ！」

てんとの身体が緑色に輝くとハンターは一瞬、後ずさりした。緑色に輝いているてんとの頭上に三つの緑色の球体がグルグルと回っている。様子を伺っていたハンターだったが変化のない緑てんとの姿を見て少しづつ距離を縮めていく。一匹のハンターが緑てんのに飛び掛った瞬間、三つのうち一つの球体がほかの球体から離れる。襲い掛かったハンターはその球体に吹き飛ばされた。離れていった球体は再び緑てんとの頭上へ戻ると三つの球体はまたてんとの頭上をぐるぐる回っている。吹き飛ばされて地面にへばりついたハンターはすぐに起きあがると緑てんのに再び襲い掛かってきた。その後、続くようにほかのハンターも襲いかかる。

三つの球体は襲い掛かってくるハンターに体当たりしては吹き飛ばすがハンターにダメージは全く無いようですぐに起きあがっては反撃してくる。

「てっ、てんと！これじゃあ、ハンターを倒せないよ。このまま逃げよう！」

「戦いとは兵力ではなく兵法ということを学ぶのに丁度いい機会だ。」

緑てんとの頭上で回っていた三つの球体はハンターのほうへ飛ん

でいくとハンターを中心としてトライアングルを形成するように三方に分かれた。三角形の形を取った三つの球体はハンターを眺めるようにピタツと静止した。しばらくハンター達は球体を眺めていたが痺れを切らした一匹が球体に攻撃を仕掛けた。しかし襲い掛かったものの球体の反発力によってハンターはまたも吹き飛ばされた。しかし今回は今までとは違う。吹き飛ばされたハンターが飛ばされた先にはもうひとつの球体が配置されてその球体に激突すると更に反発力によって弾き飛ばされた。勢いよく弾き飛ばされたハンターの先には他のハンターが集まっていた。その結果はハンター同士がぶつかり合う同士討ちとなった。てんとの球体は物質が当たる度に加速度を増していく構造をしている。ハンターの体重に加速度が加わることでより球体に弾き飛ばされたハンターのスピードは砲弾のそれと同等の衝撃力を持っている。球体に弾き飛ばされたハンターも体当たりされたハンターもその場に倒れこんでピクリともしない。ほかのハンターも次々に球体に対して攻撃を仕掛けるが同じように同士討ちとなった。恐怖を感じた最後の一匹のハンターが逃走していく。戦闘が終結すると頭上の球体を消して緑色の輝きもなくなった。突然の事態にタカヒトはただキョトンとしている。てんとはハンターが再び反撃をしてこない事を確認するとタカヒトの元に飛んでいった。

本陣への襲撃

「予定を変更する。このままハンターの本陣に向かうぞ！」

「えっ、なんで？オメガへ行くんじゃないの？」

「……ってゆうか、てんとしてソウルオブカラーを持ってたの？」

てんとはハンターの行動が気になるようで迂回してまわり込み本陣の背後から侵入することを決めた。その道中、てんとはソウルオブカラーについて話した。先ほども話したのだがソウルオブカラーはその能力が使える世界と使えない世界がある。この餓鬼道ではタカヒトの紫玉は使えず、てんとの緑玉は使える。紫玉の龐大なる者は複数のアレストを使い粒子砲により敵を一掃する能力に対して緑玉の静かなる者には紫玉のような攻撃力はない。というより攻撃してターゲットを破壊する能力が現在はないらしい。緑玉は気の流れから反発力のある球体を作り出す。球体の特性は反発力で攻撃などを仕掛けてくる敵を弾き飛ばすことしか出来ない。しかしその特性を生かせば先ほどのように戦いに勝利することが出来る。兵力より兵法。これがてんが見つけた戦い方だ。

てんがこの能力を隠していたのはタカヒトがそれに頼り自ら状況を乗り越えようとする努力を怠る恐れがある為だった。タカヒトが自ら努力して業を解消、徳を積み元の世界へと戻る為のサポートがてんとの役割なのだ。だがてんとは考え方を変える必要があった。てんとは過去に案内役として狭間に堕ちた何体もの魂をサポートしていた。もちろんすべての魂が元の世界へ戻ったわけではないがこれほど危険な目に遭った魂はタカヒト以外いない。

畜生道でのデノガイドとイーター戦、紫玉の入手と能力の会得、そしてこの餓鬼道の変貌。タカヒトを取り巻く環境はいままでとは

全く違う！そう考えたてんとは自らの能力をあえて見せる事でのからの戦いを互いに協力して乗り越えていく事を決めた。たしかにこの時てんともそれにとくべえもタカヒトのこれから降り掛かるであろう出来事は読み切れなかった・・・。

そんな事を話している間に火山の麓にあるハンターの本陣に辿り着いた。高く積み重ねた石積みの外壁のなかには石柱がいくつか並んでいるがハンターの姿は見えない。だがてんとは石柱に同色化しているハンターが数匹いることを素早く見破った。タカヒトにそれを説明してから外壁を迂回してまわり込んだのだが本陣は思っていた以上に広がった。てんとの思惑通りに裏側にはハンターはおらず、なんなり侵入できた。その内部ではハンターの一匹がハンター族頭首ゲイルに報告していた。

「ゲイル様、外に妙な奴がうるついてましたんで捕まえてまいりました。おそらくオメガの奴隷だと思います。いかがなさいましょう?」

「俺がほしいのは奴隷ではなく戦士だ。役に立たぬ者は牢屋に入れておけ!」

ハンターが連れてきたオメガの奴隷は小さくなって震えている。ハンターは軽く頭を下げるとオメガの奴隷を連れて牢屋の方向へ向かった。階段を降りていくと湿気の多い廊下をハンターと涙を流している奴隷は歩いていく。

「くそが・・・」

ゲイルは苛立っていた。鬼王率いる近代独立国家オメガに襲撃を幾度となく行なったがドライブスーツ隊の反撃に遭い何匹もの仲間を失っている。オメガ兵器の多彩な攻撃に比べハンターには肉弾戦

しかなかったからである。ゲイルはハンターの長であるコパじいに相談をした。

「じいよ……このままでは我等は敗れる。やはりあれを使うしかない！」

「ゲイル、負けても良いではないか。ここを離れて別の土地で静かに暮らそう。」

「何を言うか！ここを鬼王に明け渡せば燃料石を奪われるのだぞ！それは奴らの力を大きくさせることになる。アイスフィールドが広がれば我々の生きる土地はどこにも存在しなくなる。一族の為に負けられん！」

コパじいとゲイルの話は平行線を辿っていた。じいは鬼王の勢力の届かない世界へ向かうことを訴えたがゲイルは一族の誇りを失うわけにはいかないと反発した。二匹がやりとりしている頃、内部に侵入したタカヒト達は暗がりの廊下を歩いていた。暗がりの先からハンターが近づいてきたのでタカヒト達は身を潜めた。タカヒトはハンターの後ろに人影を発見した。暗がりだったがタカヒトにはそれが誰か分かった。

「……ミカちゃん？」

この世界にミカがいることにタカヒトはかなり驚いた。廊下沿いの牢屋のドアを開けるとハンターはミカを牢屋入れてその場から立ち去った。

「あれは確かにミカちゃんだ！なんでこんなところに？」

「……理由はわからんが助けるのか？」

タカヒトはうなずくと牢屋のドア前に走っていく。中からミカのスズリ泣く声が聞こえている。牢屋のドアと言っても鍵が付いているわけでもなくドアの留め金を外すとドアは簡単に開いた。タカヒトは牢屋の中に入ると隅にうずくまっているミカに声をかけた。

「ミカちゃん？」

「！……タカちゃん……ん？」

ミカは涙をポロポロ流した。座り込んで震えている身体は立ちあがれずタカヒトはミカに歩み寄っていく。震えるミカの前にかがむと急にタカヒトに抱きついた。

「タカちゃん、タカちゃん……」

恐怖に怯えていたミカの突然の行動にタカヒトはびっくりして固まった。少しの間、泣き続けているミカをタカヒトはぎこちなく背中を手を回してギユとした。しばらくしてミカは落ち着きを取り戻すとタカヒトに抱きついていいる事が急に恥ずかしくなったようにパツと離れた。

「うっ……うめんね……」

「……なんでミカちゃんがここにいるの？」

顔を赤らめながらミカは今までの事を話した。学校で大樹に殴られた事までは憶えているらしい。その後気がついた時にはこの餓鬼道の森にいて訳も分からずにさまよっているとところをハンターに捕

まっさらしい。落ち着きを取り戻したミカにてんとうが近づいた。

「ミカと言ったな。」

「ここまでの経緯は何と無く分かったがもう少し詳しく話してくれないか？」

「！・・・てんとう虫が喋った？」

タカヒトはいままで自身に起きたすべてのことを話すとそれをミカは静かに聴いている。ミカは少しの間考え込むと口を開いた。それはこの餓鬼道へ来る前のことだった。

「・・・私もね、その狭間というところから来たのかもしれない。私、気が付いたら暗がりになっていたの。何もないところよ。皆の名前・・・タカちゃんの名前呼んだんだよ！でも誰もいなくて・・・。怖くて不安でしたら暗がりの先に光が見えてそこに向かって走っていたの。そしたらこの世界に来て・・・でも見たこともないトカゲみたいな生物に捕まって・・・。」

「いろいろ話はあるだろうがまずはここから脱出することが先決だ。」

タカヒトとミカはうなずくとてんとうの指示に従った。来た道に戻る事も考えたがハンターが数匹いると分かっている以上先を進むしかない。暗がりの廊下を進むと大広間に出たがハンターはいないよ。うで辺りは静まり返っていた。こっそりとタカヒト達は大広間を横切ろうと歩いていると彼らを呼び止める声が聞こえた。恐ろしく低い声でてんとうがその声に反応すると大広間の奥の椅子に同色していたゲイルが座っていた。脱出することに気を取られ椅子に同色していたゲイルに気づかなかったことをてんとうは悔やんだ。ゲイルはタ

カヒト達をその鋭い目で睨みながら言った。

「さっきの奴隷？・・・お前等が取り戻しに来たというわけか。だが返すわけにはいかん！我々は奪う種族で奪われる種族ではないからな！」

ゲイルが口笛を吹くと大広間におびただし数のハンター達が押し寄せてタカヒト達は逃げ場を失った。戦うしかないと覚悟を決めたタカヒトはミカの前に立ちハンター達から守るように構えた。今のタカヒトには紫玉は使えないし、てんとの緑玉だけではこのハンター達は倒せないかもしれない。それでもどんな事をしてでもミカだけは守る。ミカが自分を守るのではなく、自分がミカを守るのだ。タカヒトは決意して腰に吊るしてある徳の水筒に触れた。

おびただし数のハンター達に囲まれたタカヒト達に勝算はなかった。てんとの緑玉も複数の相手では対応できない。タカヒトは腰に吊るしてある徳の水筒を握る。いくら徳の水筒を使ったからといってミカを守りながらハンター達と戦えるのか不安だった。しかし周りのハンター達は身体を低くしてすでに戦闘体勢に入っている以上戦うしかなかった。

「あれ？今日はパーティーでもあるのかい？それなら僕も入れてほしいな。」

ハンター達の動きが止まり一斉に声のほうに眼を向けた。そこにはタカヒトより少し背の大きい人間の姿をした亜人種が立っている。戦闘体勢の興奮状態だったハンター達の顔が急に蒼くなり震えだした。戦闘種族で怖いものなどないハンター達はその亜人種を見ただけで震えているのである。ゲイルがその存在に気が付くと亜人種に怒声をあげた。

「鬼王！・・・貴様、何の用だ！」

「何のようだったって？？あのさあゝ・・・僕がここまで足を延ばして来てやったんだよ。わかるでしょ？はやくここを明け渡してほしいんだけど！」

鬼王が自分と同じ位の背丈である事にタカヒトは驚いた。しかし武器も何も持たない彼が何故鬼王と呼ばれてハンター達に恐れられているのかわからなかった。だがそれもすぐにわかるようになる。ゲイルは額から流れる汗を気にしながらも強気な姿勢は崩さなかった。

「そんなつもりはない！なぜ明け渡す必要がある？」

なぜ貴様は我らから土地を奪おうとする？」

「ここって奪い奪われる世界のはずだよな？僕ね、暑いのと臭いの駄目なんだ。キミ達が居なくなれば暑いのと臭いの耐えることもないし僕が過ごしやすい環境を造る事が出来る。ブレイカー部隊にハンター壊滅を任せておいたのに全然ハンター減らないから僕一人で潰しにきたよ。僕ね、実を言うと忍耐とか我慢するとかまったく出来ないんだ。だから消えてくれる？」

ハンター達を震えあがらせるのに鬼王の一言は十分すぎた。ほとんどのハンターが戦意を失いかけてはいるがゲイルだけは違った。たったの独りでこの場に侵入した鬼王にゲイルはハンター最強集団である八人衆を仕向けた。ゲイルの後から八匹のハンターが出てきた。それらはいままでタカヒト達が見てきたハンターとは全く異なり身体がほかのハンターより一回りも二回りも大きく、爪や牙も異常にデカい。そんな八人衆は鬼王を囲むように配置された。よだれを垂らし知能こそなさそうだがそれを補うほど戦闘力は高そうだ。

鬼気迫る勢いの八人衆に比べ鬼王は戦闘体勢に入るわけでもなく冷静に状況を眺めていた。

「やれやれ・・・この前あれだけ痛い目に遭ったのにまだ懲りないんだ。」

「やっぱり下等な生物ってこんなもんかな？」

鬼王が言い終えた瞬間、八人衆が一斉に襲い掛かった。だが鬼王にその鋭い爪で襲い掛かったはずの八人衆は目前で次々とその場に倒れこんだ。攻撃を仕掛けた八人衆が成す術もなく朽ちていく姿をゲイルは理解出来ないで呆然としている。ただ変化しているといえれば八人衆の倒れた付近が濡れていることだけであった。最強集団の八人衆が敗れたことに沈黙していたハンター達は状況が理解出来たらしく混乱して鬼王から逃げ出そうとした。怖いものなどないはずのハンター達が圧倒的な鬼王の力に恐怖を感じてこの場から逃げようとしている。獣としての本能がそうさせたのだろう。

「逃走するのも無様なもんだ。だ・け・ど・・・逃げる場所はない！」

鬼王はため息をつくとも八人衆と同様に何か物質を繰り出してはハンター達を駆逐していく。大広間は凄惨な光景となった。この世界で最強と謳われたハンターがたった一人の亜人種に成す術もなく駆逐されていくのである。倒れているハンター達を見向きもせず唯一の生き残りであるゲイルの前へ鬼王は歩いていく。

「ハンターの意地を見せてくれる！」

ゲイルは両手の爪を鋭く尖らせ怒声をあげながら襲い掛かるが鬼王の身体が青色に輝く。すると呆気なくゲイルはその場に倒れた。

大広間に残されたのはタカヒトとてんと、ミカそれに鬼王だけだった。タカヒト達を取り囲んだハンター達は鬼王の攻撃により肉の塊となっていた。ハンターの屍骸と血の海を中心に鬼王は立ちその圧倒的な強さにミカもタカヒトも恐怖を感じていた。次は自分達の番という思いが次第に強くなっていく。それでもミカだけは守らなければならぬとタカヒトは鬼王の恐怖とすでに戦っていた。鬼王はタカヒト達に視線を向けた。

「あれ？てんとじゃないか。久しぶり！」

「ジエイド、とぼけるな！私がいることなどすでにわかっていたはずだ。おまえ、なぜ鬼王など名乗ってこの世界を狂わしている？餓鬼道をどうするつもりだ？」

「別にどうもしないさ！それよりキミこそ何をやってるんだい？キミの後ろの子達・・・タカヒト君とミカちゃんだっけ？狭間に落ちた子達だろ？」

タカヒトには鬼王が何を言っているのか分からなかった。てんとは鬼王は知り合い？ジエイド？鬼王が何故タカヒトとミカが狭間に落ちた事を知っている？タカヒトの頭の中はグチャグチャになって訳がわからなくなっていた。

「私は与えられた任務を全うしているだけだ！」

「任務・・・僕にはそれらは障害となる可能性がある。ついでに処理するよ。」

その言葉に再びタカヒトに戦慄が走った。それらって僕たちの事？ゴミを処分するような簡単な気持ちで僕たちは殺される？それで

もミカを守るようにタカヒトは前に立ち塞がる。笑みを浮かべたジエイドの身体が青色に輝き始めた。その刹那、てんと球体がタカヒト達を守るように立ち塞がり飛んできた何かを弾き返すとタカヒト達の目の前に液体が激しい勢いで地面に飛び散った。緑てん頭の頭上では三つの球体が円を描くようにグルグル回っている。

「てんとは緑玉を使っただったね。でもその能力で僕に勝ったこと一度もないよね？」

「それは学舎時代の話だ！」

「変わってないね。でも今も昔も同じだよ。キミは僕には勝てない！」

青ジエイドの身体がより輝くとその周りに拳大の水の塊が大量に現われた。一方、緑てん頭の三つの球体は常に頭上を回っている。

青ジエイドが右手を緑てん頭に向けると大量に浮遊している水の塊が一斉に襲い掛かる。

「青玉理力 ウォーターアロー！」

水の塊が矢の形となり緑てん頭に放たれたが球体の反発力の特徴を生かした防御により飛んできた水矢を青ジエイドに弾き飛ばす。

「青玉中級理力 ウォーターウォール」

左手をあげると青ジエイドを包むようにウォーターウォールと呼ばれる水の壁が現れた。その壁は跳ね返ってきた水矢を吸収する。青ジエイドと緑てん頭の一進一退の攻防が続いてはいるが少しずつ水矢はその本数を増してきている。三つの球体では矢の数の多さに

対応しきれなくなるとそれに気づいた青ジェイドは更に水矢の本数を増していく。球体が反応しきれず防御が間に合わないほど襲いかかってくると球体の間から数本の水矢が緑てんとの身体を貫ぬく。

「ガハッッ！」

地面に落ちて倒れるとてんとから緑色の輝きは消えた。瀕死の状態と確認したジェイドは青色の輝きを消してタカヒトの前まで歩いて近づいていく。

「さて、てんとは沈黙している。次はキミ達の番だね！」

タカヒトはジェイドには勝てないことをすぐに悟った。いまままでんとに戦い方を教わりそれを実行してきた。てんとの兵法を信じながら戦っていたのである。そのてんとがジェイドには成す術もなく敗れ去った。勝てない・・・それでもミカだけは助けたい！守りたい！そんな想いがミカを守るようにタカヒトの身体を動かした。

「その子を守るつもり？勝てもしないのに？そうだ！いいこと思いついた。」

そんな事を言いながら歩み寄るとジェイドはいきなりタカヒトの腹部を蹴りあげた。ジェイドの蹴撃に肋骨が折れる感触が伝わった。苦悶の表情を浮かべタカヒトはその場に膝をつきうずくまった。息も出来ず蒼白した顔からは汗がダラダラと流れてきた。

「クッ、ウウウ……」

「タカちゃん！」

苦しみ悶えているタカヒトをミカは介抱するように近寄るとジェイドからタカヒトの身を守るようにミカは立ち塞がる。そんなミカの髪の毛を鷲掴みすると強引にジェイドはミカの身体を取り押さえた。

「離して！タカちゃん・・・はあっ！・・・」

嫌がるミカの腹部に拳を入れるとミカはガクツと膝を落とし気絶した。ジェイドはミカを抱きかかえると苦しみ倒れているタカヒトに言った。

「あのさあ、彼女をオメガに連れていくから。最近、暇でね・・・これはゲームだよ。がんばって取り返しにおいで・・・そういえばこんな光景、昔あったっけ・・・」

意識を失いかけていたタカヒトはそれを聞き取ると気絶した。そう言い残すとミカを連れてジェイドはその場から消え去った。冷たい地面に倒れたタカヒトは何も出来ないまま気を失っている・・・

学舎時代

冷たい地面に倒れ気絶したてんとは深い意識の中で学舎時代の光景を思い出していた。

「おゝい、てんと！また一人で本なんか読んでるのか？たまには遊びに行こうぜ！」

「いや・・・いいよ。」

「なんだよおゝ・・・つままないなあゝ・・・。」

キングダムシティのとある天道の学舎でジェイドとてんとは共に学んでいた。ジェイドとてんとは全学舎の中で最も優秀なクラスに在籍していて、そのクラスでもジェイドは常に成績トップであった。ジェイドの成績はおろかスポーツをやらしても遊びをさせても何をさせてもすべてこなしてしまうクラスきつての人気者だった。てんとはというと成績は常にナンバー2であったがスポーツは全然駄目でどちらかといえば目立たない存在だった。この頃のジェイドは明るくて優しき少年だった・・・ある日の事、長期休校前の最後の授業を終えた時ジェイドがてんとに声を掛けてきた。

「旅行する計画があるんだけど一緒に行かないか？」

「旅？別にいいけど、どこに行くんだ？」

「えっ！・・・それはヒ・ミ・ツ！」

ジェイドとてんとは終業式を終えると急いで旅仕度をした。学舎

から少し離れた森へ入って行くふたり。森の奥には小さな湖がありその先に小さな祭殿があった。この祭殿は学舎の先生達からは入ることを禁じられて通常は鍵がかかっている。何故入るのを禁じられているのかというところこの祭壇の奥にある石にあることをすると狭間への道が開けるからと聞かされていた。

「ジエイド。ここは禁じられた祭壇だぞ！」

「大丈夫だよ。二回目だし・・・逢わせたい人がいるんだ。」

ジエイドは狭間への行き方を知っている。今回は二回目なのだ。ジエイドには一番の親友であるんとに紹介したい人がいた。嫌がるてんとを強引に祭殿に入れると石に右手をかざし何かを唱えた。すると石が透明な液状になりジエイドはてんとをその液状の中に押し入れた。

液状の中を通り抜けると辺りが真っ暗な空間が広がっていた。てんとが遠くのほうに一寸の光を見つけジエイドはその光の方へ走っていく。てんとも追いかけていくとそこは草原が広がり遠くの山はとても雄大でたくさん動物がてんとまわりを歩いていた。てんとがその美しい風景に見惚れているとジエイドは草原の先にある集落らしき建物があるところへ走っていった。ジエイドもてんともこの時は知らなかったのだがここは修羅道と呼ばれる争いのみが行われる世界であったのだ。

「ハアハアハア、ユラ・・・久しぶり！元気だった？」

「ジエイド？そんなに慌てて・・・昨日会ったばかりじゃない！」

「ハアハア、・・・そうだったけ？」

「もう・・・へんな人。」

その女の子は溢れんばかり笑顔でジェイドに笑いかけた。女の子の名はユラといって色白の肌にサラサラした黒髪でとても笑顔がかわいい子だった。てんとがふたりの会話に入れないでいるとユラがてんとの存在に気が付いた。ユラにてんとの事を聞かれるとジェイドは親友であるてんとを紹介した。少し照れながらもてんとはユラと挨拶を交わした。

「はじめまして、てんと。よろしくね。ねえ、ジェイド。」

今日は薬草を取りに行くんだけど手伝ってくれる？」

「ああ、もちろんいいよ。なっ、てんと。」

てんとがうなずく前にジェイドはユラの手を握ると薬草を取りに森へ向かっていく。ジェイドのあんなに嬉しそうな顔をてんとは見たことがなかった。てんとから見てもジェイドは明るく誰からも好かれていたがどこかでジェイドは皆を避けているところがあつた。皆と行動していてもジェイドからてんと以外で誰かを誘うことはなかった。ジェイドにとっての本当の親友はてんとだけだったのかも知れない。そのてんとですら見たことがないジェイドの笑顔がここにあつた。薬草を取りながらジェイドはユラを笑わせ楽しませていた。そんなジェイドの姿を見て、てんとはなんとなく嬉しかった。その日は集落に泊まっていくことになった。

ジェイドの話ではこの世界と天道では時間の経過速度が違うらしい。普段は休みの日にしか来れないが学舎の長期休校に合わせてこの世界にくることをジェイドは計画していた。ジェイドとてんとはそれから何日かこの世界でユラと共に生活した。そう、この頃のジェイドは笑顔が絶えない男の子だったのだ。

ユラの集落には争いのない地域だったがすぐ近くまで戦の波は迫

っていた。そしてその戦の波の中心には修羅道を統一し殺戮だけが続く世界を築きあげた修羅王がいる。だがこの時は数百人規模の軍隊を率いている兵士団長にすぎず、この男が王になるうとは誰一人として思わなかった。この男がジェイドとユラを引き裂きジェイドから笑顔を、そしてユラから命を奪った張本人である。

「ドレイク！ここにはもう何も残ってないぜ。次は隣の村を襲うのか？」

兵のひとりが丘に寝そべっている男に語りかけた。男の名はドレイクと言って背丈は二メートルとデカくその腕は丸太のように太い。・・とこれまでならどこにでもいる兵隊の一人にすぎないのだがドレイクの恐ろしいところは数百人規模の軍隊をたったの数日で作り上げたことだ。どのように作り上げたのかはわからないが少なくとも兵士はドレイクを信頼して戦っている。ドレイクの軍隊は数千、数万の規模の軍隊を相手にしてもほぼ無傷で勝利を収めている。しかも敵対する軍隊は容赦なく殺して決して情け容赦などはしない。いくつもの戦を勝利してきたドレイクのカリスマ性に兵士のなかには戦神と崇める者もいる。

ドレイクは上半身を起こすと丘の草がなびいていた。風が激しく吹荒れて雲が流れるのも速い。その風を身体中に浴びながらドレイクは戦の準備をするように兵士に伝えた。丘を駆け下りて愛馬にまたがると軍隊を率いて隣村へと突き進んでいく。その隣村こそがユラの村である。

「ユラ、今日はどうするんだい？」

「今日はね、水を汲みに泉に行くの。一緒に行きましょう。もちろん、三人でね。」

ユラはジェイドとてんとを連れて村から少し離れた泉まで来た。水汲みの最中にジェイドがじゃれてユラに水をかけるとビツクリした表情をした。

「ちよつと、ジェイド！」

少し口を膨らませたユラはお返しにとジェイドに水を掛ける。少しの間二人は掛け合って遊んでいた。そんなふたりを見ながらんとは笑みを浮かべている。するとジェイドとユラがとんとに向けて水をかけ始める。楽しい時間はアツという間に過ぎるもので三人で水をかけ合いながら遊んでいると陽も傾いてきた。疲れ切った三人は泉の畔で寝そべってほんの少し休んでいる。

「……………そろそろ帰ろうか？」

ジェイドが水袋を持って村へ向う。村の近くまで歩いていくと村の方向から煙がたちのぼり異様な空気が広がっていた。不安そうな顔のユラが村へ走っていくとその後をジェイド達が追いかけた。三人が村に着いた時、村人は誰も居らずユラの目に映った者は見たことも無い数人の兵士の姿があった。兵士達は火を起こし村人から奪った酒を酌み交わしている。村の入り口で状況を理解できずただ立ちすくんでいる三人の姿がドレイクの目に留まった。酒の入ったトックリを手に立ちあがったドレイクはユラリユラリと歩いて近づいてくるとジロジロとユラを見ながらニヤケた。

「コイツは高く売れるぜ！小僧と虫には価値は無さそつだ。殺せ。」

ドレイクに言われて数人の兵士が三人の方へ近づいてくる。兵士達は村人から奪った宝飾品を身につけていた。ジェイドが辺りを見

渡すと村人達が動かず倒れている。ドレイクは村を襲い金品や食料を奪うほか、男や老人・子供は殺し、女は他国へ連れて売付けているようだ。泣きながら座り込んだユラの前にジェイドが立ち塞がる。ニヤニヤしながら兵士達はジェイドを押し退けようとしたその瞬間、兵士達はその場に倒れこんでいく。ジェイドの身体は青色に輝くと兵士達の身体は水矢に貫かれて死んだ。怒りに身を震わせながら青ジェイドはドレイクを睨み付けている。

「青玉？小僧のくせによく使いこなしている。

よし・・・そんなじゃあ、まあ、遊んでやるか！」

兵士達に後始末を任せて積み上げた村人の死体に腰掛けていたドレイクがゆっくり立ち上がるうとすると青ジェイドは怒り任せの水矢を一斉に浴びせた。

「青玉理力 ウォーターアロー」

青ジェイドはドレイクの姿が見えなくなるくらいの水矢を浴びせた。渾身の一撃に青ジェイドもてんとも勝利を確信していたがドレイクは傷ひとつ負わずに座っていた。その姿を見た青ジェイドとてんとは驚愕した。先ほどの兵士達を瞬殺した技をドレイクは何事も無かったかのように全く無傷の姿をしていたからだ。青ジェイドは困惑しながらも状況を整理していく。確かに手ごたえはあつたはず・・・しかしドレイクは無傷で地面が濡れているだけ。

「青玉理力 ウォーターアロー」

再度、青ジェイドは繰り出したが水矢はドレイクの目前で形を崩して地面に落ちていく。ドレイクは何の防御もしていないが青ジェイドには彼にダメージを与えることが出来ない。

「おいおい、池でも作って俺に水浴びでもしろってのか？」

「！・・・なぜ技が通じないんだ！」

青ジェイドはドレイクに驚愕した。ドレイクは立ち上がり雲の流れるのを見て少しの沈黙の後、語り始めた。それはある部族の村でドレイクはある色玉を見つけた時の話だ。当時これがソウルオブカラーとは知るわけもなく宝飾品のひとつとして身に付けていた。それからいくつもの部落を襲っているところある部族の長老から聞いたらしい。

「なあに・・・伝説を耳にただけさ。この世界のどこかにあるソウルオブカラー。それを手にした者は世界の霸王になれるってな！俺はこの世界を自分の物にしたいのさ。さて、おしゃべりが過ぎたな。最近使い始めたばかりでうまくは使えないが見せてやるよ。俺の灰玉を・・・最悪だろ？ソウルキラーなんだからな！」

灰玉と聞いた瞬間、青ジェイドとてんとの表情が一気に蒼ざめた。ソウルオブカラーの中で灰玉は最強の色玉のひとつと言われている。その能力はソウルオブカラーの能力を無効する。青ジェイドは自分の攻撃がドレイクに利かないことを理解した。

「灰玉使いか！能力が無効になるわけだ。だが直接攻撃は通じらねえだ！てんと、青玉の攻撃が利かない。力を貸してくれ！」

理力を高めると緑色の輝きを放ち三つの球体を出現させた。球体はドレイクを囲むように三方向に位置着がドレイクは見回しながらも冷静な態度を崩さない。

「こっちは緑玉か。色玉使いに二人も会えるとはな・・・俺は運がいい！」

地面が揺らぐほど灰ドレイクの理力が一気に増していく。青ジェイドは球体に飛び乗ると別の球体に飛び移り三方の球体を飛び移りながら速度を増していく。球体により速度を増すと同時に青ジェイドの身体が残像を残し2・3人に見えてくる。三人の青ジェイドは右拳に力を込めると瞬時に灰ドレイクとの距離を詰めた。

「ふん、俺が灰玉だけでここまでのし上ったとでも思っているのか？」

「！ がはっ！！！」

灰ドレイクは青ジェイドの残像には見向きもせず青ジェイド本体の攻撃をかわすと力を込めた左拳を青ジェイドの腹部にめり込ませていく。内臓をえぐるように腹部に食い込んだ左拳に青ジェイドは口から血を吐き出した。青色の輝きを失ったジェイドは悶絶しながらその場に倒れこむ。灰ドレイクは更に理力を高めて灰色に輝くとしてんと三つの球体が消滅した。圧倒的な力の差にてんとはなす術もなくただその場に立ちすくんだ。

「ふうっ・・・」

もつと灰玉を使っても良かったが久しぶりに汗を流したかったもんでな！」

ドレイクは悶絶して倒れているジェイドの顔を踏みつけながら言った。ジェイドは学舎ではスポーツ万能でなかでも格闘術は教師も舌を巻くほどの使い手である。なにより学舎でソウルオブカラーを使いこなせるのはジェイドのみ。てんともまだ緑玉を完全には使い

こなせてはいなかった。そのジェイドが地面に這い蹲り悶絶している姿がてんには想像が出来なかった。いや・・・今の状況が一番理解出来ないのはジェイドかもしれない。一番・優秀・有能と称賛を浴び続けていたジェイドが地面を這い蹲りしかも頭を踏み付けられている。自分が一番最良の手段を取りドレイクに挑んだ。しかしドレイクはその手段を上回った攻撃を仕掛けてきた。しかもソウルオブカラーをほとんど使わずにだ。圧倒的な力の差・・・それは恐怖そのもの。芽生え初めた恐怖という感情にジェイドはただ震えている。

てんとはそんなジェイドの姿を初めて見ることとなった。しかし次の瞬間てんとは意識を失う。ドレイクはてんとに視線を合わせる瞬間に間合いを詰めて浮遊しているてんとに一撃を与えた。地面に叩き付けられたてんとは沈黙。次にドレイクの視線に入ったのはユラだ。ドレイクは歩いて近づいていくとユラは恐怖でその場に座り込んでいる。ジェイドはもがき苦しみながらユラへと這いずりながら近づこうとする。

「まつ、待ってくれ！ユラだけは・・・その子だけは助けてやってくれ！」

反撃も出来ずに涙ながらに懇願するジェイドに対してドレイクは再び雲を眺めながら沈黙した。再びジェイドの姿を見下すと口元をゆるめニヤケながら語りだした。

「女をただひとり残したところで生きてはいけなйдらう。売り飛ばしても大して金にはなりそうにもない。おまえの願いを聞き入れるのも・・・待てよ。おまえの無様な姿が見てみたい。俺は挫折や絶望を知らないおまえのその目が気に入らないんだ。そこでおまえには絶望をプレゼントしてやるう。」

「やめる……やめてくれ！」

涙を浮かべながら怯えているユラを見下すとドレイクは腰に吊るしてある刀を鞘から取り出していきなりユラを斬りつけた。鮮血がほとばしりその場に倒れたユラは何とか意識を保ち這い蹲りながらジェイドのほうへ這って行く。

「ジェイド……」

「ユラ……うわあああ〜！！！」

「ジ……エイ……ド……」

ジェイドとの距離があと少しと、もう少しで手が届くというところでユラは力尽きた。ジェイドにはユラが死んだ事にショックを受けてただ呆然としている。

「いいぞ、いいぞ！その顔が見たかった！ハッハッハッ！」

絶望に打ちのめされているジェイドの姿を見て笑いながらドレイク達はその場を去っていった。数時間が経過した頃、ジェイドはユラの亡骸を抱きながら村を後にした。

「……てんと……しっかりするのじゃ。」

「……徳寿先生……」

てんとは意識を取り戻すと天道の病院のベッドに寝かされていた。学舎の長である徳寿が異変に気づき倒れていたてんとを助けに来たのである。すべてを話したが徳寿はジェイドの姿は見えないと言

った。てんとは徳寿から修羅道についていろいろ聞かされながらその上で説教もされた。しかし徳寿はてんとが修羅道より無事に戻ってこれたことをなにより喜びもした。

その後天道よりジエイド捜索隊が修羅道に派遣されたが捜索は困難を極め、結局ジエイド死亡の報告がされて打ち切りとなった。

ハンターの底力

「目が覚めたかの？」

「……ここは？」

タカヒトはベッドの上に横になっていた。どれくらい寝ていたのかわからないが腹部に痛みを感じた。隣にはてんが寝ているが意識はない。声のほうに目を向けると年を取ったハンターが一匹椅子に座っている。その年老いたハンターは自らをコパと名乗り、てんとは生命に異常はなく意識が戻れば大丈夫とのことだった。コパはハンター族や餓鬼道のこと、そしてジエイド、いや鬼王が来てからのこの世界の変貌についてタカヒトに語った。そしててんとを連れてこの地を去るように伝えた。

「嫌だ！ミカちゃんを助けるまでどこにも行けない！」

「しかしのお……」

「教えて！鬼王はどこにいるの？」

タカヒトは懸命になってコパじいに話しているとそこへゲイルが部屋に入ってきた。

「話は聞いた。よし、おまえ……タカヒトとか言ったな。俺と共に戦え！」

「????? ゲイル、何を言っておる！この者達には関わりないとではないか。」

「関わりはある！こいつらはミカとかいうやつを助けに行くんだろ？俺はやつを倒しに行く。目的は同じことだ。それにこいつらは妙な技が使えるようだ。俺達の五行の印のようなものがな。そうなれば味方はひとりでも多いほうがいい。」

たしかにゲイルは鬼王との戦闘を目的としてタカヒトはミカの救出を考えている。方向性といえば一致するのかもしれない。てんとの意識が戻らない以上ゲイルの助けは必要になる。ゲイルもてんとの緑玉の能力を知っていてタカヒトもその能力を使えると確信していた。しかしタカヒトの紫玉はここでは使えない。タカヒトはその事を隠していた。

「てんとと……一緒なら行くよ。」

「……戦いの準備が整い次第出立する。」

そう言い残すとゲイルは部屋から出ていった。ゲイルが何を考えているのかわからないがミカをなんとしても助けたかった。コパジに促されタカヒトはその日はそのままベッドで休むことにした。

「ここは……?? ミカちゃん、ミカちゃんはどこ？ミカちゃんを助けなきゃ！」

「無理だ！ジェイドには勝てない……あきらめろ!!」

「てんとと一緒になら勝てなくてもミカちゃんを助けることは必ずできるよ。」

「無理だ！どうしても行くと云うのならタカヒト！おまえ一人で

行くんだな。」

「なんでそんなことを言うの？どこ行くの？てんと！てんとおゝゝ．．．どうしていつもこうなるんだ！うまくいくと思うといつも失敗する．．．うまくいかない。なんでなんだ？どうしていつもこうなるんだ？僕は一生懸命やってるのに．．．何も悪いこととしてないのに．．．どうして僕ばかり．．．なんで僕ばかりなんだ？なんで．．．なんでいつも僕だけがうまくいかないんだ！」

タカヒトは恐ろしい夢に驚いて飛び起きた。まだ夜中で辺りは静まり返っている。

隣で寝ているてんとは依然意識を取り戻さずにいた。額から流れ落ちる汗を拭いながらタカヒトは自分に言い聞かせるように言った。

「そんなことない．．．てんとは助けてくれるはずだ。」

再びベッドに横になり目を閉じたがなかなか眠れずにいた。窓から朝日が差し込み、眩しさに目を覚ますとタカヒトはベッドから抜け出した。

「タカヒト、気を付けていくのじゃぞ。決して無理をせぬようにな。」

「うん、ありがとう。コパじいちゃん」

タカヒトは独りで近代独立国家オメガを目指す事となった。てんとは依然、意識を取り戻さずゲイルは先にオメガへ向かった。いまのタカヒトはソウルオブカラーを使うことは出来ず、唯一の戦術は徳の水筒を使つての攻撃だけだ。ゲイルの作戦もただ鬼王を倒すと言っただけで作戦らしいものはまるでなかった。もちろんタカヒトに

も作戦と呼べるものは全くなくミ力を助けることしか頭にない。独り怯えるように周囲を警戒しながら歩き始めてどれくらい経ったであろうか？タカヒトを呼び止める声が聞こえてきた。ギョツとして後ろを振り返ると一匹のハンターが近づいてくる。タカヒトの目前にくるとそのハンターは息を切らせながら座り込んでしまった。

「えつと・・・たしか店の主人だよな？」

「ゼエゼエゼエ・・・おつ、憶えてくれたね。おらつちは・・・ゼエゼエゼエ、

ちよつと待っててね。休憩 休憩。」

店の主人はミゲールと言ってスクラップをオメガの裏商人から買取それを修理して好戦的ハンター達に売りつけている商人だ。最初は小さな売場だったらしいが先見の明と商売の才能があつたのだから、店は少しずつ大きくなりいまでは支店を三つも持つやり手の経営者となっていた。ミゲールにとってオメガもハンターも関係はないがそれでも同胞が殺されるのを黙ってはいられなかった。作戦を知つてぜひ自分も戦いたいと言つてきた。

「でも・・・相手は近代独立国家オメガの鬼王だよ。ゲイルみたいな好戦的ハンターでも勝てるか分からないのにミゲール・・・戦えるの？」

「なつ、なに言ってるね！タカヒトはおらつちのすごさがわかってないようね・・・

たしかに力はないね。でもおらつちにはそれを補うコレがあるね。」

ミゲールが指をさすとそこには旧型だがドライブスーツが一機走

ってきた。それはこの世界にタカヒトが来たときにミゲールの所にあつた壊れていた機体だ。タカヒトの驚く顔を横目にミゲールはオメガが開発した戦闘兵器ドライブスーツをグローディアと呼んだ。今回のタカヒト達の作戦を知った時から三日三晩、寝る間も惜しんで機体の修繕と改良を重ねてきたらしい。燃料石の凝縮技術と機体の燃費向上、自動操縦も加えて更に出力も30%アップさせた。オメガの新型にも対抗出来ると自信満々の笑みを浮かべている。自慢話を続けようとしたミゲールにグローディアの内部から声が聞こえた。

「ちよつと、くだらないウンチクなんかどうでもいいじゃん。

それよりその子は大丈夫なの？本当にアンタ鬼王に勝てるの？」

「えっ？・・・あっ！」

タカヒトがグローディアを見上げると少し生意気そうな感じのハンターの女の子がいた。ミゲールの姪っ子でマイコと言い今回の作戦についてきた。ミゲールは「自分の姪っ子を戦場に連れて行く叔父がいるわけない！」と拒否したのだがマイコは「着いていく！」と言って言う事を聞かなかつた。実際、開発は得意なミゲールであつたが操縦はからっきし駄目であつた。その点マイコのグローディアの操縦能力は高く、口では拒否したものの内心はホッとしているミゲールであつた。

「くだらないとはなんね、マイコ。早く帰るね。ママが心配してるね。」

「はいはい、いいから行くよ。その子・・・タカヒトだっけ？早く乗りなよ。」

タカヒトは自分より明らかに小さい女の子に言われて少しムツとしたが齒向かう事も出来ずグロウディアに乗りこんだ。本来は一人乗りらしいがミゲールの改良により中は割りと広々としていた。操縦席に座っていたマイコがスイッチを押すと「ドライブモード」と音声が入りグロウディアは二足歩行の戦闘形体から移動形体へ変形した。移動形体は限りなく車高が低く安定感抜群である。それはタカヒトが人道で見た自動車に近い形をしていた。驚くタカヒトの顔を見てニヤリと笑いながらマイコはご機嫌でグロウディアを走らせ一路、近代独立国家オメガを直指した。

「観念しろ。おまえに逃げ場はないぞ！」

オメガ都市のはずれの町で複数の兵士に囲まれたゲイルがそこにいた。たった独りでオメガに乗り込んだゲイルであったがオメガの特殊武装部隊ブレイカー部隊に見つかり町の袋小路に追い込まれたのだ。オメガにはいくつか特殊部隊があるのだがそのなかでも最も強力な戦闘能力を誇るブレイカー部隊。隊長のドドレスが笑みを浮かべゲイルを見下している。袋小路にして道幅は広くゲイルの周りをブレイカー部隊の兵士総勢三十名が取り囲んでいた。ドドレス率いるブレイカー部隊は最新のドライブスーツに乗り一方ゲイルはただ独りなんの武器も持たずその勝敗は戦わずして明らかであった。ドドレスの合図によりブレイカー部隊は一斉にゲイルに対して砲撃の標準を合わせた。

「標準を合わせろや……死にさらせ！」

次の瞬間ブレイカー部隊の総攻撃が始まった。ドライブスーツに搭載されたミサイルのすべてがゲイルに発射され周辺の建物ごと爆破されていく。周りは硝煙と爆破された建物の埃でゲイルの姿は見えなくなった。

「止めや！止めや・・・馬鹿共が！一匹のハンターごときにやりすぎや！」

ドドレスが攻撃終了の合図を出すと勝利を確信して高笑いをした。周囲の煙が少しずつ無くなると人影が見え、無傷のゲイルが立っていた。腰を抜かしたドドレスは顔を震わせながら額から大量の汗を流していく。

「あつ、ありえへん・・・なんでや・・・なんでなんや！」

ドドレスはいや、ブレイカー部隊の隊員すべてが自分達の目を疑った。ブレイカー部隊が驚きを隠せず戸惑っているとゲイルはゆっくりと動き出した。

「ふう〜〜・・・なんとかかわせたか・・・さすが一族に伝わる秘術。」

さてバカ面どもを一掃してやろうか！五行の印 火の印

ゲイルは自らの手を合わせ、印を組むと頭上に無数の火の塊が現われた。その火の塊が一斉に三十機のドライブスーツに激突すると爆発して炎上するドライブスーツの中から兵士達が慌てて飛び出してきた。

「悪魔や、悪魔がやってきたで！」

冷汗を額にかきながらドドレスを筆頭に一目散にブレイカー部隊は撤退していった。印を解き、火の塊が消えるとゲイルはその場にひざまずき血を吐いた。

「ぐはっ……こいつは相当身体に負担がかかりやがる。」

五行の印とはハンターに伝わる秘術で身体に印の刺青を入れる。するとその印の属性を使えるようになるが身体に対する負担も相当なもので身を滅ぼす危険なもろ刃の刃でもある。ゲイルのように五行すべての印を入れると身体への負担は更に増して長くは生きられなくなる。しかし生きる事を犠牲にしてもゲイルは戦うことを選んだ。それは死んでいった仲間の為であり、そして一族の誇りと先祖の魂に報いる為である。

「……さて、ぼちぼち行くとするか。」

ほんの束の間の休息後、ゲイルは立ちあがり鬼王のいる近代独立国家オメガの中枢グリホン要塞を目指し、歩を進めていく。一方グリホン要塞を目指しているもう一組のチームがいた。

「うわあ〜〜！」

「ちょ、ちよつとお〜……ぶつかる、ぶつかる、ぶつかるってば、バカア!!!」

ドライブモード中の機体をガンガンと町のあちこちにぶつけながらミゲールの操縦するグローディアは爆走していく。町の人々は慌ててグローディアの突進を避けていく。花を売る荷車にぶつかったり店先に並んでいるテーブルでお茶を楽しんでいる人々に向かってグローディアは突撃していった。

「なんざます、アレは……もしかして……ギヤアア〜〜、ぶつかるぞます。」

口に含んだお茶を噴出した婦人がとつさに横つ飛びするとグロリアはテーブルをなぎ倒しながら爆走していった。婦人は持つていたティーカップのお茶を溢しながら口を開けている。暴走行為に気付いたオメガの警備隊がグロリアの後を追ってきた。オメガの警備隊詰所の前を横切るグロリアを犯罪者と確定した警備隊は追尾してきたのだ。

「おつ、追ってきたね！」

焦ったミゲールの暴走は加速してゴミ箱やそば屋の屋台を跳ね飛ばし激走していく。ミゲールの顔は汗だけで手は震えていた。実は町に入る前にマイコの操縦している姿を見たミゲールが操縦したいと言い出したのだ。操縦を代わったミゲールだったが改良を加えたグロリアの反応速度は異常に速くもはやミゲールに操縦出来る機体ではなかった。

「ちょっと、ミゲおじ！これじゃ鬼王と戦う前にグロリアも私達も壊れちゃう。」

「どいて、私がやる。」

マイコはミゲールを押し退けると操縦席に座った。蛇行運転をしていたグロリアは安定して走るようになったが警備隊との距離は縮んでいた。グロリアに対してガトリングガン装備した警備隊は射撃を開始した。巧みな蛇行運転で弾丸をかわしたマイコは操縦席の前にあるスイッチを押す。「スーツモード」と音声が入りグロリアは二足歩行の戦闘形体へと変形した。

「このまま戦闘に入るわよ。しっかり掴まってなさい！」

そう言うとマイコの目が鋭く戦闘ハンターの顔になった。グロリア

ディアはその場に止まるとすぐに警備隊のドライブスーツに囲まれた。特殊部隊ほどの装備はないがやはり新型のドライブスーツは違う。警棒らしきロッドを手にすると二機のドライブスーツがグローディアに襲い掛かってきた。

「あきらめてお縄に掛かれ。」

襲い掛かってきた一機目の攻撃をかわしたものの二機目の攻撃まではかわせずグローディアは左アームで警棒ロッドを受け止めるが破壊されてしまった。それでも二機のドライブスーツから距離を取ったグローディアは戦闘態勢を整える。不安そうに見つめるタカヒトにマイコは激を飛ばした。

「泣きそうな顔しないの。ミカを助けに行くんでしょ？私は負けない！」

勝って生き抜いてやる！」

警備隊のドライブスーツは全部で四機。二機以外は待機している状態だ。新型の性能はグローディアのそれを上回り更に左アームを破壊されている。圧倒的に不利な戦況。いや勝機はある。それは警備隊がマイコのグローディアの性能を侮っていることだった。

「旧式など問題外！もはや勝機などないぞ。」

抵抗するグローディアに対して警備隊のドライブスーツはガトリングガンの標準を合わせると凄まじい勢いで回転すると葉きょうが地面に雨のように落ちていく。マイコの操縦でグローディアは弾丸を避けていくのだが待機していた警備隊のドライブスーツ一機が加わると三機のガトリングガンの銃撃が始まった。ミゲールは頭を抱えると叫んだ。

「もうダメね！」

「諦めちゃあダメだよ。マイコが戦っているんだから。」

「違うね・・・マイコの操縦は確かに警備隊の銃撃をかわしているね。」

でもマイコの操縦能力にグローディアがついていってないね！」

「えっ？」

「グローディアはおらっちの最高傑作ね。でもマイコの操縦能力はそれ以上・・・」

このままではマイコの動きにグローディアがついていけずに壊れてしまうね！」

ミゲじいの言うとおり実際、マイコの速すぎる反応にグローディアの電気回路はついていけなかった。ほんの少しのズレが次第に大きくなりガトリングガンの弾丸をかわせなくなっていく。グローディアにガトリングガンの弾丸が命中していくと崩れるように地面に倒れこんだ。

「もうおしまいね！」

これまでかとミゲールもタカヒトも諦めていたがマイコだけは鋭い眼を光らせていた。マイコは操縦桿から手を離すと両手を合わせ印を組んだ。その姿にミゲじいは驚愕した。

「マイコ？・・・まさか、おまえ！」

警備隊はすでに勝利を確信していた。三機のドライブスーツはグローディアを取り囲むとガトリングガンを向けたまま待機していた。ゆっくりとグローディアは立ち上がると破壊された左アームを右アームで千切り取った。

「ハンターは誰にも負けない、いくわよ！」

マイコは眼を光らせるとグローディアは警備隊のドライブスーツに向かって急接近していく。グローディアの右アームが背中に装備されたガトリングガンを取り出すと一機目のドライブスーツに押し当てた。そのままトリガーを引くと瞬時に蜂の巣のように穴だらけになったドライブスーツが崩れるように倒れ込んだ。だがその隣にいた二機目がグローディアに警棒を振りかぶっていた。左アームをすでに失っていたグローディアに防御する術はなく二機目が警棒で攻撃する位置はマイコ達の乗ったコクピットに直撃する軌道だ。

「もうダメね！」

ミゲールが頭を抱え死を覚悟したが印を組んでいるマイコの眼には諦めという言葉はなかった。警備隊のドライブスーツの振り下ろした警棒はグローディアを破壊することができなかった。警棒には樹木の枝が巻き付いてその樹木はグローディアの取り外された左アームから伸びていた。

「左アームはこの為に取り外したのよ。ミゲじい、グローディアはオメガの旧型ドライブスーツじゃないよ。このグローディアはハンターの最新型ドライブスーツよ！」

グローディアは二機目にガトリングガンを向けるとまた蜂の巣状の穴を開けて二機目も崩れ落ちた。警備隊は予想もしていなかった

グローディアの反撃に動揺していた。ミゲールがどんなに改良を加えたとしてもオメガ最新型のドライブスーツには歯が立たない事はマイコもわかっていた。マイコはコパじいに頼み込みマイコとグローディアにハンターの秘術である五行の印 木の印を施してもらったのだ。旧型のドライブスーツであるグローディアの反応速度を木の印により育った根が電気回路を補強する。フレームは木の印により育った樹木で補強されることでマイコの操縦能力についていく事が出来たわけである。

木の印グローディアが素早く警備隊に向かうとガトリングガンを連射すると残りの二機のドライブスーツの脚に弾丸が直撃するとその場に崩れて戦闘不能となった。ドライブスーツから脱出した警備兵達は一目散に退散していく。マイコは勝利を確信すると大破したドライブスーツを飛び越えて建物の屋上に飛び乗る。木の印グローディアは屋根から屋根へ飛び移りその場を後にした。

「まったく・・・木の印を施したなら先に言うておくことね！」

「ごめんなさい。でも言ったら怒ると思ってた・・・。」

「当たり前ね！アイタタ・・・」

「なんでそんなに怒ってるの？」

「当たり前ね！タカヒト、印を施すという事がどういうことか、わかってるね？」

「・・・わからない。」

「かつ！だから部外者は困るね。印を施すということは・・・」

「施すという事は？」

「嫁にいけないということね！」

「嫁って……マイコちゃん、まだ小さい子共だよ。」

タカヒトの言葉に激怒したミゲルは結婚について熱く語り始めた。若い娘が刺青を入れることに相手が恐がると強い口調でいった。熱弁を繰り返しているミゲルだったが自動操縦にしたとたん席から転げ落ちた。タカヒトとマイコは腰を抜かしたミゲルを介抱しつつ熱い言葉を聞き流し近代独立国家オメガの中心部であるグリホン要塞へ向かった。

グリホン要塞での戦い

近代国家オメガの中心の地にそびえ立つ黒金の城グリホン要塞。まだこの世界をハンターが支配していた頃、その片隅で死を待つ者達がいた。鉱物の石像のように動けない者達とは別に彼らは歩くことも食べることもできる。人道の者達同様に生きている。しかし何を植えても育たない何も生まれないこの地で彼らから希望と言う言葉はなかった。彼らは貧困に苦しみハンターの襲撃に恐れ死を待つだけだった……。

そこに現れたのがジェイドだ。死を待つ者の目に映ったその姿は正に神そのものだった。ジェイドは蒼玉を使いアイスフィールドを展開するとハンターの襲撃から彼らを守った。ジェイドは彼らに火の起こし方や農業開拓、建物の施工術、衣服の製作などあらゆるものを教えた。最初は小さな部落だったが近地に住んでいる者達をハンターや盗賊の襲撃から助け出していくと他の地域に暮らす者達が噂を聞きつけこの部落に集まるようになった。部落から町へ、そして数年で近代国家オメガへと発展した。彼らはジェイドを尊敬の意味を込めて餓鬼道の王・・・鬼王と呼ぶようになった。

「鬼王様！西エリアにてハンターの襲撃があり！」

「ブレイカー部隊総勢三十名が壊滅状態となりました。」

「やつと来たか。しかもゲイルだけで・・・勇ましいことだね。」

要塞の中部にある王座の間でジェイドはハンター襲撃の報告を受けていた。報告を終えた兵士が王座の間を出て行くとドレスに身を包んだミカが入って来た。ジェイドはミカを拉致したが食事を取らせて更にシャワーを浴びさせた。少し怒った表情のミカが言った。

「こんなことをしてどういづつもりなの？」

「綺麗になつたなあ〜。最初に見たときは顔中泥だらけだったのに・・・やっぱりゲームの景品はこういうのがいいからね。」

王座の間でジェイドとミカが話していると「ガッシャーン！」と窓が急に割れて黒い影が入りこんできた。一瞬ミカは驚き動きが止まったがその黒い影には見覚えがあった。この時ミカのように予想もしない事が起こると生物はショックを受け、その場に立ちすくむというのだがジェイドにはそれがまるでなかった。予想がついていたかのようにジェイドはそれを見つめていた。その影もゆっくり立ちあがるとニヤリと笑いジェイドを睨み付けた。

「あのさあ〜 ドアがあるんだからわざわざ窓を壊さなくてもいいと思うんだけど。」

「わりいわりい。早く恋人に会いたかったもんでな！」

「僕にはそういう趣味ないから・・・」

あつ、兵士達が来た。終わりかな？ハンター戦士のゲイルさん。

窓ガラスの割れた音に兵士達が王座の間に数名入ってきた。ゲイルの姿を確認した兵士達は取り囲むと持っていた小銃で一斉に攻撃を仕掛けた。

「準備もせずここに来たとても思っているのか！」

五行である火の印を唱えると火柱が現れて兵士達が連射した弾は溶けて地面に落ちる。銃火器ではゲイルにダメージを与えることが

出来なかった。怯んでいる兵士達に炎玉を浴びせるとなす術もなく焼け焦げた兵士達はその場に倒れた。焼け焦げた臭いのする異様な王座の間でゲイルはジェイドを睨みつけながらも余裕を見せていた。

「へえ〜考えたね。五行の印があ〜。この前とは少しは違うみたいだね・・・」

でも命は惜しくないのかい？」

「貴様を倒せるのなら悔いはないさ！」

ゲイルは両手を合わせ火の印を唱えると火の塊をジェイドに向けて飛ばした。ジェイドはウォーターウォールで火の塊を受け止めた。さらにゲイルは無数の火の塊を飛ばしたがすべての火の塊が水の壁により受け止められた。ジェイドはニヤリと笑うと見下しながら言った。

「わからないかなあ〜。五行相剋つて知らない？火は水には勝てないんだ。」

君は僕には勝てないよ。青玉理力ウォーターアロー！」

ジェイドから無数の水矢がゲイルに向けて放った。五行相剋の原則により水の矢を火の属性では受け止めることはできない。不敵な笑みを浮かべるジェイドに対してゲイルはまた印を唱え始めた。ゲイルの周りを浮遊していた火の塊が消えて代わりに土の壁が現れた。土の壁は水の矢をすべて受け止め吸収していくとジェイドから笑みが消えた。ゲイルは更に金の印を唱えると土の壁が消えた。三叉槍を手にしたゲイルは瞬間に間合いを詰めると鋭い刃をジェイドに突き刺す。

「何、くっ！」

蒼玉を発動させて氷の盾で防御を試みたが氷の盾は砕かれジェイドは回避することが精一杯だった。久しぶりの戦慄・・・ジェイドの背中に冷たいものが流れた。

「火の印、土の印、それに金の印・・・そんなに体に印を入れるなんて死ぬ気かい？」

「言っただろ・・・貴様を倒せるなら悔いはないとな！」

ゲイルは攻撃の手を緩めず三叉槍で連続突きを繰り返す。少しずつゲイルが押していくとジェイドは防戦一方だった。ジェイドの蒼玉の氷と青玉の水の属性に対してゲイルの金の印、土の印はそれらの属性と相対するもので打ち消す効果がある。

ソウルオブカラーの力は五行の印に相殺されてその上で戦闘能力の勝るゲイルの肉弾戦はジェイドを疲労と困惑へと導いていく。脚がもつれてその場に倒れこんだジェイドの腹部に三叉槍が突き刺さる。苦悶の表情を浮かべるジェイドに対してゲイルは更に深く腹部に突き刺した。

「ガハツ！・・・ゲツ、ゲイル・・・おまえ・・・」

三叉槍が腹部に深く突き刺さすと大量の血液が流れだしていく。ピクピクと小刻みに震え口からも大量の血を吐き出した。もはや動くこともままならないジェイドの姿を見下ろし勝利を確信したゲイルは一族の悲願である鬼王を倒した事によりハンター族の絶望は免れる事を喜んでいて。死んでいった者の無念と一族の想いがこれにより報われると思っていた・・・。

「幻覚とはいえ鬼王を殺すってどんな気持ち？嬉しい？」

「!・・・???.!!!!」

ゲイルは振り返るとそこには大理石の椅子に座りながら拍手をしているジェイドの姿があつた。そしてゲイルは自らの足元を見ると三叉槍が床の大理石を貫いていただけであつた。戦いが開始された時ジェイドは即座に青玉を発動させて幻影を作るとゲイルはジェイドの形をした幻影とずっと戦っていたのだ。大理石の椅子から立ちあがるとまっすぐゲイルのほうへと歩いていく。

「ぐうぐう・・・鬼・・・王・・・」

ゲイルは膝をガクガクさせながらも三叉槍を構えた。顔は蒼ざめ大量の汗をかき、疲労感は隠せなかつた。五行の印を使つての戦闘は予想以上に身体に負担が掛かるもの。実際ゲイルは立っているのがやっとの状態だつた。

「どうやら限界みたいだね。でもまあ続いたほうだよ。ちょっとびっくりしたしね。」

戦いは兵力じゃなくて兵法・・・これ基本だよ。」

ジェイドは疲労困憊感漂うゲイルの肩をポンと叩くと意識を失つたゲイルは前かがみに倒れた。笑顔を浮かべながらジェイドはミカンのほうへ近づこうとすると大理石の壁が「ドカツ」と吹っ飛んで大穴が開いた。王座の間の大理石の壁がボロボロと落ちていく。埃が落ち着つくとそこにはタカヒト達の乗つたグロウディアが倒れこんでいた。

警備隊との交戦を終えたマイコが戦闘を避ける為に屋根に移動していた。しかし自動操縦にしていたものの目標を完全に設定していなかつた為に想定外の動きをしたグロウディアが勢い良く王座の間

に突っ込んでしまったわけである。グローディアの中でミゲールは頭を打って気絶している。タカヒトとマイコは埃まみれの操縦席から咳き込みながら出てきた。

「ゴホツ、ゴホツ・・・マイコちゃん。もうちょっと何とかならなかったの？」

「うっ、うるさいわね！生きてるんだからいいでしょ！あれ？ちよつとゲイルが倒れて・・・あつ！鬼王がいる。」

「えっ・・・あつ、ミカちゃん！！」

「タカちゃん！！」

タカヒトの存在に気付いたミカはグローディアに向って走り出した。だが即座にジェイドはミカの前に立ち塞がると指をパチンと鳴らした次の瞬間、ミカの身体が凍り始めた。完全に凍りついたミカの姿に驚愕したタカヒトはグローディアから転がり落ちた。

「ミカちゃん！」

床に叩きつけられても痛みなど忘れているかのようにタカヒトは立ちあがると急いでミカの元へ走っていく。氷付けの塊になったミカは身動きひとつせすにすこし驚いた表情をして固まっていた。名前を何度も呼びかけてもミカは何の反応も示さず隣に立っていたジェイドにタカヒトは泣きながら言った。

「元に戻してよ。やっと、会えたのに・・・僕、ミカちゃんに謝りたいんだ。」

足にしがみつくとタカヒトにジェイドは軽く突き放すと廻しゲリをあびせた。体重の軽いタカヒトは簡単に吹っ飛ぶと地面に叩き付けられた。苦悶の表情を浮かべるタカヒトを見下しながらジェイドはため息をつく。

「あのさあ、ゲームなんだから勝つてもないのに景品がほしいはないでしょ？まあ、とりあえず安心してよ。ミカは生きてるから・・・いまのところはね。でも、いつまで持つかねえ？はやく僕を倒さないと無理かもね。」

ジェイドが機嫌良く話している最中、タカヒトは急に立ちあがるとジェイドの右頬を力いっぱい殴った。しかし顔が少しずれた程度でジェイドにダメージはまるでない。

「もしかして今のが精一杯の反撃？」

ジェイドはタカヒトを過小評価していた。てんとと一緒に行動しているだけの子供であり愛しい彼女を無力であるにも関わらず取り戻そうと勘違いしている子供だと。精一杯の攻撃でも自分に全くダメージを与えることが出来ない軟弱な存在。タカヒトがこの世界に存在できたのはてんとに守られてのこと。ジェイドは考えを頭の中でまとめていてタカヒトの変貌には全く気が付かなかった。金色に輝いているタカヒトの右拳が再びジェイドの右頬に触れるとその凄まじい衝撃にジェイドの身体は勢いよく吹っ飛んで王座の椅子に叩き付けられた。

「ガハッ！何？ぐうつ・・・こつ、この力は・・・？金色・・・だど??？」

立ちあがろうとしたジェイドはガクガクした膝を両手でおさえた。

金色に輝いている姿を見てジェイドは状況を理解した。それは徳の水による急激な力と運を手にした者の姿であり金色タカヒトを強敵と認めた上で冷静に攻撃方法を模索していく。金色タカヒトは一気にジェイドとの間合いを詰めると左右の打撃の連撃を浴びせる。それと同時にジェイドは青玉を発動させて水の盾を作り連撃をガードするがそれでもお構いなしに金色タカヒトの連撃は続いた。

金色の輝きが薄まると金色タカヒトはフロアの端へ素早く移動してジェイドから距離を取った。追撃するジェイドは金色タカヒトのその行動に困惑していた。戦況が変わり今度はジェイドの一方的な攻撃に防戦一方の金色タカヒト。ジェイドは余裕の表情を浮かべている。

「もう終わりかい？それとも徳の水が空にでもなったのかな？」

ジェイドはバカにした口調で挑発するが金色タカヒトはそれを気にせず別のあることを考えていた。金色タカヒトがある場所に目をやると凍りついたミカを担いで王座の間から出て行くマイコの姿があった。金色タカヒトはてんが手も足も出なかったジェイドをものすごく恐れている。実際ゲイルは全く歯が立たずジェイドに敗れている。だがそれほど能力があるにも関わらずミカを奪い去り危険な目に遭わせたジェイドに怒りも覚えていた。恐怖と激怒はそのどちらも戦いには不利になることが多い事を金色タカヒトは冷静に分析していた。畜生道でのデノガイドとの戦いと同様、命がけの戦いにも関わらず妙に冷静でいられる。

これも「徳の水筒の力だろう」と金色タカヒトはこの時考えていた。氷付けのミカを担いで部屋を出て行くマイコの姿はジェイドの視界にも入っていた。

「・・・なるほどね。あの子達を逃がす為とはね。結構冷静なんだ。君がここまでこれたのはてんがの助けがあったからだと思って

いたけどどうやら僕の勘違いだったようだね。邪魔者がいなくなつた事だし本気でいくよ。蒼玉理力　アイスアロー。」

蒼色の輝きを放つジエイドは複数の氷矢を一斉に金色タカヒトに撃ち込んだ。徳の水筒を飲み再び金色の輝きを取り戻したタカヒトは複数の氷矢をかわすと瞬時に蒼ジエイドに接近して打撃の連撃を繰り返す。蒼ジエイドは青に輝くと自らの身体を覆うほどの水の壁を作りだして連撃を阻止した。

「防御だけじゃないよ。同時に攻撃も行つことが出来るんだよ。」

ジエイドは青玉の防御と同時に蒼玉理力アイスアローを撃ち込んできた。ジエイドは蒼玉と青玉のふたつの能力を同時に使いこなせるのだ。氷の攻撃力と水の防御力でジエイドの兵法は常に完璧だった。アイスアローをかわして再度、打撃の連撃を繰り返すが青蒼ジエイドの水の壁に阻まれる。金色タカヒトは攻撃を止めて一次的に距離を取るようには後方へバックステップする。その直後、金色タカヒトは一気に青蒼ジエイドの頭上にジャンプした。

「身動きのとれない空中に身を置くとは愚かな。串刺しにしてあげるよ。」

楕円体になつたウォーターウォールは青蒼ジエイドの身体を完全に包み込んだ。高速に回転する楕円体の周辺から氷矢が一斉に金色タカヒト目掛けて襲い掛かってくる。金色タカヒトは氷矢の軌道を確認するとその矢を踏み台にしながら青蒼ジエイドを包み込んでいくウォーターウォールに迫っていく。金色となつたタカヒトは人道の学校で教わつた事を思い出していた。

「台風は周囲に雨や風・雷・雹などを降らせるがその中心は案外

穏やかなんだよ。

おい、そこ！聞いているか？」

金色タカヒトは台風の目を、ウォーターウォールの中心を捜していた。氷矢を踏み越え青蒼ジェイドの頭上にあるウォーターウォールの小さな、小さな孔を見つけた。金色タカヒトは右拳に力を溜め一気にそれを振り下ろした。金色の波動が中心にぶつかると水の壁が弾け飛ぶ。驚愕する青蒼ジェイドの目前に着地すると眼を光らせた金色タカヒトの左拳が腹部に突き刺さった。深く突き刺さった金色タカヒトの左拳が青蒼ジェイドに苦悶の表情を浮かばせた。

「ガハッ！」

後方に吹き飛び青蒼ジェイドの身体が壁に打ち付けられたと同時に追い討ちをかける金色タカヒトは壁に張り付いた青蒼ジェイドに左右の拳の連撃を食らわせた。部厚い壁に青蒼ジェイドの身体がめり込んでいくと最後に金色タカヒトの渾身の右拳が青蒼ジェイドの顎を突き上げた。

「アッ、ガガッ……………」

壁に張り付いた青蒼ジェイドは苦悶の表情と呻き声をあげながらズルズルと落ちていくと大理石の床に倒れこんだ。

グリホン要塞での逆転劇

タカヒトの金色の輝きは完全に消えた。倒れたジェイドはピクリとも動かない。完全な勝利にタカヒトは一息つくと思いを見渡した。そこでタカヒトは驚愕の事実を知ることになる。倒したはずのジェイドが王座に座っていたのだ。ゆったりと座りながらジェイドはタカヒトに言った。

「ゲイルと同じ結果になったようだね。僕はね、水を操れるんだ。その水は霧状となり幻影を作りだす。君は僕の幻覚と気づかず戦い続けていたってわけさ！まあ、それでも最初の一撃は喰らってしまっただけだね。結構痛かったよ・・・アレ。」

タカヒトにはジェイドの勝ち誇った言葉など全く聞こえないほど疲労が溜まっていた。急に身体が重くなり大理石の床に膝まずいた。額からは大量の汗が流れ落ちタカヒトのいる床はびっしょり濡れていた。

「重い・・・なんで・・・こんなに身体が・・・重いんだ？」

原因のわからない身体の変調にタカヒトは戸惑っていた。失いそうな意識をなんとか保っている王座からゆっくり立ちあがり膝まずくタカヒトにジェイドは歩み寄っていく。タカヒトの元に来るとジェイドの左脚がタカヒトの顔を蹴りあげた。大理石の冷たい床に叩きつけられたタカヒトはうずくまった。

「やっぱりね！徳の使い方を誤ったか・・・それは万能薬じゃあないんだよ。徳と業はバランスによって成り立っているんだ。バランスを崩すほどの徳の使用は業の嵐を生み出す。知らなかった？」

ジェイドの言葉にタカヒトはてんとに言われたことを思い出した。そう徳と業はバランスで成り立っている。徳の量と業の量はもちろん人それぞれ違うのだがどちらか一方の急激な消費があるとその後、反発が起こることがある。思いもよらない幸運を手に入れた者がその後不幸の連続に落ちていく事を時折聞くがこれがそれにあたるとであろう。逆に不運の連続があるからと言ってその後の加速的な幸運の上昇があるとはいえない。それはその者の徳の量と業の量のバランスの問題だからだ。

業を消費しなければ徳の恩恵も受けられない。業の多い者は一滴の徳の恩恵を受ける為に一生のほとんどを苦しみに支配され生きていく。

このバランスは通常はコントロール出来ないが徳と業の水筒を持っていくタカヒトにはそれが出来る。だから尚更、コントロールが必要になる。身動きのとれない今になってタカヒトはそのことを思い知らされた。

しかし紫玉を使えず、てんとの助けのない彼にはミカを助けることが出来る力はこれだけだった。ミカへの想い、自分の無力さ、限界・・・それらの想いがタカヒトの心に一斉に押し寄せると涙が溢れてきた。

「悲しむことはないよ。君はこれから新しい場所へ向かっていくんだ。

ミカもすぐにそこへ行くだろう・・・。」

タカヒトへの最後の攻撃を与える為にジェイドは蒼色に輝くがその輝きはすぐ消えた。一瞬ジェイドの動きが止まり再び蒼色に輝きだしたがまたも輝きを失った。タカヒトはジェイドの行動を理解出

来なかったがわかったことがひとつあった。

これで僕もミカちゃんも終わりなんだ。結局、ミカちゃんを守れなかった・・・

てんととも別れるんだ・・・これから何処へ行くんだろう？

ジェイドは蒼色の輝きを失っては再び輝かせてる。そんな繰り返しをしている姿を見てタカヒトは遊ばれていると考えていた。力のある者にいたぶられる事は初めてではなかった。タカヒトは人道の世界でのイジメに遭っていた事を思い出した。

僕はいつもイジメられていたんだ。あの時も大樹君にいじめられて・・・そうだ！ミカちゃんに助けられたんだ。そしてミカちゃんを死なせてしまった・・・また繰り返し返される？またミカちゃんを死なせてしまう？もしこの世界で存在出来なくなったら僕もミカちゃんも無空間へ飛ばされる。そしたら永遠に戻れない・・・駄目だ！

僕もミカちゃんも元の世界へ帰るんだ！今度は僕がミカちゃんを守るんだ！

タカヒトのミカを守りたいという強い想いに同調するように胸のペンダントが突然輝きを放った。周辺が暗黒に包み込まれると紫色の炎がタカヒトに語りかけてきた。

(タカヒトよ、私の力を受け入れるか？) (紫玉)

「紫玉？この世界じゃあ使えないって・・・あれ？ジェイドには見えてないの？」

(ここはタカヒトの心の中。おまえの持つ暗黒色の共鳴石により

私は存在できる。

今一度問う。私の力が必要なのか？（紫玉）

この時タカヒトはわかっていなかった。デオルトに貰ったペンダントが暗黒色の共鳴石であると。暗黒色の共鳴石とは共鳴亀裂を起こしている世界でも稀にソウルオブカラーの発動が可能になる。共鳴亀裂の発生している空間の補整作用を起こし所有者と色玉の繋がりを一定期間完全なものにする石である。紫玉とタカヒトの間でそんなことが起きていることなど露知らず、ジェイドは蒼玉を発動できずに苛立っていた。

「蒼玉が使えない？まさか・・・まあいい。」

青色に輝いたジェイドは周囲に水滴を発生させた。その水滴を頭上に集めるとそれは巨大な水の球体となりそこから龍が現れた。巨大な水龍はとぐるを巻きながら青ジェイドの頭上を動き回っている。両腕をあげて誇らしげな笑みを浮かべている青ジェイドの視線はタカヒトに向けられた。

「青玉最大理力 龍激波・・・君の存在を消す技の名前だ。さよ
うなら、タカヒト！」

ジェイドは両腕を振り下ろすと頭上の巨大な水龍がタカヒトに襲いかかっていく。巨大な水龍は顎を大きく開けてタカヒトを飲み込もうと襲い掛かった。

「僕は消えない！」

ミカちゃんと元の世界に帰るんだ。紫玉、僕に力を貸してくださいー！」

タカヒトは意識を失うと紫玉に心を委ねた。理力を高め紫色に輝き始めたタカヒトは襲い掛かる水龍をフワリとかわして空中に浮遊した。紫タカヒトは両腕を広げるといくつもの小さな紫色の炎が周囲を覆うように現われた。次第に紫色の炎が薄らぐと紫色のピラミッド状の角錐状の物体が姿を現した。

「アレスト、ターゲット・ロックオン・・・紫玉理力 アルティメットアタック！」

膨大な数のアレストは円周上に紫タカヒトを包み込むように配置された。大理石の床に激突した水龍は体勢を立て直すと再び紫タカヒトに襲い掛かる。膨大な数のアレストからは無数の粒子砲が放出されるが巨大すぎる水龍にダメージを与えることが出来ない。突進してくる水龍を紫タカヒトはかわしながらアレストの粒子砲を集中放出するがジリ貧状態が続く。青ジエイドの龍激波と紫タカヒトのアルティメットアタックでは理力自体に差がすぎた。押し寄せてくる龍激波を前に絶対絶命の紫タカヒト。そこに緑色の球体が突然現われた。

「球体に粒子砲をぶつけるのだ！」

その声に反応した紫タカヒトはアレストの粒子砲を球体に集中放出させた。粒子砲が球体に当たり反発すると二つ目の球体にそれが当り更に反発してスピードを増していく。三つ目の球体の反発を受けたアレストの粒子砲はひとつに集まり巨大な水龍の頭に撃ち込まれた。

「紫緑玉理力複合技 アルティメットストライク！」

紫タカヒトが右手を巨大な水龍に向けると集中粒子砲を浴び少し

ずつ形を崩して消滅していく。集中粒子砲は水龍の頭を完全に撃ち砕き、豪雨のようにジェイドの頭上に降っていく。そしてその崩れた水龍の先にいるジェイド目掛けて集中粒子砲が放たれた。ジェイドの機転に即座に水の壁を造り出したが集中粒子砲の前に砕かれた。直撃は避けたものの衝撃まではかわしきれずジェイドは床に叩きつけられた。それと同時に理力を消耗しきった紫タカヒトも輝きを失い床に落ちていった。

「……僕の龍激波が敗れるだど？」

集中粒子砲の直撃は避けたもののジェイドはかなりの衝撃を受けて肉体はダメージを負っていた。いや肉体より精神にダメージを受けたのかもしれない。よろけながらもなんとか立ちあがったジェイドの視線の先にはてんとがいた。

「て……んと……」

てんと姿を見つけたが紫色の輝きを失ったタカヒトは動くことも出来ずに床から起き上がることもすら出来ない。そんなタカヒトの横を通り過ぎるとてんとはジェイドに近づいていく。

「僕は……負けたのか？」

「そうだ、おまえは負けたのだ。」

タカヒトとの戦闘能力の差は圧倒的におまえが上だったにも関わらず負けたのだ！

「そんなことはない……まだ手はあるさ。蒼玉……??？」

「蒼玉は……ユラは助けてはくれないぞ。今のおまえをユラが

助けるわけがない！」

「……………」

蒼玉を発動させようとするが何の反応も示さなかった。ジェイドは蒼玉に何度も呼びかけたがそれでも反応はなかった。てんとはなんとなく蒼玉がユラの魂であることに気が付いていた。学舎時代てんとはジェイドとソウルオブカラーについて調べた。

ソウルオブカラーはその名の通り様々な色をした魂のことである。魂は不滅なものであり例え人道の世界で死んだとしても徳と業の増減のバランスにより振り分けられる。天道や餓鬼道などの世界へ飛ばされて、その世界で新たな魂となり生きていくのである。そして永き輪廻転生を繰り返した高い能力を持つ魂のみがソウルオブカラーとなる事がある。それはまさに永き歳月をかけてダイヤモンドが形成されるのと同じ事である。そのソウルオブカラーに認められた者のみがその能力を操ることが出来る。

しかしある禁じられた秘法を使うとソウルオブカラーを作り出すことができる

修羅道の世界でユラが殺されて・・・ジェイドはずっとユラを抱きしめていた。ユラが冷たくなってもぬくもりだけは忘れなくなかった。涙がとめどなくあふれていたいどれくらい時間が経ったのだろうか？ジェイドはあることを考えていた。

そう、禁じられた秘法のことを・・・

ユラを抱きかかえて廃墟と化した小屋に入ると壊れかけたベッドに寝かせた。そしてジェイドは材料を集めに外へ出掛けた。雨カマキリ、こねの葉、きりとうがらし、不破の実・・・それらを水に入れて煮詰めること一週間。さらに転生孔雀の足を入れて二週間煮詰める。冷ましたその液体に筆をつけると秘法の呪文をユラの身体中

に書き記した。この秘法は輪廻転生の法則を無視して魂をソウルオブカラーに強制的に創り上げるものだ。これによりユラは生まれ変わることは出来なくなり永遠にソウルオブカラー蒼玉として生きていくこととなる。ジェイドはユラがソウルオブカラーに昇華するのを何日も何日も待ち続けた。そしてある朝、ジェイドが眠りから覚めるとユラは蒼色に輝く色玉へと変わっていった。

「ユラ・・・愛している・・・ずっと一緒だよ・・・」

ジェイドは蒼玉を飲み込むとその場から姿を消した。

「蒼玉を発動出来ないのはユラがおまえにこれ以上罪を犯してほしくないと願っているからだ。今おまえがやっていることはドレイクがユラにしたことと同じなんだぞ！」

「!・・・ドレイク・・・ドレイクだと?・・・アツ、ガガガ・・・
そっ、その名を口にするな。グツ、ギギギイー・・・もういい・・・
・・・アガツ!・・・すっ、すべて壊す!・・・ゲガガツ・・・なっ、
何もかも・・・ギガツ・・・狂わしてやる!」

四神 蒼龍

「殺してやる・・・破壊してやる・・・そしてすべてを無に・・・」

両手で頭をおさえ、発狂していくジェイドの理力が辺りに伝わり大理石の床はビリビリと振動しはじめる。ジェイドの身体が青色と蒼色に交互に輝きを変えながら次第にそれは大きくなっていく。ジェイドの異様な姿に危険を感じたてんとは球体にタカヒトを乗せると倒れているゲイルの所に向った。タカヒトとゲイル、てんとの頭上に二つの球体を、そして三つ目の球体は部屋を出て行ったマイコとミカの頭上に配置された。球体は緑色のシールドを形成して彼らを覆っていく。

更に理力が増すと青色と蒼色の輝きがジェイドの頭上に光柱を発生させた。その光柱の中から恐ろしく巨大な青蒼しい龍が現れた。ジェイドの青玉最大理力 龍激波の水龍とは明らかに存在感が違う。

「なぜ・・・蒼龍が！」

てんとは驚愕した蒼龍とは四神のひとつである。四神とは東西南北に配置する守護神で中央の創造神を守る存在である。実際にそれを目の当たりにしたのはてんとですら初である。その蒼龍が何故ここにいるのか？何故ジェイドが操っているのか？いやそれどころか蒼龍に攻撃されたら自分達はおるかこの世界のすべてが破滅する恐れが・・・その予想は的中した。

蒼龍は激しく動き出すと要塞グリホンを支えるレンガや鉄骨が次々と崩れていく。蒼龍は空高く舞い上がり両手に持つ宝玉から蒼色のエネルギー体が放たれた。その光線は近代国家オメガの中枢である要塞グリホンを溶かしていく。地上では逃げ惑うオメガの人々の

頭上にレンガが崩れ落ちていく。崩れたレンガや瓦礫の間から真っ赤な血が滴り、逃げ惑う人々を恐怖が包み込んでいく。

蒼龍のエネルギー体により崩れるレンガや鉄骨を緑玉のシールドがなんとか防いでいた。蒼色と青色のオーラに包まれているジェイドは蒼龍の額に吸い込まれていくと更に蒼龍は能力を高めていく。蒼龍は要塞グリホンの上空に停止すると両手に持つ宝玉と大きく開けた顎に蒼いエネルギー体を溜め込んでいく。

「ぐっ・・・なんとというエネルギー量だ・・・」

危険を感じたてんとは理力を限界まで高めてシールドを強化した。蒼龍は溜め込んだエネルギー体を一気に放出するとレンガや鉄骨は瞬時に溶けた。それは逃げ惑う人々も要塞グリホンもすべてを溶かしていくと、てんとがすべての理力を注ぎ込んだシールドも耐え切れず溶け出していく。

「限界だ・・・防ぎきれん！」

てんとが諦めかけた瞬間、緑色のシールドを飲み込むように黄色のオーラが包み込んだ。それでも衝撃は凄まじくてんとはおろかその場にいた誰もが恐怖に死を覚悟した。激しいエネルギー体の放出を完全に終えた蒼龍は天高く上昇するとその姿を消した。

「助かったのか・・・」

黄色のオーラもてんとのシールドも消えるとてんと達はなんとか繋ぎ止めた命を喜んだ。黄色のオーラのおかげでシールドは破壊されずにてんと達は一命を取り留めたのだ。だが要塞グリホンや都市の建物は壊滅的な被害を被った。都市の人々も生きている者を見つけるのが困難なほどだった。繁栄のすべてを失った都市を時間だけ

が見つめていた。

「てんとや・・・無事でよかったわい。」

「徳寿様・・・」

数時間ほど経った頃だろうか？てんとはタカヒトとゲイルに手にした薬草で治療していた。てんが忙しく水をくんだりしているところに徳寿が歩み寄ってきた。徳寿はてんと達の無事を確認すると蒼龍について語りだした。

ジェイドの持つ蒼玉と青玉の波長にある種の力を与えると蒼龍を呼び出す道が出来ること。そして蒼龍は時空を移動出来る生命体であり、その能力を操ってジェイドはどこかの世界へ向かった事を伝えた。徳寿の話ではジェイドの能力は桁外れだけにいずれまた出逢う可能性があるとも言った。徳寿とてんが話をしているところへ包帯を胸に巻いたタカヒトがゆっくりと歩いて近づいてきた。

「ああ〜、とくべえさんだ！なにしてるの？今すごく大変だったんだよ。」

「おおう、タカヒトではないか！近くまで来たんで寄ってみたんじゃ。」

「そんなに大変じゃったのか？」

「ちえっ、気楽だなあ〜」

「タカちゃん〜ん。」

「ミカちゃん！」

徳寿と話していると遠くのほうからタカヒトの名を呼ぶ声が聞こえた。振り返るとドレスを着たミカが嬉しそうな表情で走ってきた。ジエイドが消えた為に氷に閉じ込められたミカの封印が解けたのだ。タカヒトもミカの元へゆっくり歩いていく。再会を喜んでいるとそんなふたりをマイコはジロジロと見ていた。

「タカヒトとミカってラブラブね！」

マイコの意味深な言葉と視線に「ハッ！」としたふたりは顔を赤らめ急に距離を取った。そんなふたりにマイコはニヤニヤしながらちよっかいをだしていた。そんな空気に全く気がつかない徳寿はタカヒトに忠告というべき言葉を伝えた。

「さて、タカヒトや。気張っていくんじゃぞ！これから・・・聞いてはおらぬか・・・まあ、よい・・・てんとよ、いずれまたジエイドが現れよう。その時どうするか考えておく必要があるじゃろうな。次に会うときジエイドは天道界をも脅かす存在となっておるかもしれないの。」

「天道界をも脅かす存在・・・」

「ワシも動向を注意深く観察していくつもりじゃ
・・・今回は一段と気が抜けぬかもしれんが頼んじゃぞ。」

徳寿はそのまま別れも告げずに去っていった。考え込むとタカヒトが笑顔で近づいてきた。タカヒトとミカそれにマイコの笑顔を見たてんとは何となく心のわだかまりが取れたような気がした。

「・・・なんとかなるか。」

「えっ？何か言った？」

「いや・・・なんでもない。」

タカヒトと出会ったことによりてんとの中で何かが少しずつだが変わってきたようだ。

「おゝい、肝心な人物を忘れてないね？」

大理石の床の端でレンガに押し潰されていたグローディアの中からミゲールが顔中真っ黒にして出てきた。蒼龍の攻撃にも要塞グリホンの崩落にも耐えてなんとか生き長らえたミゲールが一番運がいいのかもしれない。

「うぐぐ・・・ここは・・・？」

てんとの治療により意識を取り戻したゲイルを球体に乗せてタカヒト達は崩れかかった階段を降りていった。タカヒト達が階段を降り終えるとそこには数人の生き残った者達がいた。すべてを失い途方に暮れている者達の顔に生気は無くただ座り込んでいた。頭を抱えている者、泣きじゃくる者、混乱してパニックを起こしている者。鬼王により近代独立国家オメガを創り上げ栄華を誇っていた者達。しかしその栄華も永遠に続くわけではなく今彼らの頭の中には絶望しかないであろう。

「ここでおろしてくれ・・・ところでおまえ達はこれからどうするんだ？」

「えっ、どうするって・・・」

ゲイルは崩れ落ちたブロックに腰をおろしながら一呼吸おくとタカヒトに語りかけた。しかしタカヒトに答えられるわけもなかった。業の水筒は真紅に染まっていけない為ほかの世界への移動は出来ない。この者達も放つてはおけないのだが何が出来るかわからないし何をすればいいのかもわからない。そんな思いが頭の中を巡っている。

「行くところがないのなら力を貸してはくれないか？実はな・・・」

プライドの高いゲイルが頼みごとをした事にタカヒトは目が点になった。ゲイルの話だとこの地よりはるか南にサラムンドラの生息している場所があるらしい。サラムンドラとはかつてこの地上に君臨した邪悪なる巨大竜のことである。彼らはその想像を絶する獰猛さでハンターを喰らい、紅蓮の炎で地表焼き尽くした。そして恐るべき繁殖力を持ちこの世界を支配した一族だ。

ゲイル達の先祖はサラムンドラから逃げるようにこの地に来たらしい。サラムンドラは寒さには異常なほど弱くジェイドの作り上げたアイスフィールドにより近づくことが出来なかった。しかし近代独立国家オメガが崩壊したと同時にアイスフィールドも崩壊した為襲撃してくる恐れがあるらしい。

「しかしゲイルよ。それだけではサラムンドラの情報が少なすぎる。少ない情報では作戦は立てられないぞ！」

ゲイルはてんとにサラムンドラについて更に説明をした。今現在サラムンドラは数匹しかいないらしい。かつて地上に君臨した凶王の栄華も永遠に続くものではなく、衰退して絶滅の危機に瀕している。しかしその情報を得るためにゲイルがサラムンドラの地に送った数匹の斥候はただ一匹を残して全滅していた。

てんとはこの近代独立国家オメガを復興するにしてもサラマン
ラの脅威がなくなるわけではないのでゲイルと共にサラマン
ドラへ行くことにした。無論、自動的にタカヒトも行くことになる
のだがミカも着いて行くと言って聞かなかった。

「なんでタカちゃんが行くのに私は駄目なの？」

「ミカ、サラマンドラの地はこの近代独立国家オメガより危険な
のだ。」

そう言っただけで納得するミカではなかった。説得しきれないと悟った
てんとはミカに桜色の玉の付いた首飾りを渡した。それは徳寿が持
ってきたソウルオブカラーのひとつで桜色玉という。

桜色玉は穏やかなる力を持つ者と言っただけでソウルオブカラーの中
もっとも優しく、大らかな能力を持つ。その魂は必ずミカの心に共
鳴するであろうと徳寿がてんに渡したものである。ミカはその首
飾りを眺めながらてんに使い方を聞いた。

「それは自分で見つけることだ。口で説明することではない。」

「わかったわ・・・なんとかかしてみる。これで手助けできればい
いんだけど・・・。」

ミカは首につけた首飾りを触りながらなんとかタカヒトの力にな
ればと考えていた。ミゲールとマイコは生き残った人々を集め復興
に力を注ぐことにした。この状況に「もはや近代独立国家オメガも
ハンターも関係がない」とマイコが言っていた。実際そうなのかも
しれない。復興という共通の目標があれば人種の違いも思想の違い
も関係がないのかもしれない。マイコは生き残った者達を集めて復
興に取り掛かった。当初、オメガの人々はマイコの声に耳を傾ける

こともなく、ただ絶望に身を置いていた。説得を諦めたマイコはミゲルとふたりで懸命にオメガの復興に力を入れていた。

ある時、マイコが崩れたレンガを片付けていると突然柱が倒れた。直撃は避けたものの足に怪我を負ってしまう。それでもマイコは傷付いた足を気にすることなく汗をかきながら、必死になって働いている。するとオメガの老人が声を掛けてきた。

「お譲ちゃん、ワシも手伝おうか。」

「ありがとう、じっちゃん。」

笑顔を見せるマイコに老人も笑みを浮かべるとレンガの片付けを手伝う。しかし老人は足腰がおぼつかずになかなか片付けが進まなかった。怪我をしたマイコと老人の進まない作業を見かねたひとりの男が立ちあがった。

「おい、皆！子供と年寄りだけに復興作業を任せていいのか！

俺達がやらなければほかに誰がやるんだ！」

激を飛ばした男はレンガの片付けに加勢すると次々とオメガの男達が集まって手を貸していく。女達は傷ついたマイコを介抱するよう集まってきた。その光景を見たマイコは涙が止まらなかった。

「ありがとう・・・皆、ありがとう」

大泣きするマイコを見てミゲルは微笑んだ。そしてオメガの人々は息を吹き返したかのように復興作業を進めていく。復興には時間がかかるかもしれない。しかし皆が力を合わせたこの瞬間から復興にかかる時間はかなり短縮された。

一方、タカヒト達はサラマンドラの地へ向かっていた。サラマン

ドラ攻略に向かった者はタカヒトとミカ、てんとそれにゲイルの四名だけだった。修理されたグローディアをタカヒトの操縦で四名は一路サラマンドラの地を目指した。

正義の味方 ボンマン

「アイスフィールドが消えた?・・・」

年老いたサラマンドラの王は名をプロメテウスといい絶滅寸前の一族を率いている。栄華を誇っていたサラマンドラ一族だったが衰退・絶滅の危機に瀕しもはや絶滅は避けられないと諦めていた。しかしアイスフィールドの影響力もなくなり一族が栄華を取り戻すには近代独立国家オメガを奪い取る以外ないとプロメテウスは考えていた。

そして今、プロメテウスに従うサラマンドラの生き残りが集結した。プロメテウスは体長約10メートルほどでサラマンドラとしてはそれほど大きくはない。しかもかなりの高齢である為もはや戦うことは叶わない。ウラノスは体長3メートルの小型サラマンドラである。四足歩行のサラマンドラの中でマーキュリーと共に二足歩行の出来る珍しいタイプでもある。彼は最も獰猛なサラマンドラで知能、攻撃力ともに高い。エリニウスは四足歩行型の大型で15メートルを超える。マーキュリーは一族唯一の雌で体長は2メートルとかなり小型だが知性が高く彼女の作戦でオメガ奪取計画が行われる。プロメテウスの前に膝まついてマーキュリーは今回の作戦を伝えた。

「プロメテウス様!この地にハンターが攻め込んでくる恐れがあります。アイスフィールドがなくなったことで我ら一族の襲撃を恐れていることでしょう。」

今回の作戦はウラノスとエリニウスで攻め込んでくるハンターに対し反撃を行います。私は上空より敵地のオメガを襲撃します。恐らく全戦力をこちらに向けてくるので近代独立国家オメガ自体は手薄となりましょう。敵地を壊滅してハンターの後ろにまわり込めばやつらもひとたまりもないでしょう。」

「この期を逃してはならぬ。オメガを奪取し我ら一族の繁栄をもう一度築くのだ！」

プロメテウスに一礼するとウラノスはエリニユスの背に乗り近代独立国家オメガを目指して駆けていく。マーキュリーも近代独立国家オメガに向けて羽ばたいていった。

その頃、グローディアに乗りサラマンドラの地を目指しているタカヒト達の前に人影が急に現れた。ビックリしたタカヒトは急ブレーキを掛けるとグローディアはその人影をかわしたが乗っていたタカヒト達は操縦室の中で重なりながら倒れこんだ。重なりをどけながらゲイルが操縦席のドアを開けて人影に向かって怒鳴りだした。

「おい、何やってんだ、バカヤロー！あぶねえじゃねえか！」

「私のことか？私の名はポンマン。正義の味方ポンマン・L・ホルディングだ！」

「そんなこと聞いてねえよ！さっさとどきやがれ。」

熱くなり怒鳴ったゲイルをよそにポンマンなる人物は平然としている。変わったマスクを被り赤いマントにピンクのブーツを履いて青い水玉模様の服装をしている。その姿は明らかに変な亜人種だ。怒りがピークに達したゲイルは操縦席から飛び降りると五行・金の印を唱えて三叉槍を手にする。その三叉槍でポンマンの頭部を貫く。しかしポンマンが座り込んだ為にゲイルの三叉槍は空を切った。頭上に光る三叉槍を見たポンマンは異常なほど驚き蒼ざめた顔をして脂汗を掻きながら後ずさりした。

「ふっふっふっ……そっ、それくらいにしといたほうがいい。」

そつ、それ以上は命がないよ……」

「きつ、貴様……殺す！」

「ちよつと、ゲイル！ダメだつて！」

激怒したゲイルがさらに一撃浴びせようと構えたがタカヒトとミカがゲイルの怒りを抑えなんとかその場を和ました。九死に一生を得たポンマンはサラマンドラについて話を始めた。

「私は放浪の旅を続けている者だ。サラマンドラの砦付近を歩いていたら二匹のサラマンドラがハンターの襲撃に備えているのを偶然見かけたんだ。私は放浪中、病気になって苦しんでいた時にオメガの人々に世話になったことがあった。恩返しと言ってはなんだが、なんとかこの事を知らせたいと思いでここまで来た。」

話を聞いたてんとはポンマンに更に詳しい情勢を聞いて新たな作戦を考え始めた。

「なるほど、我らの行動はすでにお見通しというわけか……
どうやら頭の切れる指揮官がいるらしいな。」

ポンマンはてんとは近代独立国家オメガに戻ることを勧めたがてんとはこの場で二匹のサラマンドラを迎え撃つことを決めた。

「迎え撃つだつて！アンタ、何を考えてんだい？」

「ポンマンと言つたな。我々はここでやつらを迎え撃つ。おまえは逃げるといい。」

情報には感謝する。礼を言おう。」

「逃げる？正義の味方である私がひとり逃げるわけにはいかない。共に戦おう。」

「戦う？腰抜けのおまえに用は無い！消える！！」

「いいじゃない、ゲイル。ひとりでも多いほうがいいと思うわよ。」

ゲイルは反対したもののミカはポンマンのキャラが気に入ったらしく？タカヒトと共に仲間に入れることをゲイルに頼んだ。渋々応じたゲイルとは対照的に陽気なポンマンは踊りながら喜んでいた。

「もうすぐ日が暮れるから天幕を張って休むことにしよう。」

ポンマンの提案でタカヒト達は日が暮れる前に天幕を張ることにした。彼らはポンマンの案内で紙竹林に入っていく。紙竹とは薄い紙が何層も巻かれて竹でこの辺りではさほど珍しくない植物である。燃料にも紙としても何にでも利用が可能なことから万能竹とも呼ばれている。

ポンマンは紙竹を持っていたナイフで一本切り倒すと表面に薄い切れ目を入れた。紙竹の表面の皮を剥がすとロール状の紙の層が見えてきた。そのロールを広げてタカヒト達の乗ってきたグロウディアに被せた。紙竹はポマードと呼ばれる薬液をかけると周りの色と同色して硬化する性質がある。ポンマンがポマードをかけると紙竹はパリパリに固まりまわりと同色化してグロウディアの機械色を隠せた。同様に紙竹の骨組みを作り周りを紙竹のロールで覆う。簡単な天幕だが丈夫で風を通さず周囲と同色化してうまくカモフラージュすることができた。火を使って料理を行ったが紙竹の笹が煙をのみ消していく。サラマンドラのなかには飛行能力のある者がいるら

しくそれらからもわからないようにするには紙竹林は絶好の場所だった。

実際、近代独立国家オメガに向かって飛行していたマーキュリーはサラマンドラの砦を出発してタカヒト達のいる紙竹林の頭上を通り過ぎた時には全くそれに気が付かなかった。食事を済ましてタカヒトとミカは紙竹林を見ながら会話をしていた。初めて二人つきりになったタカヒトはミカに伝えたい言葉があった。

「ミカちゃん・・・あのね・・・」

「ん？なあに？」

「ぼつ、僕ね、ミカちゃんに謝らなければならない事があるんだ。」

「・・・謝る？」

タカヒトはミカの顔を見つめた。大樹からの暴力によりタカヒトの代わりに犠牲になった事、自分が病院へ行った事、ずっと謝ろうとタカヒトは思っていた言葉のすべてを伝えた。ミカは黙ってタカヒトの言葉を聴いていた。

「ゴメンね、ミカちゃん。僕のせいでこんな目に遭って・・・本当にゴメンなさい。」

「タカちゃん・・・私、タカちゃんに謝ってもらうことなんて一個もないよ。タカちゃんを守ったのは私が勝手にしたことだし、ここに来たのも私が判断したのだから。経緯はどうであれ、タカちゃんはその私にきてくれた。そしてさらわれた私を助けてくれた。私、嬉しかったんだ。だからタカちゃんに感謝することはあっても

謝まっつてほしいなんて思っつてないよ。」

「……ありがとう……ミカちゃん。」

少し涙ぐんだタカヒトを氣遣つてミカは楽しい会話を始めた。そこへポンマンが近づいてきて話に加わるとタカヒトとミカに冗談を言つて場を和ました。

「はっはは、タカヒトは面白いな。ガールフレンドもいて幸せ者だし！」

「えっ、ミカちゃんはそういうんじゃない……」

「えっ！……違つうの？」

「えっ、あつ、その……」

ミカに言い寄られタカヒトは顔が真っ赤になつた。少しからかいながらタカヒトを追い詰めていくミカの笑顔にポンマンは微笑ましくふたりを眺めていた。ポンマンはタカヒト達がここにいる経緯を聞くと少しの沈黙の後、静かに語り始めた。

「君達の未来の為に、人生は何たるかを教えよう……生きていく者の人生はこの紙竹によく似ている。紙竹は荒れた土から力強くニヨキニヨキ出て、そこから陽の当たる場所まで伸びる。だが土に栄養が足りなかつたり、ほかの紙竹との生存競争もある。途中で折れたり、曲がつたりと順調には成長できないのだ。その数ある紙竹のなかでなんとか真っ直ぐ伸びていく紙竹は順調に成長して長さが増していくのだ。それはほかの紙竹を押し退けての成長だしその成長は永遠ではない。」

いずれその紙竹も成長が終わり衰退へと向かっていく。腐り折れて土へと帰るのだ。そして新たに生まれる紙竹の糧となる。それが紙竹の生きていくサイクルなのだ。もちろん我々にもそのサイクルがある。」

「私達も曲がったり、折れたりしないでがんばればいいの？」

「いや、そうではないぞ、ミカ。たしかに紙竹は曲がったり、折れたりしたら他の紙竹の糧となるしかない。だが我々は違う。例えものがうまくいかなくて挫折したとしてもほかの道がある。私達は紙竹と違って考えて行動することができる。間違えてもやり直せることができるのだ。道はひとつではないということかな。」

タカヒトにはいまひとつポンマンの言っていることがわからなかった。何故、衰退すると判っているのに頑張るのか？それをポンマンに問い掛けてみるとその理由のひとつに使命があるからだと答えた。

「使命？」

「そうだ！生きるのに意味のないことはない。どんな生き物でも必ず生きる意味はある。いらぬ命などない。自らの生きる意味である使命を理解してそれを実行する。」

お前達の生きる意味や使命がどのようなものかは私にはわからないがいずれお前達が自らそれに気が付く日がくるだろう。その日が来たらそれを理解して使命を果たすのだ。それが生きるということだ！」

「使命を果たす・・・それだけの為に自分は生きている？」

タカヒトはいままでそんな事考えてもみなかった。自分に生きている意味があり、いずれ使命を果たす日が来る。本当にそんなものがあるのだろうか？それはいつたいたいどんなものなのだろうか？タカヒトは黙ってポンマンの話聞いていた。ポンマンの話が一段落するとミカがひとつ疑問を問い掛けた。

「ねえ、ポンマン。使命を果たすだけの為に私達は生きているの？」

「いやいや、使命を果たすだけの為に生きていくのは辛いだろう。私達は人生を楽しむ義務もある。生きる意味は人生を楽しむ、そして使命を果たす事だよ、ミカ。」

ポンマンはミカの疑問に笑みを浮かべると優しく答えた。しかしタカヒトにはイマイチ実感が無かった。タカヒトにはいままで人生を楽しむ事が無かったからである。いままで苦しく辛い思いをしてきたタカヒトにとって使命や人生を楽しむ義務といった言葉は理解が出来ないものであった。

しかし今、タカヒトの隣にはミカやポンマン、てんと達がいる。ポンマンの言葉はよくわからなかったが今のタカヒトは十分幸せを感じていた。

「そうね、人生を楽しむ使命を果たす・・・ポンマンって哲学者なのね。」

「ほんと・・・僕はただの怖がり屋さんかと思ってた。」

「なつ、なにを言うか！あつ、あれはほんの冗談だ。」

わっ、私が本気になればあんな槍、目をつぶってもかわせるのだぞ！」

「ふうっん・・・あつ、ゲイルだ！」

「ひいい〜ごっ、ごめんなさい。調子に乗りました！」

「・・・・・・・・冗談だよ。」

「・・・・・・・・」

ポンマンは後ろを振り返ったがもちろんゲイルがいるわけがなくそのオドオドした表情にタカヒトとミカは笑った。からかわれたポンマンは少しムツとしていた。

「・・・・・・・・そろそろ天幕に戻ろうかね・・・」

ポンマンはタカヒト達を連れて天幕に戻っていった。タカヒト達が天幕に戻ったのを確認したてんとも後を追うように戻っていく。天幕に戻ったタカヒトは急に睡魔に襲われた。紙竹に薬品をかけて柔らかくなつた紙竹布団をかけて横になるとポンマンに言われたことを考えながら眠りについた。

「生きるとは人生を楽しみ、そして与えられた使命を果たすことか・・・・・・・・」

終焉のリディーネ

「ねえ、あんただけ？・・・ほかのサラマンドラはどこ行ったの？」

「誰だ？・・・我を知つての無礼か？」

ウラノス達は対ハンター戦に出掛けて砦を守るのはプロメテウスただ一匹だけであつた。サラマンドラは獰猛な魔物であり例えハンターとてその砦に近づくことはなかつた。しかしただ独りその砦に入りプロメテウスに話かけている少女がいた。その少女の挑発的な態度にプロメテウスは激怒した。サラマンドラは相手が誰であろうとも容赦はしない。プロメテウスは顎を大きく開けると火炎をその少女に浴びせた。燃え盛る少女は声をあげる事すらなく倒れた。

「ふん、つまらん事をした・・・」

プロメテウスが表情を曇らせていた。しかし燃え盛る火炎の中でムクツと立ちあがつた少女は右腕を振り下ろすと火炎は瞬時に消えた。そこには火傷ひとつ負っていない少女が立っていた。プロメテウスは自分の眼を疑い再び顎を開くと火炎を浴びせた。だが少女に死を与えるどころかダメージすらあたえる事が出来ない。驚愕するプロメテウス！すべての頂点に立つサラマンドラとして長年生きてきたがプロメテウスの火炎を浴びて生きていた者はただのひとりもいなかった・・・。

「なつ、何故だ！我が火炎を浴びながら・・・貴様はいつたい？」

「あんた、バカあゝ？」

紅玉を持つ私に火炎なんかでダメージ与えられるわけないですよ！」

「紅玉……リディーネ……貴様……終焉のリディーネか！」

「あんた死にたいの？その名を口にしたら確実に死ぬよ。サラマンドラはほっといても絶滅する種族だけど特別に見せてあげるわ。」

私の紅玉……すべてを破壊せし者の力をね！」

リディーネは闘気を高めると身体が紅く輝きプロメテウスの身体を遙かに凌ぐ巨大な炎玉を頭上に創り出した。その炎玉を見たプロメテウスは死を予感した。火の精霊サラマンドラに火炎の攻撃など全く無意味なはずである。しかしそれは通常の火炎の事であり、地獄道に存在する業火の前には火の精霊サラマンドラとて無傷ではない。紅リディーネの創り出した炎玉はその業火よりもあきらかに上級のものでありプロメテウスはその炎玉によって自らの死が近くまで迫っていることを理解している。紅リディーネは巨大な炎玉をプロメテウスの頭上へ近づけると死の近づく恐怖に怯えているプロメテウスに問い掛けた。

「死ぬ前に聞きたいことがあるんだけど……赤玉はどこにあるか知らない？」

「赤玉など知らん！たとえ知っていても貴様に教えるつもりなどないわ！」

「あつ、そ……あんたやっぱりバカね。じゃあ死んで。紅玉上級闘気 朱玉。」

紅リディーネが更に闘気を高めるとプロメテウスの頭上の朱玉は更に大きくなり重みでプロメテウスに向って落下していく。朱玉はプロメテウスを包むとその内部で激しく燃焼する。朱玉に取り込まれた者はそれから逃れる事は不可能であり、その存在が溶けて無くなるまで燃え続ける。

「ぐわあゝゝ熱い！ たっ、助けてくれ！ しっ、死にたくない！
我が種族の繁栄を・・・ピィゝゝピィゝゝ」

「あらら、あまりの熱さに言葉も失ったのね。笑えるうゝゝ・・・サラマンドラ！ たかが火の精霊ごときが火の神が宿る紅玉に逆らおうなんて愚かだわ！ 塵となってその罪を償いなさい！」

朱玉の中でプロメテウスの身体は燃え尽きその身は灰となっていく。朱玉はその球体をだんだん小さくさせて消えていった。地面にたまった灰の塊も風に吹かれて跡形もなくなっていく。誰もいなくなった砦で紅リディーネが大声で笑い出すと砦中に響きわたる。

「あっはっはっはっ・・・はあゝゝあ、つまんない・・・帰えるっかな？」

リディーネはブツブツ言いながらサラマンドラの砦から出ていった。それと同じ頃、崩壊後の近代独立国家オメガに到着したマーキュリーは困惑した表情をしていた。

「こっつ、これはどういうこと??？」

マーキュリーは自分の目を疑った。プロメテウスの命令で近代独立国家オメガを占領するつもりだった。もちろんマーキュリーには

それが出来るだけの能力を持っている。だが能力を発揮すべき目標物の近代独立国家オメガ自体が跡形もなく崩壊していた。攻めるべき目標を失ったマーキュリーはただ呆然としている。

「……………プロメテウス様に報告しなくては。」

この状況を報告する為にマーキュリーは皆に向けて羽たいていく。何故、近代独立国家オメガが崩壊したのか？思いも寄らない事態に困惑していたマーキュリーは地上のタカヒト達のいる天幕に気づきもせずに通り返していく。ふと地上を見おろすとウラノスがエリニユスにまたがり近代独立国家オメガを目指し駆けていた。マーキュリーは急降下すると近代独立国家オメガの状況をウラノスに話した。

「なんだと……計画は中止だ。長老の助言を得よう。戻るぞ！」

絶滅寸前のサラマンドラ一族には手痛い仕打ちとなってしまった。この地で他の生物を殺し喰らいながら栄華を誇り、最強の力と富を得ていたサラマンドラ一族も疫病、近代独立国家オメガのアイスフィールドの拡張、そしてサラマンドラの雌の出生率の低下と次第に個体数が減少していく。

「オメガさえ……近代独立国家オメガさえ手に入れば我らの栄華は再び復活する！」

たったひとつの願いの為にこの奪取作戦が決行されたのである。しかし近代独立国家オメガは原因不明の壊滅状態にあり奪取だけを考えていた三匹のサラマンドラ達はどうしていいのかわからずに途方に暮れながら皆へ戻っていく。

「長老の助言さえあればなんとかなるだろう。」と言ったウラノスの言葉だけが彼らに希望を与えていた。長老であるプロメテウス

は常に的確な助言を与え、彼らはその言葉に従うことで今日まで生き長らえることが出来た。だがそのプロメテウスもはやこの世界にいない・・・希望が絶望に変わる瞬間がそこまで近づいていることに彼らは気が付いていなかった。三匹の眼に砦の方向から煙があがっている光景が映った。三匹は急ぎ砦に向かうと内部に入れないほど燃え盛っていた。ウラノスの眼に砦の片隅の小さな岩に座り込んで退屈そうにしているリディーネの姿が映った。

「貴様！ここで何をしている？プロメテウス様・・・長老に何をしました？」

「はあ～～・・・あんた誰？・・・プロメテウスってあの年寄りサラマンドラのこと？」

あのジジイなら殺したよ。」

「なっ、なんだと！」

「それよりあんた達に聞きたいことがあるんだけど、赤玉って知ってる？」

アタシすんごくほしいんだけど。」

三匹のサラマンドラはリディーネの言葉に状況が飲み込めなかった。炎の精霊でこの地の頂点に立つサラマンドラ一族の長老が老いたとはいえ、こんな小娘に殺されるはずがない。冗談であろうとサラマンドラを侮辱した罪は重い。巨漢のエリニユスはゆっくりと身体を動かしてリディーネに近づくと重量感のある前足をあげてリディーネを踏む潰した。

「フザケたヤツだ。お前達の手を汚すまでもなかった・・・??？」

「これうまいね・・・ゴボツ！」

ボンマンがバクバクとうまそうに食べていると喉に詰まらせた。タカヒトは久しぶりの楽しい朝食を過ごしている。食事を終えて皆で一休みしているとゲイルが話を始めた。

ここから先はサラマンドラの領域となるらしくいつ襲ってくるのかわからない。休息と呼べるものはこの朝食が最後になるだろうとゲイルの口調は厳しいものになった。その言葉を聞いたタカヒトは気を引き締めて準備に取り掛かった。天幕の片付けも終了してタカヒト達はサラマンドラの砦を目指す。

「はっはっはっ、やったか？長老、エリニユス、仇は取ったぞ！」

ウラノス達はリディーネと交戦中であつた。ウラノスとマーキュリーの火炎攻撃を受け、炎にまみれ焼死したりリディーネの姿にウラノスは勝利を確信した。火炎力では一族のなかで最も強いウラノスとマーキュリーの火炎にはさすがにリディーネも耐えられないと笑みを浮かべた。

その場に倒れこんだリディーネが焼死したと考えたウラノスとマーキュリーは火炎を吐くのをやめた。少しの沈黙の後、リディーネの死を確認したウラノスとマーキュリーはその場を立ち去ろうとした時、焼死したはずのリディーネがポツリと呟いた。

「・・・ねえ、もういいかな？」

一瞬でもこの私を相手に勝利を味わえたんだしいいよね？

さてと、じゃあ殺して・あ・げ・る」

ウラノスとマーキュリーが振り返ると何事もなかったかのように

無傷の紅リディーネが立っていた。サラマンドラ最強の攻撃でも火傷ひとつ負わせる事が出来なかった。ウラノスとマーキュリーはその圧倒的な力の差に恐怖を感じる。紅リディーネはスツと右手を差し出し炎の塊を出す。

「うふつ、死になさい。紅玉鬪気 火矢」

「ぎゃあああ〜!!・・・ぐつ、うつ・・・」

紅リディーネの右手から炎の塊が飛び出すとそれは矢の形となりマーキュリーの右脚に突き刺さった。痛み悶えうずくまるマーキュリーを守るようにウラノスが反撃を始める。ウラノスの右拳、左蹴り、まわしシツポ振り落とし。すべての攻撃をフワリとかわすとウラノスの腹部に紅リディーネの前蹴りがヒットする。刃物を持つても貫けない強じんな皮膚を持つウラノスの腹部に紅リディーネの右脚のつま先が減り込んでいく。九の字に折れ曲がったウラノスの身体は吹っ飛んでいく。体勢を整えながら着地したが受けたダメージはかなり大きい。

「ぐつ、があつ、・・・なつ、何故だ？何故、俺の攻撃が通じない!」

「少しはやるみたいだけど私の敵ではないわね!さて、そろそろ終わらそうかな?」

先ほどの紅リディーネの一撃にウラノスの内臓はグチャグチャに潰された。口から血を流し、もはや生き長らえることは不可能。マーキュリーは右脚を負傷しているが翼は無事で何とか飛べそうだ。ウラノスは瞬時に判断するとマーキュリーにこの場から逃げるように指示した。しかしマーキュリーはいつしよに戦うとそれを拒んだ。

「ダメだ！おまえだけにはなんとしても逃げる・・・生きるんだ！」

ウラノスは必死に一族の絶滅を避けることを伝えるとマーキュリーは涙を流しながらも近代独立国家オメガを目指して飛んでいく。その行動に気がついた紅リディーネは火矢をマーキュリーに飛ばすが寸前のところでウラノスが火矢を弾き飛ばす。地上に降りたウラノスは紅リディーネの前に立ち塞がった。

「ちょっと、何、邪魔してんのよ！！！」

「おまえの相手はこの俺だ。かかってきやがれ、バカ女！」

「・・・殺す！！！」

穏やかなる力を持つ者

「んっ？なにあれ？・・・あっ、何か落ちてくる！」

タカヒト達の準備が整い、出発という時に上空からマーキュリーが落下してきた。

「ふっ、ぐぐううう」

マーキュリーの身体は酷く傷ついていた。しかしそれは落下して出来たものではない。右脚から血が流れてしかも左の翼は焼き焦げていた。地面に叩きつけられたマーキュリーの意識はもろろうとしていたがすぐにミカが看護を行った事が良かったのだろ。ほんの少し時間が経った頃マーキュリーは意識を取り戻した。

「・・・あなたはオメガの人達？・・・はっ、はやくここから逃げて。」

やつが・・・リディーネが・・・。」

「リディーネ・・・！まさか終焉のか？」

てんとがマーキュリーに問いかけると彼女はうなずいた。てんとは動揺を隠せず顔面が蒼白している。マーキュリーの来た方角に視界を移すとそこには薄っすらと人影らしきものが飛行している姿が見えた。

「タカヒト、この者を連れて隠れるのだ！早くしろ！」

険しい表情のてんとに指示された通りにマーキュリーを紙竹で被

い、てんとはマーキュリーの落ちた痕跡を消す作業を行った。皆が隠れたことを確認するとてんだけがその場に残った。すると上空を飛行していたリディーネがてんとの存在に気がつき地上に降りた。あどけない少女のような姿であるがそれがリディーネとすぐにわかった。てんとはトボけた表情をしてリディーネとの衝突を避けようと試みた。

「ねえ、こっちのほうに変な奴来なかった？」

「そつ、そつですねえ……へんなのが空を飛んで西へ行きましたよ。」

僕は怖くて隠れていたんですがね。」

「ふうくん、そつ……ならいいわ。」

てんとのやりとりを終えて納得したリディーネはその場を立ち去ろうとした。てんとはうまくいったと内心ホツとしている。リディーネと関わって生きていた者はただのひとりもない。故にリディーネと出逢った者には必ず死が降りかかる。それが終焉のリディーネと呼ばれる由縁だ。リディーネとの衝突を免れたてんとは紙竹林に戻ろうとするとクスクスと笑いながらリディーネが振り返った。

「アツハハハ あんた、おバカあ……？」

そんな猿芝居通じると思ってるの？っていつか畜生芝居ってやつ。」

紅色の輝きを放つリディーネは紙竹林に火矢を打ち込んだ。燃え広がる紙竹林からタカヒト達は一斉にてんとのところに飛び出してきた。てんとの顔が蒼白になる。リディーネはすべてを見透かした上でてんとの出方を確認していたのだ。てんとの表情を見たタカヒ

トはリディーネがどれほどの強さかすぐに察した。

「さよなら、おバカさん達。」

タカヒト達を仕留めるべく火矢を撃ち込もうと紅リディーネが構えるとミカの肩を借りながらマーキュリーが前に出てきた。

「ウツ、ウラノスは・・・彼は・・・どうした!」

「ウラノス?・・・ああ、あれね。あれなら殺したわよ。」

なかなか死ななくて本当、ウザいってカンジだったけど。」

「くっ・・・目的は・・・この赤玉・・・」

ここに・・・あるから・・・関係のない彼らは・・・見逃して・・・」

立っていることもままならないマーキュリーは地面に膝をついた。すると胸に埋め込まれている赤い玉を自らえぐり取り紅リディーネに向けて差し出した。紅リディーネは念を送り込むと自分のところへ赤玉を導きしばらく見つめていた。タカヒト達は固唾を呑んで様子を伺っている。

「ふう〜ん、これが赤玉なんだあ〜。以外と小さいんだ・・・ちよつと試そうかな。あんた達、死んでよ?」

「そつ、そんな・・・話が違いわ!」

「おバカ、約束は破る為にあるのよ!」

「話は決裂したようだ。タカヒト、ゲイル!一斉攻撃を仕掛ける

ぞ。ミカとポンマンはマーキュリーを連れて逃げるのだ！」

ミカとポンマンはマーキュリーに肩を貸すと急いで攻撃範囲から逃げていく。タカヒトは紫玉に呼びかけると意識を明け渡した。紫タカヒトはアレストを周辺に配置して理力を高めていく。緑てんとも三つの球体を頭上に回転させた。五行・水の印を唱えるゲイルの足元には水溜りが現れてきた。

「緑玉理力 球撃！」

「紫玉理力 アルティメットアタック！」

「水の印 水柱！」

地中から現れた水柱が紅リディーネを包む紅い炎を消し去ると同時にアレストから龐大な数の粒子砲が放たれた。更に緑てんと三つの球体が反発力により粒子砲の速度と破壊力を増していく。三名の最強コンボ攻撃に紅リディーネの足元から砂煙が舞いあがっていく。完全な勝利と確信したポンマンはマーキュリーを紙竹林で隠すとミカを連れてタカヒト達のもとへ走っていった。ポンマンが笑顔で喜んでいるがすべての理力を出し切ったタカヒト達は様子を伺っている。砂煙が収まる頃、何事も無かったかのように紅リディーネは涼しげな表情をしていた。諦めにも近い声をあげたのはてんとだった。

「能力にこれほど差があるとは……」

「はあ〜あ……アトラクションショーは終わった？」

「まったく、退屈だったわね……！ ああ〜〜！！」

紅リディーネは赤玉を見ながらその手を震わせていた。マーキュリーから奪い取った赤玉が粉々になっていったのだ。てんと達の集中

攻撃に対して紅リディーネ自身はなんともなかったのだが赤玉には耐えられなかったらしい。身体を震わせて怒る紅リディーネは激しく吠えた。

「あつ、あんた達！アタシが夢にまで見た赤玉を・・・
よつ、よくも・・・うううグスン、グスン・・・殺してやる
ううう！！！」

発狂した紅リディーネは紅い輝きを増しながら闘気を高めていくと火炎玉を作り出した。すべての理力を出し尽くしたてんと達にはそれを防げる術はなく今、そこにある絶望をただ傍観するしかなかった。絶望を目の当たりにしたタカヒトはミカの傍に近寄るとギョツと手を握った。リディーネは上空に浮遊すると闘気を高めその手には紅色に輝く火炎玉が握られていた。

「死ね、死ね、死ね！紅玉闘気 業火」

火炎玉がタカヒト達目掛けて襲い掛かってくる。ゲイルは諦めきれず水の印を唱え、水球を撃ち込むが火炎玉にはまるで歯がたたない。

「くそつたれ！」

ゲイルは力を出し尽くすと膝まずき紅リディーネの業火を睨み付けるがその表情は次第に歪んでいく。頭を押えたポンマンは身を小さくして脅え、てんともすべてを諦めた表情をしていた。タカヒトはミカの姿を最後に目に焼き付けようとするがその手を払いミカは立ちあがると業火に近づいていった。

「ミカちゃん・・・？」

「私は諦めない。まだ死ぬ訳にはいかないもん！桜玉お願い、皆を守って！」

ミカの心の叫びに色玉が反応した。ミカの周囲が無数の桜色の花びらに覆われたかと思うと目の前に桜色の炎が現れた。辺りを見渡してもタカヒトやてんとの姿はない。ただ桜色の炎が目の前に存在しているだけだった。

「……もしかして桜玉なの？」

「私を受け入れし者、名はミカ。私との契約を更新しますか？」

「更新？……それって私が以前に契約したような言い方だよ。」

「その通り。あなたと私……正確には前世のあなたと私は契約をかわしました。ただ現世のあなたが私の力を使わなかっただけです。」

「……このとくべえさんから貰った桜玉は？」

「それは所有者としての自覚を持たせる為に用意された偽物です。私はミカが生まれた時からあなたの心の中に存在しています。さあ、力を解放しなさい。穏やかなる力を持つ者の力を！」

桜色の世界が消えるとミカの目の前には火炎玉が迫っていた。理力を高めたミカは桜色に輝くと両手を火炎玉に向けた。

「穏やかなる力を持つ者よ、私に守るべき力を与えて！」

桜色の輝きがさらに増すとミカの頭上に大きな桜の葉が出現した。それは盾となり激突した火炎玉からタカヒト達を守っている。しかしその盾は次第に焼け焦げていった。それだけ業火のエネルギーは大きかったのだ。桜ミカが火炎玉を必死になつて受け止めていると意識の中で桜玉が語りかけた。

(ミカ・・・残念だけど、今のミカの理力ではこの攻撃は防ぎきれないわ。)(桜玉)

「わかってるよ。でも諦めたくないから・・・」

私はタカちゃんと元の世界に帰りたいから。」

桜ミカの想いが一時的に桜玉理力サクラリーフを大きくさせたがそれでも業火の優勢は変わらない。桜ミカの必死の抵抗を見ているだけで何の役にも立たないタカヒトは自分がとても齒痒かった。悔しさに歯を食いしばっているタカヒトに何者かの声が聞こえた。

(おい・・・ちょっと、やばくねえか?)

「えっ?」

絶大なる力を持つ者

タカヒトの耳に聞いたこともない声が聞こえた。てんともゲイルもほかの誰も一言も言葉を発していないし、もちろんそんな状況ではない。タカヒトは辺りを見回すと背後に赤い火の玉が浮遊していた。びっくりしたタカヒトは驚いて腰を抜かすとその火の玉はゲラゲラと笑いだした。

「わっはっはっはっ、別に俺様は死神じゃないぜ！

面白いなあ、おまえ。がっはっはっ！」

「????? きつ、君は・・・誰なの？」

「はあ？・・・何言つてやがる！俺様は赤玉に決まってるじゃねえか！

封印を解いたのはおまえじゃねえのか？」

リディーネに奪われた赤い玉は赤玉自体を封印する器に過ぎずその器を破壊したためにこの世界に出てこられたと赤玉は語った。話を聞いていたてんとはある伝説を思い出した。その昔絶大なる力を持つ者が自らの力に酔いしれ、意味もなく都市の破壊を楽しんでいた。その行動に激怒した神が絶大なる力を持つ者を赤い玉に封印したというものだった。学舎で学んだ時、それは学徒を教育する為の作り話だと思っていた。しかしその伝説が実際にあった話だと今になって気づいた。

「まあ、いいや。それよりいいのか？このままだとかなりやばいぜ・・・

俺様なら助けること出来るんだけどなあ。」

「ミカちゃんを助けられるの？」

「もちろんだ！おまえ紫玉と契約しているだろ？ってことは波長が俺様も合うってことだ。俺様と紫玉は属性が似ているからな・・・俺様と契約しろ！」

でもそれだけじゃあ、奴には勝てないな。奴は紅玉を使いこなしているし闘気の量もかなりある。今のおまえじゃあ、逆立ちしても勝ち目はまず無いな！」

「どうすれば、ミカちゃんを守れるの？」

「それはな、おまえのすべての意識を俺様に明け渡すことだ。いか、すべてだぞ！おまえの潜在能力はかなり高いと思うぜ。紫玉も認めたくらいだからな。俺様がおまえの身体を支配して能力をフルに使えるば簡単に奴を倒せるぜ！」

「ちよつと待て、タカヒト！」

こいつの言うことはうさん臭いぞ。何を考えてるかわからない。

てんとは赤玉の伝説を知っている。その乱暴さも分かっている。タカヒトの身体を奪ってこの場から逃げ去ることも考えられた。てんとの脳裏にはすでにリディーネから逃げる策が整えられていた。

「赤玉は信用出来ない。すでにここから逃げる策は考えてあるのだ。そいつの言う事は気にせずミカを助けこの場から撤退するぞ！」

てんとはタカヒトに思い止まらせようとした。少しの間、沈黙が

流れると痺れを切らした赤玉が急ぎ立てた。

「おい、どうすんだよ！やんのか？やらないのか？早く決めないとマズイぜ！」

「・・・わかった・・・どうすればいいの？」

「そこなくっちゃな！やり方は・・・」

「おい、タカヒト！やめろ。危険すぎる。」

赤玉が契約しようとするのとてんがそれを阻止すべく試みた。赤玉の力を借りずに別の方法でこの場から逃げようとしたのだがタカヒトは首を縦に振らなかった。

「ムリだよ・・・リディーネの能力から逃れる可能性が低いことは僕でもわかる。このままだとミカちゃん危険なんだ。今は赤玉を信じるほかに手がないんだ。」

言われたとおりにすべてを赤玉に託すとタカヒトは意識を開放していく。それを見た赤玉は更にタカヒトに問い掛けた。

「いいんだな？ すべての意識を・・・心を解き放て！」

タカヒトはうなずくと両手を開き、深呼吸をすると目を閉じて意識を開放していく。赤玉はタカヒトと同調していくかのようにタカヒトの身体の中に消えていった・・・。

「あっはっはっはっ、もう限界？あたしに逆らおうなんて身のほど知らずな女ね。」

「さあ、死になさい！」

「くっ……もっ、もうダメ……耐えられないよ……」

地面に座り込みミカの理力は限界に近づいていく。紅リディーネの業火が更に勢いを増していくのとは逆にミカのサクラリーフは次第に弱まっていく。サクラリーフが完全に消えてなくなると紅い業火がミカを襲う。ミカが瞳を閉じて死を覚悟した瞬間、ひとつの人影がミカの前フワリと現れて左手を差し出すと紅い業火を受け止めた。

「……ん……？」

ミカはうつすら瞳を開けて辺りを見渡すと目の前で赤タカヒトが業火を受け止めていた。地面に座り込みキョトンとしているミカに向かって赤タカヒトは口を開いた。

「……ミカとかいったな？ちよつと退いてる。俺様が奴を倒してやる！」

「?????……タカちゃん？」

しかしすぐにミカにはそれがタカヒトでないことがわかった。姿形はタカヒトだがいつものオドオド感はなく、身体は赤く輝き、目が鋭く髪の毛も目も赤く光っていたからである。

業火を弾き飛ばした赤タカヒトは座り込むミカを軽々と抱きかかえて、てんと達のほうへ連れて行く。恥ずかしくて赤面しているミカをてんと達のいる場所に降ろし赤タカヒトは空中に浮かんでいる紅リディーネを睨み付けた。

「おい、てめえ！何様だ？この俺様を見下して・・・ぶっ飛ばすぞ、バカ女！」

「なにい〜？あんたバカあ〜？さっきの攻撃で勝てないってわからなかった？」

業火を受け止めた位でいい気にならないでよね。」

闘気をあげた紅リディーネから更に紅い輝きが増すと周辺の空気がビリビリと揺れる。てんとはその闘気の大きさに驚愕している。その闘気を一気に開放したらここら一帯、焼け野原と化すことは間違いない。しかし赤タカヒトは微動だにせず紅リディーネを睨んでいる。

「さて・・・待たせたわね！」

この私を怒らせたんだから死んで償いなさい。 中級闘気 焦土」

業火クラスの火炎の波が地面を這うように襲い掛かってきた。ミカにてんと、ゲイル、パンマン、そしてマーキュリーはすべての終わりを感じた。しかしただひとり赤タカヒトだけはそんな事など思っていない。赤タカヒト少しほくそえんだ後、闘気を一気に開放すると両手を紅リディーネに向けた。

「いくぜ！赤玉中級闘気フレイム」

赤タカヒトが闘気を一気に開放すると地面から炎の壁が現れて襲い掛かる火炎の波をすべて受け止めた。焦土の勢いは止まることはなかったが、それらのすべてを赤タカヒトの炎の壁が受け止めていく。自分と同等の力をもつ赤タカヒトに脅威を覚えた紅リディーネは困惑した。

「・・・あんだ、何者？」

「俺様か？よぉくく耳の穴かっばじいて聞きやがれ。俺様が赤玉だ！」

「なるほどね。ソウルオブカラーとして私の力にならなかったわけか・・・」

私の敵ならその存在自体消すしかないわね！」

「やってみやがれ！バカ女・・・俺様は強えぞ！」

新たなる敵

紅リディーネは更に闘気を高めていく。今度は周囲の空気どころか地上までビリビリと揺れていく。それはリディーネが最高の技である紅玉上級闘気を繰り出そうとしているということだ。その行動に気付いた赤玉は意識の中に存在するもうひとつのソウルオブカラ―に話しかけた。

（紫玉、聞こえつか？ちょっとマズイことになった。俺様を助ける！）（赤玉）

（……）（紫玉）

（おい、聞こえてんだろ？奴は上級でくるらしい。俺様の上級だけじゃあ、力が拮抗するだけだ。おまえの上級理力も必要だ！）（赤玉）

（……そんなことは知らん。私はタカヒトの為に存在している。）（紫玉）

（そのタカヒトに危険が迫ってるつうの！それにそのツレもヤバイ。）

どうすんだ？歴大なる力を持つ者。）（赤玉）

（……好きにしろ。）（紫玉）

紫玉の意向を聞き取った赤タカヒトは闘気を全開にすると紅リディーネと同様に周辺の空気がビリビリと揺れた。最高の闘気を放つ赤タカヒトは満足げな表情をして左手を紅リディーネに向けた。紅

リディーネも両手を赤タカヒトに向けて標準を合わせる。拮抗する力に大地が、空気がビリビリと震えあがる。

「紅玉上級闘気 朱玉！」

「赤玉上級闘気 メガフレア！」

業火の火炎玉とは比べ物にならない位の巨大な大火炎玉の朱玉とそれに匹敵する巨大な赤色の大火炎柱のメガフレアが激突する。周辺の紙竹林が着火して燃え盛り、更に爆風で燃え広がる。目の前に広がる大火炎地獄に緑てんと球体シールドと桜色ミカのサクラリーフの防御によりなんとか火炎と爆風の衝撃から皆の身を守ることが出来てはいる。紅リディーネの朱玉と赤タカヒトのメガフレアは同等の威力を持ち、それらは均衡を保っていた。

「なかなかやるわね！私の朱玉と対等の威力を持っているなんて

」

「対等？バカなこと言ってるじゃねえよ！ だからバカ女って言うてんだよ。」

「アンタ……何言ってるの？」

「おまえは両手で上級闘気を繰り出しているよな？俺様は左手のみで上級闘気を繰り出しているんだぜ。つ・ま・り、右手は空いているってわけ……タカヒトとの潜在能力に差が出たな！」

「あつ！……あああ！！」

「やっと気づいたか、バカヤロウが！喰らいやがれ！」

紫玉上級理力 アルティメットキャノン！」

赤紫タカヒトは紫色に輝く右手を空高くあげると歴大な数のアレ
ストが現れた。アレストは円形に集結すると列を成して巨大な砲筒
を形成した。その砲筒から紫色の波動砲がリディーネに向けて発射
された。拮抗していた朱玉とメガフレアの均衡がアルティメットキ
ャノンによって崩壊される。赤色の大火炎柱と紫色の大波動砲が混
ざり合い、ほとばしる赤紫色の大火炎波動砲が巨大な球体の朱玉を
貫き紅リディーネに襲い掛かる。

「おまえの負けだ！赤紫玉上級複合技、紫炎キャノン！！」

「ひぎゃあああああああ~~~~！！」

赤紫色の大火炎波動砲は紅リディーネの身体に突き刺さると激し
く燃え上空へと押し上げていく。苦しみ悶えながらリディーネの身
体はどんどん上空に飛ばされていく。次の瞬間、赤紫色の大火炎波
動砲にエネルギー体が衝突すると軌道が強引に変えられた。上空へ
飛ばされていたリディーネは勢いを失い、地上へ向かって落ちてい
くとひとつの人影がそれを受け止めた。

肩まで伸びた黒髪に腰には太刀をさげている。その姿は人道の世
界で西洋の騎士を思わせるが眼は恐ろしく黄色く光っている。頭
には角が生えてその風貌は正に鬼そのものだ。紫炎キャノンのダメー
ジによりリディーネは気を失っていたがその身体をしっかりと受け止
めていた。その人物は赤紫タカヒトを上空より睨みつけている。

「なんだあゝ、てめえは？」

「我が名はアレス！破壊神に仕える三獣士のひとり。

いずれお前ともあいまみえることもあろう・・・その時は容赦

するつもりはない。」

「はあああくん・・・なに言ってるやがんだ、バカ野郎が！」

赤紫タカヒトを無視するとアレスはリディーネと共に姿を消した。炎で包まれていた紙竹林は燃え尽き灰と化した大地は静まりかえっていた。大火炎地獄の戦いが起きたのだから当然なのかもしれないが大地のほぼ全域を焼き尽くした赤タカヒトの力にてんとはリディーネに匹敵する脅威に感じた。もちろん脅威はそれだけではないのだが・・・。

てんと達のいる場所に赤紫タカヒトは笑顔を浮かべながら戻ってくるのとてんが第一声を放った。

「赤玉、意識と身体をタカヒトに明け返すのだ。」

「・・・助けてもらったのにごめんなさい。私も元のタカちゃんに戻ってほしい。」

「チエツ、・・・分かったよ。でもな、また俺様の力が必要になるぜ。さっきのアレスとかいう奴はかなり強い。俺様と紫玉の複合技を跳ね飛ばすほどの力を持つてるくらいだからな。まっ、その時はまたこの俺様が力を貸してやるぜ。あっ！そうそう意識をタカヒトに明け渡したらコイツ気絶するぜ。なんたってタカヒトの潜在能力を一気に限界まであげたんだからな。まっ、死んだりしないから安心しな。じゃっ、またな！」

フツと赤色と紫色の輝きがなくなるといつものタカヒトの姿に戻った。身体をふらつかせながらミカ達の様子を伺っている。

「ミカちゃん、てんと。皆、無事だった・・・んだね。良かった。」

・・・バタツ！」

「タカちゃん！タカちゃん！すっかりして！・・・タカちゃん！」

タカヒトは皆が無事なのを確認するとニツコリしてそのまま気絶して倒れ込んだ。必死のミカの叫び声にも反応しないタカヒトは深い意識の底へ向かっていた。てんと達が駆け寄り気絶しているタカヒトの周りに集まった。

「ミカ、タカヒトの容態はどうだ？」

部屋に入ってきたてんとはミカに問いかけた。リディーネに辛くも勝利する事が出来たタカヒトであるが身体への負担は予想以上に大きく近代独立国家、いや崩壊後のオメガに戻ってから三日間タカヒトはずっと眠り続けていた。オメガに戻った時には発熱と大量の汗で苦しんでいたタカヒトだったがミカの献身的な看病のおかげで少しずつではあるが回復へと向かっていた。

「うん・・・もう熱もないし大丈夫だよ。」

「私にはこういうことが出来ない。ミカが居てくれたお陰で助かった。礼を言おう。」

「礼だなんて・・・当たり前のことだよ。」

「そうか・・・私の見てきた世界ではミカのような考えを持った者がいなかった。」

誰に対してもミカはどのように行動するのか？」

「困った人がいたら手を貸すのは当たり前だよ……でもタカちゃんも特別なな。」

「特別……?」

少し顔を赤らめてミカは汗ばんだタカヒトの顔をタオルで優しく拭いた。ミカはタカヒトと出会った頃のことをとんと話した。それはミカがまだ幼稚園に通っていた時にタカヒト達が引越してきた頃の事だ。タカヒトは父親と母親の三人家族だった。父親の仕事の関係で地方への引越しが多かったらしいが、子供の教育の為に仕事を变えて一戸建てを建て家族でこの地で暮らすことになった。

その頃のタカヒトは人見知りが激しくミカが話し掛けても母親のうしろに隠れてしまうような子供だった。小学校へ入学した時にはミカと話せるくらいにはなっていたが、タカヒトの人見知りは直らずにはほかの児童からイジメられるようになっていく。そんなタカヒトをイジメから守ったのがミカだった。ミカは明るく活発な女の子でクラスの男子や女子からも人気があった。タカヒトをかばうミカに対して「イジメに巻き込まれるからやめたほうがいい。」と言う女の子達がいたがそれでもミカはタカヒトを見捨てはしなかった。

「そう、特別……なんかタカちゃんって心配なんだ。なんか守ってあげなきゃってそんな気持ちになるの。でもこの前の戦いで私タカちゃんに守られた。赤玉や紫玉の助けがあったのはわかってるけどタカちゃんに守ってもらって……すごく嬉しかった。」

ミカは顔を赤らめながらまたタカヒトの額の汗を拭いた。タカヒトを守るとは言っても守ってもらうのは嬉しいらしく笑顔でタカヒトの看病をしている。

しかし今回のようにタカヒトに負担が掛かるようでは先を乗り越

えてはいけない。やはり自分達の能力を高めてタカヒトに負担が掛からないような戦い方をしていかなくはならない。てんとはこの時そう考えていた。

ボンマンの翡翠玉

「……」

タカヒトは天井を眺めていた。見たこともない風景に戸惑ってはいたがベッドの傍らにミカがいた。看病疲れのせいか、ベッドにもたれ掛るように眠っている。身体を動かすことが出来ないタカヒトは右手をなんとか動かすと眠っているミカの髪の毛を撫でてみた。髪を触られて目が覚めたミカはタカヒトが意識を取り戻したことに驚いた。

「タツ、タカちゃん？ 意識が戻ったのね！良かった・・・本当に良かった。」

涙ながらにミカはタカヒトの手をギュツと握ってタカヒトを見つめている。そんなミカを見て顔を真っ赤にするタカヒト。そのタカヒトの表情を見てミカは自分のしたことが急に恥ずかしくなってしまう。手を離すと顔を赤らめた。

「わっ、私みんなに知らせてくるね。」

椅子から立ちあがるとミカは急いで部屋を出て行った。ミカの嬉しそうな顔を見て生きていることをタカヒトは実感した。タカヒトはベッドの上で瞳を閉じてミカが戻るのを待っていた。しばらくして部屋の外が急に騒がしくなったかと思うとすぐに皆が押し寄せるように入ってきた。

「滋養にいい雨蛙を喰え！生がいいんだ。すぐに喰らいつけ！」とゲイル。

「鯨豚の丸焼きを持ってきたね。」とミゲール。

部屋の中にたくさん仲間が動けなくなるくらい入ってきてちょっと騒動になった。

「ミゲール、そんな豚なんか後回しだ！身体の回復には雨蛙が一番効くんだよ！」

「何を言ってるね！ゲイルだろうとこればかりは譲れないね！」

「ミゲール……てめええゝ俺に逆らおうってのか！いい度胸だ！！」

「五行の印を唱えて脅しても無駄ね。こればかりは譲れないね。鯨豚の丸焼きに命を賭けてるね、勝負ね、ゲイル！」

一触即発の状況で誰もが固唾を呑んだ。動けないタカヒトも戦慄を感じたほどだった。

そんな睨み合うふたりの間にマイコが割って入ってきた。

「はいはい、おバカさん達。ここがどこだかわかるかなあゝ？」

タカヒトの寝室だぞあゝ。テーブルの上に雨蛙と鯨豚を置いて出て行くよ。」

マイコに促されて雨蛙と鯨豚をテーブルに置くと渋々ゲイルとミゲールは部屋を出て行った。意識を取り戻してもタカヒトにはまだ休息が必要だとミカを残して皆は部屋を出て行った。

「じゃあね、ミカ」

ドアを閉める瞬間、マイコはミカにウィンクして閉めた。急に静まりかえった部屋でミカとタカヒトの間には沈黙の時間が流れた。

「皆、来てくれたね・・・」

「うん・・・」

「・・・ゲイルとミゲールのもってきてくれたの食べる？」

「・・・いらない・・・」

「そう・・・」

「・・・ミカちゃんのご飯が食べたい・・・」

「えっ！・・・あっ、うん！ちよっと待っててね。」

笑顔のミカは部屋を出ていくと急いで料理を作る。しばらくしてミカが戻ってくると野菜スープをタカヒトに飲ませた。

「熱い！」

「ゴメンね。熱かった？フウ〜フウ〜・・・はい、どうぞ。」

「うん、美味しい。」

「本当？いっぱいあるからゆっくり食べてね。」

ミカの手料理を食べさせてもらいながら幸せを噛締めていた。そんなことが繰り返り広げられているうちに月日が経ちタカヒトの身体は完全に回復していった。

「さて・・・そろそろ出発だ！」

てんとの言葉にタカヒトはうなずいた。崩壊した近代独立国家オメガは復旧が順調に進んで少しずつ元の形を取り戻してきた。人々の心から絶望というものは次第に消えて希望と笑顔が溢れてきた頃、タカヒトの業の水筒が赤く輝きだした。この餓鬼道との別れが近づくと思うとタカヒトはなんともいえない気持ちになった。

人道にいた頃は父親の仕事の関係で引越しを繰り返し別れは何度も味わった。それでも別れは慣れることはなく辛く悲しいものだと思い知った。

ミカちゃんを連れて人道へ、元の世界へ戻るんだ！

そんな想いがなんとか悲しみを押えていた。タカヒト達の周りには近代独立国家オメガの人々やハンター達が集まっていた。そこへミゲールとマイコもやってきた。ミゲールは鯨豚の燻製を持って涙を滝のように流している。

「タカヒトおっ、寂しくなるね。この特製鯨豚の燻製を持ってくね。」

「てんともミカも元気だね・・・ぶわあああ～～～！」

「泣かないの、ミゲじい。タカヒトいろいろありがとだね。」

「ミカのこと離しちゃ駄目だよ。うふふ・・・。」

「うん・・・二人も元気でね！」

タカヒトとの挨拶を済ませたマイコはミカと別れを惜しむように泣きながら話していた。今回のオメガの復興にはミゲールのグロウディアがかなり活躍したらしい。これからの近代独立国家オメガはオメガに住んでいた人々とかハンターとかは関係なく暮らせる国家にするように皆で話し合った。ハンター族の長老に相談役兼代表を務めてもらいながら皆で新しい国 永久中立国家オメガを発展させていく。ミゲールも建設機械開発兼整備長となりここでマイコと暮らしていくらしい。そんな事を話しているとゲイルとマーキュリーがやってきた。

「もういくのか・・・寂しくなるな。」

「うん、ゲイル達も元気でね。」

ゲイルはハンターの本陣に戻りそこで暮らすらしい。自分のような好戦的ハンターがオメガに住むという理由とトラブルの原因にもなりかねないというのが理由だ。残った好戦的ハンターを集めてハンターの本陣で永久中立国家オメガを侵略しようとする者と戦う防衛と警護にあたる。マーキュリーもゲイルと共に生きていくらしい。

「私はサラマンドラの地と家族を失ったわ・・・でもゲイルが誘ってくれたの。だから私も残りの人生をゲイルとオメガの人々のために費やしていこうと思っているわ。」

マーキュリーはゲイルを見ながら笑顔で話してくれた。マイコの話だと悲しみにくれていたマーキュリーをゲイルがなぐさめていたらしい。そしてふたりに愛が芽生えたとマイコがコッソリ教えてくれた。そしてポンマンはというと・・・風呂敷いっぱい荷物

抱えて慌てて走ってきた。

「ぜえぜえぜえ、ごっ、ごめん！遅くなって・・・」

「？・・・そんなに荷物持ってどこかに行くの？」

「どこって・・・タカヒト達と一緒に決まってるじゃないか！」

「えっ、一緒？」

タカヒトにはポンマンの言っている事が理解出来なかった。本来は業の水筒を持っている者しか六道の移動は出来ないのだがソウルオブカラーを持っていてる者もその共鳴により六道を移動出来る。故にてんとは緑玉をミカは桜玉を持っているのでタカヒトと共に移動が出来るというわけだ。もちろん彼らには六道の何処へ行くのかは分からないのだが・・・。

「言っでなかったけ？ほら、これ。」

疲れきっているポンマンが手にして見せてくれたのは紛れもなくソウルオブカラーであった。それを見てタカヒト達は驚いた。ポンマンが世界を放浪する旅人であるという持っているのは知っていたがまさかソウルオブカラーを持っているとは思ってもみなかった。

実はポンマンは自分の持つ翡翠玉ひすいぎょくの能力はほとんどわかってない。最初は身に付ける飾りくらいにしか思っでなかったらしいが時々、急に別の世界へ移動する事が何度か遭ったらしい。

「いままでタカヒトみたいに業の水筒を持っている人物に会うたことがあるんだよね。それで急に翡翠玉が輝いて知らないところに

移動したんだ。まあ、今じゃあ、それにも慣れて旅の道具くらいには使えるよ。」

「……………」

のん気に構えているポンマンにてんとはため息をつきながらもこのような考え方をする者もいるのだと悟った。そんなやりとりをしているとタカヒトの業の水筒が真紅に輝きだした。タカヒトの周りにてんと、ミカそれにポンマンが集まると四人は真紅の球体の輝きに包まれていく。

「みんな、ありがとう！」

タカヒトが笑顔で手を振り真紅の輝きが消えたと同時に四人は消えていった。

「行っちゃったね……………」

マイコが寂しそうにポツリというとミゲールがマイコの頭を撫でながら呟いた。

「生きてさえいれば……………いつの日か会えるね。」

バーカーサーとの出会い

「ここが修羅道・・・」

広い野原が続いて遠くには雪を被った山々がある。風が吹き野原の草がゆらゆらと揺れて心地よい感じた。ここが修羅道と思えない綺麗な光景であった。タカヒトやミカ、ポンマンもこの美しい光景に見とれていた。まるで人道の世界のようだと・・・しかしここが人道ではなく修羅道とすぐにわかるようになる。野原の先に小さな丘があり何本かの柱が立っている。

「あれ・・・何か吊るされているぞ！」

ポンマンの声にタカヒトは小さな丘に視線を移した。視線の先に映った柱には人形らしきものが吊るされていた。おびただしい数の鳥に突付かれていたそれがすぐに人形ではなく修羅道の住人だとわかった。あまりにも残虐な光景にミカは膝について腰を抜かした。

「ミカちゃん！・・・大丈夫？」

「・・・」

放心状態がしばらく続いたミカはタカヒトの手を握るとゆっくりと立ちあがった。足はフラフラともつれミカはタカヒトに支えられながらでなければ歩けなかった。歩いている最中も下を向いたままシヨックを受けているミカをタカヒトは心配そうな表情で見つめている。

しばらく歩くと小さな部落に辿り着いた。丈夫そうな布で覆われているコテージがいくつもあり、そこには数人の人々がいた。近く

にいたひとりの男がタカヒト達に声を掛けてきた。

「この辺りでは見かけない顔だが・・・どうしたんだい？」

「我々は世界を旅している者だ。」

ここに来たのは初めてで丘の上の光景に驚きここまで逃げてきた。」

てんとの言葉を聞いた男は表情を曇らせた。そして少しの間、沈黙の時間が流れる。

「・・・とりあえず中に入りなさい。」

男はタカヒト達をコテージに招き入れると温かいミルクをご馳走してくれた。ミルクを飲んでいるタカヒト達に男は静かに語り始めた。自らをヘイパイスと名乗り、この部落の長であると言った。そしてこの辺り一帯はチモネガと呼ばれる領主に支配されていると語るとその表情は険しいものになっていく。領主のチモネガは暇つぶしにコテージに住み遊牧を続けるヘイパイス達の一族バーカーサー族を狩猟するバーカーサー狩りを行う。馬に乗り、弓を引いては逃げていくバーカーサーを狙い、撃ち殺しては柱に吊るしあげる残酷な道楽を興じるのだ。

「そんな・・・ひどい。」

人を人とも思わないチモネガのやり方にミカが涙を流すとヘイパイスは少しの間、沈黙した。そして再び話を続ける。彼らもただ黙っているわけもなくチモネガに反撃を数回繰り返したらしい。しかしその度に返り討ちに遭っていた。理由はチモネガが雇っている兵士にあった。

その兵士達はバルキリーと呼ばれる集団でとてつもなく強く残忍な集団である。その集団を率いているある人物の名を聞いて、てんとは驚愕した。

「！　いつ、今なんと言った？」

「バルキリーの集団を率いているのはドレイクだと言ったのだが・
・
」

「ドレイク……」

てんがドレイクの名を聞いた瞬間その表情が曇り、蒼ざめたことがタカヒトは気になった。てんが黙り込みどれくらい経ったのだろう……。

「てんと……ドレイクって？」

静かに口を開いたてんから驚くべき事実が明らかになった。

「ドレイクは……ジェイドに唯一敗北を味あわせ、

ジェイドの最愛の人ユラを殺した男だ。」

「あのジェイドに敗北を味あわせた？」

てんとはジェイドとユラと自らの関係を話し、ドレイクによってジェイドがどのように変貌していったのかを説明した。タカヒトは少しだけジェイドの気持ち理解了きた。もしミカに同じことが起こったら自分はどうするのだろうか……。

てんと達にとってドレイクの問題である。いずれドレイクの襲撃もあるだろうし、もしドレイクと戦えば確実な死が待ち受

けている。

「バルキリーも強いがドレイクの強さは他を凌駕している。やつの使う能力は地を操るものだ！」

「地を操る？」

てんとは耳を疑った。ドレイク的能力は他のソウルオブカラーの能力を無効にする灰玉だったはずである。ドレイクがそれ以外にもソウルオブカラーを持っているとは思いつかなかった。しかも地を操る能力とは間違いなく茶玉である。能力を無効にする灰玉と地を操る能力である茶玉を所有するドレイクにどう対応していけば良いのか？てんには全く戦術が思いつかなかった。

ヘイパイスの計らいにコテージで休むことになりタカヒトは疲れていたせいかすぐに眠りについた。しかしてんだけは明け方まで目が冴えて眠ることが出来なかった。

「小麦作り？」

「そうよ、タカちゃん。こちらにお世話になるんだからお手伝いをしないとね。」

「そうだぞ、タカヒト。働かざる者、食うべからずだ。」

タカヒト達はしばらくの間この地にいることになった。これはてんとの考えで決めた事である。ドレイクの襲撃に備えて修羅道の地形や環境を知る必要がある、それと同時に安全な場所を確保する必要がある。ヘイパイスに事情を説明すると快諾してくれた。

てんとは周辺の地形を確認する為に朝早く出掛けていた。朝食を済ませたタカヒト達もヘイパイスの仕事を手伝う為に同行すること

になった。ヘイパイスは道具を荷車に積み込み、タカヒト達を連れ
て荒れ果てた開拓地に向かった。ヘイパイスは荷車から鍬を取り出
すと未開拓の硬い地面に深く突き刺した。タカヒトとポンマンも渡
された鍬を使って地面を耕していく。地面は想像以上に硬くかな
か作業がうまくいかなかった。

「硬い・・・こんなに硬いなんて開拓ってキツイ仕事だね。」

「泣き言を言つな。ミカを見る！」

ポンマンが指さすとミカが硬い地面に生えている雑草を取って
いた。額に汗を掻きながら働く姿を見て、タカヒトも懸命に鍬を使っ
て耕していく。

「負けんぞ、タカヒト。こう見えても野良仕事のポンちゃんと異
名を取った私だ。」

その腕前を見せてやる！」

競うようにポンマンとタカヒトは硬い地面を耕していった。

「はっ、ははは。そんなに気張ると疲れるぞ。先は長いんだ。ゆ
っくりとな。」

ヘイパイスの笑い声にミカも笑みを浮かべていた。困難な作業で
あったがタカヒトとポンマンの活躍？により見事な畑が仕上がった。
すでに日も傾いていてヘイパイス達は作業を止めてコテージに帰る
事にした。この日はタカヒトがミゲールから貰った鯨豚の燻製が夕
食として用意された。ヘイパイスは食べた事のない燻製に戸惑って
いたが口に合ったらしくバーカーサー達に評判が良かった。夕食を
済ませ、ドラム缶の風呂で汗を流したタカヒトはコテージ内から

んどの帰りを待っていた。

「てんとなら大丈夫だよ。タカちゃん。」

「・・・うん。」

「もう寝ましよう。」

ミカとタカヒトは作業の疲れのせいか、すぐに深い眠りについた。それから数日間、タカヒト達は固い地面に鍬入れ作業を続けていった。

「アイタタタ・・・」

「ポンマンどうしたの？」

「連日の野良仕事に身体が悲鳴をあげている。」

「アイタタ・・・タカヒトは大丈夫なのか？」

「うん、手に豆が出来たくらいだよ。」

タカヒトは手まめをポンマンに見せた。腰をさすりながらポンマンが手まめを触って騒いでいるとハイパイスがやってきた。

「今日は種まきをしてほしいのだが・・・ポンマン、大丈夫か？」

「ポンマンなら大丈夫だよ、たぶん。今日は種を蒔くの？」

ハイパイスは皆で耕した畑地に小麦を蒔くと言った。ミカの働き

ですすでに小麦の種は荷車に載せられてあった。昼食の弁当を持ってきたミカと共に畑地に歩いていく。道中、ポンマンがタカヒトに近づいてこっそり声をかけた。

「タカヒトの手まめもまいたら？てまめも種だけに・・・プップ
ププ」

「それってオヤジギャク？」

「オヤジギャクって・・・ミカ、ちよつと言い過ぎじゃない？」

そんな笑い話をしていると耕した畑地に到着した。荷車から杭を取り出してヘイパイスは畑地の周辺にそれらを打ち込んだ。何故、杭を打ち込むのかと言うタカヒトの問い掛けに開拓地には野犬や小動物がいるらしく、畑地に埋めた種を掘り起こしてしまうらしい。それらを防止する為の柵造りがかかせないとヘイパイスは語った。タカヒトとポンマンは杭を運ぶとヘイパイスのマネをしながら大槌で打ち込んでいく。ヘイパイス達が杭打ちを行っている間、ミカは種蒔きの準備を行っていた。

「ミカ、準備は整ったかな？」

「この縄に種が入っているの？」

この地での種蒔きはタカヒトが見てきたものとはまるで違った。丸めてある荒縄を畑地に敷いていくものだった。

「この荒縄には種のほかに数種類の肥料も入っている。
後は規則正しく荒縄を敷いていけば完了だ。」

荒縄を敷いている最中、ハイパスは辺りを警戒していた。コテージを離れてこの未開拓の地で作業するという事は正に命賭けの作業でもある。荒縄を敷くだけの作業であれば、万が一に備える事が出来る。荒縄農業はこの地で生きる者の知恵なのだ。哀しい現実にはミカはポツリと言った。

「ここが修羅道だっことを忘れていたね・・・」

命のサイクル

「よし、種蒔きは完了だな。さあ、皆で昼食にしよう。」

「お昼、お昼、お昼！」

ポンマンはスキップをしながら昼食の準備をしているミカのまわりを回っている。

「お昼、お昼、お昼！」

ウズウズしたタカヒトもポンマンと一緒にスキップしてミカのまわりを回った。ミカは樹木の木陰にシートを敷くと弁当を並べた。

「食いしん坊さん、食べてもいいわよ。」

「いったただきまゝす！」

いつも通り奪い合うようにタカヒトとポンマンはパンを両手に持ち口をモゴモゴさせていた。ガツガツ食べるタカヒトの口のまわりをミカがハンカチで拭いている。それを見ていたヘイパイスは笑顔で言った。

「はっははは、ミカには世話の焼ける子供達がいて大変だな。」

「まったく・・・タカヒトは世話が焼ける子供だ。」

「タカちゃんだけじゃないよ、ポンマン。子供達って言ったんだから。」

「……………」

「昼食が終わったら早くコテージに戻ろう。今日は種蒔きの宴があるんだ。」

バーカーサー達は種を蒔いた日と収穫の日には宴を行うのが風習となっている。タカヒト達がコテージに戻る頃にはすでに宴の準備が行われていた。そして陽も沈み宴が始まったがそこにいつもの姿はなかった。コテージの中心に作られた宴の会場にはバーカーサー達が集まっていた。

「まだ戻ってこないなあ……………」

「大丈夫だよ、タカちゃん。もうすぐに戻ってくるから。」

「でも…………もし何かあったら？てんとの身に何かあったら僕……………」

「私の身に何かあったらどうするのだ？」

「！ てんと！いつ帰ってきたの？」

「今だ。それより私の身になにかあったらどうするのだ？」

「えっ？どうするって……………」

「まあ、まあ、いいじゃない。それより宴、宴。
てんともタカヒトもこっちに座って！さあ、はやく、はやく。」

ポンマンに背中を押されてタカヒトとてんと、ミカは席に座った。たくさん料理が並べられてポンマンは相変わらず両手一杯抱え込んで口をモゴモゴさせている。

僕はてんとの身に何かあったらどうするつもりだったんだろう……。

宴の最中、タカヒトはずっとそんな事を考えていた。何かを思い悩むタカヒトにミカが声を掛けようとするところにハイパイスが近づいてきた。

「どうした？ 悩み事か？」

隣に座るハイパイスは黙って聞きしばらく考えた後で言った。ハイパイスは黙って聞きしばらく考えた後で言った。

「命のサイクルってわかるか？」

「命のサイクル？」

「大地に根付いた芽が長い歳月を経て樹木になる。そして樹木から新たな種が大地に落とされる。それと同時に樹木は枯れて腐り土の養分となる。土に落ちた種から新たな芽が芽生えまた樹木が育っていく。こうして命のサイクルが行われていくんだ。

我々もそうだ。生まれ、成長し、家族や仲間を得て協力して生活する。そして大切な事を後世に残して屍となる。」

「難しくって……よくわからないや。」

「タカヒトは成長の途中だ。そして今、タカヒトにはミカやポン

マン、てんとという仲間がいる。てんとの身に何かあったら、どうするのかはいずれタカヒト自身が答えを出すだろう。」

「僕自身が？」

「そうだ。今は大切な仲間を得られた事に感謝してその仲間を失わない努力と仲間を信じる力を身につけることだな。」

そう言い残すとハイパイは席を立つていった。タカヒトはてんとやポンマンを見つめて、いろいろな事を考えた。それでも答えは出なかった。ふと視線を感じるとミカが心配そうにタカヒトを見つめていた。

「仲間を失わない努力と信じる力かあ……」

「うん、何か言った？」

「ううん、なんでもないよ。」

タカヒトにはハイパイの話がよくわからなかったがそれでも今のこの幸せを感じ取ることだけは出来た。てんが居て、ミカが居て、ポンマンが居る。皆が愉しそうな顔をしている事が大切な事でタカヒトはそれで良かったと思っっている。皆の笑顔が一番幸せなんだとタカヒトは思っている。宴は遅くまで続いた……。

「ううん……よく寝たあ。」

コテージの前でタカヒトは昇ってくる太陽を眺めながら清々しい朝を迎えた。ハイパイのコテージからは朝食の準備をしているらしく煙がモクモクとあがっている。

「タカヒト、朝食よ！」

ヘイパイスの妻アリスに呼ばれてタカヒトはコテージの中に入るとすでに朝食が用意されてポンマンが口を大きく開けてほおばっている。

「モゴモゴ タカヒトお〜。はやくしないと無くなっちゃうよ。もごごごぶがっ、ごぼっ！」

むせるポンマンにミカがコップを手渡すと勢いよくそれを飲み干した。それからポンマンの食欲が衰えることもなく食べる速度は加速していく。タカヒトも席に座ると食べ始め、ポンマンと競い合うように食べていく。

「てんと、気分でも悪いの？」

「……………」

てんとの様子が気になったミカが声をかけたがてんとは黙ったまま朝食を取り始めた。その様子を気にしていたミカだった。タカヒトとポンマンがお腹いっぱい動けなくなった頃にヘイパイスが風の精霊シルフについて語りだした。

ヘイパイス達バーサーカーがバルキリーの襲撃を免れている理由のひとつに風の精霊の力がある。コテージは森に包まれるように建てられている。シルフ達の風の能力により風の壁が形成されていることでバルキリーの襲撃を押えられているのだ。そのおかげでバーサーカー達も安心して暮らせている。しかしその森を焼き払いシルフの捕獲とバーサーカーの襲撃をチモネガは進めている。

「我々はこの計画をなんとか阻止したい。そこでチモネガの計画阻止する為にバーカーサーの戦士達がシルフの森へ向かう事になった。旅人の君達にお願いするのはおこがましい事なのだがコテージを守ってほしい。すべての戦士達が森に向かえば女子供だけをここに残すことになる。万が一に備えて君達に女子供の非難の手助けを頼みたいのだ・・・聞き入れてくれぬか？」

「万が一に備えて準備をしておけばいいのだな。もちろん拒む理由はない。」

「引き受けてくれるか！ありがとう。」

てんが快諾するとハイパイスは喜んだ。するとハイパイスは作戦準備があるからとその場を立ちあがりコテージから出て行った。コテージの外ではバーカーサーの戦士達が刃物を研ぎ、弓弦の調整をしている。子供達は喜んで戦士の真似事をしているが女達はコテージから心配そうに見つめていた。

数日後、ハイパイスを筆頭にバーカーサーの戦士達がシルフの森へと向かう朝、タカヒト達は見送りにいく。心地よい風が戦士達の身体を包み込んでいた。

「皆、よく聞け！この心地よい風同様に天も我らの味方している。いくぞ！」

「うおおお〜！」

勝鬨を挙げた戦士達はシルフの森へと進軍を開始していった。バーカーサーの戦士達は身体中を黒く塗りテンションをあげている。しかしその化粧は死を恐れずに立ち向かうという意味も込められている。彼らは自らの死を賭けて戦いに挑むのだ。

一方、チモネガの城内では今年の作物の取立てについて農作大臣が報告を行っていた。農作は順調に進んで今年は2%の取立てになると農作大臣は報告した。

「2%・・・取立ては5%にせよ！」

「チモネガ様、5%の取立てでは農民の生活が成り立ちません。・・・なにとぞ、なにとぞ、お慈悲を！」

必死に説得する農作大臣にチモネガは近衛兵に合図をした。すると周囲を取り囲んでいる近衛兵は槍を握り締めると農作大臣の胸部を突き刺した。悲鳴が部屋中に響き渡ると農作大臣は冷たい床に倒れこんだ。近衛兵は冷たくなった農作大臣をひきずると部屋から放り出す。王室に控えていたほかの大臣達は恐怖に静まりかえり、殺された農作大臣の血痕を近衛兵に拭かせながらチモネガが声を荒げた。

「我はこの世で一番偉いのである。逆らう者は死を与えるのみである！」

その場でチモネガは次期農作大臣を決めると任された大臣はすぐに作物の取立てを5%として部下に命令した。力と恐怖で支配するチモネガに誰ひとり逆らえなかった。チモネガが信じるのは金だけ。「金があればこの世界で出来ないことなどない！」と豪語するチモネガは王座に座るとシルフについて話を始めた。

「ところでシルフの捕獲はどうなっております。ワシは隣国の王達に晩餐会でシルフをペットとして連れていくと言ってしまったのだ。はよ、捕まえてくるのだ。」

「チモネガ様！」

シルフの能力とバーカーサーの反撃に思った以上に苦戦しておりまして……」

「言い訳など聞きとらない。貴様も前農作大臣のようになりたいのか？」

「バーカーサー攻略はドレイクに命ずるがよい。」

チモネガは戦略大臣にドレイクのバーカーサー攻略への参加を命じた。戦略大臣は部下に命令するとすぐにそれはドレイクの耳に入ることになった。チモネガ城の近郊にある丘の上で寝そべっていたドレイクにひとり近づいていく女がいる。黒い肌と髪を持ちわりと筋肉質でスレンダーな体型をしている。彼女の名はリナといいドレイク率いるバルキリー軍団の参謀である。今回のバーカーサー攻略作戦を伝えにきた。作戦を聞いたドレイクは動こうともせずじっと流れゆく雲を眺めていた。

「エイパイス達バーカーサーの必死の抵抗にチモネガ兵団は撤退を余儀なくされていた。痺れを切らしたチモネガがドレイクに命じたのだがドレイクはこの作戦にはあまり乗り気ではなかった。」

「ドレイク！ はやく攻略に取り掛からないと……」

「そう急くなよ、リナ。シルフをペットにとは……あの悪趣味ブタ野郎の言いなりになるのもシャクに障るんだよな。……そうだ！おまえが行けよ。」

「私が討伐の指揮を？」

「バーカーサーくらいならおまえの牡丹玉だけで十分だろう。」

「俺は寝るから勝手にやっといてくれ。」

寝そべったままドレイクは再び雲を眺めているとそのまま目を閉じて眠ってしまった。リナは何も言わずにその場を去って行と兵士を集めるように部下に伝えた。

数時間後、リナの目の前にはバルキリー兵団の精鋭部隊が集まった。リナは馬に乗ると精鋭部隊と共にシルフの森を目指して行軍を開始していく。

高貴なる力を持つ者

シルフの森に近づくとつれて兵士達の屍が増えていった。背中に矢が突き刺さっているところを見ると敗走を喫つたようだ。敵に背を向けるとはなんと無様なものだ。リナは嫌気がさしていた。リナ達がシルフの森近くに駐留するチモネガ兵駐屯地に着くと兵士達はいたる所に這いつくばって敗戦色に包まれていた。

「リナ様！ 皆、援軍が着たぞ！」

リナとバルキリー精鋭部隊の姿を見るとチモネガ兵士達が歓声をあげた。チモネガ兵士達の士気が一気にあがり兵士達が立ちあがるとリナの周囲を取り囲むように集まりだした。

「我々は必ず勝利するだろう。」

私について来い！勝利の美酒というものを味あわせてやる。」

リナのほんのわずかな激励でチモネガ兵士達の顔つきが変わり戦士の顔となっていた。集まった兵士の中心でリナは勝鬨をあげる。歓声が辺りを包むとリナとバルキリー精鋭部隊、チモネガ兵士達はシルフの森へと向かうべく行軍を開始していく。精鋭部隊もチモネガ兵士達も休む間もなく行軍していくわけだが、士気が高まるという事はそれだけで最高の力を発揮するということがわかる。

しかしそれを打砕くようにシルフの森にはハイパイス達が鉄壁の防御で立ち塞がっていた。シルフのいる大樹木は丘の上であり、その周りは自然に積まれた岩がある。大樹木を中心に周りを見下ろす構造となっていた。チモネガ兵士達が大樹木を直指すには岩を登らねばならず登ればバーカーサー達の投石や弓矢の攻撃に遭う。その為、兵士の数では圧倒的に有利だったにも関わらず敗戦を余儀なく

されたのだ。

「また懲りずにきたか。皆の者、応戦の準備を急げ！」

ヘイパイスの合図によりバーカーサー達は配置につくと弓矢を構えた。状況は撃ち下ろしの態勢となる為バーカーサーが圧倒的に有利であった。以前もこの方法で勝利を得ていたのだが、今回は少し状況が違った。丘の麓にいるバルキリー精鋭部隊は弓矢の射程距離には入れなかったが馬に乗ったりリナが進むとバーカーサーは一斉攻撃を仕掛けた。

星の数ほどの矢が襲かかるとリナの目の前ですべて焼け焦げて塵となった。怯む事なくバーカーサーは投石と弓矢を放つがリナにダメージを与えることは出来ない。馬上のリナは片手をあげてエレメントを高めていくと身体が淡い牡丹色に輝き出す。空が急に灰色に変わり雷雲が現れた。

「高貴なる力を持つ者の前に平伏せ！牡丹玉ハイエレメント インドラ！」

雷雲から一斉に雷がシルフの大樹木に落ちる。瞬きする間もないまさに刹那の瞬間、バーカーサー達は次々と焼け焦げていく。リナの合図と共にバルキリー精鋭部隊が岩を駆け登り逃げ惑うバーカーサーに襲い掛かっていく。雷に驚いたバーカーサー達はその場に腰を抜かすと攻めてくるバルキリーになす術もなく斬りつけられていった。弓弦は切られ、投石をするバーカーサーの腕は斬りおとされた。

優勢だった形勢は一気に逆転してバーカーサーは壊滅状態に陥った。瀕死のダメージを負いながらも襲撃を免れたヘイパイスは少数の味方と最後の風の精霊シルフを連れて焼け落ちていく大樹木を後に逃走した。

「バーカーサーが逃走したぞ。追え！」

雷撃により燃え盛る大樹木を見上げたリナはハイパイス達が逃走するのを発見するとすぐさま追手を差し向けるよう指示した。指示を受け馬に乗った精鋭部隊が追撃に向かう。血を流し傷つきながらも風の精霊シルフを守って逃走するハイパイスにシルフは表情を曇らせた。

「ハイパイス殿、私を置いて逃げてください！」

私はあなた方が傷つくのを見てはいられないのです。」

「そのようなことを・・・我々は先祖代々風の精霊シルフを守る為に生きています。」

私は命と引き換えにしても使命を果たします！」

敗走するハイパイス達にバルキリーの追手が馬上から弓矢を放つ。数名のバーカーサーがその場に立ち止まると武器を構えて矢を弾き飛ばした。敵を迎え撃つべく体勢を取った。

「ハイパイス！ここは我らが阻止する。早く行け！」

彼らはバルキリー精鋭部隊を相手に勝てるとは思っていない。しかし風の精霊シルフを守る事が彼らの使命でありその為の時間稼ぎならば喜んで命を失うであろう。

「・・・すまん！」

涙を流しシルフを背に乗せると彼らを置いてハイパイスはその場を走り去った。バルキリー精鋭部隊は馬を降りると剣を構えて攻撃

体勢をとった。それに対してその場に残ったバーカーサー達は気を高めると身体が一回り大きくなっていく。

これがバーカーサーの秘術であるバーサクである。精神状態を発狂状態まで一気に高めて障害となるものを叩き潰すことができるようになる。しかし発狂状態であるため敵味方の区別がつかずその場にいる者をすべて倒すか、もしくは自らが息絶えるまで戦い続ける戦闘マシンと化していく。

バーサク状態となったバーカーサーは斬られても攻撃を止めず、バルキリー兵士を一人また一人と倒していった。眼は赤く充血してそれは正にケモノそのものであった。追撃してきた精鋭部隊の半分あまりを倒したバーカーサーに戦場で無敗を誇っていたバルキリー部隊は動揺を隠せなかった。

そのあまりにも獰猛な姿に恐れをなしたバルキリー精鋭部隊はバーカーサーに恐怖を感じて後退していく。数名のバルキリー兵士が敗走を図ると精鋭部隊の兵士すべてが逃げ出した。敗走する兵士達の視線に馬に跨るリナの姿が映った。

「無敗を誇るバルキリー精鋭部隊に臆病者はいらない！」

牡丹玉ミドルエレメント サンドラドック

リナの身体が牡丹玉に輝き始める。そして襲い掛かってくるバーカーサーに右手を、敗走するバルキリー兵士に左手を牡丹リナは差し向けた。牡丹リナの左右の手から獣の形をした雷獣が飛び出すとバーサク状態のバーカーサーとバルキリー兵士に襲い掛かり、一瞬にして焦げ付いた人形の塊が数十体出来上がった。人形の塊の間を馬に乗り通り抜けると牡丹リナはハイパイスの逃げ帰った先を目指していく。

「てんと、やっぱりハイパイスさんに相談しないでコテージの人たちを湖の畔に行かせたのってやりすぎじゃないの？」

てんとはハイパイス達が出発してから胸騒ぎがおさまらず、コテージに残ったバーカーサーの人々を少し離れた湖の畔へと移動させていた。てんとはバルキリー精鋭部隊を率いているドレイクの怖さを知っている。バーカーサー達が必ず勝てるとも思えずバルキリー精鋭部隊の追撃に対して、てん達はコテージに残ると防衛戦線を張った。

防衛戦線を張ってから待機する日々が続いた。数日が経った頃、目のいいポンマンが遠くにハイパイスの姿を確認するとてんに報告した。

「タカヒト、ポンマンと共にハイパイスを迎えに行ってくれ
．．．くれぐれも気をつけるのだぞ。」

辺りを警戒しながらタカヒトとポンマンはハイパイスに近づいていくとその傷ついた姿に驚いた。ふたりは肩を貸すとハイパイスをコテージに連れていく。ベッドに寝かせると痛みを堪えながらハイパイスは雷撃使いがこちらに向かって話を話してくれた。話を聞いたてんとは一時考え込むとこの防衛戦線を維持しながら雷撃使いを迎え撃つ事にした。

「そんな事は．．．頼んでない。はやく．．．ここから逃げて．．
くれ。」

「ヤツが．．．くる．．．。」

「大丈夫だよ、ハイパイスさん。準備は出来ているから。傷ついたハイパイスさんを置いて逃げるなんて僕達には出来ないよ。」

タカヒトの言葉に皆の顔を見まわしハイパイスは涙を流した。いろいろな感情が混ざり合い涙が止まらない。それは大切な仲間を失

った事であり自分の無力さ故に大切な友人達に危険な思いをさせる
齒痒さであり、その大切な友人が傷ついた自分の為に力を貸してく
れると言ってくれたからであった。涙を流しているハイパイスの服
の中から小さな精霊が現れた。タカヒトは目が点になって驚いたが
その精霊はタカヒト達を見あげると頭を下げ礼を言った。

「皆さん、本当にありがとうございます。」

「？・・・喋ったぞ。この生き物はなんなんだ？」

ポンマンが驚き腰を抜かしてその場に座り込むと生き物は再び口
を開いた。その生き物は風の精霊シルフでフーウと名乗った。フー
ウは火の精霊サラマンドラと違って攻撃性は全くなく体長も手のひ
らにのるくらいの亜人種だ。フーウは風の精霊シルフの唯一の生き
残りであり絶滅は免れない。

その貴重性に目をつけたチモネガがペットとして自慢できると判
断して狩猟することになったのである。それを阻止するバーカーサ
ーの反撃に激怒したチモネガとの間に戦争が始まった。フーウは自
分が犠牲になればバーカーサーに危害は及ばないと伝えたが風の精
霊を神と崇めるバーカーサーには聞き入れてはもらえなかった。

「それでも私の為に彼らが傷つき息絶えていくのは苦しいのです。」

涙を流して懸命に訴えるフーウの姿を見たポンマンはポツリと口
を開いた。

「たぶん彼らにとってあなたはかけがえない大切な存在なんだ。
だから命がけで守ろうとする。そんな彼らが傷つき倒れていくのを見
続けなければならぬあなたも苦しいでしょう。でも、もしあな

たを失つたら彼らは生きてはいけない。今は苦しいかもしれないけど、それは永遠でないのだから・・・彼らの為にもあなたには生きてほしい。」

「・・・ありがとう。」

「ポンマンってたまにいいこと言うよね。」

「たまにって・・・タカヒト、何を言ってるの!」

ポンマンはタカヒトを追いかけて場を和ました。皆に笑顔が戻り束の間の安らぎの時間が流れた。それから数時間が経った頃、偵察の任についていたポンマンの目にリナの姿が映った。てんとは対リナ戦に立てていた作戦を実行すべく準備に取り掛かった。コテージの前にミカとポンマンが立ち、コテージの裏に隠れるようにタカヒトが配置する。つまりリナからはミカとポンマンしか確認する事が出来ないという事になる。リナが馬から降りるとコテージの前に立つミカとポンマンに向かって声をあげた。

「無益な戦はしたくはない。シルフを差し出せば危害を加えず撤退するつもりだ。」

シルフを差し出せ!」

「あんななんかにフーウを渡すつもりはないわ!」

「愚かな・・・ならば我が雷撃を喰らうがよい。」

牡丹玉ミドルエレメント サンドラドック」

交渉は決裂したとばかりにリナはエレメントを高めると牡丹色に輝いたその身体から雷獣が襲ってくる。それはバーサク化したバー

サーカーとバルキリー精鋭部隊を瞬時に焼き殺した技であった。ミカは桜玉理力サクラーフを発動させてそれを受け止めるが理力の差は明らかだった。サクラーフは砕け散りミカとポンマンは吹っ飛んだ。攻撃を止めた牡丹リナは再度ミカに忠告した。

「おまえと私の力の差は歴然としている。いい加減にシルフを渡せ！」

「言っただでしょ！あんななんかにフーウを渡す気はないわ。いくわよ、ポンマン。」

「オツケー、ミカ！」

「ならば死ね！牡丹玉ハイエレメント インドラ」

エレメントを高めた牡丹リナの頭上を巨大な雷雲が空を埋め尽くしていく。雷鳴が轟き暗黒の雲の中心に無数の雷が集中してミカ達に標準を合わせていく。ミカはポンマンの背中に両手をつけるとポンマンと共に理力を限界まで高めていく。

次の瞬間、雷はミカとポンマン目掛けて落ちてきた。牡丹玉の最大級の雷撃を浴びればミカの桜玉理力サクラーフでは防ぐ事はおろか、コテージそのものが消滅してしまう。桜色に輝くミカと翡翠色のポンマンが上空を見上げた。

「翡翠玉理力 増幅力！」

「桜玉理力 サクラーフ！」

翡翠玉には攻撃する能力は全くない。だが翡翠玉理力増幅力を発動させる事によりミカの桜玉理力サクラーフの防御力をあげる事が可能となる。複合技とはまた違ったポンマンの翡翠玉独自の能力

なのであるが能力をあげたサクラリーフは厚みが増して大きさもひとまわりもふたまわりもデカくなった。サクラリーフはインドラをすべて受け止めていくがやはり差は埋められず、桜ミカのサクラリーフが押し潰され始めた。

「タカヒト、今だ！」

ポンマンの合図にコテージに隠れていたタカヒトが飛び出す。理力を高めていた身体は紫色に輝いて紫タカヒトの周囲には膨大な数のアレストが配置されていた。

「紫玉理力 アルティメットアタック！」

牡丹リナに膨大な数のアレストの粒子砲を一斉に浴びせた。だが紫タカヒトの動きを瞬時に察した牡丹リナは攻撃を止めるとアレストの粒子砲をかわした。

「おまえの気配などお見通し、私に不意打ちなど利かないわ！」

「それはどうかな？」

「何！……！！！」

空中に回避した牡丹リナは自分の背後に気配を感じた。後ろを振り返るとそこにんとがいた。紫タカヒトのアルティメットアタックは牡丹リナを狙ったものではなく、牡丹リナの背後に立つ緑てんとの球体を狙ったものだった。緑玉の球体に弾かれた膨大なアレストの粒子砲は破壊力とスピードを増して、ひとつの巨大な紫色の粒子砲となり牡丹リナに襲い掛かる。

「紫緑玉複合技 アルティメットストライク！」

「きゃあああああ〜、あはっ、あああああ〜！！！」

空中に回避した牡丹リナに巨大な紫色の粒子砲から逃げる術もなく直撃。牡丹玉の発動によりダメージは最小限に抑えたものの一時的に意識を失って地上に落ちていく。緑てんとはトドメを刺そうとしたがバルキリー精鋭部隊とチモネガ兵隊が砲撃を仕掛けてきた。紫タカヒト達は後退を余儀なくされてコテージまで撤退していく。地上に落ちたりナはすぐに意識は取り戻した。這いつくばりながらも立ちあがり数名のバルキリー兵士に連れられて敗走していく。

「はあはあはあ・・・なんという失態！このままでは済まさないわ。」

風のとんと

なんとかリナ率いるバルキリー精鋭部隊を撤退させる事に成功したが反撃してくることは目に見えていた。だがヘイパイスの具合は思った以上に悪く動かすことが出来ない。てんとはいくつかの想定を考えながら作戦を練ろうとしたがドレイクに対抗できる手段は全く思い浮かばなかった。コテージの一室でひとり頭を抱えて悩んでいるてんにフーウが近寄ってきた。

「何を悩まれているのですか？」

「戦力をどんなに分析してもドレイクに勝てる要素がまるでない。いったいどうすればいいのか・・・」

「戦力・・・ですか。あなたの戦力だけでしたら上げることは可能なのですけども。」

「私の戦力をあげる？」

緑玉とは風の精霊の魂が凝縮して出来たものらしくフーウの力でその能力をあげることが可能だという。てんとは戦力が上がるのならどんなことでもする覚悟があると伝えるとクスツと笑いフーウは何かを唱え始めた。するとそれと共鳴するようにてんとの緑玉も輝きを放ち始めた。部屋中を覆う緑の輝きにてんとの心は穏やかさを取り戻していく。

作戦が煮詰まっていたことなどすでに忘れてその爽やかな輝きを受け入れていく。緑の輝きが少しずつおさまるとフーウは静かにてんと言った。

「これであなたの持つ緑玉は力を得ました。あなたは緑玉に、精霊の魂に好かれているのですね。あなたのためならすべてを捧げると言っていますよ。」

てんとは緑玉を見つめると不思議と不安な気持ちは取れていた。部屋をフーウと共にいるとタカヒトとポンマンが相変わらず争うように食べていた。ポンマンはまたも喉を詰まらせて咳き込んでいた。

「考えてもしょうがない。なんとかなるだろう。」

「そうですよ、なんとかかりますよ。」

フーウは微笑むとてんとは笑顔を取り戻した。その頃、チモネガ駐屯地へ戻ったリナは身体の回復を待ちながらも次の作戦を考えていた。ミカとてんと、ポンマンにタカヒトの四人の能力者を相手に敗北したのだがこのまま帰る訳にはいかなかった。ドレイクの力を借りる事も考えたが任せられた以上ここは自分の力のみで乗り越える事にした。

数日が経ち、タカヒト達の能力から攻略法を見出したりリナはバルキリー精鋭部隊とチモネガ兵を引き連れてコテージへと行軍を進めていく。

「各中隊は散開せよ。」

コテージに近づくに連れてバルキリー・チモネガ混合部隊は各個中隊に分かれていく。敵がコテージにて籠城している以上、四方八方から攻撃を開始してあぶり出す作戦を考えたりナはコテージを囲むように兵士達を配置していく。取り囲みに成功したりリナは笑みを浮かべながらコテージを眺めていた。

依然、籠城していると悟ったりリナは合図を出すと周囲を取り囲ん

だバルキリー・チモネガ混合部隊は一斉に砲撃を開始した。コテージが形を崩して崩壊していくがバルキリー・チモネガ混合部隊は砲撃を止める事はなく更に砲撃は増していく。コテージはすでに崩壊して無くなり、そこには跡形もなく更地と化していた。計算された砲撃により勝利を確信したりナは砲撃を止めるように命令した。

「圧倒的な力の差は埋められるはずはない。我らの勝利だ。勝鬨をあげよ！」

勝利の勝鬨をあげるバルキリー・チモネガ混合部隊を見て思った以上に呆気なかったと上空を見上げたりナは驚愕した。そこには緑の輝きを放つ緑てんと紫タカヒトが浮かんでいた。

「紫玉理力アルティメットアタック！」

緑てんとその後で紫色の輝きを放っていた紫タカヒトが勝利に浮かれていたバルキリー・チモネガ混合部隊に向って標準を合わせた。四方八方にひろがったアレストが一斉に粒子砲を放出すると無防備の兵士達の身体を貫く。バルキリー・チモネガ混合部隊は思いもよらない反撃に混乱している状況の中、リナは状況を把握できずに困惑していた。

「何故？・・・奴らにこの奇襲がわかる訳がない・・・まさか、内通者か？」

数々の思惑を想定しながらもまずはこの状況の打開を考えたりナは上空に浮遊しているてんと達にサンドラドックを浴びせる。だが地上に隠れていた桜ミカがサクラーーフで簡単に防いだ。

牡丹リナは精神が不安定である為にエレメントもいつもよりも弱く力を出し切れない。紫タカヒトのアレストによる粒子砲の集中攻

撃にバルキリー・チモネガ混合部隊はほぼ壊滅状態に陥っていく。リナ以外の兵士は地面に倒れて二度と立ちあがることはなかった。

「こんな・・・こんな事になるなんて・・・」

膝をガクツと落してバルキリー・チモネガ混合部隊が次々と壊滅していく様子をただ黙って見ているだけのリナの肩をポンと叩く人物がいた。ドレイクだ。

放心状態のリナの前に立つとドレイクは片手を広げて灰色の光を放つ。それと同調するように上空に浮遊していたとんに異変が起こった。急にてんとに緑色の輝きが無くなると地上へと落ちていく。

「うわあ~~~~・・・ドン!!!痛たあ~~~~・・・」

てんと、こんな降り方ないよ! っていつか、落ちただけだ!」

「灰玉の能力だ。すべてを無にかえす者は能力を無効にするのだ!」

「おい、俺の女に酷いことするじゃねえか。これは確実に倍返しってやつだよな?」

灰ドレイクがてんと達を見つめるとニヤリと笑みを浮かべた。灰玉はソウルオブカラーの中で唯一、すべての能力を無効化させる事が出来る。その為ドレイクが灰玉を輝かせた時、てんとやタカヒトミカにポンマンのソウルオブカラーはその能力のすべてを失ってしまった。灰色の輝きが消えたドレイクは困惑しているてんと達に近づいていく。背中に背負っていた刀を瞬時に鞘から抜くとてんとに振り下ろした。球体を発生させると紙一重で何とか受け止めた。ドレイクはおろした刀を振り上げるとてんとを見つめた。困惑しているてんとは口を開いた。

「何故・・・ソウルオブカラーを使わないのだ？」

「前に会ったことがあるよな？小さな部落を襲った時におまえともう一人・・・。」

ドレイクが振り上げた刀で肩をポンポンと叩いているとリナが立ち上がりドレイクに何かを話していた。タカヒトとてんとは怪我をしていなかった。てんとはミカの傍にいるフーウの姿を確認すると逃走の準備に取り掛かるうとしていた。対リナ戦での戦略は成功したと言っただろう。しかし対ドレイク戦の戦略は立てられなかった。と言うより立てようが無かったと言ったほうがいだろうか。すべての能力を無効にする灰玉に何の抵抗も戦略も無意味であり、ソウルオブカラーが使えない以上、対徒手、対剣術、対槍術、どのような戦術をしてもドレイクに勝てる要素は無い。てんとにとってこの場を逃げる事が最良の策であった。リナの話聞き終わるとドレイクはニヤリと笑みを浮かべた。

「なるほどな。そうか・・・おまえは緑玉を使うのだったな。」

風を読み、リナの戦略を読んだか？」

てんとは驚愕した。てんとの考えはすべてドレイクにはお見通しであったのだ。つまりドレイクにはこの後てん何が何をしてどう動くかすべてわかっていいる。しかしそれでもてんとは逃走という手段しか最良と呼べる策が無かった。そしてその準備だけはしていた。てんとの落ちた場所は偶然ではなく、そこに落ちるように上空へ飛んでいたのである。

そして近くには草木で隠した丸太で作ったイカダがある。イカダにはすでにハイパイイスが乗っていた。隠れていたポンマンとミカがそれに乗り込み帆を揚げると風の精霊フーウが風を起こす。ハイパ

イスとポンマン、ミカを乗せたイカダの帆が拡がり速度をあげて前進していく。ドレイクの目前でタカヒトとてんとをイカダに乗せると一気に加速して逃走していく。地面を滑るようにイカダは進んでいくとドレイクがタメ息をつきながら言った。

「考えたようだがそんなにうまくいくわけがないだろ！」

茶玉中級闘気 アースクエイク！！」

茶色の輝きを放つ茶ドレイクは両手を地面に押し付けると地面が揺れて地割れを起こす。地割れがイカダに迫ってくるとタカヒトが叫んだ。

「地割れに落ちたら二度と出られなくなるよ！」

「安心しろ！手は打ってある！！」

てんとは緑色に輝くとイカダは三つの球体に支えられて上空へと浮かびあがり地割れを避けていく。森の奥へと消えていったイカダをドレイクは見つめていた。

「ドレイク！何故、奴らを逃がすような事を？」

「久しぶりの獲物だ・・・楽しみたい。」

ドレイクの活き活きとした表情を見たリナは少しだけ嫉妬した。遭遇した敵を獲物と言った事はいまままでに一度も無く、こんなに喜んで楽しそうなドレイクを見たことがなかった。逃げていったタカヒト達を恋人に逢いに行くように喜びを感じながら追いかけていくドレイクに嫉妬しながらも確実な死をもたらすドレイクという死神にリナはタカヒト達を哀れんでもいた。

ノームの森

ドレイクから命からがら逃げる事に成功したタカヒト達であったが、てんとは理力は限界に達し、イカダは森の中で緊急着陸した。

「イカダ・・・壊れちゃったね・・・」

イカダの帆は森の木々により破かれてしまった。ドレイクの襲撃が無い事を確認したてんとは皆の状況を確認していく。タカヒトとミカ、それにポンマンは身体に異常はなかったが無理な着陸だった為、にへいパイスの傷口が開いてしまった事はかなり深刻な状態であった。しかしそれ以上に深刻な問題があった。それはここがノームの森であるということだった。

「ドレイクから逃れる事だけを考えてこの地に辿り着いたのだが・・・
不覚にもノームの森に来てしまった。」

「ノームの森？」

タカヒトの疑問にてんとは静かに口を開いた。ノームとは地の精霊でありこの森に生息している。姿は樹木そのものであるがノームは歩行が可能な魔物である。最も恐ろしいのはノームが獰猛な魔物であるということだ。精霊でありながらノームは血の臭いを嗅ぎ付けて樹木に擬態しながら獲物を仕留めて喰らうのである。

へいパイスの傷口から流れる血は群れで行動するノームを引き寄せるのに十分であった。これがドレイクの計算の内なのかはてんとには計りかねないが確実にこのままではノームの餌食となってしまう。まずはへいパイスの傷口の手当てと周辺に警戒をする事が先決

であった。しかしこのてんとの判断は遅かった。ノームの群れがすでに血の臭いを嗅ぎつけてタカヒト達を囲んでいたのである。

「ノオ〜〜ム！」

恐ろしいほど低音の声がタカヒト達を中心として周囲から聞こえてくる。タカヒトが辺りを見渡すと樹木が歩いて近づいてきた。

「何アレ！ 木が歩いてる。」

一見すると樹木にしか見えないが根っこを地面に押し当てるように歩いてくる。複数の枝は手のように動いて、幹には口らしきモノがあり常に樹液が流れていた。その姿からは理性というものは全くと言っていいほど感じられない。いままで出会った精霊と比べると精霊と呼ぶにはあまりにも醜いものがある。だがノームがタカヒト達を獲物として捉えている事だけはすぐにわかった。

「ノオ〜〜ム！」

再び低い声をあげてタカヒト達に歩み寄ると長い枝を伸ばしてきた。てんとは残り少ない理力で球体を生み出し近づいてくる長い枝にぶつける。ミカもサクラーリーフで周辺を覆った。伸びてくるノームの枝に対して球体とサクラーリーフで防御しているがノームの数はどんどん増えていく。このままではジリ貧の状況が続いててんとミカの理力が無くなった瞬間ノームの狩りが始まるだろう。

「タカヒト、紫玉の能力でノームを一掃するのだ！」

てんとの作戦は紫タカヒトの紫玉理力アルティメットアタックによる粒子砲攻撃により周囲を取り囲むノームの一ヶ所を切り開いて

この場から逃げるといふものであった。

「紫玉理力 アルティメットアタック！」

タカヒトはてんと言われた通りに紫玉を発動させると紫玉理力アルティメットアタックをノームに繰り出す。龐大な数のアレストが出現すると紫色の粒子砲が一齐に放たれた。しかしイーターの硬い甲殻すら打ち破った粒子砲がノームには全く効かない。いや、それどころかノームは粒子砲を浴びる度に大きくなっていく。

「駄目です！攻撃をやめてください。」

感情的になったことなどなかったフーウが大声をあげて紫タカヒトに制止を促した。紫タカヒトが理力を止めると龐大な数のアレストが一齐にその場から姿を消した。紫タカヒトが理力を消費したのとは逆にノームは力を増して状況は更に悪化していく。

「五行相生の法則により火の属性での攻撃ではノームは倒せないのです。」

五行相生とは木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ずという関係である。地の精霊ノームの属性は土であり、タカヒトの持つ紫玉と赤玉の属性は火である。つまり火は土を育てるといふ事になり紫タカヒトがどんなに攻撃を加えてもノームにはダメージどころかその能力を増すことにしかならないということだ。

そして五行相剋とは水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つという関係である。この法則によると土の属性であるノームを倒すには木の属性である桜玉が唯一の攻撃手段なのだ。しかし今のミカに攻撃する能力はなく、てんとの風の

属性やポンマンの無属性のソウルオブカラーではノームは倒せない。ミカの理力もすでに限界でサクラリーフも小さくなっていく。

攻撃手段を失ったてんが思い悩んでいるとタカヒトが立ちあがった。腰に吊るしてある徳の水筒を取り出し一口飲むとタカヒトは金色に輝き出した。

「てんと、僕が道を切り開くから皆をお願い！」

金色タカヒトはノームに瞬時に近づき蹴りを繰り出すとノームが吹っ飛んでいく。数体のノームに次々と蹴撃を浴びせると一体のノームが他のノームに当たりボーリングのピンのようにはじかれていく。金色タカヒトの連続蹴撃によりひとすじの道が開かれる。てんとは理力を振り絞って皆を浮遊させるとその道を一気に通り抜けていく。

「タカちゃん、手を出して！」

途中で金色の輝きを失ったタカヒトの手をミカが掴むと一気にノームの森を駆け抜けていく。ノームの姿が次第に小さくなっていくのをタカヒトは確認すると必死に手を握ってくれているミカの顔を見つめていた。

またミカちゃんに助けられてる・・・

人道にいた頃よりも強くなったはずなのにまたミカに助けられていることにタカヒトはションボリしていた・・・。

「俺の前にこれほどの数のノームがいるって事は奴らめ！逃げ延びたってわけか。」

タカヒト達から少し離れた所まで来ていたドレイクとリナの周り

を複数のノームが取り囲んでいた。黒い眼を鋭く光らせたノーム達は獲物を喰らおうとドレイクに近づいていく。リナが牡丹色に輝きながら前に出るがドレイクがそれを制止させた。そして頭を掻きながらドレイクは茶玉を発動させていく。

「精霊ごときが俺に勝つ気でいやがる！茶玉中級闘気 アースク
エイク！」

地面が激しく揺れて地表が裂ける。次々とノーム達は断末魔をあげながらその裂け目に落ちていく。身動きも取れず、なす術のないノーム達が裂け目の底へと落ちていくと裂け目は閉じて元の地表に戻った。てんと達が苦戦したノームをいとも簡単に倒したドレイクはリナと共に馬に乗りタカヒト達を追って森の奥へと進んでいった。一方、タカヒト達はノームから逃れたものの依然ノームの森にいた。浮遊の連続にてんとは完全に理力を消耗しきっていた。しかも理力を消耗しきっていたのはミカもタカヒトも同様であった。更にタカヒトは徳の力の反動により体力も消耗しきってハイパイスト同様動く事もままならない状況だ。唯一の頼みはポンマンだけなのだ。ポンマンには攻撃能力が全くない。今、ドレイクやノームの襲撃に遭えば生き残る可能性はないに等しい。この最悪の状況の中でてんとは対処法を考えたが答えは出なかった。

「森に・・・薬草がないか捜してくるよ・・・」

ポンマンはそう言い残すと森の中に姿を消して行った。ミカとフーウはハイパイストとタカヒトの看病に忙しく動き回っている。ほんの一時の休息であったが最悪の状況の中で最悪の出来事はすぐにやってきた。またしてもノームの群れに囲まれたのだ。理力の回復していないてんと達にノームから身を守る手段は無い。

ポンマンは戻らずてんとは危険を感じたポンマンは逃走したのだ

と諦めた。いや、ポンマンがいたとしてもノームから身を守る事は不可能である。てんとは死というものを覚悟した。ジリジリと近づいてくるノームにミカはタカヒトをギュッと抱きしめた。

「ノオ~~~~ム！」

一匹のノームが叫び声をあげて自らの枝を伸ばすとタカヒトの身体に巻付いた。

「ダメ！」

ミカがそれを必死で取り除く。餌を捕られたと烈火の如く怒り黒い眼を鋭くさせたノームは複数の枝を一斉に伸ばしてくる。他のノームもジリジリと近寄ってくる。と獲物を我先にと奪おうと枝を伸ばす。防ぎきれないと悟ったミカがタカヒトの身体に覆い被さった。

「ちよつと待った！」

枝がミカに触れる寸前でノームの動きが止まった。ミカが恐る恐る顔をあげるとそこには足を大きく開き仁王立ちしているポンマンがいた。捕食を止められたノームは怒り振り返るとポンマン目掛けて鋭い枝を一斉に伸ばしていく。ポンマンはそれを素早く避けると何かをノームに投げつけた。

「ノオオオオ~~~~~~~~ムウ~~~~!!！」

ノームは断末魔をあげるとその身体は粉々に崩れていく。粉々になったノームを見てミカは口をアングリした。いや、実際ポンマンがどのような方法でノームを倒したのかわからないがポンマンがノームを倒した事は間違いない。仲間を殺されたノーム達はポンマン

に対して警戒感を高めていく。攻撃を仕掛けずに間合いを取るノーム達に対して怯むこともなく余裕のポンマンは腰に手をあてた。

「はっはっはっ、お待たせしました。頼れる男ポンマン参上!」

「ポンマン、危ない!」

甲高い声をあげながら笑っているポンマンに複数のノームが襲い掛かった。それでもポンマンは冷静にそれらをかわずと再び何かノームに投げつけた。

「ノオオオオ~~~~~ムウ~~~~!」

再び素早く避けると何かをノームに投げつけるとノームは断末魔をあげ、身体は粉々に崩れていく。ポンマンの活躍にてんと達を囲んでいた複数のノームが次々と粉々に崩れていく。そして最後の一匹だけになった。ほかのノームと違いひとまわり大きくどうやら集団をまとめているボスのようだ。

「最後の一匹・・・」

「ドゴオオ~~~~ム!!」

向かい合い対峙するポンマンとボスノームは次第に距離を縮めていく。次の瞬間、ボスノームの枝がポンマンの身体に突き刺さった。

「いやあ~~~~!!」

ミカは目を背けた。だが突き刺さったのはポンマンのマントだけでその伸びてきた枝のへこみにポンマンは小さな種を入れ込んだ。

「ドゴオオオオ~~~~~ムウ~~~~~!!!」

ボスノームの動きが止まり呻き声をあげながら粉々に崩れていった。すべてのノームを倒したポンマンはてんと達のいるところへ歩み寄っていく。ミカの傍に座り込んですり鉢と棒を取り出すと持っていた薬草をすり鉢に入れて練り込んだ。練りこんだ薬草を丸めると水と一緒にミカに手渡した。

「ミカ、これは滋養回復の薬草だ。タカヒトとハイパイに飲ませてやってくれ。」

「わかったわ。」

薬草を飲ませた二人の顔色はしばらくすると少しずつ生氣を取り戻していく。続いて傷に効く薬草をポンマンがすり鉢で練り込みハイパイの傷口に塗り込むとすぐに止血した。安心したポンマンは道具をバックに詰め込んで片付けを始めた。

「これでとりあえず安心だよ。」

「ポンマン、ノームに何をしたのだ？」

「何をしたってスクスク草の種を植えただけだよ。」

「……スクスク草って何なの？」

スクスク草とはその名の通り成長速度が異常に早い植物であり、土に栄養があればどのような環境でも育っていく植物だ。ノームは地の精霊で土の属性を持っている。見た目は樹木なのだが実際は土

の塊であり火の属性はノームにとって栄養なのだがスクスク草はノームにとって命を削り取る脅威そのものである。

てんとうがノームの崩れた場所に目をやるとそこには確かに成長したスクスク草が花を咲かせていた。ポンマンはこの森の中にスクスク草を探し、それと共にタカヒト達の薬草も捜していたのであった。一時的に最悪の状況は脱したもののドレイクという脅威が依然近づいている。

スクスク草に怯えたノームはこの場から去り、タカヒトとヘイパイスの体調が回復するのに十分な休息が取れた。ドレイクの動きが気になったタカヒト達は森を抜け出す為にその場を後にした。

守るべきもの

「なんたる醜態だ！貴様、責任の取り方はわかっておるのじゃろうな？」

チモネガの罵声がりナのいる王座の間に響き渡る。近衛兵に囲まれたチモネガは王座より大理石の階段をコツコツと音を立てながら降りてくる。王座の間に並んでいる大臣達は身の引き締まる思いで額からは冷や汗が流れ落ちていく。ドレイクとリナはタカヒト達の搜索を諦めて城に戻っていたのだ。理由は腹が減ったからだ。ドレイクは豪語した。

だが多くの部下を失い散々な戦果となったりリナへの責任追及をチモネガは緩めなかった。リナはチモネガの罵声を甘んじて受け入れ、てはいたが更にチモネガは責任を取り自害するよう強要した。沈黙を続けているリナは短刀を取り出し自ら刃を首元に突きつけた。すると王座の間にドレイクが勢いよく入ってきた。

「リナ、やめておけ。」

「何を言っておる？このわしが命令したのじゃぞ！」

激怒したチモネガの命令にリナは再び短刀を首元に近づけたがその短刀をドレイクが取り上げへし折った。大理石の床に折れた短刀が落ちると王座の間に鳴り響いた。ドレイクの身体が茶色の輝きを放っていくとチモネガの顔が蒼ざめていく。

近衛兵はチモネガを守るべく茶ドレイクを包囲したが槍を持つその手はガタガタと震えている。雇用する側のチモネガと雇用される側のドレイクという関係なのだがチモネガは常にドレイクを恐れていた。近衛兵の後ろに隠れながらもチモネガは生きた心地がしな

った。

「リナに命令したのはこの俺だ！すべての責任は俺にある。

バーカーサーの全滅とシルフの奪取は命にかけて約束しよう。」

「わっ、わかった。でっ、ではおまえにすべてを・・・任せよう。」

「

「リナも連れていくぞ。必要な人材だからな！」

蒼ざめた表情を浮かべるチモネガにドレイクは一礼するとリナを連れて出て行った。近衛兵の背に隠れていたチモネガはホッと胸をなでおろす。大臣達もホツとした表情を隠せずに穏やかな空気が流れていた。

部屋に戻ったドレイクはドサツと椅子に座るとグラスに注いだ酒を飲み干した。リナはしばらく黙ってドレイクを見つめていたが拳を握り締めると感情を一気に爆発させた。

「なんでチモネガにあんな馬鹿な約束したの？」

「言つたる。すべては俺に責任がある！」

「でっ、でも・・・だからってあんな約束をするなんて！」

リナは涙を拭いてゆっくりと座っているドレイクに近づいていくと肩に手をそつと押し当てる。その悲しげな表情をするリナの横顔を見つめながらドレイクはポツリと言った。

「なんでだろうな。軍隊を率いて国を創ろうとして・・・その為たくさんの命を、すべてを奪い取ってきた。自分が傷つくのならほ

かの奴を殺せばいいと思っただけでいまままでやってきた……だがおまえに出逢って変わったみたいだ。」

真つ直ぐ見つめてくるドレイクにリナは顔を赤らめうつむいているとその身体を押し寄せて抱きしめた。沈黙の時間が二人の間にゆつくりと流れて耳まで真つ赤にしたリナはただドレイクの温もりを感じていた。

それから数日後、ドレイクはリナのみを連れてバーカーサー討伐作戦を実行すべく出立した。敵がソウルオブカラーの使い手であるかぎり、こちらにもソウルオブカラーの使い手に対応しなければならぬ。故にそれ以外はすべて足手まといになるとバルキリー精鋭部隊の討伐作戦への投入を拒んだ。

「力の在りすぎる存在は……危険じゃ。」

ドレイクとリナが討伐へ向かった次の日、ドレイクに疑念を感じていたチモネガは自らバルキリー精鋭部隊全勢力を率いてドレイク達の後を追った。

「てんとおっく、なにやってるの？」

ドレイクの襲撃に怯えながらもなんとかノームの森から脱出することが出来たタカヒト達はバーカーサーの避難先である湖の畔に戻ってきた。ハイパイスとフーウは他のバーカーサーと共に湖の畔に残してタカヒト達は来た道に戻る。てんとの考えで以前リナに破壊されたコテージ跡地に新たなコテージを設置してここでタカヒトとミカ、ポンマンの四名はドレイクに対峙することにした。

戻った日からてんとはコテージの外に出ると毎日同じ場所で瞑想していた。いまままでにないてんとの行動にタカヒトは困惑していた。タカヒトは思い切って問い掛けたのだが問い掛けを無視するかのよ

うにてんとは黙ったまま瞑想を続けた。動揺するタカヒトにミカが近づいてきた。

「タカちゃん、てんには考えがあると思うの。だからそっとしておこうよ。」

「・・・うん」

ミカに言われて少し寂しい想いをしながらもタカヒトはその場をミカと去ろうとしたその時、てんが目を開けた。

「タカヒト、ミカ！奴が、ドレイクが来るぞ！」

「????? 何で分かるの？」

「移動しながら説明する。ついて来るのだ！」

ビククリして声をあげたミカにてんとはフーウより能力を高めてもらったことを伝えた。風を読むことで遠方の気配を感じ取る事が出来るようになった事を。風の知らせではドレイクがリナを連れてこの湖の近くまで向かって来ているらしい。迎え討つための準備を急いであるように指示するとタカヒト達は言われるまま行動した。

てんとの予想ではドレイクとリナのふたりだけで攻めてくるらしい。ということとはドレイクはバルキリー精鋭部隊を気にせず総攻撃をいきなり仕掛けるはずだ。こちらも最初から総攻撃を仕掛ける作戦を行う必要がある。コテージの護りを堅めているタカヒト達を見ながらてんとの心には少し不安が残った。ドレイク達の遙か遠く後方から多数の気配が揺れ動いていると風が伝えてきたからだ。その不穏な動きを気にしながらも今はドレイク戦にすべての力を出すと不安を振り払おうとしていた。

「リナ・・・奴らの気配を感じるか？どつやら戦闘態勢は整っているらしい。」

「どつという作戦でいくつもり？」

「作戦などないさ。奴らもこちらの気配を感じているはずだ。ならば小細工など無用。」

「一気にいくぞ！中級闘気　アースクエイク！」

馬上から闘気を高めるとドレイクの身体が茶色に輝き始める。それと同時にタカヒト達のいる地面が急にしかも立てないくらいに激しく揺れだした。タカヒト達は立っていることが出来ずに地面に膝をつきながら身動きが取れないでいるとそこに雷獣が迫ってきた。

「うわああああ、来るよ、来るよ。てんとおおおお〜！」

「安心しろ、タカヒト。予想はしていた。静かなる力を持つ者よ。我に力を！」

緑玉理力　浮遊フワフワ！」

目前まで迫ってくる数匹の雷獣にタカヒトが身動きを取れずに慌てふためいていると緑てんとがタカヒトの目前にきた。タカヒトとミカそれにポンマンの身体がふわりと浮きあがり雷獣をかわしていく。

「あわわわわわ〜〜〜！」

タカヒトが声をあげて慌てたが次第にその環境になれていく。足元には何も無いがフワフワして雲にでも乗っているような感じだった。

た。依然にもこれにより危機を免れた事もあり今回も地震からの衝撃は全く受けたくない。と同時に牡丹リナの雷獣からも身を守る事が出来ている。そんな頼りになるてんとにタカヒトがポツリと言った。

「……これって浮遊フワフワって言うんだね。」

「うっ、うるさい！名などどうでもよい。とっ、とにかくこれで攻撃は防げる！」

「ところがどっこい、そんなにうまくはいかないぜ！」

茶玉上級闘気 オーバークエイク！」

浮遊しているてんと達の眼下に馬に乗った茶ドレイクと牡丹リナがいた。そして茶ドレイクの闘気が著しくあがると揺れていただけの地面が荒々しく陥没、突起を繰り返して地面の動きが激しくなっていく。そして亀裂からマグマが噴きあがってきた。マグマは火山弾とともに浮遊しているてんと達まで飛んできた。

「桜玉理力 サクラリーフ」

桜ミカの機転によりサクラリーフでなんとかマグマと火山岩は防ぐことが出来たが茶ドレイクの後ろではリナの牡丹色がさらに輝く。

「牡丹玉ハイエレメント インドラ！」

「えっ？あああゝふっ、くっ！」

黒雲が広がると無数の雷がタカヒト達に襲い掛かった。サクラリーフでなんとか凌いではいるが上から雷撃と下からマグマと火山弾

に桜ミカの理力は消耗していく。タカヒトは桜ミカの苦しむ表情を身ながらも何も出来ない自分に嫌気がさした。そんなタカヒトの意識の中で赤玉が再びささやいた。

真打登場

（おい、タカヒト・・・やばいんじゃないかねえのか？この俺様が手を貸してやるのか？

俺様に身体を明け渡せばこんな奴ら瞬殺だぜ！）（赤玉）

「ミカちゃんや皆を護ってくれるの？だったら・・・。」

「おしつ！そうと決まれば、はやく心を開放しろ！」

タカヒトは深呼吸して瞳を閉じると心を開放していく。みるみるうちにタカヒトの身体が赤く輝きを放つていくと閉じていた瞳がひらいた。その瞳は赤く輝いている。

「へいへいへいへい 待たせたな、このやろう。真打登場だぜ！」

「別におまえなど待つてはいないがな！」

「ケツ、ノリの悪い野郎だぜ！とりあえず真打の挨拶だ！赤玉中級闘気 フレイム」

赤タカヒトが腕を大きく振り上げると地面より出た火炎柱が茶ドレイクを襲う。茶ドレイクも地上に手を押し当てると地面から土柱を突き出し火炎柱のすべてを防いだ。

攻守交替するかのように火炎柱を受け止めた茶ドレイクの後ろから牡丹リナが飛び出してくると頭上から雷撃が赤タカヒトに襲いかかる。

「ナメンな！」

雷撃を赤タカヒトは巨大な火炎の盾を創りだして受け止める。雷撃を受け止めると同時に火炎弾を撃ち込んで反撃するものの茶ドレイクの鉄壁の防御と牡丹リナの雷撃によるコンビネーションの前に少はずつではあるが赤タカヒトは押されつつあった。戦況不利と見た赤タカヒトが意識の中の紫玉に問い掛けた。

「おい、紫玉！聞こえっか？・・・かなりヤバイことになっちゃまったぜ。」

「・・・行き当たりバッタリの行動が裏目に出たな。自業自得だ！」（紫玉）

「つんだと、コラ！何、上からもの言ってるんだよ。ケツ、てめえの助けなんざいるかってんだよ！」

（紫玉・・・お願い、手を貸してあげて。僕は皆を護りたいんだ。）（タカヒト）

「?・・・タカヒト！おっ、おまえ・・・意識があるのか？」

赤タカヒトはビックリして浮遊している場所で引っくり返った。赤タカヒトを狙って牡丹リナが雷撃を撃ち込んだがひっくり返ったおかげで運良くかわせた。

「あつ、あぶねえ〜・・・」

（うん、理由はよくわからないんだけどね。ねえ、紫玉・・・赤玉と僕と三人で協力していこうよ！じゃないと皆を護れない。）（タカヒト）

「そつだそつだ。協力していこうぜ、紫玉。俺達とタカヒトが力を合わせれば確実に勝てるぜ。俺様には考えがあるんだ！」

（おまえの考えには従えないがタカヒトには従わねばならない
・・・ところでおまえが真打なら私はなんなんだ？） （紫玉）

「！・・・まっ、まあ、いいじゃねえか。ほら、いくぜ！」

（・・・） （紫玉）

少し納得のいかない紫玉であるが赤タカヒトに力を貸すことにした。赤タカヒトの身体を包み込むように紫色のオーラが揺らぎだしていく。両手を広げ赤紫に輝くその姿は神々しく目を覆うほどだった。戦いが激化していくと察した緑てんとは桜ミカとポンマンと共に地上に降り立つと事態の成り行きを見守っている。

「おらおらあゝきたぜ！きたぜ！きたぜえゝゝ 最高のパワーがよおおゝゝ！」

赤タカヒトの身体のまわりを更に紫色の輝きが包んだ。緑てんとポンマンはその異様な変わり様に驚愕していた。しかし桜ミカだけはどんな姿になるうともタカヒトのことを信じていた。

「リナ、奴は何か仕掛けてきそつだ！注意しろ。」

茶ドレイクは牡丹リナに警戒するように伝えた。その様子を上空でうかがっていた赤紫タカヒトは一気に茶ドレイク目掛けて急降下していく。瞬時に間合いに入った赤紫タカヒトは拳と蹴りの連撃を繰り出していく。茶ドレイクは驚愕しながらもそれを素早くかわし

ていった。赤紫タカヒトは茶ドレイクに確実なダメージは与えられず、ほんの少しでも隙を見せると牡丹リナの雷撃が襲い掛かってきた。緑てんと達の援護を得ようにも牡丹リナは赤紫タカヒトとてんと達の二方向への同時雷撃を繰り返しているために期待はできない。消耗戦となっていく戦況を確認すると茶ドレイクは標準を緑てんと達に向けた。牡丹リナと茶ドレイクの闘気が異常なほど高まって、茶色と牡丹色の輝きが混ざり合うように広まっていく。一気に勝負を仕掛けてきた茶ドレイクと牡丹リナ！

「リナ、いくぞ。複合技だ！ 茶玉最大闘気 ガイヤ！」

「はあぁぁぁ 牡丹玉オーバーエレメント リ インドラ メガラウンド！」

「大地の怒り！茶玉牡丹玉複合技 雷激怒！」

大地から巨大な大岩石が出没してくるとその大岩石に頭上から雷が降り落ちてくる。茶ドレイクと牡丹リナの創りし雷を帯びた大岩石が緑てんと達に襲い掛かる。緑てんとと桜ミカの防御に翡翠ポンマンの増幅力を合わせても雷激怒は防ぐことは不可能。そう判断した赤紫タカヒトは緑てんと達の前方へ瞬時に移動すると闘気を一気に高める。赤色と紫色のふたつの輝きが混ざり合うように強く光っていく。

（赤玉よ。どうするつもりだ？

いくら私達が力を合わせても奴らの複合技は受け止めきれない

ぞ！）（紫玉）

「安心しやがれ！ここでタカヒトの力を使うんじゃねえか。」

(えっ？僕の力？)(タカヒト)

雷激怒は茶玉と牡丹玉の最大闘気の複合技であり、今の赤玉の上級闘気と紫玉の上級理力の複合技ではとても敵わない。そこでタカヒトの持つ徳の水筒を使い一時だけ能力をあげて雷激怒に対抗する。

「それでも雷激怒に勝てる保障はないけどな！」

(どちらにしてもやらなければならないみたいだな。)(紫玉)

「そういうこっちゃ。やらなきゃやられる。やらなければ確実に死が待ってんだ。」

やるしかねえぜ！なあ、タカヒト！」

(うん、僕は赤玉と紫玉を信じてる。みんなで生き残るんだ！)

(タカヒト)

赤紫タカヒトが徳の水筒を口に含むと赤紫色に輝いているその身体を金色のオーラが包んだ。てんが、ミカが、ポンマンが雷激怒の接近に何度目かの死にすべてを諦めかけている。迫り来る雷激怒を金色の赤紫タカヒトが受け止めると踏ん張りきれずに両足が地面に減り込んでいく。

「ほう、受け止めるか。リナ、エレメントを高めろ！」

茶ドレイクと牡丹リナが更にエレメントを高めると少しずつだが雷激怒が押し迫ってきた。両腕で支えているがあまりにも巨大な大岩石に金色の赤紫タカヒトは押されつつあった。気づけばてんと達のある位置まで近づいていた。

「もうダメだ！」

あまりの恐怖にポンマンは身をすくめて座り込んでしまった。今、
てんとやミカ、ポンマンのすべてが託されている金色の赤紫タカヒ
トの両腕は雷により焼け焦げ始めた。

「あちっ、くそが！ 熱いじゃねえか!!！」

激痛を堪えながらも守るべき大切な仲間の為に金色の赤紫タカヒ
トは渾身の力を振り絞っていく。これが最後の攻撃となる・・・。

（僕は諦めない！皆を護るんだ！）（タカヒト）

「おおし、やってやるぜ！」

（私はタカヒトと共にいる）（紫玉）

「はあああゝゝ・・・!!！」

赤紫玉上級闘気複合技 徳の力 バージョン 金色いゝ紫炎キ
ヤノ〜ン!!！」

金色の赤紫タカヒトが金色に輝く紫炎キャノンを放つと迫りくる
雷激怒と拮抗していく。徳の水筒の影響なのか更に勢いを増してい
く金色紫炎キャノンは拮抗を破ると雷激怒を押しした。闘気が高まっ
ていく金色の赤紫タカヒトとは逆にリナのエレメントは限界が近づ
いてきた。

「ああああゝもう、限界!!！」

ついに力尽きたリナのエレメントが小さくなると雷激怒の力が弱まり一気に体勢が逆転して金色紫炎キャノンが押していく。弱まった雷激怒は碎け散り金色紫炎キャノンが茶ドレイクとリナに襲い掛かる。茶ドレイクはリナに覆い被さり金色紫炎キャノンの直撃を受けた。

「ドレイク！」

「ガハッ！・・・」

リナを抱きかかえながらもその身体に受けたダメージは相当大きい。両膝を地面につけ、ドレイクにもはや攻撃を仕掛けてくる気配はない。

灰玉の力

金色紫炎キャノンが直撃したドレイクは逃走を計るが膝から崩れ落ちもはや反撃できる状態ではなかった。リナを抱きかかえながらタカヒトの攻撃を警戒しているドレイク。

「はん、いよいよ幕引きだな！トドメだ！！」

金色の赤紫赤タカヒトはドレイクに接近すると拳を固めた。だがその時、金色の赤紫タカヒトに異変が起きた。両手は力が抜けたようにだらんとたらし、膝がカクンと曲がると地面に倒れ込んだ。

「なつ、何だ？・・・この脱力感は??」

膝まずき何の抵抗も出来ない金色の赤紫タカヒトを見下すようにリナを抱きかかえたドレイクは立ちあがった。

「どうやら形勢逆転のようだな。」

何も出来ない金色の赤紫タカヒトはドレイクの服にしがみつき最後の抵抗をした。その手を蹴飛ばすと冷静にドレイクは灰玉の力を明かした。ソウルキラーである灰玉はすべての能力を無効にする。つまりどのような能力を持っていても灰玉の能力の前に成す術がないのだ。能力が使えない金色の赤紫タカヒトの表情は絶望感でいっぱいだ。

「この灰玉さえあれば俺は無敵だ！」

「くっ、あと少しだったに・・・なんちゃって！」

「何????」

「バアゝカ。なあゝんもわかつちやいねえなあゝ。お・し・ば・
いだよ！灰玉の能力を俺様が知らなかつたとも思つたのか？徳の
水筒にはバリアの効力もあるんだぜ。だから灰玉の能力は俺様には
効かないってわけだ！だけど・・・おまえは違つよな？」

「ぐっ!!!」

「灰玉はソウルキラード！それはもちろんおまえにとつてもな。
灰玉の能力を使っている時は茶玉も牡丹玉の能力も無効だ。だが俺
様は違つ！さてと・・・大トリの最後の派手な演出だ。くらいやが
れ！赤玉上級闘気　メガフレア」

ドレイクの眼下に膝まずいていた金色の赤紫タカヒトから激しい
火炎柱が放出される。リナを左腕で抱きかかえるとドレイクは右腕
で火炎柱を受け止めた。

「ぐがあああゝゝ!!!」

「ドレイク!!!」

激しく燃える火炎柱にドレイクの右腕は黒く皮膚はただれ大量の
血が流れた。地面に焦げ落ちた腕は燃え尽き、苦しみがくドレイ
クに金色の赤紫タカヒトはトドメを刺そうとした。しかし寸前のと
ころでリナが金色の赤紫タカヒトの前に立ち塞がった。痛みを堪え
ながら右肩を止血するように左手でおさえているドレイクを守るよ
うに両腕を広げ金色の赤紫タカヒトを真っ直ぐ見つめて対峙してい
る。

「もう傷つけさせないわ。私が守る！」

「そうかい。じゃあ、おまえから・・・なんだあれ??」

砲玉が飛んできたことに気がついた金色の赤紫タカヒトは火炎の波でそれを受け止めた。その直後、徳の効力が消え、赤紫タカヒトから金色の輝きがなくなった。砲撃の先を見るとチモネガがバルキリー部隊を引き連れて総攻撃を仕掛けてきていた。すると赤紫タカヒトの無事を確認したてんと達は繰り返し返される大砲撃に対してすべての力を防御に注いだ。赤紫タカヒトとてんと達はバルキリー部隊の大砲撃に防戦一方で後退を余儀なくされた。そんな赤紫タカヒト達をチモネガは嘲笑っていた。

「ガツハツハツハツ　もはや敵は虫の息じゃ！攻撃を続ける・・・なんじゃ？ドレイク！増援がきたのじゃ。あやつらをはよう仕留めよ！」

チモネガの罵声が辺りに響き渡りドレイクは必死で立ちあがろうとしていたのだが出血があまりにも酷くりなに支えられなければ立つ事も出来ないほどであった。複数のバルキリー兵士の担ぐ神輿のような形の王座に座っているチモネガの目には右肩から先を失い瀕死状態のドレイクの姿が映った。そこにはいつもの勝ち誇ったドレイクの姿はなく血と泥に塗れた哀れな小さい存在に見えた。王座の上でニヤニヤ笑いながらチモネガは吼えた。

「この役立たずめが・・・ドレイクもろとも叩き潰せ！」

チモネガは赤紫タカヒト達のみではなくドレイクとリナの抹殺も命じた。バルキリー全部隊が前面に進んでくるとリナの切実な声も

届かず総攻撃が開始されていく。右腕を失い瀕死状態のドレイクを守っているリナの防御も圧倒的な砲撃の前に屈していく。激しい砲撃に地上は砂埃が舞い上がり草木に火が燃え移り辺りが炎で包まれていく。追い詰められていく状況の中ミカがドレイクとリナの近くまで走っていくと桜玉理力サクラーフを放った。思いもつかないミカの行動にリナは呆気に取られていた。ミカのサクラーフはバルキリー部隊の総攻撃からリナとドレイクを守っている。

「……どうして？私達はあなた達を殺そうとしていたのよ！」

「そんな事わかってる。でも……あなた達のこと、ほおっておけないの！」

懸命にそして必死にリナとドレイクを守っているミカ。砲撃が増してサクラーフも限界に近づいているがそれでも理力を高め抵抗している。

「……ありがとう」

涙ながらにリナは呟くと傷ついたドレイクを抱きしめた。

「撃て、撃て、撃ち殺せ！」

砲撃がミカに集中するとサクラーフの一部にヒビが入り割れ始めた。異変に気づいたバルキリー部隊はその部分を集中的に狙って砲撃してくる。砲撃に振動にリナの胸元に頭を埋めていたドレイクが言った。

「ドレイク……」

「ぐうつ……どいてろ、リナ。」

蒼ざめた表情のドレイクは闘気を振り絞り地面に左手を押し当てると地面が激しく揺れ、亀裂が走っていく。バルキリー部隊いる地盤が大きく裂け崩れると砲台の標準は定まらず砲撃が一時的に止まった。

「リナ……逃げるんだ……」

ドレイクはこの場から逃げるようにリナに伝えたとそのまま気を失った。ミカはサクラリーフを消すとリナと共にドレイクの肩を支えながら防戦中のタカヒト達のところまで歩いていく。ミカは勢いでリナ達のもとまで走ってきたがタカヒト達との距離はそれほど遠くはなかった。ポンマンが手を振って安否を気にしている姿がミカからも見えた。ミカとリナはドレイクを引きずり歩いていくが体格の良いドレイクは重く思うように近づけない。

「いで……おのれえ……」

地盤の崩れにより神輿の王座から転落したチモネガは顔中が泥まみれとなり怒りに震えていた。その眼に逃走していくドレイク達の姿が映ると歯ぎしりをして立ちあがった。兵士が持っていた小銃を取り上げると標準を合わせた。

「ドレイクウ……死ねえ……!」

気絶していたはずのドレイクは殺気を感じると無意識にリナとミカを地面に押し倒すと自らが二人の盾となるべく覆い被さった。砲撃が止まっている中で銃声が確かに鳴り響いた。突然のことにリナは状況がわからなかったがドレイクの口から血が流れ倒れている姿

が瞳に映った。ミカは再びサクラライフを繰り出すとチモネガの銃撃からふたりを守る。桜ミカの足元では倒れたドレイクをリナが呆然と見つめていた。

「ド・・・ドレイク？・・・ドレイク・・・」

胸の出血は止まらず口からも大量の血を吐いたドレイクを抱きかかえリナは必死で呼びかけた。だがほんの少しの笑みを浮かべるだけでその顔は次第に蒼ざめていく。地盤が安定して攻撃態勢を整えていくバルキリー部隊の砲撃が再度開始していくと赤紫タカヒト達の防戦が続く。

「くそつたれめ！・・・いつまで続くんだ！」

防戦はひたすら続き闘気が弱まっていくなか赤紫タカヒト達に対してバルキリーの総攻撃はさらに勢いと強さを増していく。彼らは成す術も無く終わるしかないのか。

戦いの結末

砲撃は収まるどころか強さを増していく。辺りは硝煙と砂埃に包まれていた。それでもまだ赤紫タカヒト達の必死の抵抗は続いていた。チモネガが勝利を確信していた頃、チモネガのもとへ指令官がやってきた。司令官の話によると北の方角より正体不明の者がたつたひとりでこちらに向かっているとのことだった。勝利に浮かれていたチモネガは急に不機嫌な顔をしだした。

「それがどうしたというのだ！それくらいのことではいちいち……
一個小隊で十分おつりがくるであろう！」

「お言葉を返すようで申し訳ないのですが、すでに第五部隊を投入済みなのです。」

しかし……応答がなく……」

「なんじゃと？……もう一度申してみよ！」

チモネガは耳を疑り指令官にもう一度聞きなおした。一個小隊は百人程度で中隊が千人程度。ひとつの部隊ともなれば一万人の規模にもなる。バルキリー部隊は第十部隊あり、第五部隊といえは全部隊中で最強と言われている。なかでも第五部隊長のキルギルスは凶暴、残虐、好戦的な男である。

「キルギルスが敗れるはずはないであろう……」

第一から第四部隊総勢四万の兵士を送り込むのじゃ！」

今回の戦はすでに勝利していると信じきっているチモネガは兵士

の半分を正体不明の者に投入した。兵士達は戦場を後にして命令通りに出立していった。

「おい・・・なんか攻撃が弱まったんじゃないか？」

赤紫タカヒトやてんが気づくのは当然だった。勝利を確信したチモネガは北の方角より来る正体不明の者への攻撃に部隊の半分を投入した為、攻撃が弱まったのである。

「赤紫タカヒト、撤退するぞ！ミカを頼む。」

「おう、任せろ！」

てんとは赤紫タカヒトにこの場から退避することを伝えると赤紫タカヒトは砲撃をかわしながらミカのもとへ飛んでいく。

「砲撃が弱まったわ。早く逃げましょう！」

「・・・ありがとう。でも一緒にはいけない。私達は大丈夫だからはやく行って！」

「えっ？なんで・・・？」

「おい、ミカ・・・行くぞ！」

赤紫タカヒトはミカがいる場所に到着するとミカとリナが向かい合って話していた。ミカはリナ達との撤退を望んでいた。しかしリナは違った。強い意志と笑顔を見せたりナを察した赤紫タカヒトは何も言わずにミカを抱きかかえると飛んでいく。

「ちょっと、待って！まだ・・・」

「リナの意志がわからないのか？」

「えっ・・・！」

赤紫タカヒトの言葉にミカはリナの考えを察すると涙で頬を濡らした。ミカは少しずつ小さくなっていくリナ達の姿をずっと見つめていた。大量の血を流したドレイクはすでに意識はなくなりナはギュッと抱きしめていた。創りあげた雷の盾により砲撃は直撃すること無くドレイクの冷たくなった顔を撫でながらリナは語りかけた。

「いい子だったね・・・どうして私は大切な人を傷つけて失ってしまうのかしら？」

もし生まれ変われたら・・・ふたりで争いの無い世界へ・・・

涙を流しながらリナは冷たいドレイクを強く抱きしめると右手を挙げ最後の力を振り絞っていく。牡丹玉ハイエレメントインドラを頭上に創りあげるとバルキリー部隊はその巨大な雷玉を恐れ、砲撃を止めて逃走しだした。部隊の逃走と雷玉の恐怖にチモネガもその場から逃走していく。リナを取り囲んでいたバルキリー部隊はいなくなりこの地にふたりつきりとなった。

リナは冷たくなっていくドレイクの身体を抱きしめるとその頭上に雷玉が落ちてくる。地上に落ちた雷玉は激しい光と衝撃を撒き散らした。それが収まった頃・・・ふたりの姿はそこにはなかった。

「チモネガ様・・・部隊が全滅いたしました！」

「なっ・・・なんじゃと！」

チモネガは持っていたグラスを落とす。それはリナの雷玉から逃げ出して北の方角へと向かっている途中での報告だった。チモネガは敗走したのではなく敵を殲滅させ撤退しているのだと部下達に言い聞かせて次なる敵の殲滅に向かう行軍しているのだと豪語した。落ちたグラスからは酒が飛び散り先の戦の勝利の余韻を味わっていたチモネガの顔を一気に蒼白くさせた。

バルキリー兵士四万人も投入したのだから負けることなど有り得ないはずなのだが送り出した全部体の全滅。唯一の生き残りである兵士が報告してきた。

「正体不明の者がこちらへ進路を向けてきています。撤退を！」

「ええい！全戦力を投入せよ。殺せ！」

不安と恐怖に支配されたチモネガは勝利の余裕など微塵もなくなり声を荒げた。その頃、戦場からの退避に成功したタカヒト達は湖の畔まで辿り着いていた。しかし追手の追撃を警戒したてんとはタカヒトを連れて戦場へ飛んでいった。

そこで彼らが見たものは北の方角へ多数のバルキリー部隊が向かっている光景だった。それはまるで押し寄せる波のようにも見えた。そしてその押し寄せる波の先にひとつの人影が見える。てんとの視力は人間に比べて非常に高くその人影を見ることができるとてんとは驚愕した。

「ジエイド！！！」

「・・・なんでここに？」

てんとのかなり動揺した態度と発した言葉にタカヒトは問い掛け

た。ジェイドなぜここにいるのか？それ以上にあの多数のバルキリー兵士を相手にジェイドたったひとりで立ち向かうのか？助けるべきなのか？てんとの頭の中をいろいろな感情が交錯していく。てんとはジェイドの様子を観察する。

「砲撃開始 撃てえ〜〜！！」

砲台が火を噴くと星の数ほどの砲玉がジェイド目掛けて襲い掛かる。だがジェイドにはまるでダメージを与えることが出来ない。砲玉がジェイドに当たる遙か手前で凍りつき地上に落ちていくのである。砲撃を諦めたバルキリー部隊は第六部隊と第八部隊の二万人の騎馬部隊による挟み撃ち攻撃を展開する。襲い掛かる騎馬部隊に無表情なジェイドは左右の腕をゆっくり広げると右腕は蒼色に左腕は青色に輝き出す。

「青玉最大理力 龍撃波、 蒼玉最大理力 アイスワールド！」

ジェイドの左腕から巨大な水龍が飛び出すと顎を開き第八部隊の騎馬兵達をすべて飲み込んでいった。そして右腕から一滴の氷の粒が地面に落ちると地面が一気に凍り第六部隊の騎馬兵達は生きていたまま氷漬けにされていく。ジェイドがふたつのソウルオブカラーを放つてから数秒後に第六部隊と第八部隊の二万人の騎馬兵がこの世を去った。

「……壊滅じゃとー！」

戦果を聞いたチモネガの顔は油汗と恐怖にまみれ膝はガクガクと震えて立っていることもままならない。近衛兵に支えられながら王座に座ると震える声を振り絞った。

「第七・九・十部隊の総勢三万人のバルキリー銃火気兵を投入せよ！すべての火気を使いあの悪魔を倒すのじゃ！」

「てんと、なんでジェイドがここにいるの？」

「……何の考えもなく行動する奴ではない。何か考えがあるはずだ……見る！バルキリー部隊が総攻撃をかけるようだぞ！」

てんとが指さす方向にタカヒトが目を向けると莫大な数の銃火気兵がジェイドのいる方向へ行軍していく。もし自分達にあの数が襲ってきたらどうなっていたのだろうか？

そんな事を考えるとてんとは急に寒気がしてきた。バルキリー銃火気部隊の勢いは凄まじく、ジェイドの姿を確認すると莫大な数の砲撃と銃撃が開始された。しかしどのような攻撃をしてもジェイドにダメージを与えることが出来ない。

「撃て、撃て、撃て！」

「師団長！残弾が残りわずかです。」

「補給部隊はまだ来ぬのか？」

「残弾が切れました！」

「これまでか！」

弾薬を使い果たして戦意を失うバルキリー銃火気兵達にジェイドが両腕を差し向けるといままで見ただけでもないほどの蒼色と青色の輝きがジェイドを包み込んだ。

「蒼青玉最大理力複合技　ディノ・デビル・イノセント！」

三万人のバルキリー銃火気兵達の足元から水が湧きあがると一気に腰まで浸かり身動きが取れないようになった。次の瞬間、その腰まで湧きあがった水が凍りつき完全に動けなくなると銃火気兵達は混乱していく。頭上から巨大な水の塊が落ちてくるとそれは銃火気兵達を包み込むように地上すれすれで浮遊していた。動けない銃火気兵達の身体が水の塊の中でもがき苦しんでいる姿がてんと達している場所からも確認出来た。

身動きも息も出来なく、もがき、苦しみ、恐怖を味わいながら溺死していく銃火気兵達をジェイドは何の感情もなく冷酷な眼差しで見ている。ジェイドの目の前には下半身は凍りつき上半身が水ぶくれの溺死した三万人の銃火気兵達の屍が彫刻の像のように立っていた。それらを迂回してジェイドは歩いていく。

「・・・強すぎる！奴は・・・ジェイドの力は私の想像を遥かに凌駕している。」

今の我々では・・・とうてい勝てない。」

失意のてんとはタカヒトと共に皆のいる湖の畔へ向かった。その道中てんとはジェイドのことをずっと考えていた。どうすれば・・・しかしその答えは見つからなかった。どう足掻いてもジェイドには勝てはしない。出来れば遭わずにいたい。願望にも近い想いだけが今のてんを支えていた。

「これだな」

その頃、ジェイドは捜していたものを見つけた。足元には光輝く茶玉と灰玉が寄り添うように並んでいる。そしてそのふたつのソウ

ルオブカラーを拾い上げた。

「第一段階完了・・・と言ったところか。」

次の瞬間ジエイドはそこから消え去った。最悪の事態を免れたてんと達であった。

一方チモネガはというと・・・

「ぜえぜえぜえ・・・こっ、ここまで来ればもう大丈夫だ。」

ジエイドに勝てないと察したチモネガはバルキリー部隊に総攻撃をさせておきながら自らは逃亡を図っていた。山脈と山脈の間の谷を抜ければ誰も知らない洞窟がある。そこはチモネガが密かに造らせた建物が存在する場所だ。もちろんそれを造った者たちはすでに抹殺されてこの世界にはいない。

その建物にはチモネガの貯め込んだ財宝がある。誰も信じられないチモネガが唯一信じれるのは財産だけである。チモネガは城に残してきた財宝の一部を担ぎ汗を掻きながらも一心不乱にその建物を目指していく。

「ワシにもものじゃ〜。」

これさえあればワシは地位を保てるのじゃ！誰にも渡しわせぬわ！」

チモネガの目指す場所は谷を抜けた先にありそこまで細い谷の道が続いている。先を急ぐあまり足元に注意が及ばず細い道に数箇所亀裂があることに気がつかなかった。

「おわっ・・・！ワシの財宝が！」

チモネガは足を取られ担いでいた財宝が谷底へ落ちていく。自らも体勢を崩したが命より大事な財宝を守ろうと必死に支えている。しかしあまりの重さに引き上げること出来ず財宝と共に谷底へ落ちていった。

「ゲホツ、ゲホツ・・ワ・・シの・・・・・」

冷たい谷底で散らばった財宝だけがうつ伏せになって死んでいるチモネガの姿をずっと見つめていた。

「てんと、何をしてるの？」

チモネガ率いるバルキリー部隊との戦は終戦を向かえ、タカヒト達はバーカーサーと共に勝利の祝杯をあげていた。てんとは皆の輪から離れて独り波打つ湖を眺めて、心配したタカヒトとミカがてんとに声を掛けたのであった。てんとの頭の中にあるのはジェイドのことだけだった。

何故、ジェイドはこの世界にいたのだ？

復讐？いや・・それだけで行動するわけがない。

きつと裏で何かとてつもない事が起こっているはずだ。

この時のてんには天道やほかの世界に衝撃的な出来事が起こるうとは夢にも思わなかった。数日が経ちタカヒト達に旅立ちの日が訪れた。ハイパイスの具合も完全に回復して湖の畔に新たなコテージを建てバーカーサーの生活も安定してきた頃、タカヒトの業の水筒が赤く輝き出したのだ。タカヒトの業の水筒の量も最初に比べてかなり減ってきてはいたがそれと共に徳の水筒の量も減っていた。

椅子に座りながらタカヒトは次の世界への希望と不安の感情が交

差する・・・そんな想いに包まれていた。テーブルの上に置いてある徳と業の水筒を眺めながら、ふとミカに目を向けると笑顔でバーカーサーの子供達の遊び相手をしていた。

「ねえ、ポンマン。ミカちゃんっていつも笑顔だけど不安とかないのかな？」

「・・・先のことなど誰にもわかりはしないし不安がないわけでもない。今、この時間をミカは大切にしたいのだろう。ミカは聡明な子だ。先見の明もある。そのうえで不安を押えながら笑顔でいられる・・・タカヒト、いい子と出逢えたな。」

ポンマンにそう言われてタカヒトは顔を赤らめながらミカを眺めていた。ミカがいたからいままで頑張れた。このままミカとてんと・・・あとポンマンと一緒に居られればいいなとタカヒトは思っていた。その頃、てんとはシルフの部屋を訪れていた。てんとはジエイドとのことをシルフに話した上で今後について良きアドバイスを貰おうとしている。シルフは沈黙の後、ただ一言だけをてんに伝えた。

「水の精霊ウンディーネといずれ会えるときが来るでしょう。あなたとジエイドは」

何かの運命的な繋がりがあるようですね。

その答えをウンディーネなら導いてくれるでしょう。」

「水の精霊・・・ウンディーネ・・・」

それから数日が経ち、てんがウンディーネの事を考えているとタカヒトの持つ業の水筒が赤から真紅へと変わりいよいよ旅立ちの時がきた。

「タカヒト、いろいろ世話になったな。ありがとう」

「そんな・・・世話になったなんて。」

「小麦の収穫日には戻ってこいよ。皆で待っているからな。」

湖の畔に新たなコテージを造り、バーカーサーもいままで同様穏やかに生活していく。別れの日にはタカヒト達をバーカーサー達が感謝を込めて歌を歌い送り出そうとしてくれた。そんな姿に涙を浮かべているミカの手をタカヒトはそっと握る。ハイパイスが、シルフが、そしてバーカーサー達が見守る中、業の水筒が真紅の輝き包まれるとタカヒト達はその場から消えていった。タカヒト達が消えてもバーカーサー達の歌声は止まず、森中に響き続けていた。

地獄道の猛者

辿り着いた場所は紛れもなく地獄道だとてんと言った。だがタカヒトが想像していた地獄道とはかなり違っていた。真つ暗な場所で隣にいたミカ達の姿ははっきり見えるが辺りは何も見えない。

そこは以前タカヒトとミカが見たことがある狭間のような場所に見えた。

「本当にここが地獄道なの？」

「そうだ・・・地獄道とは言っても狭間に近い空間と言ってもいだろうがな。地獄道でも最もはずれに位置する場所だ。」

「そうなんだ・・・。」

急に不安を感じたミカはタカヒトの手をギュッと握った。そこへ見覚えのある一台の車が近づいて来た。それがすぐに徳寿の車とわかったのだが・・・様子が変だ。

車からは黒い煙が出て、タイヤは一本取れていた。タカヒト達の前で止まると強引にドアを外して煙と共に徳寿が現れた。

「ゴボツゴボツ・・・タカヒトではないか！こんな所で何をしておるのじゃ？」

「業の水筒に運ばれて来たんだ・・・それよりとくべえさん大丈夫？」

「まあ。じゃが、奴らより先に見つけられて良かったわい。こも安全というわけではない！着いて来るのじゃ・・・やれやれ、

「当分パン屋も休業じゃのお。」

徳寿が車から出てくると火は勢いよく燃えあがった。徳寿はタカヒト達を連れてその場を離れていく。燃えあがる車から少し離れた上空を二匹のデモンズが飛んできた。一匹のデモンズが燃えあがる炎を確認すると指さした。

「おい、見つけたぞ！しかし・・・あれでは生きてはおるまい。」

「死体確認との命令だ。」

「確認は無理だ！」

炎が消えフレームの一部だけが残っている程度で残りのすべてが灰になっているところにデモンズは到着した。デモンズの身の丈は180センチ位で背中には黒い翼が生えている。全身が黒くクチバシを持ちカラスのような姿をしていた。何も残っていない車の残骸を確認すると無言のまま二匹は飛び去っていった。

「どうやら、気づかれなかったようじゃ。」

独り徳寿はデモンズの様子を確認するとホッと一息ついた。天幕に戻ると徳寿は沸かしていたコーヒーを皆にご馳走した。黒色の天幕に入っていたタカヒト達の姿がデモンズに発見されることはなかった。予想だにしない出来事にてんとは徳寿に原因を聞こうとしていた。徳寿はコーヒーを一口飲むと話を始めた。

今、現在地獄道の世界は破壊神と呼ばれる者が治めている。地獄道は最も罪深い者の行き着く先であるため、あらくれ者が多い。そのため天道より派遣されていた閻魔大王と地獄道屈指の鬼達はその強力な力であらくれ者達を抑え秩序を守っていた。しかし突然現れ

た破壊神の圧倒的な力に閻魔大王と鬼達は屈したのだ。

破壊神には三獣士と呼ばれる者達がいる。陸地を制するギガスはヘルズなる兵士を率いる。水中を支配するカオス。そしてさきほど見たデモンズを率いて空を支配し、三獣士の中で最も強力な力を持つアレス。タカヒト達はリディーネを激波したときに現れた男がアレスだと徳寿の説明でわかった。赤紫タカヒトの最大級の攻撃を跳ね返したその力はまさに強力なものだった。

「・・・・・・・・」

話を聞き終えたタカヒトは沈黙していた。人道の世界へ、元の世界にミカと一緒に帰りたい！しかしこの地獄道で破壊神や三獣士とその軍団を相手に勝てるわけがなく、それどころか生き残る保障もない。戻る事も先にも進めない！そんな思いがタカヒトとミカを苦しめていた。てんとはほかにもジェイドがいつ襲い掛かってくるかも不安要素となっていた。ドンヨリした空気を払拭しようと徳寿はロールパンを用意した。

「まあ、とりあえずロールパンでもどうじゃ？車をデモンズにやられてのお〜。」

「なんとかこれだけ持ってきたんじゃが・・・・どうじゃ？」

「へえ〜 うまそうだなあ〜。」

ポンマンはロールパンに手をやるとムシヤムシヤ食べ始めた。ポンマンの笑顔を見たミカもロールパンを手にすると言った。

「悩んでいてもなにも変わらない。今はとくべえさんのロールパンを食べよ。」

「うん・・・そうだね。」

ミカに促されてタカヒトも食べ始めた。笑顔でロールパンを食べ終えた彼らを見て徳寿はこれからのことを話し始めた・・・。

「じゃあ、てんと・・・行ってくるね。」

「ああ・・・気をつけていくのだぞ。」

タカヒトとミカは徳寿に借りた麒麟に乗り天道に向かうことになった。てんとと出会いずつと一緒にいられると思っていたタカヒトはまさかこんな別れがあることなど思いもしなかった。昨日徳寿に言われたこと。それは・・・

「おまえ達にはあることを頼みたいのだが今のままでは駄目じゃ

・

今のままでは地獄道で待っているのは確実な死だけじゃ！」

徳寿はいままで見せたことのない厳しい表情をするとタカヒトの背中に冷たいものが流れた。しかしいままでいくつもの死の危険を乗り越えられたのはてんとをはじめ、たくさんの仲間の協力があつたからである。この地獄道でも力を合わせればなんとかなるとタカヒトは徳寿に食ってかかった。少しの沈黙の後、徳寿は再び話した。

「ふむ・・・たしかにタカヒトにてんと、ミカそれにポンマンの能力を増し強くなつてはいる。じゃが・・・この地獄道はいままでの世界とは異質なのじゃ。」

先の戦で修羅王と、いやドレイクと言ったかのおく。ドレイクの

力を100としよう。赤紫タカヒトとなつた力が105として先ほどのデモンズ一匹の力は・・・少なくとも80じゃ。しかも奴らは群れで行動をする。この意味がわかるかの？」

この言葉にてんとも納得せざる得なかつた。徳寿の判断は適切であり徳寿ほど能力を持った者がデモンズから逃げて隠れたのである。それだけこの地獄道が恐ろしく危険な世界であることだけはわかつた。徳寿の話によればこの世界を乗り越えていくにはタカヒトやミカ、てんとにポンマンのソウルオブカラーの能力をあげるしかないらしい。

そこで徳寿はタカヒトとミカに天道へ向かいある人物に逢うこと。そしててんとは地獄道の世界のどこかにいる水の精霊ウンディーネに逢うことを促した。

「てんと達も気をつけてね。」

麒麟はゆっくり歩き出すと少しずつ浮遊してそのまま駆けあがるように天空を目指していく。てんと達が遠く小さくなっていくのをタカヒトは涙を堪えながらずっと見つめていた。てんともまた、天空へと向かっていくタカヒトを眺めていた。見えなくなってもずっとその場を動こうとしないでてんとにポンマンは声を掛けた。

「てんと・・・なんか寂しくなるね。」

「・・・いつか逢えるさ。」

そう・・・また逢えると信じて・・・

その名は死神ディーノ

「何処まで行くんだろ？」

「わからないわ。この子に聞かないと……。」

ミカは麒麟の首を撫でた。てんとにいる場所から飛び立ってかなり時間が経った。今はただ雲の中を天へ突き進んでいくだけだった。それからどれくらい経ったのだろうか……雲を抜けて青空の見える場所に辿り着いた。麒麟が雲の上に降り立つとゆっくり腰をおろした。

タカヒト達は辺りを見渡したが雲と青空以外何も見えなかった。変化のない光景に麒麟の背中中でウトウトすると睡魔に襲われたタカヒト達は眠ってしまった。

「……よ……よお……お……き……てけ……れ おきてけれ！」

タカヒトとミカはビックリして飛び起きた。目の前には異常に顔がデカくしかも顔の半分を占めるほどのデカイ一つ目の恐ろしい魔物がいた。タカヒト達は麒麟の背中を降りるとキョロキョロと辺りを見渡した。タカヒトは心の中で魔物？と警戒していた。その表情を見た一つ目はクスツと笑うと口を開いた。

「残念ながら魔物ではないらよ。」

「！……僕の心が読めるの？」

「アハッ、違つらよ。そんな顔してたら誰でもわかるらよ。」

一つ目は自らをディーノと名乗り徳寿より使命を受けていると言った。本来なら天道で会うことになっていたがディーノは天道が嫌いだと言う。その代わり気に入っているこの場所で会うことに勝手にしたらしい。もともと麒麟はディーノのペットである為、主人のもとに来る事は当然だと豪語した。長いディーノの話を聞いている間もタカヒトは地獄道で待っているてんと達のことを考えていた。

「僕達はすぐにも戻りたいんだ。何をすれば良いの？」

「焦ることはないらよ……」

タカヒトがディーノに問い掛けるとディーノは目を閉じた。ほんの一時が過ぎて焦り出したタカヒトは怒鳴るように言った。

「ディーノ！僕は何をすればいいの？」

タカヒトに言われ、ディーノは少しずつ目を開いていく。いったいどんな試練が待っているのかと考えながらタカヒトは固唾を飲み込みディーノの口が開くのを待った。目をしっかりと見開きタカヒトとミカにディーノは静かにそれでいてハッキリと答えた。

「……あつ、ゴメン！寝ちゃった。」

一方、てんと達はというと……水の精霊ウンディーネのいる遙かなる泉を目指していた。地獄道に唯一存在する聖なる泉はウンディーネの力により邪気なる者を近づけない境界が張り巡らされていた。しかし泉へ行くには地獄の一丁目を通り抜けなければならぬ。しかも地獄の一丁目はギガス率いるヘルズ軍団の拠点となつて

いる。徳寿の計画で定期的に食料などが地獄の一丁目に運ばれるらしくその荷台に隠れて侵入することになった。そして今、てんととポンマンはその荷台に隠れて地獄の一丁目へ向かっていた。

「ちよつとおくく　寝ないでよねえ！」

「じつ、ごめんらよ。

ずっと待つとつたからつい・・・気を取り直していつてみるらよ！」

軽くキレ気味のミカにハンカチで顔の汗を拭きながらしどろもどろのディーノはふたりを連れて歩いていく。すると天空に伸びた雲の木がタカヒト達の視界に入ってきた。ディーノの話ではこの雲の木は天道まで伸びているらしい。

「この雲の木を登らなければ天道に行けないのかあ。どうやって登るの？」

不安になったタカヒトはディーノに問い掛けた。ディーノは両腕の手のひらを返して首を横に振ってみせた。

「登る？違うらよ。ドアを開けてこの中に入るんらよ。」

ディーノは幹に付いているノブを廻して中へ入るとタカヒト達も続いた。そこはいままでいた雲の世界とは全く異なっていて地も天もない不思議な空間だった。ディーノの後を歩いて行くとテーブルらしきものがあり、その上にはひとつのグラスが置いてあった。

飲み物とは思えない色をしていてタカヒトはまさかとは思ったのだが、ディーノはタカヒトにグラスに入っている飲み物を飲むよう

に言った。タカヒトはやっぱりと思いグラスを見つめたがそれ以上にこの空間が気になっている。

「ちよつと、待ってよ！その前にここはどこなの？天道??」

「天道ではないらよ。ここは無空間らよ！」

無空間とは天道や地獄道、狭間とも違う異質の世界でここは無空間のほんの一部らしい。地獄道に堕ちた魂でも救いようのない魂やソウルオブカラーの所有者や狭間に堕ちた者達がその命を終えた時、その魂はここに連れてこられるらしい。

「気をつけるらよ。出入口を見失うと出られなくなるらよ。ここへ来ては彷徨う魂が後を絶たないらよ。」

ドンヨリして灰色によんだ無空間はどこまでも続く限界のない場所でそれが恐ろしく見えて、タカヒトとミカはピッタリとくっついていた。

「タカヒト、持ち物を全部テーブルの上に置いて、グラスの飲み物を飲むらよ。」

「本当に・・・飲むの？」

「大丈夫らよ、毒じゃないらよ。」

嫌々ながらも言われた通りにテーブルの上のグラスを持ったタカヒトは素直にそれを飲んでいく。すべて飲みきったタカヒトはなんとと言えない表情をしている。

「味とかないんだね・・・あれ？なんか苦しく・・・ガハッ、ゲホッゲホッゲホッ！」

「タカちゃん！どうしたの？」

グラスを落として、その場に膝まついたタカヒトは苦しみ悶えだした。近くにあったテーブルはひっくり返り、水筒と赤玉、紫玉が床に散乱していく。床を転がり悶え苦しんでいるタカヒトをミカは必死になって容態を確認する。動転したミカが部屋の壁にもたれ掛かっているディーノを睨みつけた。

「ディーノ！どういうこと？」

「なんでタカちゃんがこんなに苦しんでるの？ねえ！どうして？」

「誰でも信じすぎなんらよね！騙されたほうが悪いんらよ。いやあゝ、他人の苦しむ姿を見るのはなんとも楽しいものらね！」

「あなた・・・何者？」

「ワスは死神・・・死神ディーノらよ！」

無空間のタカヒト

「ガハッ、ゲホッ！ガボッ・・・」

「タカちゃん・・・タカちゃんを元に戻しなさい！」

床に這いつくばり咳と嘔吐を繰り返すタカヒトの姿を見て喜んでいるデイーノ。ミカの怒りは理力と共に高まっていく。両腕の前に差し向けるとサクラリーフを放った。今のミカには攻撃技はないがサクラリーフと部屋の壁に挟まれればデイーノとてひとたまりもないだろう。後の壁とサクラリーフを見たデイーノは恐怖に顔中が汗だくになった。

「ちつ、違うらよ！！タカヒトは死なないらよ。これは頼まれたことらよ！」

「頼まれた???」

ミカは理力を解くとデイーノはヘナヘナとその場に座り込んでしまった。ミカが問いただとデイーノは汗だくになった顔をハンカチで拭きながら答えた。タカヒトが飲んだのは徳寿から渡された活魂水と呼ばれる水である。活魂水とは・・・

「だから信じてほしいらよ！デイーノは死神だけど嘘はつかないらよ。」

「信じられるわけがないでしょ！」

デイーノは徳寿から言われた言葉を伝えた。タカヒトの魂は高い

エネルギーを持っておりそれがなんらかの理由で制御されている。何故、高いエネルギーの持ち主かという二つ目の理由としてそもそもソウルオブカラーは高いエネルギーを持つ魂の持主でないとコントロール出来ず、そうでない者は玉の存在を確認することすら出来ないらしい。タカヒトは赤玉と紫玉をすでに使いこなしている。意識を明け渡しているとはいえ二つの色玉を同時に使いこなすなど並大抵の魂では不可能である。

二つ目の理由としてタカヒトが人道を離れた時に狭間に墮ちたことである。狭間に墮ち、各界を行き来出来るということ自体が誰しも出来ることではなくタカヒトには何か特別な能力があると徳寿は考えているらしい。そこで活魂水を使いタカヒトの隠されている自我を開放させることを計画したのだ。自我を開放させるのは極めて危険なことであるがミカの助けがあればそれも可能だとも言っていたらしい。先ほどまで苦しんでいたタカヒトは容態も落ち着き、今は眠りについたようだった。その様子を見たミカはしばらく考えた後、ディーノに問い掛けた。

「私はどうすればいいの？」

「ワスと一緒にタカヒトの中に入るらよ。」

「????? どうやって?」

ディーノはミカの頭をポンと触るとミカの身体がスツと倒れ込んだ。しかしミカはそれには一切気づかずふと足元を見ると自分の身体が倒れていた。

「えっ！」

一瞬、ミカは動揺したがすぐにそれがディーノの仕業とわかった。

死神であるディーノにとって靈魂を取り出すことなど容易いのだがそれは無空間という世界限定なのである。

一時的に靈魂となったミカはディーノと共にタカヒトの精神に入り込み制御されているタカヒトの力を引き出そうと試みる。

「あれ？ここは・・・ミカちゃん？」

活魂水を飲み苦しんでいたことまでは覚えているが今どこにいるのかはわからなかった。活魂水を飲んだタカヒトは一時的に靈魂となったが移動できる範囲は自らの体内だけだった。つまりこの世界はタカヒト自身の身体の中だった。そうとは知らずにタカヒトは相変わらず辺りを見渡してはウロウロしていた。

「おにいちゃん、どうしたの？・・・迷子？」

「えっ・・・？」

タカヒトが振り返ると小さな男の子がそこにいた。白い布に身を包んだ男の子はタカヒトの前に立つとニコニコと笑っていた。

「ねえ、一緒に遊ぼうよ。」

男の子がタカヒトの手を引っ張るが人を捜しているとタカヒトは拒んだ。すると男の子は辺りを見渡した。

「誰もいないよ。人捜しだなんて、そんなことしてもムダだよ！君は誰からも相手にされないんだ。必要とされてないんだよ！」

「そんなこと・・・」

「考えてごらんよ。いままでの事を！君は無力で無意味で価値の無い生き物だ。」

君は存在してはいけないんだ！」

「……………」

「君はいらない。さあ、何も考えず僕と一緒に行こう。」

男の子は白いオーラを放つとそれにタカヒトは包まれていく。それは妙に温かくタカヒトは穏やかな気持ちになっていった。

いらぬ。必要ない。無力……………」

白いオーラに包まれながらタカヒトの頭の中をそんな言葉が流れていく。そして、次第に意識も薄れて遠のいていった……………」

「ディーノ……………どこまで歩くの？」

「ワスにもわからないらよ。」

ディーノの後を歩いて来たミカだがどれだけ時が過ぎたのだろうか。辺りを見渡すと黒くくすんでおりこれがタカヒトの心の中とは到底思えない。歩いていると急にディーノが止まり指さした方向をミカが見つめると赤い炎と紫色の炎がふたつ並んで浮いていた。赤い炎がゆっくりとミカ達の方へ近づいてくる。

「あれ？ミカじゃねえか！どうしたんだ？こんなところに来て。てゆう〜かどうやって来れた？」

「あれ？赤玉なの？・・・もうひとつは紫玉？」

「・・・どうやってここに来た？」

「うん、実はね・・・。」

ミカ達がここに来た理由を聞いた赤玉達は一緒にタカヒトを捜すと言い出した。しかし赤玉と紫玉はタカヒトが霊体になる前にテールの上に置いたはず。それが何故ここにいるのかミカには不思議なことだった。

「私達はすでにタカヒトの意識の中に存在している。タカヒトの持っている玉は私達が封印されていた玉にすぎないのだ。」

「実はな。ミカ達が来る少し前からタカヒトの心模様が急激に変わってな。辺りが急に黒くくすみだして・・・俺達も気になっていた。」

「そうだったの。わかったわ。力を貸してくれる？」

「もちろん、いいぜ！」

ミカと赤玉、紫玉そしてディーノはタカヒトを捜し再び歩き始めた。ミカには以前から気になっていた事があった。その疑問を思い切って聞いてみた。

「ねえ、何故赤玉と紫玉はタカちゃんを意識を乗っ取って赤タカヒトや紫タカヒトとなることが出来るの？」

「よし、その疑問は俺様が答えてやろう。俺達は自らの力だけでは攻撃も何も出来ない。共鳴する能力者の力を借りることで力を発揮できるわけだ。だが、共鳴する波長の・・・なんか説明するのがめんどくせえ。」

「・・・私が変わりに説明しよう。波長の同調性が高ければつまり我らソウルオブカラーと所有者の同調率が高ければ高いほど我らは持てる力をすべて発揮する事が出来る。それが更に高く昇華されると我らは能力者の身体を操ることも出来るようになるのだ。」

「タカちゃんとの同調率が高い・・・ってこと?」

「まあ、偉そうに言ってるが俺もタカヒトほど同調した所有者には会った事がない。」

「身体の乗っ取り自体初めてだったしな。」

「そうよね。私と桜玉やてんと達もそこまでの同調はないものね・・・。」

「ねえ、どうしてそこまで同調出来るの?」

「そんなの・・・知らん!」

「知らんって・・・。」

ミカが口をアングリ開けていると赤玉は話を続けた。出会った頃はタカヒトの意識を支配できるかはわからなかったがなんとなく出来る様な気がしたらしい。だが今ではタカヒトの身体と意識の波長の同調率が高いのは証明されて赤玉の能力をすべて使いこなせると豪語した。紫玉もそのことだけは赤玉と同意見でタカヒトという器に赤玉と紫玉という液体が混ざり合う事により、強敵を撃破してい

ったことだけは否定できないと語った。

原因はともかく、今はこの力を活かしてタカヒトと共に地獄道を乗り越えていくべきだとも紫玉は語る。ミカもそれを聞いて納得した。そんな事を話しているうちに辺りのくすみがどんどん酷くなっていく。その先には白いモヤに包まれたタカヒトがいた。

「タカちゃん！」

ミカがその姿を発見して急ぎ走りタカヒトに近づく。声を荒げて何度も呼んだがタカヒトはなんの反応もなく座り込んでいた。その傍らに白い衣を着た男の子が立っていた。

「あなたは誰？タカちゃんに何をしたの？」

「別に何もしてはいないよ・・・」

ただ彼は僕とずっと一緒にいてくれるって約束してくれたんだ
「！」

「嘘つ、そんなこというわけない。ねえ、タカちゃん！タカちゃんってば！……！」

座り込んでいるタカヒトの身体を揺すりながらミカは叫び続けるが何の反応を示さない。白い衣を着た男の子の手がタカヒトの背中に触れる。すると急に白く輝き出してミカを振り払った。

「きゃあああー！」

白いオーラを放つその姿はいつものタカヒトとはまったく異なっている。押し倒されて驚いているミカに紫玉は言った。

「ミカ！あれはタカヒトではない。あれは白玉だ！！」

「白・・・玉？」

「そうだ！あれは間違えなく白玉だ。だが何故白玉がタカヒトの中にいる？白玉は本来とてつもない力を封印する制御玉として使われるはず・・・！！まさか・・・いや、もしそうならば・・・」

両腕を広げた白タカヒトは急激に心力を高めていくと周囲の空気がビリビリと振るえていく。その直後、ミカや赤玉、紫玉とディーノが何かに吹き飛ばされた。絶大な力の前に赤玉も紫玉も無力であり、唯一タカヒトを救えるのはミカのみだ。

「どうやら戦闘開始のようだ。攻撃体勢を整えるぞ。」

「けっ、なんでてめえの言いなりにならなきゃなんねんだよ！」

「タカちゃんの身体は大丈夫なの？」

紫玉はミカと赤玉にタカヒト救出作戦を伝えたがミカはタカヒトの身体が心配だと言い、赤玉は紫玉の命令など聞くものと拒んだ。

「今はそんな場合ではない。やらなければやられるぞ！」

「うっ・・・うん、わかった！」

「ケッ、しょうがねえな！」

紫玉の必死の説得に応じてミカと赤玉は作戦に従った。もし紫玉

の考え通りであるならば必ず元のタカヒトに戻る。

タカヒト救出劇

「あれ、急にどうしたの？」

白タカヒトはミカ達の行動にキョトンとしながらもその様子を見ていた。それはミカが一番前に立ち、その後を赤玉と紫玉が平行に並んでいるからだ。

「行くわよ、赤玉、紫玉！」

その攻撃体勢のまま彼らは白タカヒトに向かって走って行く。走っている最中紫玉の作戦がミカの頭を駆け巡る。

「ミカ、今の我々には白タカヒトに対抗する力はない！我々ソウルオブカラーはそれぞれが特殊な能力を持っているが使いこなす所有者がいなければその力は無に等しい。

高級なバイオリンであつてもそれを扱う奏者がいなければその綺麗な音色を奏でられないように。私も赤玉も今は何も出来ない。だがミカが攻撃を仕掛けてくる白タカヒトの気をそらす事が出来れば赤玉と共にタカヒトの意識の中側に入れるかもしれない。

白玉を捕らえることが出来ればタカヒトの意識を取り戻せるはずだ！」

ミカの桜玉には攻撃系のものは現在ない。しかも今のミカに使えるのはサクラリーフのみ。そこでミカは限界まで白タカヒトに近づきサクラリーフを放つ。防御系の技とはいえサクラリーフの出現時の前方への衝撃はかなりのものでありその衝撃力は白タカヒトの気をそらすには十分である。白タカヒトに近づくにつれて理力を高めていくミカ。それと対象的に無邪気に笑っている白タカヒト。ふた

りの距離が縮んでいく。

距離 20m・・・10m・・・

無邪気に笑う白タカヒトは右手を差し向けると心力を高める。次の瞬間、白タカヒトの右手から衝撃波がミカ達に襲い掛かる。

「桜玉理力 サクラリーフ！」

ミカはサクラリーフを放つとなんとかその衝撃波を押さえ込んだがその威力は凄まじく防御するのが精一杯だった。ミカは赤玉と紫玉それにディーノを守る為に理力を最大まで高めて衝撃波を食い止めた。しかし衝撃波はミカの想像を超えるものですぐに体力と理力が限界に越した。

ミカはその場に崩れるように倒れ込むとその姿を見下ろし白タカヒトは無邪気な笑顔を見せている。

「あれ、もうおしまいなの？つまんないのぉ。」

白タカヒトは右手を倒れているミカに向けると白い輝きが高まっていく。

「くそつたれが！」

「ミカ！」

赤玉と紫玉が白タカヒトに向かっていくが衝撃波により吹き飛ばされ返り討ちとなった。恐怖に怯えるディーノ。そして傷つき意識を失いかけているミカに再び右手を向ける白タカヒト。

「さようなら・・・んっ？・・・タカヒトなんか用？」

「・・・タカ・・・ちゃん・・・」

(ダ・・・メだ！ミカちゃんを・・・傷つけることは・・・)(タカヒト)

「タカヒト、何をする！！」

白タカヒトが頭をおさえ苦しみ始めた。意識を失いかけているミカがゆっくり見上げると白タカヒトは膝をつき悶えるように地面をはいつくばっている。

返り討ちにあったものの意識を取り戻した赤玉と紫玉は状況を把握出来ずに戸惑っていた。勝ち誇っていたはずの白タカヒトが苦しみ地面を這いずり回っていたからである。

「やめろおゝ、やめてくれ！」

(ミカちゃんだけは傷つけさせない！)(タカヒト)

頭を抱える白タカヒトの身体が白色に激しく輝き、それが次第に収まっていくと白い炎がタカヒトの身体から弾き飛ばされた。

「おい、出やがったぞ！捕まえる！」

白玉の存在に気づいた赤玉と紫玉は白玉を取り押さえる。するとタカヒトの身体から完全に白い輝きが無くなった。白玉を取り押さえた赤玉が意気込んだ。

「このクソ白玉野郎が調子に乗りやがって！！どうしてくれようか？」

「ちょっと待ってよ・・・マズいよ。タカヒトが大変なことになっちゃうよお。」

「てめえ、逃げようとして適当なこと言ってるじゃねえぞ！オラあ！」

赤玉達がそんなやりとりをしている時タカヒトの容態が急激に変化していることにミカが気づいた。

「タカちゃん、どうしたの？」

「ううう〜ん・・・あがつ・・・！」

急に苦しんだかと思うと次の瞬間には意識を失った。タカヒトは覚醒と気絶を交互に繰り返し苦しんでいる。

「てめえ、タカヒトに何かしやがったな？てめえが原因だろ。白状しやがれ！」

「違うよ、違うつたら！タカヒトの中で封印された能力が解放されたんだ。それが原因でこの症状が起きているんだよ。」

迫る赤玉に白玉は完全否定した。タカヒトの能力は相当なものらしく白玉の制御能力により封印されていた。白玉がタカヒトの意識に入ったのはかなり昔のこと。白玉自体あまり覚えていない。しかし能力が異常に高かったことだけは憶えているらしい。

誰が何の為にタカヒトの能力を封印したのかわからないが白玉の封印を解いたことにより抑えられていた能力がタカヒトの自我を壊すほどの勢いで開放されつつある。自我の崩壊をタカヒトの精神がなんとか保っていたが自我の崩壊は時間の問題であった。

白玉も捕獲されて状況が沈静した事を確認したディーノがミカ達のいるところに近づいてきた。

「とりあえず、ここを出てワスの家に戻るらよ!」

「・・・そうね。」

ディーノの言葉に従いミカ達はタカヒトを連れてタカヒトの意識の中を脱出して元の場所へ戻った。ディーノのベッドへタカヒトを寝かせたが異常なほどの高熱と大量の汗。目を覚ましたかと思うとまた意識を失う覚醒と気絶を再び繰り返す。

「タカちゃん・・・」

ミカは希望と絶望の間で苦しみながらも献身的な看病を続けた。

ミスターポリック

地獄の一丁目への侵入に成功したてんと達は建物と建物の中に身を隠し様子を伺っていた。地獄の一丁目はてんとが学舎時代に勉強した通り江戸時代の下町のように長屋が並んでいた。道端では商売をしているヘルズもいてヤケに活気づいている。

しかし警備も厳重になっており地獄の一丁目から遙かなる泉へ向かう門には巨大なヘルズ兵が二匹立ち周囲を警戒していた。

「現状はかなり厳しいな。」

「ねえ、てんと！僕に考えがあるんだ。」

てんとが悩んでいるとポンマンがある作戦を思いついた。てんとはその作戦にはかなりの抵抗があったがほかに考えも浮かばず仕方なくポンマンの作戦に便乗する事とした。ポンマンは地獄の一丁目のメインストリートを堂々と歩き出すとてんともその後をついていく。歩いているとすぐに屈強そうなヘルズに囲まれた。一匹のヘルズがポンマンを見下ろすと睨みつけた。

「おい、おまえら！ここいらで見かけない面だな？」

「これは、これは、皆さん。お待たせいたしました。」

私はミスターマジックことポリックと申します。お見知りおきを！」

挨拶がてらポリックはポケットからスカーフを取り出すと両手で丸めた。ヘルズ達が見つめる中、再び両手を開くとスカーフが鳥に変わり空へ飛んでいった。

「おおお〜 すごいぞ！」

そのマジックに驚いたヘルズ達は歓喜に沸いた。マジックにより感動と刺激をモットーに地獄の世界を興行していると伝えると喜んで道を開けてくれた。

「どうやら成功したみたいだね。」

ポンマンの作戦とは芸人であることをアピールしてこの地獄の一丁目を把握し遥かなる泉へ向かうチャンスを狙うものだった。しかしこの作戦は意外な方向へと向かった。

「本日のマジックはこれにて閉演。次回のご来店をお待ちしております。」

それはポンマンの作戦が成功した数時間後のことだった。

「へい、ユー達！ちよつと芸能関係に興味はないかね？」

「……」

「おっと、私は怪しい者ではない。」

その者はポンマンに名刺を手渡した。名刺にはロマンス・ヘルトンと書かれて、地獄の一丁目で商いをしているらしい。他のヘルズに比べるとかなり小柄で戦闘よりもそろばんをはじくことが得意と語った。最近では感動を与える商売がしたいと願っていて偶然ポリックのマジックが目にとまった。

「私に協力してほしい。もちろん金に糸目はつけん。才能を捜していた。これは運命であると思わんかね？」

そんなこんなでロマンスの芸能プロダクションに所属したポリックとてんとは巧みな話術とマジックを披露していく。ロマンスの戦略は見事に成功して感動と刺激に飢えていたヘルズ達はポリックのマジックショーを見るためにチケットを奪い合うほどだった。連日に及ぶ大盛況でポリックは与えられたステージでマジックを披露する度に彼の名は地獄の一丁目中に広まって一躍時の人となった。

「ポリック殿、本日はあるパーティーへの参加を熱望しはせ参じました。」

幾度かの公演を成功させたポリックのもとへギガスの使者が現れた。これにはロマンスもかなり驚いていた。使者はポリックの公演をギガスの館で披露する事を熱望した。なんでもギガスが三獣士となって666周年となるらしい。そのパーティーでマジックを披露して盛り上げるのが今回の依頼だ。ロマンスはビジネスチャンスと興奮して、てんとも三獣士に遭えるチャンスだと依頼を引き受けた。ポンマンを見つめ、てんとは言った。

「一時はどうなることかと思ったがチャンスは意外な形でやってきたものだ。」

その頃、館では666周年パーティーの準備が忙しく行われている。館はいくつもの和室からなっているがそれは忍者に憧れているギガスの趣味らしい。その一番奥にある和室に彼女はいた。パーティーの服装について悩んでいるらしくいくつもの着物を着替えては吟味していてその傍らにはリディーネがいた。

「ねえ、リディーネ。この着物はどうかしら？」

「なんでもいいんじゃない。好きにすればあゝ。」

「そうはいかないわよ！」

この美貌に着物を合わせて私の美しさを地獄の隅まで広める必要があるわ！」

リディーネは無視しているが、低くまとわりつくような甘い声を発するこの女性こそが三獣士のひとり、ギガスである。彼女は地獄界最強のギガントス一族の長であり、リディーネの幼時期の戦闘教育係でもある。

ギガントスは地獄道で最も怪力を誇り凶暴な怪物であるがギガスは千年に一度生まれるという伝説の女型。美しさと強さを兼ね備えたギガスは自分のような女型が生まれる事を恐れその力で一族を滅亡させた。唯一のギガントスとなった彼女のその残虐さと能力が買われ三獣士となったのだ。

準備も整い、いよいよパーティーが始まった。パーティー会場は館に似合わず洋室で床がフローリングとなっている。会場の隣にある控え室ではポリックとてんとがマジックの準備をしていた。会場にリディーネがいるとも知らずに・・・

「・・・いよいよギガスと対面だな。」

てんとの一言にポンマンもうなずき衣装に身を通すと用意された飲み物を口にした。破壊神に仕える最強の戦士 三獣士のギガスがどのような姿をしてその能力はどの程度なのか？てんとの興味はその一点だけだった。

舞台のそでに着くとすでにパーティーは始まっておりヘルズ達はドンチャン騒ぎの真っ最中だった。ポリックの人気はかなりのもの

でヘルズ達はポリックのマジックを今や遅しと待ち望んでいた。ギガスの姿をてんが捜していると一瞬にして凍りつくほどの衝撃を受けた。

リディーネがこのパーティー会場にいたのだ。リディーネはてんと達の姿を見たことがあり、見つければ逃げることにすら出来ず確実に死が待ち受けているだろう。ポンマンは何も知らず舞台そでから舞台中央部まで出て行ってしまった。

「ポンマン、ちょっと待て！・・・ちょっと、くっ！」

てんとも裏方のヘルズに促され中央部まで飛んでいく。

「レディー スアンド ジェントルマン ミスターマジックことポリックの登場だ！」

歓喜の声援を受けポリックとてんとは一礼するとマジックが披露されていく。その度にヘルズ達の驚きの声と歓喜の声が入り混じりパーティー会場は盛大に盛り上がった。

「あれ、どこかで見たような・・・！」

リディーネがてんと達に気がつくのにそう時間は掛からなかった。無事にマジックが終わるとポリックとてんとは一礼をして舞台を去ろうとした。

「いい余興であつた。褒美を取らす。」

上座に座っていたギガスがポリックに声を掛けると歓喜と興奮に包まれていた会場が一瞬にして静まり返った。ゆっくり立ちあがり舞台のほうへ歩いていくと舞台を覆っていたヘルズ達は波が引いた

ようにギガスの通る道を作り出した。舞台から降りてギガスの前に平伏したポリックとてんとは怯えていた。てんとはギガスではなくその後を歩いてきたリディーネに怯えていた。

「褒美を取らず。何がよいか申せ？」

てんと達の前に立ち止まったギガスが尋ねると怯えているポンマンの代わりにてんが答えた。

「私達は旅をしながら芸を磨いております。

この地より北に向かいたいので北門を開放して頂きたいのですが……」

「そんなことで良いのか？ならば……」

「ちよつと待って！アンタ見かけた顔ねえ。」

リディーネがてんとに声を掛けるとてんとは一瞬動揺してしまつた。その様子を見ていたギガスが腰の刃に手をつけると陽気に笑つていたヘルズ達の目も鋭く光つた。

絶対絶命！もはや逃げることも出来ない状況である。てんとの頭の中は後悔の二文字が過つていた。するとポンマンがスツとてんの前に出てきた。

「私達のことをご存知とは……あなた様はかなり通ですな！わかりました。

あなた様のアンコール、このポリックがお受けしましょう！」

「？……何を言ってるの。アンタ？」

ポリツクの言葉にリディーネやギガスそれにヘルズ達はポカンと口を開けているとポリツクはリディーネの手を掴み強引にステージに連れていく。そしてステージ上で騒いだ。

「レディー スアンド ジェントルメン！！リディーネ様のアンコールに応えまして本日最後の最も危険なマジックを披露いたしましたよーう！！！」

ポリツクは大きめのボックスを用意するとそれをリディーネの前に設置した。ポリツクはリディーネにボックスの中に入るように促すがリディーネは拒んだ。するとポリツクは両手を広げて大きな声をあげた。

「まさか、リディーネ様ともあろう方がそんなに怖いのですか？」

ヘルズ達のざわつきに異常なほど抵抗していたリディーネは渋々ボックスの中に入った。顔と足のみをボックスから出したリディーネの姿をギガスとヘルズ達は固唾を呑んで見守った。

「それでは・・・最大のマジックを披露いたします。」

ポリツクはいつもより真剣な顔つきで近くに立掛けてある長刀に手をやるとリディーネに向ける。ヘルズが食べていたキャベツを拝借するとその長刀でザクザク切裂いた。

「ちよ、ちよっと・・・冗談でしょ？」

動けず恐怖に怯えるリディーネのボックスにポリツクは長刀を刺した。

「ちよつ・・・ちよつと待ちなさいよ！待って・・・ぎゃああゝ
ゝ・・・あれ？」

続けざまに長刀をボックスに刺していくがリディーネには全く痛みを感じない。その異様な状況にヘルズ達の口は開いたまま驚愕していた。何本かの長刀が刺さったところでリディーネが騒ぎ出した。

「ちよつと、いつまで刺してるつもり！いいかげんに・・・」

「最後の仕上げは、これだ！」

リディーネの入っているボックスをポリックは二つに割った。するとリディーネの上半身と下半身が離れていく。言葉を失うリディーネと口を更に大きく開けて驚愕するヘルズ達は一瞬で凍りついた空間に身を置いた。

「すげえぞおおゝゝ！」

しばらくすると物凄い拍手と喝采が会場を包んだ。あまりもの衝動に泣き出すヘルズ、雄叫びをあげて喜ぶヘルズ、拍手はいつまでも鳴り止まなかった。

「ちよつと、聞いているの？」

リディーネがなにか騒いでいたが喝采と拍手によりそれらは全て打ち消された。しかしギガスの手があがった瞬間、ヘルズ達の騒ぎは一瞬にして止んだ。

「見事・・・実に見事であったぞ！ポリック。

これほどの感動・・・良き余興である！！」

「有難きお言葉。至極幸せにございます。」

ポリックとてんとは一礼すると再び喝采と拍手が鳴り響いた。その後、ギガズの計らいによって門の開閉の許可を貰ったてんと達は地獄の一丁目を出ることになった。

てんと達は更に一礼して舞台を後にした。興奮冷め止まぬヘルズ達はてんと達の後を追って門まで着いて行く。ギガスは満足して会場を後にした。ただ、誰もいない舞台の上でボックスに入ったままリディーネだけはポツンと佇んでいた。

「……………あのさあ……………私のこと忘れてない？」

悲しい別れと再会の喜び

無事、公演も終わり出発の準備を終えたポリック達は門の近くまで来ていた。門はすでにギガスにより開門されてヘルズ達に見送られながら少しずつ門へと向かう。ロマンス・ヘルトンとヘルズ達の喝采を浴びながらポリックは別れを惜しんでいる。

「もう行ってしまおうのか・・・さびしくなるな。」

「おまえらホンマにええヤツらやったでえ〜・・・あばよ!」

ポリックとてんとはヘルズ達へのサインと写真攻めに合いなかなか門へと辿り着けない。ギガスも見守る中ポリックコールは止まなかった。

「どうしても行ってしまうのか

・・・私の芸能プロダクションもこれでおしまいか。」

「ロマンス社長なら大丈夫。かならず良いタレントが見つかるよ。」

「ミスターポリック・・・ありがとう。君達のこととは忘れないよ。」

涙を流しながら抱き合っているポリックとロマンス社長の姿にヘルズ達は男泣きした。そんな感動の場面にリディーネが怒涛の勢いでやってきた。

「芸能人みたいにチャホヤされちゃって頭くるわねえ〜。あんた

達の正体はわかってんだからこのまま帰すわけにはいかないわ！」

「リディーネ様！いきなり何をおっしゃっているのですか？
てゆうか、どうやってあの箱から出てこれたのですか？」

「あんな箱、燃やしたわよ。・・・それが何か？」

ヘルズの問い掛けにリディーネは豪語した。そして、てんと達がリディーネを攻撃した時のことを事細かくギガスとヘルズ達に伝えた。しかしリディーネの説得にも関わらずヘルズ達は動こうとはしなかった。この地獄道では攻撃したとか、されたということはさほど問題ではなく、ポリックに惹かれていたヘルズ達はポンマンに対して愛情のような感情すら芽生えていた。

もつともヘルズが動かない最大の理由はギガスの言葉である。ギガスはポンマン達に対して褒美を取らずと云ってポンマン達は門を出たいと答えた。ギガスは三獣士の一角であり最強の陸軍であるヘルズ軍団を率いる将軍でもある。そのギガスが一度言葉にした事を覆すことなど出来るわけもなく例えそれがリディーネの敵であつても同じ事である。

ギガスは何も言わずに館に戻っていくとヘルズ達もその場を去っていった。残ったのはポンマンとてんとそれにリディーネだけだった。リディーネが単独でてんと達を攻撃するのは問題がないとわかるとリディーネはニヤリと笑いだした。

「さて・・・タカヒトとかいうヤツもいないし楽勝ね！さあ、死んでくれる？」

中級闘気 焦土！」

リディーネが闘気を高め右手をてんと達に差し向けると火炎の波がてんと達に襲い掛かる。紅リディーネとてんと達の力の差は歴然

としている。笑みを浮かべる紅リディーネと恐怖に身がすくむポマン、あと少しのところまで勝機を失い成す術がないでんと！近づいてくる火炎の波に一寸の雷撃が押し当り火と雷は相殺された。勝利を確信した紅リディーネが驚愕して声を荒げた。

「誰よ？邪魔するのは？」

紅リディーネの火炎と拮抗する力！てんとはその雷撃に見覚えがあった。てんが振り返るとそこにはリナが立っている。何故助けてくれたのか？全く理解出来ない。リナとは修羅道の世界で敵対する関係であり助けられる理由はなかった。

「このおゝ、死ね！」

不意をついた紅リディーネは火炎攻撃を仕掛けてきたが牡丹リナの雷撃によりまたもてんと達への攻撃を阻止した。だがリナの目的がわからない以上、警戒心を解くわけにはいかない。紅リナと牡丹リディーネの力は拮抗しておりてんととポマンがリナのサポートに当たれば勝機はあるのだが……。再び攻撃を阻止されて紅リディーネは異常に苛ついていた。

「ちよつとおゝ！何、邪魔してんのよゝ！」

弱い者イジメが唯一のストレス解消なんだから！

邪魔するとあんたも殺すわよ！！！」

「陰湿なものね……。あなた、愛されたことがないでしょ？」

「……………コロス！」

紅リディーネが闘気を異常なほど高めていくと身体が朱色に染ま

り周囲も同様に染まりだす。上空へと浮遊した紅リディーネの物凄い闘気の大きさにリナがてんと達と言った。

「共同戦線を・・・」

「・・・・・・」

紅リディーネから身を守る方法がないことを悟ると不本意ながらてんとはリナの戦術に協力することにした。闘気を高めきった紅リディーネが不敵に笑った。

「アツハツハツハツ・・・私に逆らった結果がこれよ。死ね、クソ野郎ども！」

朱色玉最大闘気 獄熱地獄！」

紅リディーネが獄熱地獄を繰り出すと同時にてんと達のいる地面がいきなり熱を発して溶け出していく。上空からも熱気を感じて見上げるとそこには朱玉級の火炎玉が四つもてんと達目掛けて落ちてきた。上下の攻撃に逃げ場を失ったてんと達であったが緑玉理力浮遊フワフワにより緑てんととポンマンそれに牡丹リナの身体が空中へ浮きあがった。

だが上空からの四つの朱玉を防ぐことはできない。危機を完全に回避したわけではないこの状況で牡丹リナが翡翠ポンマンに協力を仰いだ。

「いくわよ、牡丹玉 ハイエレメント インドラ！」

「オツケー、翡翠玉理力 増幅力！」

牡丹リナの両手から雷撃が朱玉に向かっていく。しかし牡丹リナ

のインドラの力ではあの四つの朱玉の威力には打ち勝つことはできない。牡丹リナの雷撃に翡翠ポンマンの翡翠色の輝きが合わさると翡翠色雷撃は一つの朱玉に激突すると同時に網の目状になりそれを包んでいく。

朱玉を包み込んだその形は正にハンマー投げのように見えた。牡丹リナが手元でコントロールすると網に包まれた朱玉がほかの朱玉から大きく離れた。もう一度牡丹リナが手元の雷網を引っ張ると大きく離れた朱玉が三つの朱玉の方向へ勢いよく戻ってそれらに当たりビリヤードの玉のように三方へ飛ばされていった。紅リディーネの更に上空で牡丹リナは雷網に包まれている朱玉を振り回していた。

「あなたのよね？返すわ！」

「ちよっ、ちよっと・・・タンマ、タンマ・・・うぎゃあああゝゝ！！！」

牡丹リナは自らがコントロールしている朱玉を紅リディーネに向けて投げつけた。高みの見物のはずが一気に劣勢となる紅リディーネは向かってきた朱玉を受け止めたが朱玉の重さに速度エネルギーが加わり朱玉と地面に押し潰された。門の近くで大の字になって黒焦げで倒れているリディーネ。

地獄道では手助けすることは無用とされている為、この勝負を目標撃していたヘルズ達も助太刀や復讐といったことを起こそうとは思っていない。てんと達が地上に降り立つと門は開放されて、そこを通ろうとすると門番のヘルズが立ち塞がり睨みつけた。

「わしらはリディーネ様を倒したおめえらをゆるさねえ！だがわしらはギガス様の配下であり、この地獄道では勝負に文句をつけることはご法度だ！今回は見なかったことにするが次に遭ったらこうはいかねえぜ！・・・だがお前等の舞台、最高だったぜ！！！」

門番のヘルズは顔を赤らめながらも厳しい表情を取り戻しその場を退くとてんと達は門を通り抜けた。敵対するてんと達に拍手や喝采をあげるヘルズが門のたもとに残って、それらが鳴り止むことはなかった。それから彼らは険しい谷を抜け地獄の森に入っていく。遙かなる泉を目指し、水の精霊ウンディーネに逢いにいく為歩を進めていく。

「いやあ〜．．．なんとかここまで来れたね。それもこれもリナのお陰だよ！」

「ねえ、てんと！」

「何を考えているのか．．．わからないがな！」

「．．．．．」

「まっ、別にいいじゃない！こうして一緒にいる訳だし．．．」

うつむいたままのリナと無口になったてんととの間に挟まれてなんとか笑いを取るうとするポンマン。三人は奇妙な関係ではあったが一路遙かなる泉を目指して歩を進めていく。地獄道はヘルズ以外にも魑魅魍魎といった下等生物もいたのだがそれらは彼らの能力によつて退かれ更に歩を進めていく。遙かなる泉に近づくにつれて灰色の樹木や溶岩の固まった大地から天空を目指す勢いの大樹や花や草の生い茂った大地へと変わっていく。大樹のそびえ立つ並木道を通っていくとその先の方に泉が見えてきた。

鳥がさえざり、そこは地獄道とは思えないほど美しい世界だった。期待が膨らみ進む足が次第に速くなり、急ぎ泉へと向かうがその途中でひとりの少年が立っていた。不思議に思ったポンマンが声を掛けた。

「君は誰だい？」

「僕はデュポン・・・君らの存在を消す者だよ！」

その名はデュポン

その少年は確かに「存在を消す」と言った。タカヒトと同じ位の背丈でおどけたその表情からはさきほどの言葉が冗談にしか聞こえないくらいだった。

「えっと・・・存在を消すって君が？」

ポンマンが耳をほじりもう一度聞き直したのだがやはり少年は「そうだ」と答えた。ポンマンは信用出来なくて再度聞き直した時、少年はため息をつきながら言った。

「はあ〜、こんなナリじゃあ、信じられないのも無理ないな。それじゃあ、本気で行くぞい。」

少年は一呼吸するとその姿を消すほどの風が辺りを包み込んだ。ポンマンが目をしかめているとその風は収まった。するとさきほどの少年とは思えない恐ろしい化物の姿がそこにいた。全身が緑色で肩が異常に張っている。手足に鋭い爪を持ち白髪の前には突かれれば即死は免れないほどの角がある。紫色の目玉をギョロとさせて、てんと達の前に立ち塞がっている。

「グフウ〜我が名はデュポン。風の亡霊なり！この力でおまえ達を絶望へと誘おう！」

デュポンは口を大きく開けて大量の空気を吸うとみるみるうちに腹が膨れあがった。溜めこんだ空気を一気に吐き出すとその風圧は恐ろしく強くポンマンは吹き飛ばされた。

「おわあぁ〜・・・はっ、とう！」

ポンマンは飛ばされながらも着地には成功した。怪我を負う事こそなかったがあまりに強力な風圧は脅威であった。その後、風圧はてんと達に向けられていく。なんとか風圧に耐えているてんとリナは反撃を試みる。緑色の輝きを放つとてんとは三つの球体を頭上に出した。

「緑玉中級理力 カマイタチ」

三つの球体が急速に回転すると真空状態が発生、それにより生じた無数の風の刃がデュポンを襲うが・・・。

「くっ、やはりダメか！」

風の刃はデュポンにダメージを与えることは出来なかった。次に牡丹リナの雷撃を浴びせたがやはりデュポンは無傷であった。

「グウウ〜、効かぬわ！」

動揺する二人に不敵な笑みを浮かべるデュポン。両腕を広げると更にその身体が大きくなっていく。デュポンは風の属性を持つ生命体であり風や雷の属性ではダメージを与えるどころか力を与えている事にしかない。デュポンは再び大量の空気を吸い込むと一気に吐き出した。その凄まじい衝撃に緑てんと球体でのガードも牡丹リナの雷盾も簡単に弾かれ二人は吹っ飛ばされた。

ポンマンのところまで吹っ飛ばされた二人はすぐに立ち上がるとデュポンを見据えた。デュポンは鋭い爪を振るうと瞬時に真空を作り出し鋭い風刃がてんと達に襲い掛かる。

「きゃっ、あっ、はあう〜！」

風刃はリナの身体を切り刻み、風刃により深刻なダメージを受けた。

「グワツ、ハハハアア〜」

甲高い笑い声のデュポンとは対象的に傷つき倒れ込むてんと達。彼らはデュポンの巨大な力に屈していく。血を流し倒れ込んでいる三人は顔をあげるのが精一杯でもはや動き逃げることも出来ないところがデュポンは勝利を確信しているらしく甲高い声を出しながら踊っていた。

「リナ・・・ポンマン・・・？」

リナとポンマンはかなりの深手を負っていたがてんとは球体の防御によって致命傷は免れていた。風の精霊であるデュポンには風の攻撃も雷撃もまるで効かない。リナとポンマンの状態を確認したてんとは自らの持つ理力を最大まで引きあげる。三人の身体が上空へフワリと浮き上がるとデュポンの頭上を越えて泉の方向へ飛んでいく。

「グオオオオ〜、逃がさんぞ！」

逃げる緑てんと達に怒り狂うデュポンは口を大きく開けると風刃を浴びせ続ける。緑てんとは風刃をかわしながら泉のある場所を捜していた。しかし理力の尽きたてんとは上空より墜落して泉の中へと落ちていった。

「・・・死におったか！」

三人の姿が水面に浮き上がることはなくデュポンは一時、泉の水面を眺めていたが諦めたらしく自分の巢へと戻っていった。

「タカ・・・ヒ・・・ト・・・」

夢まどろみの意識の中、てんとかすれるほどか細い声が聞こえた。この時のタカヒトは自分が生きているのか死んでいるのかすらわからなかった。それはタカヒトを看病しているミカも同様だった。あれから一ヶ月ほど経ち以前ほどの大量の汗も熱も出なくなっていた。しかし今でもタカヒトは意識を取り戻すことがない。

「タカちゃん・・・」

ミカがタカヒトの顔に触れるとかすかにぬくもりが伝わってくる。そのぬくもりを信じてミカは折れそうな心を抑え看病している。タカヒトは自らの深い意識の中におり、身動きもとれずにただ闇のどこからか聞こえてくる声と問答をしていた。

目覚めろ。与えられた使命を果たすのだ！

誰？使命って・・・あれ？ここは・・・

ミカちゃん？ てんとかみんなのところへ戻らんのだ！

「づつ・・・ミカ・・・ちゃん・・・ん？」

「・・・タカちゃん？タカちゃん・・・意識が戻ったのね。」

一ヶ月ぶりに意識を取り戻したタカヒトに抱きつくとき涙を流しながらミカは喜んだ。この一ヶ月間、意識の無いタカヒトをずっと看病してきたのである。もしかしたらもう駄目かもしれないという想いを振り払いながら懸命に看病したミカはその不安から一気に開放された。

「ミカ・・・ちゃん・・・」

抱きつかれたタカヒトは理由もわからず、少し顔を赤らめていた。なんとなくミカの背中に手をまわそうとしていると突然ディーノが部屋に入ってきた。

「タカヒト、意識が戻ったらね！」

突然のディーノの出現にミカの背中にまわそうとしていた手をタカヒトはスツと引つ込めた。ゆっくり起き上がり涙を拭きながらタカヒトを見つめるミカの顔は溢れんばかりの笑顔だった。

ディーノの後には赤玉や紫玉そして白玉が主の回復を喜んでいて、ディーノにこれまでの経緯を教えてもらいながらミカの作ったスプーンをスプーンで飲ませてもらっていた。

「へいへいへい、甘えすぎじゃねえの？」

赤玉が二人にチャチャを入れていたが紫玉と白玉に取り押さえられるとディーノと共に外に出ていった。顔を赤らめながらタカヒトはスプーンを口にすると皆、無事で良かったと喜びをかみしめていた。その一方でんと達のこと気がなってもいた。夢まどろみの中で

聞いたてんとの叫びに一刻もはやく地獄道へ戻らなければとタカヒトの想いはどんどん強くなっていく。

それから一週間経った・・・

タカヒトの体調も完全に回復していた。身支度を整えてミカと共に外に出ると麒麟はディーノの家の前でタカヒト達を待っていた。ミカは麒麟の首を撫でて再会を喜んだ。

「てんと達は地獄の一丁目から遙かなる泉を目指しているって聞いたらよ。」

「そこへ行けばてんと達に逢えるんだね」

「その通りらよ。しかし地獄道は恐ろしい所らよ。十分注意していくらよ。」

「うん、ありがとう。」

タカヒトとミカが礼を言うとディーノは顔を赤らめて恥ずかしがっている。麒麟に跨るとタカヒトとミカはディーノに別れを告げた。麒麟はフワツと浮き上がり地獄道目指して駆けていく。ミカがずつと手を振っているとディーノの姿が次第に小さくなって完全に見えなくなってしまうた。

「ディーノっていい人だったね。」

「ミカちゃん、先を急ごう！てんと達が心配なんだ！」

「うん！」

ミカはタカヒトにしがみつく麒麟は速度をあげて駆けて行った。タカヒト達を見送ったディーノは一息つくと黄色の輝きを発した。黄色の輝きが薄れると徳寿の姿に変わっていた。徳寿は少しの間タカヒトに向かった方向を眺めている。

「ふう〜、肩がこつたわい。まずは第一段階完了と言った所かの。」

拝啓 終焉のリディーネ様

「はあ〜あ、出るのはため息だけ！」

リディーネは地獄の森を散歩していた。タカヒトとの戦いに敗れリナにも敗れた。自分は強い！そんな自惚れた自分の心が打ちのめされていた。地獄道を支配する破壊神の子でありながら二度の敗北はリディーネ自身許せなかった。

しかし何故自分が負けたのか？・・・それだけを考えていた。タカヒトにしてもリナにしても実力はリディーネとほぼ互角のはずが何故敗れたのか？その事を考えながら森の奥深くを歩いていた。

「私は強い！！でも何故？調子に乗っていたけど・・・もしかして私って弱いのか？破壊神の娘だからって皆が手を抜いてくれた？本当は弱い？」

そんな想いを打ち消すように森を走り抜けていく。気がつくまで深い森林の中にいた。見たこともない風景が広がり遠くには泉が見える。リディーネは泉に向かい歩いていくとデュボンと遭遇してしまった。てんと達に逃げられてイライラしていたデュボンはリディーネの姿を見つけるとニヤリと笑みを浮かべる。

「グフウ〜！」

ストレスが溜まっていたところに餌とはなんたる幸運。殺してくれよう！〜！」

「殺す？私を・・・殺すって言うの？」

「グフウ〜〜！そうだ！！今しがた、餌を逃したところ・・・」

おまえを殺してストレスを発散させよう。」

「そう・・・わかったわ！いいわよ。ストレス発散させてあげる！」

この姿を見て逃げようとしてもしないリディーネにデュポンは少し疑問を感じていた。逃げられないと諦めたのであろうと勝手に解釈したデュポンは両腕を広げて、口を開けると空気を吸い込みそれを一気に吐き出した。大量に圧縮した空気を排出した為に真空状態が発生するとカマイタチを作り出しそれがリディーネに一気に襲い掛かる。

カマイタチの風刃がリディーネの服を切り裂くとデュポンはいたぶるように少しづつ風刃の威力を高めていく。服を切り裂き薄く肌を切り刻んでいく。身を縮め、風刃の嵐を耐えるリディーネを面白そうに眺めているデュポン。そんなデュポンを見てリディーネが問い掛ける。

「・・・ねえ　もしかしてこれって精一杯の攻撃？」

「！・・・こっ、これからもっといたぶってやるぞ！」

「・・・もう、いいわよ。飽きたし！！」

デュポンが風刃の数と攻撃力を増していったがリディーネは平然とした態度をした。それを見たデュポンは更に攻撃を強めていったのだが、リディーネは両腕の手のひらを返してため息をつくと紅色の輝きを放ち、カマイタチの風刃を粉々に砕いた。

その光景を見てデュポンは口をアングリと開けて驚いている。紅リディーネは右手に炎を溜めて睨みつけるとデュポンの顔がサァと蒼くなっていく。

「朱玉鬪気 業火」

紅リディーネの右手から火炎玉がデュポンに襲い掛かっていく。デュポンは風の精霊であるために火炎による灼熱と爆風がその身体を吹き飛ばしバラバラにしていく。なんとか防ごうとデュポンも必死に抵抗するが紅リディーネの業火がそれを許さない。

「グオオオオオ〜！！！」

デュポンは吹き飛ばされ身体を形成している殻のみの姿となった。デュポンは殻保有種である。デュポンのような風の集合体からなる生命体は殻と呼ばれる魂の塊を持つ者が多い。殻は生命を保つものでそれを壊されると身体を維持しておくことが出来ない。つまり死んでしまうのである。

デュポンはそれを恐れ必死に抵抗していたがそれも虚しく今では殻のみとなってしまった。殻となったデュポンは攻撃も防御も出来ず、ただ浮かんでいるだけの小さな球体である。恐怖に怯えているとリディーネが近づいてきた。

「たっ、助けて……」

「……何で？」

「おっ、お願いします！何でも言うつことを聞きますから。殺さないでください！！！」

恐怖に身を震わせて懇願するデュポンの姿を見てリディーネは命だけは助けることにした。その代償として自分のしもべとなり命を捧げる事をリディーネは約束させた。デュポンは殻を風で包むと再

び巨大な身体を取り戻した。そしてリディーネに膝まつき絶対服従を誓った。

「ささっ、こちらへどうぞ。」

デュポンは自らが生活している穴ぐらにリディーネを招き入れると狩りをして得たダルマいも虫を料理していく。腹を減らしているリディーネにこんがり焼けたダルマいも虫の皿が置かれた。デュポンはよだれを垂らしながらそのごちそうを小皿に分けてリディーネに手渡した。

「あんた・・・これを喰えっというつもり！」

激怒したりディーネに再度狩りを命じられたデュポンは遙かなる泉に向かった。魚を取り、山菜を集め、戻ってくると食事の用意をした。こうしてリディーネとデュポンは共に生活していく事となった。

一方、麒麟にまたがり、てんと達のいる地獄の一丁目を目指すタカヒト達であったが雲をすり抜けたその場所は海色一色に染まっていた。タカヒトはディーノに言われていたことを思い出した。

「この住む世界と地獄道は時間の経過速度が若干違つらよ。再び地獄に戻る際、その経過速度の影響を受けて別の場所へ墮ちる可能性があるらよ。」

「ディーノの言った通りだ。全然知らない所に着ちゃったみたいだね。」

「はやく、てんと達を捜さないと！」

「タカちゃん！」

ミカが驚いた表情で海面を指さした。その指先にはケタ外れの大
きな体に八つの頭と尾があるやまたのオロチが三匹海面にいた。だ
がもつと驚いたことはその三匹のやまたのオロチに向かつていく一
隻の小船があつた事だ。次の瞬間、一匹のやまたのオロチが小船を
その鋭い牙により砕き木端微塵にした。

「きゃあああ〜！」

ミカの悲鳴にやまたのオロチはタカヒト達の存在に気づき雄叫び
をあげて威嚇した。はるか上空に浮遊するタカヒト達への攻撃が不
可能であることに気づくとやまたのオロチの鋭い眼差しが海面に再
び向けられた。驚いたことに小船はすでに沈没してしまつたがひと
つの影が海面に立っていた。小船に乗っていた生き残りの亜人種な
のか？武器らしきものをひとつも持たずただ立っていた。

「タカちゃん、あの人助けなくちゃ！」

ミカの一言でタカヒトは麒麟に近づくように合図したが麒麟は怯
えきつて動こうとしない。タカヒトが赤玉の協力を得てやまたのオ
ロチを攻撃しようとしたその時、やまたのオロチが亜人種を喰らお
うと八つの内の一つの首が顎を開き襲い掛かった。

次の瞬間、襲い掛かった一つの首が海面に立っている亜人種の目
の前で、「グシャ」と音を立てて潰れ海中に沈んでいった。ほかの
七つの首は呆然としている。やまたのオロチにとって、海面に立っ
ている亜人種はただの餌くらいにしか認識がなく反撃されるなど夢
にも思つてなかつた。我に帰つた残りの七つの首のやまたのオロチ
は一斉に海面の亜人種に襲い掛かった。

しかし海面に立っている亜人種が何をしたのかもわからないうちに七つの首はとつもない衝撃を受けて朽ちていく。一つ目の頭は陥没し、二つ目の頭は上顎から上が無くなり、三つ目の頭は下顎が吹っ飛んで無くなっていた。ほかの頭も意識もなく、やまたのオロチは成す術もなく海中に沈んでいった。残りの二匹のやまたのオロチは戦慄を覚え、海面に立っている亜人種を餌から敵という認識に変えていく。一匹のやまたのオロチは素早く海面に立っている亜人種の後側にまわりこんだ。

挟み撃ちの体勢を取ったやまたのオロチは八つの頭を亜人種に向けて襲い掛かる。海面に立っている亜人種は「ニヤリ」と笑みを浮かべ身体中から藍色の輝きを放つ。

その直後、前後挟み込んでいた二匹のやまたのオロチが途轍もないデカイ拳に殴られたかのように吹っ飛んでいく。海面に立っていた男が両手を前後のやまたのオロチに向けた瞬間、物凄い衝撃を受けたように二匹のやまたのオロチの胴体が陥没した。二匹のやまたのオロチは八つの口から大量の血を噴出すとそのまま海底深く沈んでいった。その一部始終を見ていた赤玉がタカヒトに言った。

「ありやゝゝ相当の使い手だな。強いぜ！ヤツは。」

赤玉にそう言わせるほどの使い手が目の前にいる事にタカヒトは困惑していると続けて赤玉は海面に立っている男がこちらを異常に警戒していると言葉を荒げた。タカヒトが亜人種の方に目を向けると亜人種はタカヒトを睨みつけていた。

次の瞬間、タカヒトの身体に物凄い衝撃が襲い掛かった。タカヒトとミカの乗っていた麒麟ごと衝撃を受けて吹っ飛んだかと思うとそのまま海面目掛けて落ちていく。ミカと麒麟は衝撃により気を失っているが、タカヒトはなんとか意識を保っていた。落ちていくタカヒトに赤玉は語りかけた。

「あの野郎おっくやってくれやがるぜ！」

おい、タカヒト！このままだと海面に落ちて即死だぞ！！俺様に代われ！！！！」

この状況の中でミカと麒麟を助けることが出来るのは赤玉しかいなかった・・・タカヒトに選ぶ選択肢は無かった。意識を開放して赤玉に身体を明け渡すとタカヒトの身体は赤色に輝き出した。

「おっしやあ！」

赤タカヒトは体勢を立て直すと気絶して落下しているミカと麒麟の救助に向かった。ミカの身体を抱きしめると次に麒麟の首元を掴みそのまま近くの孤島へと降りた。ミカをそつと浜辺に寝かすと赤タカヒトは海面に立つ亜人種の元へ飛んでいく。

赤タカヒトの姿を見ても驚きもせず亜人種はただ海面に立っていた。亜人種は全身が藍色に染まっていて驚いたことに顔には眼らしきものしかない。何の反応も見せない男に赤タカヒトは次第にイライラしてきた。

「待たせたなあゝ とりあえず自己紹介だ。俺様は赤玉だ。おまえは？」

「・・・・・・」

「なんも言わねえんだな・・・とりあえず挨拶だ！」

赤タカヒトは激しく燃え盛るメガフレアを亜人種にぶつけた。しかし亜人種はメガフレアを見つめると一瞬にしてそれを打ち消した。「ニヤリ」と笑みを浮かべると亜人種が攻撃を開始していく。

「おわっ！」

衝撃波が赤タカヒトに次々と襲い掛かる。赤タカヒトは防戦一方となり、逆に亜人種の衝撃波の威力が増していく。

「ぐわっ！」

防御に徹していた赤タカヒトの両腕は弾かれ衝撃波の直撃を顔面に食らった。膨大な数の衝撃波を受け続けた赤タカヒトはダメージを蓄積して意識を失いかけていく。

「くっ……」

その時、赤タカヒトの前に桜色の壁が現われて衝撃波から赤タカヒトを守った。赤タカヒトは薄れていく意識の中、孤島の方に目を向けると意識を取り戻したミカが桜玉を発動させていた。

「……ミカか……」

ミカのレインボーウォールによりすべての衝撃波は弾かれていた。ミカはただタカヒトの付き添いにディーノのところに行ったのではなかったのだ。ミカの持つ桜玉の能力もディーノによる修行によりかなり高まっていた。浜辺で意識を取り戻したミカは赤タカヒトの戦況を確認するとすかさずレインボーウォールを繰り出した。

ミカの機転によりなんとか生き長らえた赤タカヒトであったが依然状況は変わってはいない。どうすれば勝てるのか？……そんなことを考えていると赤タカヒトに白玉が語りかけた。

（あのさあ、赤ちゃんじゃあ、アイツには勝てないよ！）（白玉）

「赤ちゃん・・・」

「てめえ、その呼び方なんとかしやがれ！勝負はこれからだ、バカ野郎。」

（んん〜とねえ〜 無理だと思うよ。アイツは空気を急激に圧縮してそれに方向性をつけて飛ばすんだ。つまり、空気を自在に操れることが出来るって事。赤ちゃんとじゃあ相性が悪いんだよ。僕がやってみるよ。僕の能力とアイツは同種類なんだ。だから、なんとかなると思う。）（白玉）

「けつ、勝手にしやがれ！もし変な気を起こしたらタダじゃおかねえからな！」

赤タカヒトは意識を白玉に譲るとタカヒトの身体から赤色の輝きがなくなり、髪の色や瞳が白くなった白タカヒトが現れた。白タカヒトは海面に立っている男のところまで降りていくと同じように海面に立った。赤タカヒトの時に受けたダメージを引きずっているが何とか攻撃は可能だと確認した白タカヒトだったが初めて目にする同種的能力者の前で攻撃のタイミングを伺っていた。

同種の能力者

「さてと・・・待たせちゃったね。」

「・・・」

赤タカヒトから白タカヒトに選手交代したわけだが海面上の亜人種は微動だにしなかった。そのような変化は亜人種にとってどうでもよいことなのかもしれない。亜人種は白タカヒトを睨みつけるといきなり衝撃波を放った。しかしその刹那、白タカヒトも衝撃波を繰り出すと空中で衝撃波同士が相殺された。この出来事にはさすがに亜人種も動揺した。

「えへっ、ビックリした？僕も同じ能力を使うんだ。君のと少し違うけどね。」

海面に立っている亜人種はフワツと浮きあがると白タカヒト目掛けて一気に距離を詰めてきた。驚いた白タカヒトは防御に徹する。亜人種は近距離から連続蹴技を白タカヒトに浴びせる。白玉の能力である圧縮空気の応用で衝撃波の盾を作った白タカヒトは亜人種の蹴技をなんとか受け止めていく。

「こっのおく！」

白タカヒトも負けじと亜人種に蹴技を浴びせるが亜人種も同様に衝撃波の盾で防御する。亜人種は再び衝撃波を白タカヒトに放つが白タカヒトも衝撃波を繰り出し双方の衝撃波は空中で相殺され弾け飛んだ。今まさに亜人種と白タカヒトの力は拮抗していた。

「結構やるねえ。君、名前なんていうの？
僕とこれだけ渡り合えるなんてかなりの能力者だよな？」

「・・・カオス。」

「やっと喋ってくれたよ。へえ、カオス君っていうんだ。よろしくね。」

それじゃあ、カオス君・・・行くよ！」

白タカヒトは自分の足元に圧縮空気の玉を二つ作るとその玉に乗った。ニヤリと笑みを浮かべた白タカヒトはカオスとの距離を瞬時に詰めた。二つの圧縮空気の玉は水の入った風船のようなもので玉に乗るとその部分が破ける。風船が破ければそこから水が溢れ出すように破れた部分から圧縮空気が一気に白タカヒトの身体を押し出したのだ。白タカヒトはカオスに近づきながら両手に圧縮空気の玉を作りだす。むかつてくる白タカヒトにカオスは衝撃波を放つが両手に作った圧縮空気を巧みに使って白タカヒトはカオスの衝撃波を次々とかわしていく。

「イツツ、クール！！！！」

カオスは次々と衝撃波を放つがそれらをかわして白タカヒトは次第に接近していく。戦慄を感じたカオスが巨大な衝撃波をためこんで白タカヒトに目掛けて放った。

「あまいよあ、とりゃあ！」

間一髪のところでも巨大な衝撃波をかわすとカオスの懐に入り込むことに成功した。白タカヒトは両手をカオスの腹部に押し当てると会心の衝撃波を放つ。カオスの腹部に異常な陥没が発生すると勢い

よく海底へと落ちていった。

「イエイ、僕の勝ち！」

カオスとの戦闘に勝利を確信した白タカヒトはミカのいる浜辺へと飛んでいった。

「どうだった？僕って凄いでしょ？」

「・・・あれ、見て！」

ミカの表情が急に曇り、その指さした方向に白タカヒトが視線を向けるとカオスが顔だけを海面から出して睨みつけていた。

「あれ？生きてる・・・でも向かって来ないね？恐いのかな？」

不思議がる白タカヒトを睨みつけながらカオスは微動だにしない。ただ機械混じりの声らしき音だけは白タカヒトとミカにもはっきり聞こえた。

「ピッ、ガ、ガガ・・・損傷率55パーセント・・・右腕・・・
破損・・・セーフティロック・・・解除・・・スタビライザー解除・・・
リミッター解除・・・」

白タカヒトの攻撃により負傷を負っていたカオスが海面より少しずつ浮きあがっていく。下をうつむきながら少しずつ浮きあがると再び海面に立つ。顔をあげたカオスの表情からはダメージを受けた様子は伺えない。

白タカヒトを見据えたカオスは海面上を猛スピードで向かってきた。同様に白タカヒトもカオスに向かっていく。すでに勝利を確信

していた得意げの白タカヒトは衝撃波を繰り出した。カオスは衝撃波を受け続けるがダメージは全く受けてはいない。

「効かない？じゃあ、これならどうだ？」

白タカヒトは衝撃波の数と威力を増していくがそれらを浴びながらもカオスは白タカヒトの懐にいとも簡単に入り込んだ。動揺する白タカヒトの腹部へカオスの右膝が入ると丸の字に折れ曲がった白タカヒトは苦悶の表情を浮かべた。

「あががが・・・！！」

次の瞬間、白タカヒトの視界に映ったものはカオスの左脚だった。蹴りを浴びた白タカヒトは上空のカオスを見つめながら海底へと落ちていく。沈んでいく白タカヒトを追ってカオスも海中へと潜った。

「もっ、ごごご、もごご・・・ぶっ！」

息を堪えながら反撃しようとするがカオスがそれをさせない。海中でもスピードの落ちないカオスは白タカヒトの背後にまわり込むと右拳を突き出した。

海水が突き刺さるように海中から空中へと飛ばされた白タカヒト。それを追ってカオスが海中から飛びだした。

「くっそお・・・どこだ？」

白タカヒトは空中でなんとか体勢を整えて海面を見るがそこにカオスはいない。カオスの気配を感じて頭上を見上げたがすでにカオスは衝撃波を繰り出す体勢にあった。

白タカヒトは回避する余裕もなくカオスの怒涛の衝撃波を浴び続

けて海中へと再び落ちていく。カオスは攻撃を止めようとはせずに衝撃波を繰り返して続けた。

「あががががが……」

衝撃波を浴び続けた白タカヒトは海底へと打ち付けられその身体は海底の砂に埋もれていく。衝撃波がおさまった頃、白タカヒトは覆いかぶさった砂をどけて立ちあがろうとしたが膝はガクガクしてうまく立てない。

カオスを攻めて倒したはずが今では自分が瀕死に近い状況に追い込まれている。状況を理解出来ない白タカヒトの心に紫玉は語りかけた。

（白玉よ。カオスは急激にその力を増した。今のままでは勝てないぞ！）（紫玉）

「うるさい！黙っててよ！」

紫玉の話に耳を傾けようとはせずにガクガクしている膝をなんとか押さえ立ちあがると空中に立っているカオスを睨みつけた。白タカヒトは最後の力を振り絞って海面にあがると衝撃波をカオスに打ち込んだ。カオスはその衝撃波をいとも簡単に腕のみで打ち落とすていく。

「うわああああ……ちくしょう……なんで僕の攻撃が効かないんだあ……！」

白タカヒトは涙を流して泣きながら衝撃波を乱れ撃つ。カオスは衝撃波をかわしながら海面に立っている白タカヒトに衝撃波を溜め込みながらゆっくり向かっていく。近づいてくるカオスに蹴撃を繰

り出すが紙一重でかわされるとカオスの左膝が白タカヒトの腹部にめり込んだ。

「うっっ……がはっ！」

苦しみに悶える白タカヒトの顔面にカオスの特大衝撃波が放たれた。ゆっくり海底に沈んでいく白タカヒトの瞳にぼんやりとカオスの無表情な顔が映っていた。意識を失いかけている白タカヒトに紫玉が必死に話かける。

（おい！白玉……大丈夫か？） （紫玉）

「うっ……紫……玉くん？やっぱり……ダメだったよ。」

（なんとか大丈夫らしいな。よく聞くんだ！ヤツは強い。おまえや赤玉の単独攻撃では勝てない。だが我々の力を合わせればヤツに勝てる要素は十分にありそうだ！意識を赤玉に戻せ。反撃の開始だ！） （紫玉）

赤＋白＋紫＝どつなの？

「ムム……おし、俺様復活だ！」

海底にいた赤タカヒトはムクツと立ちあがると海面に飛び出した。しかしカオスは反応を示さない。いや理解出来ないのかもしれない。カオスの力は赤タカヒトや白タカヒトのそれを遥かに超えている。計算ではカオスの攻撃によりタカヒトの損傷率は80%以上で起きあがることは不可能のはず。それが何事もなかったような表情をしていること自体が想定外であった。

頭が混乱したカオスは赤タカヒトの接近を簡単に許した。その手にカオスが気づいた瞬間カオスの胸元が赤く光った。

「赤玉上級闘気　メガフレア！」

右手からの赤い激しい炎柱にカオスは上空へと押し飛ばされた。激しい炎柱を身体から引き離すとそれは遥か上空へと消えていく。その場に留まったカオスは驚きを隠せない。それと同時に胸に異常な衝撃と高熱を覚えた。

生まれて初めての苦しみを覚え、そして生まれて初めての怒りも覚えた。その怒りの矛先は赤タカヒトに向けられていた。しかし赤タカヒトは有り余る力に驚いてカオスの殺気などまるで頭になかった。

「すげえ……凄えぜ、この力！おし、この力があればあんなヤツ

こてんぱんにしてやるぜ！」

（油断は禁物だぞ、赤玉。まだ、カオスの能力は未知数なのだ。）

(紫玉)

(ほんとだよ。赤ちゃんってすぐ調子に乗るんだから!) (白玉)

「ケツ、勝手に言ってやがれ!

おまえらこそ力の出し惜しみしてんじゃねえぞ。いくぜ、オラ!

赤タカヒトはカオスのもとに飛んでいく。上空には怒りの表情を浮かべるカオスが睨みつけている。それを無視するかのように孤島の浜辺でタカヒトを心配するミカを見つけると赤タカヒトはVサインをして見せた。ミカは赤タカヒトの無事を確認するとホツとした。しかしいつもの赤タカヒトとは違い、赤タカヒトのまわりを紫色の輝きが包み、更にそのまわりを白い輝きが覆っていた。

赤紫白タカヒトがカオスの目前で止まるとカオスは依然、激怒した表情をしていた。全身藍色づくめで目だけはヤケに紅い。カオスは上空より一気に赤紫白タカヒトとの距離を詰めると右腕を振り回したが赤紫白タカヒトは紙一重でそれをかわした。再び右左の連続蹴技をカオスは繰り出す。赤紫白タカヒトはなんなくそれをかわしていく。

徳の水を飲んでるわけでもないが、いやそれ以上の力が赤紫白タカヒトの身体中にみなぎっていた。

「オラオラオラ、遅いぜ、遅いぜ!」

上空で怒涛の攻撃を仕掛けるが赤紫白タカヒトにはそれらがスロ―モーションのように見えている。今の赤紫白タカヒトにはカオスの動きが、呼吸のすべてが手にとるようにわかった。次にどのような攻撃をカオスが仕掛けてくるのかも……。

赤紫白タカヒトはカオスの蹴り足との距離を少しずつ縮めていく。最初は身体を大きく反らしていたがそれは次第に動きが小さくなっていく。まるで羽毛のようにフワリフワリと無駄な動きが全くなくなっていく。激怒した表情が次第にこわばっていくカオスは左蹴りを赤紫白タカヒトに浴びせる。しかしそれすらかわされると赤紫白タカヒトはカオスの懐に入り鬪気を高めた。

赤紫白タカヒトの身体は紫色と白色の輝きが更に増していく。両手をカオスの腹部に押し付けると鬪気を一気に開放させた。

「赤白玉上級鬪気複合技 ハイパーメガフレア！」

赤紫白タカヒトの右手からメガフレアが、そして左手から衝撃波が放たれた。それぞれが空中で交じり合い通常のメガフレアに白の衝撃波がプラスされた。

ハイパーメガフレアの直撃を受けたカオスはさらに上空へと押し出されていく。赤紫白タカヒトは瞬時に移動して近づいてくるカオスの背後にまわりこむと紫色の輝きを増していく。カオスに向けて赤紫白タカヒトは紫玉の理力を高めて両手を差し出した。

「これが最後の攻撃だ！アルティメットオーキヤノン！」

アレストから紫色の波動が一直線にカオスに放たれた。ハイパーメガフレアに押されて身動きの取れないカオスの背中にアルティメットキヤノンが激突した。ハイパーメガフレアとアルティメットキヤノンに挟まれたカオスの身体は次第に潰されていく。

「ギガガゴガガガガ！！！」

衝撃音とカオスの悲鳴のような音だけが辺りに響いていた。赤紫白タカヒトから白と紫の輝きがなくなるとそこには何の反応も示さ

ないカオスが立っていた。

「……………」

その後カオスは少しずつ海面に近づいて海底に向かって沈んでいった。少し警戒しながらも赤タカヒトはこの戦いにより闘気の多大な消耗とダメージにその場に座り込んだ。

「ハアハアハア……勝ったのか？」

（どうやら……そのようだな）（紫玉）

（やったね！赤ちゃん）（白玉）

「おおよ……」

（だが樂觀は出来ないぞ。赤玉！ミカを連れてこの場から撤退する。）（紫玉）

紫玉に言われて赤タカヒトはミカのある場所まで飛んでいく。事情を説明すると意識を取り戻していた麒麟の背中に乗りてんと達している遙かなる泉をふたりは目指した。

赤タカヒト達がいなくなった頃、海底に沈んだカオスは……

ピッガガ……補助電源……入電……ピッピッピッピッ……機能……

ピッ・ガガガガ 回復……再生……

水の精霊ウンディーネ

「水の中??」

てんとが目を覚ますと見たこともない光景が広がっていた。白いフロアにガラスのような壁。そのガラスらしきものの外側には多数の種類の魚が泳いでいる。驚いているてんとが気配を感じ、そこに視線を移すと部屋に入ってくる影があった。それはクラゲのような透明な身体をしている亜人種であった。

「お目覚めですか？」

「・・・何者だ？」

「私は水の精霊ウンディーネといます。」

あつ、心配なさらないください。ここは安全です。」

「・・・私といた二人は？」

「二人とも命に別状はありませんが安静にしている必要があります。」

「そうか・・・偶然とはいえ、やっと会う事ができた。」

てんとはウンディーネに会うためにこの地に来た事とこれまでの経緯を話した。

「シルフがそんな事を・・・。確かにあなたとジエイドは前世でも因果により結ばれた存在です。でもこの事を私が話す事は簡単な

事だけど今のあなたには理解する事も回避する事も出来はしない事
・
・
・
」

ウンディーネの口ぶりからして事はかなり深刻で巨大な力が関わっている事だけは理解できた。そのこともあるがウンディーネはてんと達のソウルオブカラーの能力をあげる必要があると言った。ウンディーネとてんとはある部屋へ向かった。

「共鳴石の部屋？共鳴石ならすでに所有している。」

ソウルオブカラーにはその能力を発揮できない世界が必ずひとつはある。だが、共鳴石を持つことによりどの世界でもソウルオブカラーの能力を発揮することができるようになるのだ。そして共鳴石はタカヒトがペンダントとして持っている。

「いいえ、共鳴石の役割はそれだけではありません。」

ウンディーネは話を始めた。本来、共鳴石はソウルオブカラーの輝きを増す研磨のような役割を持っている。つまり共鳴石からである特異な音波によりソウルオブカラーは磨かれて、その能力をあげることが可能なのである。しかしその共鳴石が特異な音波を出すにはある条件が必要だという。

「ある条件？」

「共鳴石に必要なもの・・・それは私の身体を構成している生命水です。」

ウンディーネの身体は生命水と呼ばれるもので構成されている。その生命水の雫を共鳴石にかけると特異な音波を出す。だが、それ

を続ければウンディーネの存在自体が無くなる。ソウルオブカラーの能力をあげて地獄道の魔物達に対抗できる力を身につけるためにこの地へと来たがそれにはウンディーネの命が必要になる。自分の大切な者を守るために犠牲にしなければならぬ命がある。悩み沈黙を続けるてんとにウンディーネは笑みを浮かべた。

「……大丈夫ですよ。」

何千年も生きてきたウンディーネはただ静かにこの世界をずっと眺めてきた。殺戮と破壊の世界を悲観しながら自らの無力さに憂いを感じながら生きてきた。

ウンディーネがこの殺戮と破壊の世界で生きてこられたのは自分の役割を果たすためであった。ウンディーネは自分にどの様な役割が与えられているのかは正直分からなかったがこの出会いがそうだと確信した。

「では急ぎましょう。」

「急ぐ理由でもあるのか？」

「はい……アレスが近づいています。」

てんとは自身の血の気が引くのがわかった。それはこれから降り掛かるうとする悪夢の始まりでもあった。

「アレス様、カオス様との交信が途絶えました。」

「何かあったとは考えられんが……交信の途絶えた位置に向かえ！」

ウンディーネの力を狙って三獣士のひとり、空のアレスがこの遙かなる泉へと進軍をしてきていた。実はギガスが地獄の一丁目を建設した理由はウンディーネに結界をはらせ籠城させる為である。アレスとカオスは逃げ場を失ったウンディーネに対して空から攻撃を仕掛けるという作戦を立てていた。だがカオスは思いも寄らない敵の出現により海底に沈んでいた。

「もし、あのような者たちがこの力を手に入ればこの世界だけでなく、ほかのすべての世界まで影響が及ぶでしょう。」

悲しみの表情を浮かべながらもウンディーネはてんと達に希望を見出していた。ウンディーネとてんとは共鳴石のある部屋の扉を開いた。そこは上も下もすべて藍い空間となっていて部屋の中央には重量感のある共鳴石が置かれていた。そしてそのまわりにリナとポンマンが寝かされていた。

「リナ、ポンマン！」

「大丈夫です。意識はありませんが命に問題はありません。ただ・・・」

意識はないものの二人の体力は著しく低下している為ソウルオブカラーの能力をあげるのと同時に体力の回復をはかる必要がある。そう説明すると急かすようにウンディーネは言った。

「さあ、てんと。時間がありません。あなたも早く共鳴石のもとへ」

「しかし、それではあなたの生命が・・・」

ウンディーネは渋るてんとを共鳴石のもとへと連れていくとそこへ寝かせた。そしてウンディーネが石に触れると神々しい光を共鳴石が放出する。てんとは自分の力がみなぎる感触を実感するが、ウンディーネの身体が痩せ細っていくのもわかった。三人が共鳴石により能力をあげているその時、海底に沈んだカオスを巨大な飛行艇が回収作業にあたっていた。

「アレス様！カオス様の收容が完了しました。」

「よし、これより泉へ向かう。全乗組員！第一戦闘配置につけ！」

海底よりカオスは飛行艇に收容された。再起動はしているもの動く事は叶わず再生シエルにて治療を受けることになった。アレスは破壊神の命令を受け、泉にいるウンディーネと共鳴石の奪取に向かうことになっている。すでにギガスにより泉の周囲は包囲されている為アレスは上空より侵入する運びとなっていた。メインデッキでアレスに参謀のスードルが声をかけてきた。

「アレス様。今回の作戦はギガス様なくしてはありえませんが、たな。」

「確かに我らと協力するとはな！まあ、それも破壊神様には想定内であったという事だろう。ヤツがあのに居ればそれだけで役割を果たすと計算しておられたのだろう。だが問題はカオスのほうだ。ヤツにこれほど損傷を与える存在がいる事が脅威だ。」

アレスは異常なほど警戒していた。スピードだけをとってみれば三獣士の中で最もずば抜けているカオスに致命傷を与えた者がいる。想定外の存在の出現に困惑するアレスにひとりの男が近づいてきた。

「かなり動揺しているな。まあ、無理もない。三獣士の一角が落とされたのだから。」

「フンツ、ジェイドか・・・勘違いするな！」

カオスやギガスの能力など、この私とでは雲泥の差がある！」

「そうか・・・まあ、ここは地獄道最強戦士のお手並みを拝見しようとするか。」

カオスを倒した正体不明の存在に動揺しているアレス。その隣でジェイドはカオスを撃破した存在が何者なのか検討がついていた。

「再会も近いか・・・」

再びてんと達との再会があることを確信するとその場から去っていく。飛行艇のメインデッキに残されたアレスにスードルが声をかけた。

「アレス様、ヤツは何者なのですか？」

「ふん、ヤツは破壊神様のお気に入りだ。どうやって取り入れたのかは知らんがな。」

飛行艇内を自由に行動出来て三獣士と同等の権威を持っているジェイドをアレスはあまり面白く思っていなかった。アレスはジェイドがどのようにして破壊神に取り入れたのかわからなかったがジェ

イドの持っていた茶玉と灰玉は破壊神よりアレスの手に渡った。

「絶望の子 ジェイドか・・・だがヤツの存在など俺には取るに足らん！」

ジェイドが何を考えていようとこのふたつの能力があれば恐れることもないとアレスは自分に言い聞かせた。

「ねえ、あれじゃない？」

一方、その飛行艇の遙か前方を麒麟に乗っているタカヒト達は遙かなる泉が眼下に見えるところまで来ていた。タカヒトが指さすと麒麟は泉の畔へと降りていく。遙かなる泉と呼ばれてはいるがタカヒトとミカには普通の泉にしか見えなかった。二人が泉を眺めていると一匹の魔物が現れた。

「おふたりさん！あついねえ〜・・・悔しいから殺しちゃうぞ！」

魔物はいきなり複数の風刃の嵐を繰り出した。ミカの機転で瞬時にサクラリーフを繰り出すと風刃は無残にその巨大な盾の前にポトリ、ポトリと落ちていく。

攻撃の効果が出ないことに魔物はかなり悔しがって最大級の攻撃を仕向けてきた。上空の雲まで届くほどの竜巻を作り出すと周囲の葉が巻き上がり木々が激しく揺れ出す。自身の最大級の攻撃に勝ち誇った魔物が技を繰り出そうとした瞬間、激しい火炎柱が魔物の視界に映った。

「アグアア〜〜！！！」

激しい火炎柱は魔物の身体を次第に溶かしていく。魔物の身体を形成していた風の衣は失われ殻のみとなってしまった。殻のみとなった魔物の前には赤タカヒトが立っていた。

「おまえ、誰に喧嘩を売ってんだ？」

「はつくしよん！ちっ、畜生！覚えていろよぉ。」

「うわぁ〜ん、リディーネさまぁ〜ん。」

魔物はそう言い残すと核のまま舞うようにその場から飛び去っていった。

「なんだったんだろうね、アレ・・・」

そんな魔物の姿を、目を細めて見送る赤タカヒトとミカであった。赤タカヒトとミカはしばらく泉の周囲を歩き回ったが依然変化のない光景にミカは不安に襲われていく。

「どうしよう・・・泉に着ただけで何処に行けばいいんだらう？」

キヨロキヨロと辺りを見渡すミカとなんとかミカの不安を取り去ろうと赤タカヒトは懸命に入口らしきものを探そうとしている。だがそれらしきものは見つからず、赤タカヒトは泉に近づくと落ちていた小石を拾って投げ込んだ。

「おっ？・・・なんだ、なんだ！」

泉に波紋が広がりそれと同調するように水位が一斉に下がってい

く。赤タカヒトとミカはその光景をジツと見つめていると中央の一番深い砂地にガラスの様なもので覆われた建物を発見した。

「なんだろ・・・どうしよう？」

「どうするって行くしかねえだろ。虎穴入らずんば、虎兇を獲ずだ！」

赤タカヒト達は導かれるように建物へと入っていく。建物内に入ると砂地から水が再び沸き上がり建物を覆い隠すようにまた元の泉へと戻っていった。

燃え広がる泉

「ふう〜相変わらず険しいわね!」

デュポンを泉に残してリディーネは父親である破壊神のもとへ歩を進めていた。地獄道で最も深い深層部に位置する大焦熱地獄はすべての領域が破壊神の所有地である。弱い魔物達では近づくことすら出来ないほどの邪悪な気が辺りに漂う。大焦熱地獄の中心に破壊神の要塞デス・サイドがある。溶岩が辺りに流れ少ない岩石の道を歩いていかなくはそこには辿りつけない。

「面倒くさいわね・・・雑魚どもめ!」

途中で中級魔物の排除を繰り返し、少しウンザリしながらもリディーネはデス・サイドに辿り着いた。デス・サイドには破壊神とその妻で、リディーネの母親であるデメテルが暮らしている。要塞に入り込んだリディーネは辺りを見渡すとデカい石壁に松明が薄っすら灯っていた。薄暗い石畳の廊下をリディーネは歩いていると人影が視線の先に映った。

「まあまあ、リディーネちゃん!

どうしたの、どうしたの? 身体の具合でも悪くしたの?」

「別にそんなんじゃないわ・・・パパは?」

「ええ・・・奥の間にいるわよ。」

デメテルが奥の部屋にいることを伝えるとリディーネは何も語らずに走っていく。デメテルはリディーネの本当の母ではない。リデ

イーネの母親はリディーネが子供の頃、何者かによって暗殺された。しかもその場を幼いリディーネは目撃していたのだ。

「ママ、寝られないよお。」

なかなか寝付けなかった幼いリディーネが母親のもとへ歩いていくと母親が何者かと言いつき合いをしていた。正確には何人かと言いつき合いをしていた声をリディーネは聞いた。

「きゃあああ〜！〜！」

「ママ・・・？」

直後に悲鳴らしき声が聞こえると幼いリディーネは部屋のドアを開けた。そこで見たものは血に染まりすでに息絶えた母親の姿であった。

「ママ・・・ママ、ママ・・・ママ・・・」

血塗れの母親を目の前にリディーネは動く事も、いや呼吸をすることも忘れていた。破壊神は罪人の搜索を命じたが捕まることはなかった。リディーネの今後のことを考え、後妻として破壊神はメイドのデメテルを迎えた。破壊神の期待に応えようとデメテルは後妻としてリディーネの母親になるよう努力したがリディーネにとって母親はただひとりであり、今でもリディーネはデメテルと心の距離をおいていた。

デメテルもそれを察しているようで悲しげな表情をしていた。そんなデメテルの心情をリディーネも理解していた。それでもまだ心の整理は出来ていない。

「パパ！」

ドアを開けるとリディーネは石畳敷き部屋の上座に座る破壊神を見つけ、泣きじゃくりながら抱きついた。無言の破壊神は泣きじゃくるリディーネの頭をずつと撫でている。リディーネの泣き声は部屋の外まで響き部屋の外ではデメテルが何も語らずに立っている。ひとときほど経ち枯れるほどの涙を流したりディーネの目は赤く腫れぼつていた。赤い目をしたリディーネは今までの事を、タカヒトやリナに負けたことなどすべて話した。

「ねえ、パパ。アタシは本当にパパの子供なの？」

正直言つて私つて拾つてきた子でしょ？」

「悪い冗談を言うものだ。紛れもなく私の子じゃぞ。」

「うそ！だつたらなんでこんなに弱いのに……。」

「フム……ではどうすれば私の子供であると認めるかな？」

「……力があれば。」

その言葉を聞いた破壊神はリディーネの頭に軽く手を置いた。神々しい輝きを放つとリディーネは自分の闘気があがつていくのを感じた。その輝きが消えた頃、リディーネの闘気は飛躍的にあがつた。

「力が……みなぎってる？こんな初めて……ありがとう、パパ！」

喜んだリディーネは破壊神の頬にキスすると舞う様に部屋を出て

行った。そんなリディーネの姿を見つめる破壊神。力を得たリディーネは石畳の廊下をニコニコしながら走っていく。

「早くこの力を試したいわ！とりあえず、馬鹿タカヒトから殺してやる。」

拳を握りしめながら急いで留守番をしているデュポンの棲み処へと走っていく。リディーネが部屋から出てくるのをそっと影から見ていたデメテルの表情は薄暗い廊下のせいか冷たく光っていた。

「ギガス様！アレス様から遙かなる泉に砲撃を開始するとの報告がはいりました。」

「……どうとでもすればいい。私には無関係なことゆえ……」

ギガスは新しく仕立てた着物をウツトリした表情で眺めていた。三獣士の中で紅一点であるギガスはその能力をほとんど見せず今の地位に登りつめた。三獣士に選ばれた理由、それは簡単なことである。ギガスが最も強いからである。ソウルオブカラーのなかで最も強力な色玉の内のひとつである黒玉を操る。しかしギガスはその最強の力よりも最高の美しさを欲したのである。今回の遙かなる泉への攻撃に対して与えられた役割をギガスはすでに果たしている。破壊神の命令を果たしたギガスにとってアレスやカオスの行動など、どうでも良かったのである。

「標準を合わせろ……撃て！」

飛行艇の砲台の標準は泉に合わせられてアレスの合図と同時に砲台が火を噴く。砲撃を受けた泉の周辺の森は轟音を立てながら燃え広がっていく。砲撃の勢いはおさまる気配はまったく見せず森は燃えて小動物は逃げ惑っていく。タカヒトとミカがウンディーネに会った直後に砲撃が開始されて泉の底にあるトレブシエルまでその衝撃は鳴り響いていた。

「あわわわわ〜」

「きやあ！」

「この泉のなかにも二重三重の結界を張ってありますのでしばらくは持ちこたえるでしょう。しかし、いつまで持つことか……」

トレブシエルはターミナルポイントと呼ばれる結界を造り出す装置により三重の結界が張られている。ターミナルポイントは水中にあることからアレスやギガス達には手を出す事は出来なかった。

本作戦の鍵を握るカオスだけがターミナルポイントの破壊が出来た。ウンディーネに促されたタカヒトとミカはその地響きに動揺するも共鳴石のある部屋へ歩いていく。

「てんと、ポンマン！」

部屋に入ったタカヒトがそこで目にしたのは大きな共鳴石の近くに寝かせられていたてんと、ポンマンそれにリナの姿であった。

「えっ！……リナ？」

ミカにはリナが何故ここにいるのか少し疑問を感じたがてんとに何か考えがあつてのことだろうと即座に理解した。

「あと少しで彼らの能力アップが完了します。あなた方にも入ってもらいたいのですが、この共鳴石の部屋がそれまでもつかどうか分かりません……。」

飛行艇からの砲撃は凄まじく続いていたのであったがこの様な状況でもウンディーネの造り出した結界は強力でトレブシエルへの直撃は免れていた。砲撃に限界を感じたデモンズがアレスのいるメインデッキに入ってきた。

「アレス様！」

砲撃を繰り返してはいますが、結界が強力でトレブシエルに届きません！」

「砲撃を止める。私が出向く！」

「ハッ!!！」

配下のデモンズから報告を受けたアレスは砲撃を止めるように指示をする。すると鳴り止まなかった爆音がピタリと止まった。トレブシエル内で頭をおさえていたタカヒトが顔をあげると言った。

「砲撃が止まった?・・・弾薬切れ?」

トレブシエルでの攻防

「いえ・・・邪悪で巨大な力を感じます。」

ウンディーネは追撃が予想されると警戒を怠らなかつた。実際の予想は的中した。アレスは飛行艇の甲板に出てくると船首に立つ。強風によりアレスの赤いマントがなびいている。両手を合わせ、闘気を高めると茶色の輝きが増していく。みなぎる力に笑みを浮かべ、泉を見下ろすと水に揺れてトレブシエルがつつすらと見えた。

「くられ、茶玉最大闘気　ガイヤ！」

泉の底が熱を発した瞬間、岩が持ちあがりマグマが押し出された。トレブシエル自体は結界が張られているのでマグマや熱の被害は受けないが、泉の水はマグマにより次第に蒸発し、泉の底に沈んでいたトレブシエルがその全貌を現した。全体が白くガラスのようなトレブシエルに飛行艇からデモンズが次々と飛来してくる。

「いくぜ、野郎ども！」

デモンズ達はトレブシエルに降下していくと覆っている結界へ集中攻撃を仕掛た。地上からもギガスの指示を受けていたヘルズ達が泉の底へ押し寄せてきて結界を造り出しているターミナルポイントを次々と破壊した。それらの攻撃によりトレブシエルを覆っていた結界の効力は次第に弱まっていく。トレブシエル内ではタカヒトが落ち着き無く共鳴石の部屋をウロウロしていた。

「あわわわわ　どっ、どっしょう。」

「タカちゃん、慌てないの。大丈夫だから心配しない！」

「……うっ、うん。」

（わっはっはっ、タカヒトもミカの前じゃあ形無しだな！）（赤玉）

ミカに叱られているところを赤玉にからかわれてすっかり落ち込んでしまったタカヒト。そこへウンディーネが近づいてきた。

「能力アップが完了しました。しかし潜在意識の安定化の為、少しだけ時間が必要です。それまであなた方にトレブシエルの防衛にあたってほしいのです。お願いを聞いていただけますか？」

「うん、分かった。でも……」

「もちろん、私も行くわよ。」

「ミカちゃん……でも……」

「ほら、行くよ。」

ミカに背中を押されながら一緒にトレブシエルの外へと歩いていく。外に出たタカヒトがその光景を見て頭に浮かんだものは絶望という二文字だろう。トレブシエルの上空にはデモンズ達が、地上にはヘルズ達が物凄い形相で結界を破壊している。呆然としているタカヒトの意識に白玉が語りかけてきた。

（数分で結界の一部が完全に崩壊される。ねえ、僕にやらせてよ。デビュー戦での黒星から立ち直りたいんだ。）（白玉）

(何、しゃしゃりでてんだ！)

この場合は俺様に決つてんだ！だろ、タカヒト？) (赤玉)

「えっ……」

赤玉は反対したが白玉は熱望していた。タカヒトはかなり悩んだが白玉の熱意に押され承諾する形になった。喜んだ白玉がタカヒトの意識を支配するとタカヒトの髪の色や瞳が白くなった。

「壊れたぞ！野郎ども、一気にいくぜ！」

その瞬間、白タカヒトのいる前方の結界が完全に崩壊し、鬼のような形相をしたヘルズ達が一斉に押し寄せてきた。

「ミカちゃん、待って！僕が行く。」

反撃しようとするミカを制止させると白タカヒトは左腕を押し寄せてくるヘルズ達に向けて衝撃波を放った。押し寄せるヘルズ達は吹き飛ばされていく。続いてデモンズ達も侵入してくるが、マシンガンのように繰り出される衝撃波にデモンズ達もヘルズ達も地面に倒れこんでいく。しかし、しばらくするとムクリと起きあがりデモンズ達もヘルズ達も筋肉を隆々とさせて威嚇してきた。

「きかんわい！もっとごっつうしたのだからかい！」

「鍛えに鍛えた筋肉をなめんなや！」

白タカヒトの衝撃波を受けても強靱な肉体を持つデモンズ達もヘルズ達にはダメージを与える事が出来ず、マッスルポーズを決める

デモンズ・ヘルズ軍団。

「やっぱり無理かあゝ・・・わかつてはいたんだけどね。
ねえ、紫玉くん！力貸してくれない？」

(よかるう) (紫玉)

(?・・・ちよつと待ちやがれ！てめえゝ、自分でなんとかする
んじゃねえのか？

てゆうか、なんで俺様じゃねえんだ？ (赤玉)

「赤ちゃん！ちよつと、黙ってくれる。僕は紫玉くんと話して
いるんだから。」

(!#?+・・・) (赤玉)

怒り狂う赤玉を無視して紫玉は白タカヒトに力を貸すことを承諾
した。白タカヒトを紫色の輝きが包んでいくと白紫タカヒトは両手
を向かってくるデモンズ達もヘルズ達に向けた。

「白紫玉複合技 上級心気 メガアルティメットキャノン！」

紫色の巨大な粒子砲に白玉の衝撃波が加わりその威力は数段増し
ていく。強靱な肉体を誇っていたデモンズやヘルズの身体をいとも
簡単に溶かしていった。それは粒子砲というより馬鹿デカイ粒子の
剣のようにも見えた。白紫タカヒトはその馬鹿デカイ粒子剣を振り
回すと周囲にいるデモンズ達もヘルズ達が斬り裂かれていく。

「よし、仕上げはこれだ！」

白紫タカヒトは粒子剣を振上げると上空の飛行艇に突き刺した。心臓部といえる動力部を破壊された飛行艇は推進力を失い、煙をあげながら降下していく。そして爆音をあげ地上に落ちると焼け残った森の木々をなぎ倒しながら飛行艇は停止した。

「くそつたれ！」

炎のあがる飛行艇のパネルを突き破ってアレスが飛び出してきた。怒りに肩を震わせながらトレブシエルに降下してきた。機能を回復したカオスもアレスの後を追ってトレブシエルに降下してくる。そこへお気に入り着物を着こなし、扇子で顔を覆いながらギガスもやってきた。地獄道最強の三獣士を目の当たりにした白紫タカヒトは戦慄を憶える。

集結 三獣士

「アラアラ、苦戦しているみたいね。手を貸してあげましょうか？」

「久しぶりの三獣士の集結か・・・手出しはいらん。コイツは俺が倒す！」

ギガスとカオスを制止させるとアレスは白紫タカヒトに対して戦闘体勢を取った。アレスは明らかにカオスよりも強いと感じた白紫タカヒトはかなり動揺している。そう感じた赤玉が語りかけてきた。

「うっ、うっん・・・どうしよう。ちょっとヤバいかも・・・。」

「けっ、ビビリやがって！俺様が代わってやる。どきやがれ！」

（赤玉）

怯える白玉に代わって赤玉が強引に主導権を握った。白紫タカヒトの身体から紫色の輝きと白髪が消えると赤く輝きだして赤タカヒトが現れた。アレスは赤タカヒトを睨みながら左腕を差し向けると菜の花色の鋭い粒子砲を発射させた。だが赤タカヒトは片腕でそれを難なく弾き飛ばすと激を飛ばした。

「けっ、こんなんじゃ俺様を倒せるんでも思ってたのか？馬鹿野郎！」

「ほんの挨拶代わり・・・参る！」

「かかってこいや！」

物凄い勢いで距離を詰めるとアレスは腰を落とし左右の連打拳を繰り出す。赤タカヒトは両手でそれらを受け流していく。一瞬の隙をついた赤タカヒトは左足を地面に深く突き刺し腰を回転させると渾身の右拳をアレスの顔面に突き刺す。

アレスは頭を反らすとそれをヒラリとかわした。アレスは頬にひとすじの切り傷を受けるがそれを気にする様子もなく腰を回転させると蹴りを放つ。赤タカヒトも蹴りの軌道を確認すると体位を変えてかわし、続けて赤タカヒトは体勢を整えながら左拳でアレスの顎を狙った。それが空を切るとアレスは距離を取り赤タカヒトに笑みを浮かべた。

激しい攻防を繰り返すもお互いにダメージを与えることが出来ない。

「なかなかのものだな。ならば、これならどうだ？ 槍術、五月雨突き！」

アレスは闘気を高めると菜の花色をした槍を手にした。刃先を赤タカヒトに向けると一気に距離を詰める。アレスの五月雨突きは軌道が速く全く読めない。その上、槍術に蹴技のコンボ攻撃に赤タカヒトはかわすのが精一杯であった。

「くつそお〜、てめえ〜！ きたねえぞお〜。男なら素手で勝負しやがれ！」

「ふっはっはっはっ、闘いとはこういうものだ！」

「……てめえ、言いやがったな！」

バックステップで距離を取る赤タカヒト。勝ち誇っているアレスに赤タカヒトは闘気を高め、メガフレアを創りそれを自分の手元に留めると何やら加工を始めた。余裕のあるアレスは槍を肩に置きほんの少し様子を伺っていた。

赤タカヒトの加工が終了するとその手に持っているものは太刀にも似た赤く燃えあがっている長い刀だった。赤タカヒトはそれをメガフレイムソードと言って少し素振りをした後にアレスに剣先を向けて挑発した。

「これでタメだ。かかってこいや！」

その挑発に乗るかの如くアレスは赤タカヒトに向かって槍術を繰り出していく。更に槍撃のスピードを増していくが赤タカヒトはメガフレイムソードを巧みに使いこなしてそれらをすべて受け流していく。軽やかに槍撃を繰り出していたが次第に必死の形相に変わっていくアレスに対して逆に赤タカヒトには余裕が見られる。

一方的に五月雨突きを繰り出して優勢に見えるアレスであるが実際には赤タカヒトが攻撃をさせて体力を消耗させているだけなのだ。額から汗を流し顔面は蒼白、呼吸が乱れアレスの体力が消耗していくと五月雨突きのスピードが落ちていく。

そのタイミングを待っていたのかのように赤タカヒトは最後の五月雨突きをかわすと、メガフレイムソードをアレスの腹部に突き刺した。刺されたことに一瞬動揺したアレスはメガフレイムソードを弾き返して後退すると赤タカヒトとの距離をとった。

「はがっ、うっ・・・うっ・・・」

アレスは強度を誇る鎧により致命傷は避けたが精神的なダメージはかなり受けているようだ。よろけながら後ずさりしていくアレスを見下しながら赤タカヒトは言った。

「がっはっはっはっ、びびったろ？俺様はなあ、剣術百万段なんだよ！」

膝まづくアレスにトドメを刺そうと赤タカヒトはズカズカと歩いていくとそこにギガスとカオスが立ち塞がった。

「そうは問屋が卸さないわよ。」

赤タカヒトは刃先をふたりに向けてはいるがかなり分が悪かった。アレス級の能力者がふたりもいてカオスにはかなり手こずっていた。しかもギガスについてはその能力は未知数だったからである。額からは汗が流れ戦慄を感じる赤タカヒトと戦闘体勢をとるギガスとカオス。

初めての敗北

「あらあら、ボロボロねえ。カオス、やるわよ！」

「攻撃対象・・・確認。」

カオスとギガスがジリジリと間合いを詰めて近づいてくる。青ざめた表情の赤タカヒトのもとへ手助けをするためにミカが駆け寄ってきた。ミカは赤タカヒトの横に配置すると桜色に輝き戦闘体勢を整えた。

「あら、彼女も参加？・・・ちよつとした合コンね。始めましようか。」

語り終えた次の瞬間、瞬時に移動したギガスはミカの目前にいた。その高速移動にミカは驚き赤タカヒトはすぐさま反応したがギガスの動きはそれを超えていた。

成す術もなくミカがその場に倒れ込んでいく姿が赤タカヒトにはスローモーションのように映った。激怒した赤タカヒトは反撃するがヒラリとかわすとギガスはカオスのいる位置まで高速移動して戻った。

「くそが！」

ギガスを睨みながらもミカを心配し抱かかえると赤タカヒトはトレブシエルへ歩いていく。ギガスがどのような攻撃をしたのかはわからないがミカはただ気絶しているだけのようだった。ミカをトレブシエル内の安全な場所へおろすと赤タカヒトは紫玉と白玉に話しかけた。

「おい！白、紫・・・助けがいる。協力しろ！」

（赤ちゃん、それがものを頼む態度？）（白玉）

（フフフ、これでも頭を下げているつもりらしい。

協力しよう。そうしなければ奴らには勝てないのだから。）

（紫玉）

「あらあら、合コンは終わりなの？残念ねえ〜。」

トレブシエルより一人戻ってきた赤タカヒトに扇子を手にしたギガスはつまらないように言った。

「安心しろ！合コンは終わりだが二次会を用意してある。」

赤タカヒトの闘気が高まると同時に身体のマわりに白紫色も輝き始める。その三色の輝きが増すにつれてギガスとカオスの表情が陰しくなる。

「最高のパワーだ・・・いくぜ！」

更に輝きを増していく赤白紫タカヒトはギガスとカオスに飛び掛つていく。赤白紫タカヒトの左蹴りがカオスの顔面をヒットしたと同時にギガスに向けて左腕一本で紫玉上級理力アルティメットキヤノンを放った。顔面を歪ませたカオスにも右腕で赤白玉上級闘気複合技ハイパーメガフレアを続けて放つ。無防備の状況で直撃を喰らったカオスはその衝撃に森のほうへ吹っ飛んでいった。

ギガスもアルティメットキヤノンを喰らったが扇子を巧みに使い致命傷は避けるように受け流すとギガスはその場に立ち留まった。

森に吹っ飛んでいったカオスも直撃を受けたものの機能低下には陥つてはおらず再びギガスのもとへと戻ってきた。この赤白紫タカヒトの攻撃によりカオスとギガスの表情がガラリと変わった。いままでの余裕は全く無く、それはまさに戦士の顔となっていた。

「やるわねえ……アレスの坊やがやられるの無理ないわ。

カオス、本気でいくわよ！」

「圧縮率……上昇　バースト率……最大値……」

カオスの身体がひとまわりもふたまわりも大きくなっていく。地面が震えあがりそれと同調するようにカオスのエネルギーが高まった。地面の震えが静まる頃、カオスの風貌は異様なものへと変化していた。以前戦ったカオスとは姿形がまるで違っていた。見事にビルトアップされた肉体と言うよりは肉団子と表現したほうが正解であろう。

カオスの姿にも驚いたが本気になったギガスの姿がまったく変わらないのも赤白紫タカヒトにとって警戒すべき事であった。カオスは右腕を軽く振り回すとその風圧が赤白紫タカヒトに襲いかかる。

「くそが、なんてパワーだ！」

赤白紫タカヒトは風圧に耐えながらなんとか体勢を整えた。普段、無表情のカオスが赤白紫タカヒトを見て強者に巡り会えたことに興奮すると一気に突っ込んできた。間合いに入ったカオスが右腕を振り下ろすと赤白紫タカヒトは軌道を確認してメガフレ임ソードでそれを防ごうとした。

だがカオスの右腕とメガフレ임ソードが激突した瞬間、メガフレ임ソードは砕け散った。折れたフレ임ソードを手に驚愕する赤白紫タカヒトの瞳にカオスの巨大な左拳が映ると次の瞬間、トレ

ブシエルの壁に赤白紫タカヒトの身体がめり込んでいた。

「あつ、が……」

カオスは両手をトレブシエルに向けると連続衝撃波が赤白紫タカヒトの身体に襲い掛かる。防御する暇もなく連続衝撃波を喰らい続け壁にめり込む。赤白紫タカヒトの身体を支えきれずにトレブシエルの壁にヒビが入る。カオスの連続衝撃波はよりいっそう強力なものになり赤白紫タカヒトの身体はトレブシエルの壁を破壊して内部に入った。トレブシエルのフロアでは赤白紫タカヒトが大の字で倒れていた。

「追撃モード開始……!!」

追撃するべくトレブシエルへ向かおうとしたカオスに一閃の波動が放たれた。その波動を間一髪かわすとカオスはその先を見据えた。そこには金色の輝きを放つ赤白紫タカヒトが立っていた。赤白紫タカヒトは衝撃波の連撃を喰らいながらも徳の水筒を飲んでいたので。

「今のは結構効いたぜ……時間もねえ、一気にいくぜ!!」

金色の赤白紫タカヒトはカオスに向けて赤玉上級闘気メガフレアを放つ。それを衝撃波で打ち消したカオスの目前にはすでに金色の赤白紫タカヒトがいた。

カオスは防御する間もなく金色の赤白紫タカヒトの白紫玉複合技上級心カメガアルティメットキャノンを喰らった。

「オツケー、直撃コース!」

直撃を受けたカオスは間違いなく致命傷であるはずだと金色の赤

白紫タカヒトは確信していた。しかしカオスが直撃を受けた直後メガアルティメットキャノンの威力が少しずつ弱まって消えていった。もちろん金色の赤白紫タカヒトの最大級の技の直撃を受けたカオスは機能低下しているらしく動くことはしない。金色の赤白紫タカヒトが異変に気づきギガスのほうを見る。空中に浮いていたギガスは両腕を前方に向けてメガアルティメットキャノンの波動を吸収していた。

「あらあら、ばれちゃった？そう・・・これが私の力よ。

我が黒玉、暗黒の力を持つ者の力。思い知るがいいわ！」

ギガスの身体が黒い輝きを放ち出していく。両腕を開きその黒い輝きが弱まると同時にギガスの右腕が紫色に輝きだした。次第にそれは大きくなって紫色の波動玉を創り出した。

金色の赤白紫タカヒトがそれに気付いた時のそれより速くギガスはその紫色の波動を金色の赤白紫タカヒトへ向けて放った。見覚えのある紫色の波動アルティメットキャノンが金色の赤白紫タカヒトに襲い掛かる。瞬時に回避した為、直撃は避けたが・・・。血の流れる右肩をおさえながら金色の赤白紫タカヒトはギガスを睨みつけた。

「てめえ・・・この技は・・・」

「暗黒の力をただエネルギー吸収するだけかと思っていたのかしら？
吸収したものを放出することも出来るのよ。しかも改良してね
！」

「改良だと？・・・ぐわあああ〜！」

ギガスの放ったアルティメットキャノンをかわした金色の赤白紫

タカヒトであつたがそれは大きく弧を描いて再び襲い掛かつてきた。気がついた時にはすでに遅く金色の赤白紫タカヒトは背後からアルティメットキャノンの直撃を受けた。

金色の赤白紫タカヒトが倒れたと同時に徳の水筒の効力も消え、倒れたタカヒトにはすでに意識はなかつた。

「・・・やつたのか？」

アレスとカオスがダメージを回復してギガスの元へ向かつてきた。トレブシエルのフロアにはギガスの放つたアルティメットキャノンの直撃を受けて倒れているタカヒトを三獣士が並んで見下している。トドメを刺そうとアレスが中級闘気イレイザーを倒れて意識のないタカヒトに放つた。

菜の花色の波動がタカヒトの命を奪おうと鋭く放出されたが直撃する寸前に緑色の球体がそれを受け止めた。

「誰だ？」

アレスが壊れかけたトレブシエル内部のドアに視線を向けるとでんと、リナとポンマンの三人が立ち並んでいた。

選ばれし者

「あら？ あなた達もパーティーの参加者かしら？」

ギガスの足元を見るとタカヒトとその近くにミカが気を失っていた。それを確認したてんとは緑色の球体を移動させるとタカヒトとミカを球体に乗せてウンディーネのいる共鳴石の部屋へと運んでいく。それを阻止すべくアレスの中級闘気イレイザーとカオスの衝撃波が二人を乗せている球体に襲い掛かった。

「ハイエレメント インドラ！」

「翡翠玉中級理力 跳ね返し！」

リナの雷撃とポンマンの跳ね返しが阻止した。タカヒト達を無事ウンディーネのもとへ送るとてん、リナそれにポンマンはフロアに立ち並び余裕を見せている三獣士に視線をぶつけた。

「三獣士って言っても大したことないようね。」

「待たせたな、ショータイムの始まりだ！ 赤玉らしく言えばな。」

てんと、リナ、ポンマンとアレス、カオス、ギガスの三対三の戦いは今、火ぶたを切って落された。森の方へと移動したカオスが連続衝撃波を放つとポンマンは跳ね返して対抗する。トレブシエル内のフロアではアレスがレイザーランスを手にするるとリナへ襲い掛かる。てんとは上空へと浮上すると優雅に浮かんでいるギガスと対峙する。

「うおっ、わおっ！」

森林での戦いとなったポンマンは上空からくるカオスの衝撃波をなんとか凌いではいるが威力が増していく衝撃波を抑えることが出来なくなっていく。カオスはバースト率をあげると両手に衝撃波を溜め込み地上にいるポンマンに接近してきた。

ポンマンの跳ね返しは衝撃波・粒子砲系の飛ばし技のみに対して有効ではあるが接近戦による肉弾戦は効果がない。ポンマンの懐にいと簡単に潜り込んだカオスは衝撃波を溜めこんだ右拳を振りあげるとポンマンの身体が九の字に折れ曲がった。

「ゲガッ……」

呼吸が出来ず苦悶の表情を浮かべるポンマンの顔面にカオスは衝撃波を溜め込んだ左拳押し当てた。ポンマンは自らの顔が歪む感じを覚えながらそのまま顔面から地面に倒れ込んだ。追撃を与えるカオスの左右の衝撃波連撃がポンマンの身体をさらに地中へとめり込ませていく。カオスが攻撃を止めるとポンマンは意識もなく沈黙している。

「……破壊行為完了……援護行動開始……？」

カオスはリナとアレスの交戦状況を見定めアレスの援護に向かうとその場を去ろうとした。だがそのカオスの片足を掴む手があった。カオスはその手を振り払おうとするがポンマンは抵抗している。泥まみれのポンマンが苦悶の表情を浮かべ地面に這いつくばりながらもその足を決して離さなかった。

「致命傷率……98パーセント……瀕死状態……」

「はっ、は……ゴホッ、君の言う通りだ。これが最後の……攻撃かな？」

カオスはポンマンに向けて衝撃波を溜めていく。左腕に溜めた衝撃波を放とうとした瞬間、それと同等の衝撃波をポンマンが右腕に溜めている事に気がついた。

「同種エネルギー体……感知……？」

何故ポンマンが衝撃波を溜め込む事が出来るのか？わからず、一瞬状況が読めなくなったカオスから自ら溜め込んだ衝撃波が消えていった。次の瞬間、ポンマンが力のかぎり理力を高めると右腕をカオスに向けた。

「ハアハアハア……翡翠玉最大理力 なんちゃってバースト状況最大衝撃波！」

ポンマンの右腕から翡翠色の衝撃波が放たれるとそれはカオスの胸部に直撃した。これが翡翠玉最大理力モノマネである。ポンマンはモノマネを発動すると相手の攻撃を憶えて自らの攻撃とすることができる。つまり攻撃を受ける度にポンマンの技が増えていくのである。

しかしたとえ技を憶えてもその技を使うのにポンマンの身体が耐えられるのかは別の話。バースト状況の最大衝撃波を放つとポンマンの右肩はその衝撃により脱臼、右腕は粉碎骨折となった。自らの最大衝撃波を胸部に浴びたカオスの身体は九の字に折れ曲がる。衝撃波は強じんなカオスの胸部をえぐると内臓をくり貫きそのまま上空へと消えていった。

「損傷率99パーセント・・・キノウテイカ・・・シコウ・・・テイ・シ」

カオスの胸部に大きな穴が開くと機能を停止して地面に落ちていった。しかしポンマンはそれを確認出来ない。すでに意識を失っていた。

一方、傷ついたタカヒトとミカはトレブシエルに収容されてウンディーネのいる共鳴石の部屋にいた。ミカはすぐにてんと達と同様に共鳴石の元へ寝かされて桜玉の能力アップが施されていた。しかしタカヒトは違う。すでに活魂水によりその能力を最大まであげられている。たとえ共鳴石の力を使ったとしてももはや能力をあげることは期待出来なかった。ウンディーネはタカヒト達を巻き込み彼らの生命を危険に追い込んでいる事を後悔していた。

「どのような理由があるとしても三獣士に・・・破壊神に近づいてはいけなかった。」

タカヒト達をこの地から逃す準備を始めようとウンディーネがふとタカヒトの胸元に視線を向けると驚き自分の目を疑った。

「これは・・・暗黒色の共鳴石。まさか、この子が・・・選ばれし者？」

共鳴石は無色透明な石であり精霊の特殊な儀式によってソウルオブカラーの能力をあげることが可能なのである。共鳴石の大きさや精霊達の能力とは関係がなくソウルオブカラーの能力アップには限界があることはウンディーネ自身知っている。

しかし暗黒色の共鳴石はそれとは違う。暗黒色の共鳴石はソウルオブカラーの能力を極限にまで昇華させる事が出来る。無論、精霊の負担も増すのだが・・・。ウンディーネも暗黒色の共鳴石を初め

て目にした。その理由は暗黒色の共鳴石はその絶大なる力ゆえに天道にて嚴重に保管されていたからである。しかし原因は定かではないが暗黒色の共鳴石は四つに割れて天道よりすべての世界に散らばってしまったといわれている。

そして暗黒色の共鳴石は意志を持っているといわれ持ち主を選ぶという。暗黒色の共鳴石に選ばれた者は六道を治めると言い伝えをウンディーネも聞いたことがある。

「もし、選ばれし者なら私はこの子に希望を託す為に生きていた。
・
・
これが私の生き永らえた意味なのかもしれない。」

ウンディーネはタカヒトをミカの隣に寝かせるとタカヒトの持つ暗黒色の共鳴石を握り静かに目を閉じた。てんとやミカに施した精霊の儀式は共鳴石にウンディーネの生命エネルギーを少し送り込む事により共鳴させるものだ。しかし暗黒色の共鳴はそれでは足りない。必要なのは精霊の生命力つまり命である。

「タカヒト・・・今は闇の中かもしれない。
でもその闇を抜ければ希望が必ず見えてきます。あきらめない
てください。」

そう言い残すとウンディーネの姿は暗黒色の共鳴石に吸い取られるように消えていく。次第に暗黒色にタカヒトの身体は包まれると殻のようなものが出来あがりタカヒトはその殻の中で静かに再生の時を待つ・・・。

トレブシエル内のアレスはレイザーランスを握りリナと対峙していた。リナが牡丹玉ミドルエレメント サンドラドックを放つと二匹の雷獣がリナを守るように現れた。ゆっくり円を描くように二人は歩を進めるとその円は次第に小さくなっていく。アレスが動きを

止めると二匹の雷獣が一斉に襲い掛かっていく。顎を開き、牙を見せながら雷獣が飛び掛り、アレスに喰らいついた。次の瞬間、二匹の雷獣の胴体がふたつに割れて断末魔をあげながら消えていった。

「ほう、断末魔をあげるのか。」

襲い掛かった二匹の雷獣に気づかれずに残像を残すと同時に刃で切り裂いていたアレスの力。久しぶりにリナの背中に冷たいモノが流れた。レイザーランスを振り下ろし笑みを浮かべるアレスに次々と雷獣が襲い掛かるが鋭い斬撃によりすべてが断末魔をあげながら消えていった。

「何度やってもムダだ！」

「そうかしら？牡丹玉ハイエレメント インドラ！」

複数の雷獣を召喚しながらもりナは更に牡丹色を輝かせていくとインドラを放った。迫り来る巨大な大雷撃玉を瞬時に認識したアレスはレイザーランスを高速回転させた。

「槍術 大輪斬」

アレスの槍術により大雷撃玉は破壊され四方に分散させて直撃を回避した。四方へ分散した雷撃はトレブシエル内の壁を破壊していく。アレスはレイザーランスの回転を止めて刃先をリナに向けた。

「やはりムダだったな！」

「そうかしら？」

リナの余裕の表情を負け惜しみと感じたアレスがニヤリと笑みを浮かべた瞬間、手にしたレーザーランスが粉々に砕けた。

「!・・・きつ、貴様？」

リナの戦術にまんまとはまったアレスの表情は烈火の如く険しくなっていく。激怒したアレスは菜の花玉中級闘気イレーザーを放つと細長い菜の花色の粒子砲がリナに襲い掛かる。リナは瞬時に雷壁を構築すると粒子砲を防いだ。しかし雷壁によりリナはアレスの姿を確認出来なかった。雷壁に粒子砲を打ち込まれている時、リナはアレスがその方向にいるものだと思っていた。

まさかりナの背後にアレスがいるとは夢にも思っていない。「ドスツ」と鈍い音が響き渡るとレーザーランスがリナの身体を貫いていた。アレスはゆっくりと刃をリナの身体から引き抜いた。

「勝負あったな！」

「・・・そうかしら？」

アレスが気づいた時はすでに遅く、リナの大雷撃玉が頭上から迫ってきた。激しい大雷撃玉にアレスは両手で受け止めるが押し潰す力は強力なもので両膝をつきながらも抵抗している。

目の前に貫いたはずのリナは消えていた。リナは雷壁だけでなく自らの幻像も創りあげていたのだ。またしてもリナの戦術にしてやられたアレスは悔しがり両手で大雷撃玉を押し退けた。

「くそつたれめ！」

リナの戦う理由

アレスは両手に大雷撃玉によるやけどを負いながらもリナとの戦闘は続いた。リナとアレスの力は拮抗しているかのように見えたが、激しい攻防は次第にリナ優勢となり劣勢なアレスは疲労も溜まり勝負は決まりかけている。

「なかなかやるな・・・だが、これならどうだ！茶玉中級闘気アースクエイク！」

アレスの身体が菜の花色から茶色に変わり輝きを放つとトレブシエルの床が激しく揺れていく。身動きが取れなくなり床に膝をついたりリナにアレスは菜の花色に輝くとイレイザーが放たれた。とつさに回避したものの、右脚に菜の花色の粒子砲が直撃してダメージを負った。うずくまり痛みを堪えるリナであったかそれ以上にアレスの使った技に驚いた。先ほどアレスが発動させたのは間違いなくドレイクの茶玉中級闘気アースクエイクだった。何故、アレスが茶玉を持っているのか？

リナがこの戦いに参加したのには理由があった。六道の世界に生きる者は死を迎えるとその者の業と徳の割合により次に向かう世界が決まっている。例えば人道で生涯を終えた者の徳が多ければ天道へ魂は迎え、逆に業が多ければ餓鬼道、修羅道、地獄道へと堕ちていく。

もちろん次の世界へ魂が迎う時にはその者の記憶や姿が反映されることはない。魂に反映されるのは業と徳の量だけなのだ。だがソウルオブカラーの所有者は例外となる。リナのようにソウルオブカラーの所有者やタカヒトやミカのような狭間に堕ちた者は死ぬと無空間へと飛ばされ永遠に彷徨うようになる。しかしリナはどういう訳か狭間に堕ちてそこを抜け出そうと歩いていると地獄道へ辿り着

いたのだ。そして偶然にてんと達と出逢うことができた。

何故そのようになったのかはリナ自身にもわからなかったが、もしかしたらドレイクもこの地獄のどこかにいるかもしれないというかすかな希望を持っていた。

「何故！」

冷静なリナには似合わない感情の高まった叫び声にアレスはニヤリと笑みを浮かべた。この地獄道に来た時、リナには牡丹玉の能力が残っていた。アレスが茶玉を持っているということはドレイクはアレスに茶玉を奪われた？とそんな思いが次第に強くなる。何も語るうとせず笑みを浮かべていたアレスが口を開いた。

「私がこの能力を持っていることがそんなに気になるか？おまえのことはわかってるぞ、雷獣使いのリナよ。修羅道での大戦でおまえと茶玉の所有者であるドレイクは敗北を味わい自害したのだ。だがおまえはこの地獄道にいる。つまりドレイクもこの世界のどこかにいると考えているのではないか？」

「.....」

「ふっ、凶星か！」

リナはアレスの話の話を聞く気は全くなかった。ドレイクの消息はわからないが茶玉をアレスが持っている以上ドレイクの身に何かがあったのかは明らかだった。リナの怒りは頂点に達して右脚の痛みを堪えながら立ちあがる。ウンディーネのおかげでリナの能力はいままで以上に高まっている。リナがエレメントを高めていくとトレブシエル内の壁が共鳴するかのようには振動していく。想像以上に高まるエレメントに驚きながらもリナは今までにない最大級の攻撃を仕

掛けようとしていた。それにもかかわらずアレスは防御ひとつせず
余裕を見せている。

「はあゝああゝゝ、牡丹玉オーバーエレメント　リ　インド
ラ・・・！」

リナが牡丹玉オーバーエレメントを放とうとした瞬間身体中を覆
っていた牡丹色の輝きが一瞬にして消えてしまった。

「？・・・まつ、まさか！」

「くつくつくつ・・・気がついたか？」

このすべてを無に帰す者の力を前では牡丹玉など無力なものよ
！」

牡丹玉を発動出来ないリナに勝ち目は無かった。灰玉を発動させ
ると影響範囲は小さいがその範囲に入った者すべてのソウルオブカ
ラーの発動が出来なくなる。

当然灰玉の所有者であるアレスも菜の花玉や茶玉の発動が出来な
い。そこでアレスとリナの格闘戦となるわけだが右脚を負傷してい
るリナにアレスの連続攻撃をかわすことは不可能である。

ゆっくりアレスは歩み寄ると右脚を振りあげ蹴撃を繰り返すがす
かさずリナは両肘で防御をした。リナは両肘で頭部をブロックした
が踏ん張った右脚に激痛を感じた。右膝を地面につけ苦痛に顔を歪
めるリナの腹部にアレスの前蹴りが突き刺さった。

「はぐっつ！」

苦しみ悶え、その場にうずくまるリナにアレスは更に右蹴りを浴
びせた。リナはよろけるように倒れると床に這い蹲った。埃まみれ

のその顔からは沈着冷静でクールなりナの姿は無かった。

床に這い蹲ったりナは痛みを堪えながら立ちあがるうとしたがその背中をアレスが足で踏みつけた。床にはいつくばったりナを見下しながらアレスはニヤリと笑みを浮かべている。

「あああ・・・はあっ！」

「くつくつくつ、本来ならばソウルオブカラーの所有者であるおまえは無空間へ飛ばされるはずなのだがどうもズレが生じたようだ。だがドレイクは確実に無空間へ飛ばされたであろう。私のもとにはこの地獄道のすべての情報が入ってくる。そこにドレイクという名はひとつも出ていない。おまえがドレイクに出逢うことなどもう二度とないだろうな！」

アレスの言葉に埃まみれのリナは涙を浮かべた。ドレイクに逢えることだけを夢見ていたりナにとってそれは信じたくない絶望的な言葉だった。

「うっ、うん・・・ここは・・・？」

ミカは見覚えのある場所にキョロキョロと辺りを見渡していた。そこはトレブシエル内の共鳴石の部屋だった。以前はてんと達が眠っていたのだが今は誰もいない。ウンディーネも不在、ミカの隣には黒色の大きな卵が置いてあるだけでタカヒトの姿も無かった。ミカはここを出る時のことを思い返していた。てんと達の能力アップに時間が掛かる為、タカヒトと共に三獣士と戦っていたのだが・・・。

「そうだ！私は三獣士に攻撃されて・・・タカちゃん達はまだ戦

っているの？」

ミカは何故自分がこの部屋にいるのかは、わからなかったが皆が戦っている事だけは理解できた。

「でもなんか・・・変なかんじ。私、倒されたはずなのに力がみなぎっている・・・そうだ、早く皆の所に行かなくちゃ！うん？・・・これなんだろう？」

ミカは立ちあがると隣の黒い卵が少し気になったが急いで皆のいる場所へ走っていった。隣の黒い卵は反応を見せずに静まり返っている。階段を昇りフロアに辿り着いたミカが見たものは傷だらけで倒れているリナとその背中を踏みつけているアレスの姿だった。ミカがリナの救出に走っていくがその存在に気がついたアレスはレイザーを撃ち込んだできた。

「桜玉中級理力 レインボーウォール」

ミカは瞬時に理力を高めてレイザーを防いだがこれにはミカ自身も驚いた。今までより遥かに簡単に能力を発揮することが出来たからだ。そんな変化など全く気づいてないアレスは攻撃を防がれたことに苛立ちを隠せない。

アレスは菜の花玉から茶玉に能力の変更をさせると茶玉中級闘気アースクエイクを繰り出した。フロアが揺れ出すとミカは立っていられずにその場に座り込んでしまう。そこへ再び菜の花玉を発動させたアレスは菜の花玉中級闘気レイザーを撃ち込んでいく。レインボーウォールで防御しているがフロアの揺れが激しくミカは意識を集中する事が難しくなっていた。それでも自分が負ける訳にはいかないと思死でレイザーの集中砲撃を防御している。そんなミカの心に桜玉が語りかけてきた。

(ミカ、あなたは新たなる力を得ました。自分の力を信じなさい。
あなたなら必ず乗り越えられる。)(桜玉)

「桜玉?・・・わかった!やってみる。桜玉上級理力 桜吹雪!」

ミカは理力を高めると更に桜色の輝きが放たれ、身体を桜吹雪が覆っていく。桜吹雪は次第にフロア中に舞いひろがりアレスがそれを不快に思い払おうとするが桜吹雪は舞い続けた。

「くっ、無駄なあがきを・・・」

アレスは桜吹雪を振り払おうと懸命になる。それがおさまりかけるとそこにはミカの姿は無かった。いや、それだけではない。アレスの攻撃によりうずくまり倒れていたリナの姿もそこに無かった。フロアに落ちていた桜吹雪も無くなりトレブシエルのフロアにはアレスだけだった。

「逃げた・・・がああああ~~~~!!」

まんまと出し抜かれたアレスはトレブシエル内の壁を闘気の開放により破壊した。壁が崩壊してトレブシエル内のフロアがボロボロになった頃、落ち着きを取り戻したアレスは外へ出て戦闘を続けているギガスのもとへ向かった。誰もいなくなった静かなフロアに再び桜吹雪が舞うとミカとリナの姿がそこにあった。

「はあはあはあ・・・何とかうまくいったわね。リナ・・・大丈夫?」

「もう私の事はほつといて・・・あの人に逢えないなら生きてい

ても意味がない！」

傷心しきっているリナの頬をミカは思いっきり引つ叩いた。その行動にリナは驚き叩かれた頬を手で覆った。

「しつかりしてよ！あんなヤツの言う事信じちゃダメ・・・私もこの世界に来た時にはタカちゃんやんと逢えるなんて思ってもみなかったよ。でも逢えた！ドレイクに逢いたいんでしょ？だったら諦めないで・・・最後まで諦めないで！ねっ、リナ、一緒にドレイクを捜そうよ！」

「・・・・・・ミカ」

ミカはリナの手を握ると二人は立ちあがりトレブシエルを出て、てんと達の助けに向かった。

圧倒的な力の差

上空ではギガスとてんとの空中戦が始まっていた。てんとが緑玉中級理力カマイタチを放つと空気を切り裂くように真空の刃がギガスに襲いかかる。対するギガスも黒玉を発動させ、それらを吸収放出するとギガスを襲った真空の刃が今度はてんとに襲いかかる。てんとは三つの球体を発生させるとそれらを防御した。一進一退の攻防が続くがギガスは余裕を見せるかのようにアクビをすると扇子であおぎ始めた。

「ふあゝあゝあゝねえゝ、この繰り返しって飽きない？」

「飽きる、飽きないはおまえの勝手だろう。」

「そうね・・・」

再びてんとはカマイタチを放つが今度はギガスの目前で一筋の細長い菜の花色の粒子砲が真空の刃を撃ち抜いた。てんとが視線を下に向けると菜の花色の鬨気をまとったアレスが浮遊して近づいてきた。右腕をてんとに向けいつでもイレイザーを撃てる体勢を取っている。更にギガスのもとへ胸部に穴の開いたカオスが接近してきた。

「アレスにしては遅かったわね・・・」

それにカオス、そんな大穴開けてあなた大丈夫？」

「・・・モンダイナイ」

「声おかしくない？まあいいわ。結局残っているのはあなただけみたいけど・・・」

まだ続けるのかしら？」

「……」

正直、てんとに勝算はない。三獣士がここにいるという事はリナやポンマンが敗れたという事だ。しかも二人が生きている保障もない。ミカやタカヒトの回復も期待は出来ない。しかしウンディーネやタカヒト達を置いてこの場から逃げ去るわけにはいかない。意を決して理力を高めたてんとにギガスが言った。

「そう……三獣士相手に戦うわけね。潔いわね、あなた。」

ギガスは刃の仕込まれた扇子を広げるとてんと目掛けて襲い掛かる。カマイタチのように空気を切り裂く扇子の斬撃にてんとは球体を駆使して防御に徹する。防御に徹すればギガスに必ず隙が出来るはずとてんとは攻撃のチャンスを伺っていたのだが……。

てんとは身体に激しい衝撃を感じて体勢を崩す。そこに扇子の斬撃がてんとを身体を切り裂いた。激痛を感じながら地面に落ちていくてんとは瞳にカオスが衝撃波を撃ち込んだ姿が映った。

ギガスとの戦闘に必死だったてんとにアレスとカオスの動きを察知することはできなかった。地面に叩きつけられたてんとは意識が混濁して動けない。そこへアレスがゆっくり降りしてきた。意識が混濁としている中でアレスの手から菜の花色の光が放たれる瞬間がてんとは瞳にゆっくり見えた。死を覚悟した次の瞬間、てんとは身体を桜色のシールドが覆うとイレイザーは弾き飛ばされた。

「やはり生きていたか！」

アレスがトレブシエルに視線を移すとそこには桜色に輝くミカとリナがいた。地上に立つアレスのもとへギガスとカオスが降りてき

た。

「三獣士相手に小娘ふたり、分が悪いんじゃないかしら？」

「小娘ふたりだけではない・・・この私がいる！」

ギガスの言葉に反論するかのようにポンマンの声が辺りに響いた。外れた右肩を左手で支えながらポンマンがミカ達のもとへ歩いてきた。ミカとリナ、ポンマンと三獣士との対決が再び始まるうとしていた。

「人数だけは対等のようにだけどダメージを考えると力の差は歴然ね！」

ギガスの戦力の分析は間違っではないなかった。カオスに多少のダメージはあるものの三獣士はほぼ無傷である。一方、ポンマンは右肩が外れカオスに受けたダメージで立っているのがやっとの状態である。リナも右脚のケガにより戦力的には期待できない。ミカが中心となり戦術を構成しなければならぬのだが三獣士やその後控えているデモンズやヘルズを相手に勝てる確率はゼロといってもよい。

（・・・ミカ、すぐに戻ってきてください！）

「えっ？・・・ウンディーネなの？」

（はやく・・・時間がないわ！）

ミカの脳裏に呼び掛けるウンディーネの声があった。ミカはてんとその位置を確認するとリナとポンマンに叫んだ。

「リナ、ポンマン、てんとを連れて私の近くに来て！」

突然のミカの言葉に驚いたポンマンは走っててんとを抱きかかえ
ると急いでミカのもとへと走って戻った。

「いくわよ！桜玉上級理力　桜吹雪！」

辺りに桜の花びらが舞いだすとミカ達の姿が消えていく。三獣士
は周囲を見渡すがミカ達の姿を見つけない。桜吹雪と
化したミカ達はトレブシエル内部に戻っていた。ポンマンもリナも
驚きながらトレブシエル内部をしきりに見渡していた。ミカは両腕
を頭上にかけて理力を最大限まで高める。

「桜玉最大理力エラト・アグライア！」

ミカの両腕から桜色のオーロラが発生するとそれはトレブシエル
を覆い包んでいった。ミカの作り出した桜色のオーロラはトレブシ
エルを覆っていた結果によく似ている。その光景を見たアレスが声
を荒げた。

「籠城だと？いまさら無意味だ！」

アレスはトレブシエルへの攻撃を命じるとデモンズ軍団が一斉に
攻撃を仕掛けていく。続いてヘルズ軍団も攻撃に加わるがミカの桜
玉最大理力エラト・アグライアによりトレブシエルは鉄壁の防御力
を誇っていた。しかしミカの理力がいつまでも続くわけもなくトレ
ブシエルの崩壊は時間の問題である。ミカは理力を保ちながらリナ
とポンマンと共に瀕死のてんとを連れて共鳴石の部屋へ歩いていく。
ミカ達は部屋に戻ったがそこにウンディーネの姿は無くミカが部屋

と出たときと同じように大きな黒い卵が置いてあるだけだった。ミカを見つめるとリナが声をかけた。

「これからどうするつもりなの？ 籠城を続けても・・・」

「・・・」

部屋に戻ればウンディーネがこの状況を乗り切れる手助けをしてくれるとミカは希望を持ってここに来た。しかしそのウンディーネは何処にもいない。理力が切れればトレブシエルに三獣士達が一斉に襲い掛かってくる事を考えるとミカの小さな身体に負傷しているリナやポンマン、瀕死のてんとその生命が重く覆い被さってくる。

「ウンディーネ、ウンディーネ！」

絶望的な状況にミカは何度もウンディーネの名を叫んだ。しかし返事もなく理力が限界に達したミカは倒れるようにその場に座り込んでしまった。

それと同時にトレブシエルを包んでいたエラト・アグライアが消え去り歴大な数のデモンズ軍団とヘルズ軍団が押し入ってきた。瀕死のてんとの前にミカ達はその圧倒的な力の差を思い知らされた。

たまちゃん！

地響きのようにデモンズ・ヘルズ軍団の足音が聞こえてくる。恐怖と絶望がすぐそこまで近づいてきている・・・ミカは座り込んだまま呆然としていた。目の前にある黒い卵はミカを追い詰める壁のように置かれている。

「タカちゃん・・・どこに行っちゃったの？タカちゃん・・・」

ミカは急にタカヒトの事を思い出した。タカヒトはリナ達と戦っていると思い、この部屋を出て行ったがそのタカヒトはどこにもいなかった。そして部屋に戻ってきててもタカヒトの姿はない。ミカの頭の中で最悪の状況が駆け巡っていくと部屋中に響く位の大きな声タカヒトの名を呼び続けた。

「タカちゃん、タカちゃん！」

「うるさいなあ〜寝てられないじゃん！タカヒトならここにいるじゃんかあ〜。」

「えっ？・・・何？」

ミカがハツとして黒い卵を見つめた。動揺するミカに対して周囲を警戒したりリナが攻撃体勢を整えると黒い卵は慌てて声をあげた。

「ひえ〜 ちょ、ちよつと待つじゃん！味方、味方！

正義の味方じゃん。タカヒトは俺の中にいるじゃん！」

「それどういう事？タカちゃんが中に入ってるって？」

ミカは黒い卵に迫るとタカヒトについて詳しい話を聞きだそうとした。黒い卵は自分が共鳴石とウンディーネにより創り出されたものだと説明した。

「命と引き換え？」

「ウンディーネが命を懸けて創りあげたのがこの俺だ。どうだ、尊敬すべき存在だろ？っていうか、尊敬しろ！」

ウンディーネの命と引き換えにタカヒトの能力をあげる存在。その為にウンディーネはこの世界にはもはや存在せずデカイ共鳴石もその機能を失って今はただの石となってしまった。

「すべてを受け入れたタカヒトは今、静かに眠っているじゃん。復活には時間が掛かるじゃん。だから、待つじゃん！」

「でも……このままだと、三獣士達がこの部屋まで押し寄せてくるわ！」

「その心配はいらんじゃん！このたまちゃんに任せるじゃん。え」と……ホイ！」

卵のたまちゃんから野太い足が二本生えたとスクツと立ちあがりスタスタと奥のほうへ歩いていった。

「何をボサツとしてるじゃん？着いてくるじゃん！」

「……うっ、うん。」

たまちゃんは着いてくるようにミカ達に伝えると警戒しながらもミカ達は歩を進めた。たまちゃんは共鳴石とウンディーネの生命により創りあげられた存在でありウンディーネよりある使命を受けていた。

「使命って？」

「それはアンタ達をこの地から逃す事に決まってるじゃん。」

奥に来たたまちゃんは床を強く踏んだ。ただの壁が仕掛け扉となっていてそれが開くと暗く狭い道が続いていた。たまちゃんはミカにたいまつを持たせるとスタスタと進んでいった。続くようにミカ達も歩いていくと仕掛け扉は次第に閉じていく。どれくらい歩いたのか？それすらわからないほど暗い道を歩き続けた。何処までいくのだろうか・・・もしかしたら騙されているのかも・・・。そんな思いがミカの頭をよぎっているとたまちゃんが急に立ち止まった。

「さあ、着いたじゃん！」

「着いたってまだ道は続いているよ。」

「もちろん出口はまだ先じゃん。でも歩き疲れたじゃん。こう見えて、たまちゃんは体力ないじゃん。だから、休ませるじゃん。休息も必要じゃん！」

たまちゃんはまた床を踏むと道の壁からドアが現れた。中に入ると小さい部屋があり布で出来たハンモックが吊るされていてそこにんとを寝かせるとミカ達は束の間の休息を取った。この道は数千年前にウンディーネが万が一の為に造った道でこの部屋はトレブシエルと脱出口の中間にあり、休息場として造ったらしい。

「ミカ、ちょっと手伝うじゃん。」

たまちゃんはミカを連れて奥の部屋へ行くと薬草と水を用意させた。ミカはリナの右脚を洗い流し薬草を塗りつける。

「ポンマン、いくじゃん！とりやあああ〜〜！！！」

「！！！！・・・イツ、タイ！」

ポンマンの外れた右肩はたまちゃんの蹴りにより元に戻った。リナとポンマンもハンモックに休ませるとたまちゃんはミカを連れて食料庫へ向かった。そこには乾燥肉やタルに入った水がいくつか置いてある。

「ミカ、ここの食材を使って飯を作ってほしいじゃん！」

ミカは食料庫から材料を取り出して料理に取り掛かった。あまり見た事のない食材であるがミカは苦労しながらも何品か作りあげた。

「右肩が痛いよお〜。んっ？・・・なんかいい匂いがしてきたぞ！」

たまちゃんにより右肩は治ったもののその強引な治療法にポンマンは痛みを堪えてハンモックで休んでいた。奥の部屋からミカの作る料理のいい匂いにポンマンは吸い寄せられるように近づいていくとテーブルの上に沢山の料理が並んであった。ポンマンは並べてあった料理の皿に手を出そうとする。

「ちよっと、ポンマン！」

包丁を振りあげたミカに制止させられたポンマンは大人しく椅子に座った。料理ができあがると安静中のごんとは休ませたまま、たまちゃんとりなをテーブルに呼んで食事を始める。かきこむようにポンマンは食べ始めると満面の笑みを浮かべた。

「うまいーミカこれうまいよー！」

「もう、ポンマン！喋るか食べるかどっちかにしてよぉ。」

「でも、これ本当においしいよ。」

「ありがとう、リナ。」

ミカはほんの少し顔を赤らめるとたまちゃんとポンマンの料理皿に料理をのせてわけてあげた。たまちゃんの食欲は尋常でなく次々と料理を平らげていく。ポンマンも負けじと食べていくのだがたまちゃんの食欲には勝てずポンマンは腹一杯となるとその場に倒れ込んだ。しかしたまちゃんの食欲は限界がないらしく黙々と食べ続ける。

「たまちゃんってホントよく食べるのね。ポンマンに勝つなんてすごいよ。」

「オラっちが沢山食べないと中で寝ているタカヒトに栄養がいかないじゃん。だから俺としてはこうしてムリして食べているってわけじゃん。」

「……ねえ、たまちゃん。タカちゃんはどっなの？元気のの？」

「無事に覚醒に向かっているじゃん。この道を抜けて出口に辿り着く頃にはタカヒトは元気な姿を見せるはずじゃん。心配は無用じゃん。」

たまちゃんはそう言ったがミカには不安が残った。本当にタカヒトが戻ってくるのか？不安でたまらなかった。ミカのそんな思いを知ってか知らずか、たまちゃんはテーブルの上に料理を食べている。そんなたまちゃんの姿を見ていたミカは悩むのを止めて追加の料理を作る準備に取り掛かった。たまちゃんの食欲もおさまりミカが後片付けを始めた頃、腹を出してハンモックに横になっているボンマと同じようにハンモックに寝ているたまちゃんの姿があった。食事を終えたテーブルをミカがひとり拭いているとリナがコーヒーの入ったカップを持って歩いてきた。ミカはカップを手にとると一口飲んで椅子に座り一息ついた。

「ミカの作る料理は最高だったわ。ミカは何でも出来るのね。」

「何でもつてわけでもないんだけど・・・」

お母さんが死んでから私が父親の身の回りのことをしていたからかな？

「・・・ごめんなさい。変な事聞いちゃって。」

「ううん・・・いいの。」

「・・・あとひとつだけ聞きたいことがあるんだけど聞いてもいい？」

「聞きたいこと？」

リナがミカに聞いたかった事とはタカヒトとのことである。リナのいた世界、修羅道では強さこそがすべてであった。その世界ではドレイクは圧倒的な強さを誇りそんなドレイクにリナは惹かれたのである。リナから見てもミカは魅力的な女性でありそんなミカがどうしてタカヒトのことを想っているのか不思議だった。

タカヒトがドレイクや数多くの強敵に勝利することが出来たのもすべてソウルオブカラーの助けがあったからでありタカヒト自身には全くと言っていいほど力が無い。気の弱いタカヒトをどうしてミカがそこまで想っているのだろうか？リナはその答えが知りたかった。

「タカちゃんのこと、そこまで言わなくても・・・」

リナのストレートな言い方に少しガツカリしたがミカは話を始めた。それはミカがタカヒトと初めて出会ったのは幼稚園の頃の話だ。途中入園してきた小柄なタカヒトがオドオドしながら先生に紹介されているのがとても印象的だった。この頃のタカヒトはほかの園児達とは遊ばずに独りで絵本を読んでいることが多かった。先生からはほかの園児達と遊ぶように言われその時は皆と遊ぶのだが少し経つとまた独りで絵本を読んでいた。ただの大人しい男の子でミカはタカヒトのことを気にすることはなかった。

ミカは明るい元気でこの頃からほかの園児達のリーダー的な存在であった。共通点の全くないミカとタカヒトであったが彼らを引き寄せる事件がこの後に発生した。ミカの住んでいる家は幼稚園から近いこともありバスに乗る事もなく幼稚園には歩いて通っていた。しかしこのミカの通園にはひとつだけ問題があった。それは幼稚園の付近に当時この町の権力者の家があったことだ。議員でもあったこの権力者は大の犬好きで門柱の近くに凶暴な犬が常に鎖でつながれていた。この犬について近所の住民からは不安な声が数多く出

ていたのだが誰一人この権力者に口答え出来る者はいなかった。ミカの父親もこの時すでに議員であったが新人議員ということもあり何も出来なかった。ミカと近所に住む園児達が歩いているといつも閉まっている門柱が開いて犬が頭を出して睨んでいた。ヨダレを垂らし品のないその犬相はやはり飼い主に似ているのか。

「だつ、大丈夫だよ・・・鎖でつながれているんだもん。」

自分とふたりの園児に言い聞かせるようにミカは言った。しかし犬は門柱を通り抜けてミカ達のところまで歩いてきた。有り得ない状況にミカ達は一步も動けずにその場に立ち竦んでいる。大型で凶暴なこの犬は鎖を支えている木杭を引き抜いていたのだ。ミカの身長をはるかに超えるその犬はヨダレを垂らしながらゆっくり歩み寄ってくる。驚いたふたりの園児はミカを残して走って逃げていった。

「あつ・・・ああ・・・」

生まれて初めて恐怖を感じたミカはその場に座り込んでしまった。ヨダレを地面に垂らしながらすべてを切り裂いてしまいそうな牙を光らせている。犬の影がミカに覆い被さった瞬間、その犬が急にミカから距離を取った。涙を流しているミカの視界にタカヒトが棒切れを持って立っている姿が映った。

「離れる・・・離れないとぶつぞ！」

ミカに襲い掛かろうとしていた犬にタカヒトは棒切れを振り下ろしたのだ。偶然ミカ達を見かけたタカヒトが落ちていた棒切れを持って犬に挑んでいったのだ。怯んだ犬が後ずさりするとタカヒトは座り込んでいるミカの前に立ち塞がった。犬を前にして震えながらもタカヒトは棒切れを手にミカを守ろうとしていた。

激しく吠える犬にタカヒトは棒切れを振り回したが犬が棒切れに噛み付くといとも簡単にタカヒトの棒切れを奪いとった。棒切れを噛み砕いた犬はタカヒトに飛び掛かるとその小さな左腕に噛み付いた。子供のただならぬ叫び声に近所の大人や幼稚園の関係者が飛び出してきた。

「この狂犬め！離れろ！」

「痛い、痛いよ！うわああ〜ん・・・痛いよお〜・・・」

大人達は犬をタカヒトから引き離れたがその左腕は血が流れ、骨が見えていた。救急車に乗って病院へと運ばれていくタカヒトをミカはずっと見つめていた。この事件により狂犬は薬殺されてこの地の権力者であった議員も職を失うこととなった。今もタカヒトの左腕には狂犬に噛み付かれた傷跡がはっきりと残っている。

「ミカを守ったんだね・・・ごめんね。気が弱いなんて言ってしまうって。」

「ううん・・・たしかにタカちゃんって頼り無さそうに見える。実際、助けてくれたのってその時だけでどちらかって言うと私が守ってあげたほうが多いかな。」

「フフフ、お姫様に守られてる騎士さんね。」

「本当にそうね。」

ふたりつきりでクスクスと静かに笑っているとポンマンが寝ぼけ眼で起きてきた。ウロウロしながら水を飲み干すとまたハンモックに戻って眠った。ポンマンの滑稽な姿を見たふたりは顔を見合わせ

てクスクスと笑った。

初めての恐怖

「そろそろ出発するじゃん！」

たまちゃんはミカ達に声を掛けると部屋を後にした。たまちゃんの医術？によつてポンマンとリナはなんとか歩けるようにはなつたが依然てんとは意識不明となつていた。ポンマンはてんとを背負うとたまちゃんの後を追つて歩いていく。部屋で休んだのが良かったのかミカ達はあまり疲労感を感じず出口まで辿り着けた。

「やつと着いたじゃん。皆よくがんばつたじゃん！」

額の汗を拭つてたまちゃんは床のスイッチを押すと出口のドアを開いた。少しずつ明かりが暗い道に差し込んでくるとその眩しさに目を覆い隠したミカ達。次第にそれになれてくるとそこには雄大な海岸線がミカ達の眼下に広がっていた。

少し入江かかったところにテトラポットが無造作に設置されている。広大な海が青く輝いている。漁へ出航するのだろうか数隻の船舶では慌しく準備をしていた。ミカ達は雄大な大海原にひと時見入っていた。ひと時の安らぎを現実に取り戻したのはたまちゃんの言葉だった。

「近くに船が用意してあるじゃん。それに乗ってここから脱出をするじゃん。」

周囲を警戒しながら歩いているとたまちゃんの言った通りに船が沖に浮かんでいた。

「あそこまで泳いでいくじゃん！てんとはその木の板に乗せる

「じゃん。」

たまちゃんは浜辺に打ち揚げられていた木の板をポンマンに拾わせるのとんとをゆっくりとその上に降ろした。海に浮かべて沈まない事を確認するとゆっくりと船に向かって泳いでいく。

ポンマンの後を追ってミカとリナも泳ぎ始める。すると上空より何か接近して砂浜を陥没させた。砂煙がおさまるとそこにはギガスとカオスがいた。

「ふふふ・・・逃られるとも思っていたのかしら？」

私達は勝利したって浮かれているアレスの坊やほど甘くはないわよ!」

三獣士のギガスとカオスのふたりだけだったが、そのふたりが最悪であった。ソウルオブカラーの能力を吸い取るギガスと無属性であるカオスの衝撃波は唯一ギガスの能力の及ばない力である。最強の矛と最高の盾を持つこのふたりと戦う事は絶望を意味している。

「くっ・・・やるしかないわね!」

リナとミカは浜辺に戻ると戦闘体勢を取った。しかしその前にたまちゃんが仁王立ちするとたまちゃんの発した一言にミカは驚いた。

「ここはオイラに任せてさっさと船に行くじゃん!」

「何を言っているの?ここは皆で協力して・・・えっ!」

ミカが声をあげた瞬間たまちゃんの頭上の殻にヒビが入った。そのヒビは下まで一直線に届いて頭上の殻が次第に剥がれていく。ポロポロと殻が剥がれていくとたまちゃんは安堵したような表情をし

ている。

「ミカ・・・もう大丈夫じゃん。いよいよタカヒトの覚醒じゃん。オイラもやっとな役目を終える事が出来る。皆との晩餐は楽しかったじゃん！」

たまちゃんがそう言い残すと黒い殻がパツクリと半分に分れて神々しい光りが放たれた。そしてその光りの中からタカヒトが現れた。

「タカちゃん！」

閉じた瞳をタカヒトはゆっくり開けると立ちあがった。少しの間呆けていながら辺りを見渡してミカを見つけるとタカヒトは口を開いた。

「ミカちゃん・・・てんとを連れて早く船に行つて。」

「ひとりじゃあダメだよ！皆で協力しないと！」

「大丈夫だよ。たまちゃんを通していままでの事はなんとなく分かっているから

・・・てんとは誰に傷つけられたの？」

「ふふふ・・・この私が殺つたのよ！」

高笑いが辺りに響くとタカヒトは表情をあまり変えずにギガスを見つめた。ミカはタカヒトのその表情に少し戸惑いを感じた。最強の戦士を相手に逃げようともせずいつものタカヒトらしからぬ姿を初めて見たからだ。タカヒトがゆっくり歩を進めるとギガスの前にカオスが立ち塞がった。前回タカヒトと対戦していることでカオス

の思考回路にはタカヒトの戦闘データがすでに分析されている。

「リミッターカイジヨ・・・」

「あらあら、いきなり仕留める気？私の出番も残しておいて頂戴ね。」

全力で一気に仕留めようと身構えるカオスに対してタカヒトはふらつと身体を揺らす。次の瞬間、カオスの目前にタカヒトが立っていた。

呆然とするカオスの顔面にタカヒトの右拳が触れると合金製の顔が水飴のようにグニャと曲がった。次にカオスの目にタカヒトが映った時にはすでにカオスの頭は胴体から離れていた。カオスの頭が砂浜に落ちると主を失った胴体はグシヤと崩れ落ちる。

それはまさに一瞬の出来事だった。タカヒトの身体がふらつと揺れた瞬間、カオスの目前にいた。カオスは何の反応も出来ないまま頭部と胴体をふたつに分離されていた。

ミカ、リナも目の前の出来事に理解が出来なかったがそれはギガスも同様だった。ギガスにもタカヒトの姿が全く見えなかったのだ。ギガスは頬に流れる冷たい汗に気づく。この時ギガスは初めて恐怖感を憶えたのだ。タカヒトという恐怖に膝はガクガクと震え動く事すら出来ない。そんな状況になりながらもプライドの高いギガスは異常なほどの憎悪をタカヒトに向けている。歯をグツと噛み締めて何とか動き出すと砂浜に落ちているカオスの頭部を拾い上空へ飛び去っていった。

この戦いで一番驚いていたのはタカヒト自身だった。しばらくの間、タカヒトは自分の両手をジツと見つめていた。浅瀬にいたリナとミカが戻ってきてタカヒトのところへ近づく。ミカの顔を見つめるといつもの様に微笑むタカヒトがそこにいた。その笑顔を見て安心したミカはタカヒト達と共に船へ泳いでいく。

「皆、無事で良かった。」

タカヒト達が船に着くとポンマンがんとを甲板に寝かせていた。んととの容態が気になったタカヒトは急いで近寄り様子を伺ったが依然てんとは危険な状態を抜けてはいなかった。そこへ船室のドアを開けてひとりの亜人種が近寄ってきた。

「はあくい、みなさん元気でいらっしやるかしら？アラ！病人がいるじゃないの？」

この亜人種は船の所有者であり水先案内人のルルドと名乗った。んとを船内の医務室に連れて行くとルルドは手際が良く応急処置を施す。するとんと顔色が少し良くなったように見えた。医務室を出たルルドはタバコに火をつけると一息つき言った。

「ふうううう・・・かなり重傷ね。ここの設備では回復は期待できないわ・・・」

あんた達、何をしてきたの？」

「・・・」

「まあ、いいわ。詮索はしないから。」

ルルドはあまり深い事を聞いてはこなかったがタカヒト達の姿を見て大体のことは察したらしくチャートルームに入っていた。タカヒト達も後に続いてチャートルームに入るとルルドが海図を広げてコンパスと定規を使って作業をしている。このルルドの船、アレクサンダー4号は地獄の一丁目と大叫喚地獄を結ぶ定期便らしいのだが客人の容態が危険と判断した為に針路を変更する事を伝えてき

た。行き先は地獄一の医者がいる孤島。アレクサンダー4号が右舷に大きく傾くと帆を張り出して孤島へと向う。

一方、館に戻ったギガスは全身を映し出すほどの大きな鏡の前に立っていた。両手でカオスの頭部を抱えながら涙を浮かべて立っている。

「無様な思いをさせおつてえ〜。この怨みはらさずにおくべきかあ〜〜。」

髪を乱して怒りに狂うギガスは壊れたカオスの頭部から眼球を引っっこ抜くと持っていた頭部を投げ捨てた。ギガスの手にした眼球が色と形を変えて藍玉に変わっていく。

地獄先生

「おおーし、手術は成功した！あとは回復の経過を見守ろうか。」

孤島についたタカヒト達はルルドの紹介により地獄先生の手術を受けることが出来た。地獄先生は医者とは思えないくらい巨漢であるがその手術さばきは恐ろしく正確でんとはぎりぎりのところで一命を取り留めた。

この孤島は地獄先生が閻魔王に与えられた島で患者が地獄のあちこちから診断を受ける為にやってくる。薬草や食料も豊富にあるこの病院でタカヒト達はてんとの容態が良くなるのを待つこととした。病院の隣にはコテージが沢山設置されて当分の間に宿泊する事になる。リナとポンマンは傷を治す為に病院への通院が義務付けられ、ふたりは朝から病院へ行っている。

当然コテージにはタカヒトとミカのふたりつきりとなった。ミカが朝食の後片付けをしている間、タカヒトは独り遠くに見える海岸線を眺めていた。

「どうしたの？気分でも悪いの？」

ミカの呼び掛けにタカヒトは首を横に振った。タカヒトは三獣士相手に圧倒的な戦闘力を身につけて勝利した。しかしそれはウンディーネとたまちゃんの命をととの協力があつたからである。自分が生きる為に大切な人が犠牲になる事がタカヒトにとってとても辛かった。するとタカヒトの横に座って話を聞いていたミカが反論した。

「違うよ。ウンディーネもたまちゃんも自分の意思で託したんだよ。後悔なんてしてないと思う。だからあまり自分を責めないで・

・見てるの辛いから。」

ミカはタカヒトの肩に寄り添った。少し涙ぐんでいるミカに顔を真っ赤にしたタカヒトはしばらく動けなかった。地獄とは思えないほど孤島は草木があつて鳥も楽しそうに鳴いている。風は心地よい爽やかにふいていてふたりはひと時の安らぎを感じていた。

「アラ・・・お邪魔かしら？」

驚いたふたりが振り向くとリナとポンマンがニヤニヤ笑ってドアの前に立っていた。顔が真っ赤になったミカがタカヒトから少し離れて座った。地獄先生の受診が終了してポンマンは完治、リナも2、3日で完治予定らしい。てんとの見舞いにも行つたらしく

「容態は安定している。もうしばらくすれば意識も戻るだろう」

と地獄先生が言っていた。タカヒトとミカがてんとの容態にホツとしているとポンマンがタカヒトを海岸へ誘った。なんでも病院で知り合つた亜人種がカイトボードを教えてくれると約束をしたのだと言った。

「カイトボードって何？」

タカヒトがポンマンに質問すると無言のままポンマンはタカヒトの手を引っ張って海岸へ走っていく。タカヒト達が海岸に着くと浜辺にはいろいろな色の凧が置かれてそのうちのいくつかは海面上を滑走していた。

「カイト（凧）をあげてその揚力（引っ張る力）によりボード（板）に乗り海面を滑り楽しむスポーツだそうだよ。」

「へえ、楽しそうだね。」

「へい、ポンマン！」

「やあ、アイザック！」

小麦色のたくましい筋肉をこれでもかと見せるが如くアイザックは現れた。彼はプロのカイトボーダーでありいくつもの大会で優勝している有名なボーダーなのだが最近行われたカイトボードの大会で彼だけが凶暴な肉食イカに襲われたらしい。小麦色の筋肉で九死に一生を得たらしいが足の小指を骨折したらしく地獄先生の治療を受けていた。そこでポンマンと出逢い意気投合したらしい。

「きみ達、うまいじゃないか！」

アイザックはポンマンとタカヒトにカイトの操作を教えるとふたりともすぐにカイトを操れるようになった。これにはアイザックもかなり驚いたが続いてボードの操作を教えるとタカヒトはすぐに覚えてカイトボードを楽しんでいた。カイトボードを操り、海面上を滑るタカヒトは高波も乗りこなしてアイザックもあまりの上達ぶりに驚いた。

「へい、タカヒト！きみはスーパーグレイトだよ。今度の大会は優勝だな。」

「えっ……大会って？」

数日後、タカヒトはアイザックの呼びかけにより大会に参加した。しかしスタートラインに立ったタカヒトは予想以上に緊張していた。

タカヒトのまわりにはプロのカイトボーダーがアドレナリンを放出しながらスタート開始の合図を待っている。そしてあるカイトボーダーをタカヒトは注意深く見つめていた。蜂のような姿をしたデビット・ビーだ。タカヒトはアイザックに言われた事を思い出していた。

「タカヒト、キミの出場するバトルスピードはカイトボードを使って一番速くゴールする事を競う競技だ。だが気をつける！バトルスピードは相手に何をしてもよいことになっている。つまり死んでも文句は言えないのだ！なかでもデビット・ビーには気をつける！ヤツは勝つ為には手段を選ばない。グット・ラック！」

「まったくもう・・・登録してからそんなこと言うんだもんなあ」。

タカヒトはスタートラインで独りブツブツ文句を言っていた。バトルスピードにはデビット・ビーを恐れてか8名しか参加せずいきなり決勝戦からとなった。タカヒトはほぼ中央からデビット・ビーは右端からのスタートとなった。スタートフラッグを持った審判員が頭上高くにゆっくり持ち上げていく。

「オン ユア マークス・・・セット・・・」

パンつとスタートの合図が鳴ると共に一斉に8つのカイトが空に向かって開くとボーダーが勢いよくスタートしていく。

「緊張していたのかしら？」

「まあ、まあ、勝負は始まったばかりだよ。」

ミカヤリナ、ポンマンの応援が届かなかったのか？タカヒトはアタフタしているとスタートに出遅れて最後尾となった。他のカイトボーダーからかなり遅れ、ポツンと独りタカヒトは滑走している。

「ギツ、ギツ、これでも喰らえ！」

開始早々にデビット・ビーは自らの尾から針を飛ばすと後を着いて来た2名のボーダーのカイトに穴を開けて転倒させた。デビット・ビーはニヤけながら先頭を突き進んでいく。海面に浮かんでいる2名のボーダーの間を次々と後続者が通り抜けて最後尾のタカヒトも通り抜けていく。

トップスピードで折り返し地点のブイを見事なモンキーターンで切り返すとデビット・ビーの眼に4名のボーダーが映った。デビット・ビーは羽根を激しく震わせるとそのエネルギーが波に伝わり高波を発生させた。その高波は次々とボーダー達を飲み込んでいく。海面に浮かんでいるボーダー達を嘲笑うようにデビット・ビーは通り抜けていく。高波があったことなど知りもしないほどタカヒトは論外だったらしくデビット・ビーはタカヒトなどまるで無視をしてみずれ違つていく。スタート地点からレースの状況をミカ達と共に見ていた赤玉はチャンスとばかりにタカヒトの意識を乗っ取るうと企んでいた。

「この状況はやつぱ俺様しかないよな！」 (赤玉)

「何を言ってるのかわかんない！僕だよ 僕！」 (白玉)

どちらがタカヒトの手助けをするか？言い争っていると紫玉が出てきた。

「おい？紫玉、何してんだ！」 (赤玉)

「私が行こう。おまえが行くとレース自体を壊してしまう。」
（紫玉）

「アハッ、赤ちゃんが行くとハチャメチャになっちゃうもんね。」
（白玉）

「おまえが行っても同じ事だ！」 （紫玉）

「……………」 （白玉）

紫玉は赤玉と白玉を押し退けてその場から消えた。先頭を単独で走行するデビット・ビーとタカヒトとの距離を考えると逆転は不可能であった。それでも紫玉には勝算があった。紫玉のことなど知らずにタカヒトはのんびりとカイトボードを楽しんでいた。

音速の先へ

デビット・ビーの優勝は確実なものと感じたタカヒトは雄大な大海原をただ独りカイトボードをゆっくり進ませながら楽しんでいる。

「勝つだけがすべてじゃないし、参加する事に意味があるんだ・
・たぶん。」

タカヒトは自分に言い聞かせてノホホンと走行している。するといきなり紫玉がタカヒトの意識の中に入ってきた。

(タカヒト、のんびりしているところを悪いがちょっと身体を借りる。)(紫玉)

「えっ?・・・紫玉?・・・何で?」

戸惑っているタカヒトの意識を紫玉があっさりと乗っ取るとタカヒトの瞳と髪の毛が紫色に輝く。しかし今のままではどう足掻いてもデビット・ビーには勝てるワケもない。それほどデビット・ビーとの差は大きいものだった。だが紫タカヒトには作戦があった・・・一発逆転の方法が!紫タカヒトはカイトを手放すとコントロールを失ったカイトが上空へと飛んでいく。

「紫玉理力アルティメットアタック」

紫色のアレストが紫タカヒトのボードの周りに集まっていく。アレストが粒子砲を一斉に放つとボードが推進力により押し出されていく。ボードは水しぶきをあげながら加速していったが、それでもデビット・ビーには到底追いつけはしない。だがそれすら紫タカヒ

トの想定内の事だった。紫タカヒトは両手を広げると更に理力を高めた。

「紫玉上級理力アルティメットキャノン！」

複数のアレスト砲筒を創り紫タカヒトの両腕に装着された。紫色の巨大な粒子砲を発射させると急激に推進力があがった。アルティメットアタックとアルティメットキャノンの推進力がボードの加速を更にあげていく。海面に波しぶきをあげながら加速していく。紫タカヒトは加速を強めると音の壁に衝突していく現象が始まった。いくつもの音の壁を越えて音速の領域に達した紫タカヒトの視界にデビット・ビーの姿が映った。

「ギツギツギツ、今回も賞金は俺のモノだ！……なんだ？この音は？」

ゴール目のデビット・ビーの横を激しい爆音と共に紫タカヒトが追い抜いた。デビット・ビーは一瞬何が起こったのか？理解出来なかった。そんなデビット・ビーを差し置いて紫タカヒトはミカ達の待つ砂浜に到着した。

「アンビリーバボォー！優勝は最下位だったタカヒトだあ〜！！」

タカヒト優勝のアナウンスが流れると紫タカヒトのまわりには祝福しようとミカや沢山の観客が集まってきた。しばらく経ってからデビット・ビーがゴールしたが紫タカヒトの勝利に納得がいかないようで罵声をあげて大会主催者に食って掛かっていた。

「おい、あの野郎はなんなんだ！あんなの反則だ！」

「デビット・ビー様・・・」

レースに不正はなく彼の勝利に主催者側の異論はございません。

「

主催者の態度に怒り狂ったデビット・ビーは羽根を激しく震わせる。デビット・ビーは以前に行われた大会でも自分勝手な怒りを振りまいて羽根を激しく震わせカマイタチを発生させて優勝者と主催者を殺したことがあった。

主催者と観客は再びあの悪夢が襲い掛かると脅えその場から叫び声と共に逃げ去っていく。その場に残ったのはミカ達だけであった。恐怖のカマイタチを一掃するかのよう紫タカヒトが口を開いた。

「やれやれ、なんでもアリのレースで反則を主張するとは紳士的ではないな。」

「なつ、おんどりやあゝ・・・生きてここから出られると思うなやー！」

デビット・ビーが羽根を高速振動させると周囲の砂浜が共鳴していく。カマイタチを発生させたことにより複数の風刃が紫タカヒトに襲い掛かる。冷静沈着に状況を把握した紫タカヒトは理力を開放するまでもなく風に流れる柳のようにゆらりゆらりとカマイタチをかわしていく。

圧倒的な力の差にデビット・ビーはその場に膝まずいた。紫タカヒトはその場を後にしてミカ達の方へと歩いていく。

「この瞬間を待っていたんや・・・いてまえ！」

眼を光らせたデビット・ビーは紫タカヒトに狙いを定めて毒針を撃ち込んだ。鋭い毒針が紫タカヒトの背中目掛けて放たれる。

「待つていたのはおまえだけではないぞ。」

「なっ、なんじゃ？」

勢い良く飛んできた鋭い毒針とデビット・ビーにはすでに膨大な数のアレストが狙いを定めて配置されていた。

「紫玉上級理力アルティメットキャノン！」

毒針を紫色の粒子波が消し去るとその先にいるデビット・ビーも上空の遙か彼方に飛ばされていった。すると逃げていたはずの観客が一斉に歓喜の声をあげて、戻ってきた。紫タカヒトは瞳を閉じると紫色の輝きはおさまりタカヒトは意識を取り戻した。突然、タカヒトは観客に持ち上げられて胴上げをされた。タカヒトはいきなり紫玉に意識を乗っ取られたので状況が全く理解できていない。それでもミカやポンマン、リナが喜んでいる姿を見て紫玉がうまくやったのだと理解して素直に胴上げを楽しむことにした。その後アイザックやほかの選手達の競技も終了して表彰式が終わると笑顔と余韻を愉しみながら観客達は帰路につく。

「勝者のタカヒトを称えて、乾杯！」

グラスの鳴り響く音が聞こえる。大会を終えたタカヒト達はアイザックの招待で優勝祝福会に招かれていた。アイザックはタカヒトの優勝を喜んでいた。

「それにしてもあのデビット・ビーに勝つなんて凄いよ。」

タカヒトは本当にスーパードラグレイトボーダーだよ。」

てんとの回復

次の日、タカヒトはミカと共にてんとの病室に行った。地獄先生からてんとの意識が戻ったとの連絡があったからだ。海風がソヨソヨと吹いている部屋で、てんとは涼しげにベッドの上で風を感じていた。そこへバタバタとタカヒトが入りこんで涙を流しながらてんとに抱きついた。

「てんと、心配したんだよ！」

抱きついたまま離れようと思わないタカヒトにウンザリの表情をするもののほんの少しだけ嬉しくも思ったてんとだった。

「タカちゃん・・・」

ミカが近づいてタカヒトの肩にそつと触れるとタカヒトはてんとからゆっくり離れた。地獄先生からはてんとの意識は回復したものの傷口の完治はもう少し掛かると言われた。しかしこれ以上休んでいる訳にはいかないとてんとは旅立ちの準備を始めていた。これにはタカヒトもミカも反対したがてんとは意見を聞こうとはしなかった。

てんとが先を急ぐには理由があった。それは昨日、タカヒトがカイトボード大会に出場している時のことだった。意識を取り戻していたてんとは窓を開けて海を眺めると廊下からてんと呼ぶ声が聞こえてきた。

「意識が戻ったようじゃの。」

てんとがドアの方に視線を向けるとそこに徳寿が立っていた。驚

いたてんとはベッドから起きあがるうとするが身体が鈍っているらしく思うように動けない。

「コレ、そのまま寝ていなさい。」

徳寿はベッドの近くにあつた椅子に腰をおろした。

「今日はの……頼みたいことがあつて来たのじゃ。」

徳寿はてんとにある指令を伝える為にここに来た。その指令とは地獄のもつとも深い場所にいる破壊神と密会することである。

てんとは徳寿の考えが理解できなかった。天道を治める統括者のひとりである徳寿がもつとも警戒すべき相手である破壊神と密会を進めるとは……。深い不信感を覚えるてんに徳寿は口を開いた。

「やはり不信感を覚えるか。今から話すことは誰にも話さないと約束出来るかの？」

てんが頷くと徳寿はゆっくりと真実を語り始めた。天道を……いや、六道のすべてを統括、支配しているのは天道にいる創造神である。その創造神の言葉を伝えるのが統括者である。しかし本来、統括者は五名いるはずのだが、現在では徳寿とピサロ、ハデスのみとなっていた。

徳寿は二名の欠員については語らなかつたが問題は徳寿を除く二名の存在である。ハデスは黄泉の国を支配する者で天道に関する事には全く興味がなく黄泉の国を出ようとはしていない。

問題なのがピサロという人物でこの者は上昇志向が異常に強く野心家で六道を支配することを常に考えている。

「ピサロだけは・・・気をつける必要がある。」

六道の全支配を考えているピサロに対抗するには破壊神の力が必要だと徳寿は考えている。そして徳寿はてんとに手紙を渡した。この手紙にはピサロの陰謀や徳寿の考えそれに破壊神への協力が書かれていたらしい。この手紙を渡すことこそ、徳寿の目的であった。その為にタカヒトやてんと達に命がけの危険な修練をさせていたのである。

「直接、手渡してくれんかの。あと・・・十六善神にも警戒を怠らないようにの。」

「十六善神・・・」

十六善神とは創造神の名のもと統括者に仕える16名の戦士達のことである。ソウルオブカラーを操る者も存在し、最強戦士達と謳われる16名の所在は現在ほとんどが不明である。しかし一部の戦士はピサロの配下と成り下がっているらしく破壊神に辿り着くまで遭遇する可能性は高い。三獣士・十六善神・破壊神・ハデスそれにピサロ。これからタカヒト達が向かう先で待っている者達だ。てんにはこの指令を成功させる自信は全くなかった。

「破壊神に・・・会うことなど出来るのか？」

てんとの頭の中はそのことではいっばいだった

・・・タカヒトの呼びかけも聞こえないほど。

「てんと、てんとつてば！」

「何だ？・・・呼んだか？」

「チエツ、さつきから呼んでるのに！」

てんとはタカヒトの呼びかけに気がついた時にはタカヒトは口をふくらませていた。タカヒトは今までの出来事をてんとに話していく。しかし愉しそうに話すタカヒトの言葉もてんには伝わらなかつた。今のてんには徳寿からの言葉が重く押し掛かっていたのだ。タカヒト達が帰ってからもてんとはいくつものシュミレーションを考えながら、最良の策を練っていた。そんな事していると数日が経っていった……。

「後、二・三日したら退院していいぞ。」

てんとを診察した地獄先生はそう言った。苦しいリハビリを乗り越えて、てんとの身体は完全回復した。てんとは今すぐにでも出発をしたいと願い出た。

「何を急いでおるのか、わからんが出発するにせよ、準備が必要だろう？」

焦るてんとに地獄先生は優しく笑みを浮べた……

それからさらに数日が経ちてんと達はルルドの船アレクサンダー4号に乗っていた。本来は地獄の一丁目と大叫喚地獄を結ぶ定期船であるので、今は進路を元に戻し叫喚地獄へと向かっている。

「てんと、薬の時間だよ。一日三回毎日飲まないかね。」

タカヒトはてんとに薬を飲ませるように地獄先生からキツク言われていた。てんとを医務室に連れて薬を飲ませるとベッドに眠らせた。そこヘルルドがタバコをくわえながら入ってきた。

「アラ・・・その子、回復したみたいね！良かったわあ〜。」

ルルドは寝ているてんを見下ろしながら言った。どうやらてんとのことを気に入ったらしくやたらと顔を近づけていた。ミカがなんとか間に入ってルルドの行動を止めたのだが、もしてんが起きていたらどうなっていたのだろうか？とタカヒトは少し愉しみでもあった。ミカの巧みな防御？にルルドは少し険しい顔をしながらも今後の航路について話を始めた。

「実はねえ〜、もうすぐ大叫喚地獄の入り口に入るんだけどお〜
〜・・・」

やたらと長つたらしい話し方にリナは少しイラツとしたがルルドの話はこうだ。地獄の一丁目と大叫喚地獄を結ぶ定期船の航海でもっとも危険な場所が大叫喚地獄の入口らしい。海流が激しく沈没船が後を絶たない。その上、沈没船の積荷を狙って地獄の海賊が集まってくる。激しい海流を乗りこなしながら海賊との戦闘を行わなければならぬ。ルルドはタカヒト達の命の保障が出来ないと言う。

「わかったよ。自分の命は自分で守れってことだね？」

「そうよ、タカヒトちゃん。わかって貰えたかしら？」

まあ、そうは言っても私の船に乗って被害を受けた人はいないけどね！」

意味深な言葉を残してルルドは部屋を出て行った。どちらにしてもてんとの体調を考えるとタカヒトは海賊相手に戦わなければならぬと覚悟を決めていた。

「赤玉、紫玉、白玉、いいよね？」

タカヒトは意識の中の赤玉、紫玉それに白玉に相談すると快く応じてくれた。ミカにてんとの看病を任せてタカヒトは部屋を出て行った。タカヒトが甲板に出るとルルドがタバコをふかしながら立っている。タカヒトが歩いていくとその後をリナとポンマンが着いてきた。

「抜駆けはよくないぞ！」

「私も身体も鈍っていたところよ。」

ポンマンはこころなしか顔が蒼ざめていたがリナはすでにエレメントを開放して戦闘体勢を整えていた。そんなタカヒト達を見ても何の反応も見せずルルドはタバコをふかしている。

大叫喚地獄の入口に近づくと上空からデモンズの群れが近づいてきた。デモンズと言ってもアレスの率いるデモンズとは違うようだ。飼いならされていない野生の凶暴なデモンズの襲撃にタカヒトも闘気を高めて戦闘体勢に入ろうとしたその時、タバコをくわえたルルドがタカヒトを制止した。

「タカヒトちゃん、いいわよ。私一人でやるわ！」

タカヒトは困惑した。数百匹の凶暴なデモンズをたった独りでルルドは相手をすると言ったのだ。しかしルルドの表情からは冗談を言っているとも思えない。ルルドはくわえていたタバコを手に持ち煙を吐き出した次の瞬間、ルルドの身体が高速回転した。

「ふう〜・・・終わったわよ。」

そう言うと再びタバコをくわえながらルルドは操舵室へと歩いていった。いったい何の事を言っているのか理解できないタカヒトは振り返ると数百匹のデモンズを見つめた。デモンズは動こうとせずその場にジツとしているように見えた。だがそれは違った。鋭い刃で斬られた者は斬られたことに気づかず死んでいく。今、それと同じ事がデモンズ達に起こった。数百匹のデモンズは自分達が斬殺された事にも気づかず海に堕ちていった。

「私の船に乗って被害を受けた人はいないけどね！」と言ったルルドの言葉は間違いではなかった。海流を乗り越えるのはほとんど問題がなくルルドのアレクサンダー4号は無事、大叫喚地獄の入口に到着した。

「さあ、到着したわよ・・・アラ？」

ルルドが上空を見つめるとタカヒトもつられて上空を見つめた。その先には見覚えのある飛行艇がアレクサンダー4号に向かってきた。そしてそれからいきなり激しい砲撃が開始された。アレクサンダー4号の周囲に砲弾が水しぶきをあげて落ちてくる。

「ふうく・・・やれやれだわ。」

砲撃が激しくなっているがルルドはタバコを甲板の床に捨てるとそれを踏みつけた。ゆっくり上空を見つめるとさきほどと同様にルルドの身体が高速に回転した。ルルドが高速回転するにつれて砲弾が次々と空中で爆破されていく。砲撃は一向に止む気配はないがルルドの高速回転も止まる気配がまったくなくない。飛行艇の司令室ではデモンズがあわただしく動いていた。弾薬も底をつきかけていて一匹のデモンズが今にも泣きそうな表情でアレスに報告してきた。

「アレス様、弾薬が残りわずかです。」

「ええい、総攻撃をかける!!」

飛行艇からデモンズが一斉に降下してきた。その数はトレブシエルでの戦闘の比ではなかった。さすがにルルドも助けが必要になるだろうとタカヒトは思ったがルルドの表情はまるで変化がなかった。ルルドは高速回転を止めるとデモンズの集団を睨みつけた。ルルドはゆっくり浮遊していく。

その速度が急激にあがり、加速したルルドが瞬時に飛行艇の甲板に辿り着いた時にはデモンズ軍団のすべてが海に堕ちていった。ただすれ違っただけで地獄道最強の戦士であるデモンズが倒されたのである。

「おまけにこれもあげるわ。」

ルルドは飛行艇の甲板上に右手をそっと押し付ける。爆発音も何もないが飛行艇は煙をあげて海面へ落ちていった。再びアレクサンダー4号の甲板に降りてきたルルドはタバコに火をつけて落ちていく飛行艇を無表情のまま眺めながらポツリと言った。

「さっさと出てくれば、あの飛行艇も沈まずにすんだのにね。」

「・・・何故貴様がここにいる!」

ルルドがくわえていたタバコを手に煙を吐いて一息つくとも目の前にアレスとギガスがいた。突然現れたアレス達にタカヒトとリナは驚愕しながらも戦闘体勢に入った。だがアレスには二人の存在は眼中に無かった。たったひとり、ルルドの存在だけしか見えていなかった。

「何故？おかしなことを聞くわね。私は船長よ。船と乗客を守るのは私の仕事よ。」

「どきなさい！・・・私はその少年に用があるのよ！」

「えっ・・・僕？」

ギガスはゆっくり歩み寄るとタカヒトを見下ろすように立った。美しい着物に身を包み長く綺麗な髪をしているギガスはタカヒトを激しく睨みつけた。

「私に初めて恐怖というものを生みつけたおまえを生かしておく訳にはいかないわ！」

おまえに決闘を申込む。受けるか？」

タカヒトは啞然としながらギガスを見つめた。よく意味が分からないがアレスは手を出さないようだ。

「アラ、決闘なの？だったら最初からそう言えばよかつたのに、嫌だわ、まったく。大掛かりな登場をして襲撃かと思ったじゃないの。近くに大叫喚地獄コロシウムがあるからそこで決闘をしたらいいわ。」

「・・・」

何も語らずにアレスとギガスが飛び去っていくとルルドはタカヒト達を連れて大叫喚地獄の入口近くに建設されている大叫喚地獄コロシウムへと船を進めた。大叫喚地獄コロシウムは最近ではコンサートや舞台公演などに使われていた場所であるが以前は決闘などにも使われていた。

大叫喚地獄では物事の賛否はすべて決闘により決められていた。地獄道そのものが強さこそが正義という世界なのだ。ゆえに決闘は神聖なものとされて第三者の介入を酷く嫌い何人も介入は許されない。

怖い相手

「タカちゃん・・・」

不安な表情を浮かべるミカにタカヒトは少し引きつった笑顔をした。三獣士のギガスとの一騎打ちなのだから無理もないがミカにはあまり不安な思いはさせたくなかった。決闘に使う武器は制限が無いらしく控え室には沢山の種類の武器が揃っている。

「これで戦うんだよ！相手はあのギガスだぜ。」（赤玉）

「こっちのほうがいいってば！素早い斬撃でギガスを切り刻むんだ。」（白玉）

赤玉と白玉は武具を取り合って誰がギガスと戦うかを勝手に決めていた。

「赤玉、白玉。この決闘は僕とギガスの戦いなんだ。だから僕自身戦う。」

「チエツ、わかったよ・・・じゃあ、武器はこれにしるよな。」（赤玉）

赤玉が持ってきたのはタカヒトが使うにはあまりにも大きすぎるバカでかい斧だった。それを手にしたタカヒトはよろけながら転倒した。床に落ちた斧を持つにも重過ぎてタカヒトには持てない。

「タカヒト、そんなのダメにきまつてるって。こっちにしなよ。」（白玉）

白玉も負けじと持ってきたのが鉛筆を削るつもりなのか？小さなナイフだった。それを手にしたタカヒトはおもむろに鉛筆を削ると先の尖った鉛筆が出来上がった。

「おお、すげえぞ。」（赤玉）

「……武器はいらない。僕には赤玉と白玉それに紫玉がいる。ミカちゃん、リナ、ポンマン……それにてんががいる。それだけで十分だよ。」

「……よし、わかった。この俺様がおまえに力を貸してやる！」（赤玉）

「僕も！」（白玉）

「私はタカヒトと共にいる。」（紫玉）

「ありがとう」

「タカヒト様、決闘の準備は整いましたかな？」

控え室にコロシアムの世話人が入ってきた。ギガスはすでに準備を終えてタカヒトとの対戦を待ち構えている。タカヒトはミカに笑顔を見せると控え室を後にした。暗い廊下を歩いていくと次第に眩しい光が差し込んできた。眩しさに慣れた頃、タカヒトの視界に入ってきたのはコロシアムすべての席を埋め尽くすほどの観客と歓喜の声だった。観客のほとんどがギガスの配下であるヘルズ達でタカヒトが入場するとブーイングが鳴り響いていた。

しかしタカヒトには観客のブーイングは聞こえてはいなかった。

タカヒトの視線はコロシアムの中央に向けられている。円状の闘技場の中央にはギガスが仁王立ちをして立っていたのだ。タカヒトは歩み寄っていくと扇子で顔を覆ったギガスが口を開いた。

「逃げもせずによく来たわね。褒めてあげるわ。カオスの怨み・
・そして私のプライドを傷つけた罪。その命で償ってもらおう！」

戦いの合図を待たずに、先に攻撃を仕掛けてきたのはギガスだった。持っていた扇子を広げるとタカヒトとの間合いを一気に詰めてきた。闘気を高めタカヒトはギリギリのところまでギガスの斬撃をかわしていく。だが、斬撃をかわしてはいるものの攻撃に移行できないタカヒトのジリ貧状態は続いた。防戦一方の状況からタカヒトは一時的に距離を取る。

「逃げていても私には勝てないわよ！」

「赤玉上級闘気　メガフレア！」

扇子を両手に距離を詰めてくるギガスにタカヒトは激しい大炎柱を放つが扇子を巧みに使いその軌道を変えた。動揺したタカヒトの闘気が鈍ると一瞬の隙をつきギガスの鋭い斬撃が肉を斬り裂いた。火傷のような熱さを左脚に感じたタカヒトの首元にさらなる斬撃が襲い掛かる。

皮一枚でそれをかわすと後退し、再びギガスとの距離を取った。扇子を口に当て、笑みを浮かべるギガス。

「どうしたのかしら？・・・もしかして余裕を見せてるつもり？」

「.....」

斬撃を浴びたタカヒトの左脚から血が流れると観客の歓喜の叫び声がいっそう大きくなった。それに応えるようにギガスが右腕を振上げた。このまま長引けば戦況は不利になると考えたタカヒトは一気に決着をつける決断をする。タカヒトは闘気を最大限まで高め、赤い輝きを放っていく。その様子を伺っていたギガスもまた闘気を最大まで高めていく。

「赤玉最大闘気 テラアグニギガント！」

タカヒトの両腕から激しく巨大な火炎龍がギガスの周囲を覆い尽くすようにとぐるを巻いていく。逃げ場を失ったギガスの頭部から火炎龍は顎を大きく開くと喰らいついた。完全にギガスを飲み込んだ火炎龍は闘技場を火炎の海と変え、泳いでいるようにも見えた。ヘルズ達の悲鳴が広がる闘技場の中心でギガスが敗れタカヒトが勝利を得たかに見えた。そんな大火炎の海でギガスの口元がゆるむ。

「私に勝利したと勘違いしているわけではないわよね？」

燃盛る巨大な大火炎の海は火炎龍と共に次第に小さくなっていく。というよりはギガスに吸収されていった。タカヒトの闘気は衰えてはいないが巨大な火炎龍は最初と比べるとその火炎力は明らかに衰えている。闘気を最大限まで高めているタカヒトは次第に弱まり攻撃を受けているギガスは力を得ていく。力尽きその場に膝まずいたタカヒトに対して火炎をすべて吸収したギガスは扇子を振り高揚感に溢れている。両手を広げ、なんとも言えない幸福感に包まれたギガスの表情にヘルズ達も大歓喜に沸いた。

「いいわあ〜、このみなぎる力・・・素敵よ・・・」

ギガスは闘気を完全に失い、膝まずくタカヒトに火炎弾を放つと

面白いように着弾する。タカヒトの皮膚は水ぶくれを起こし、悲鳴と共にその数は増していく。その悲鳴を聞きながらタカヒトをいたぶるギガスは復讐というよりはイジメに近い。ギガス同様にタカヒトも戦いというよりイジメを受けていると錯覚していた。そしてタカヒトは大樹達に苛められていたあの頃を思い出す。闘気とともに完全に戦意を失ったタカヒトは涙を流し、その場を動けず頭を抱えて怯えている。

「もう、止めて……止めてよぉ〜。」

その言葉に高揚したギガスは火炎蛇をタカヒトの周囲に撒き散らすとその飛火がタカヒトの身体に火傷をさらに増やしていく。恐怖と痛みが大樹達に苛められていたあの頃の恐怖と重なっていくタカヒト。

「おい、タカヒト！てめえ、逃げてんじゃねえぞ！」

「止めてよ……お願いだから止めてよ。」

個室トイレに閉じ込められたタカヒトの頭上から大樹はバケツを使って水を浴びせ続けた。ビショビショに濡れて息も思うように出れない。いつ終わるのかも分からない苦しみがタカヒトを追い詰めていた……。

顔はすでに泥まみれになり涙の流れた跡だけが目立つ。地面を這いつくばりながらギガスの火炎蛇から逃れようとするタカヒト。ギガスの表情は高揚感から怒りへと変わっていく。

「止めてよ……お願いだからもう許してよ。」

「貴様のような無様なヤツに少しでも恐怖を味わったこと……」

「屈辱だわ。」

地面を這いながら逃げようとする泥まみれのタカヒトを見下してギガスは扇子をパシツとたたんだ。ギガスは相手のエネルギーを吸収してより強力なエネルギーを創る事ができる。タカヒトから吸収した火炎をより強力にして小出しにしながらタカヒトに放っていた。しかし戦いの終末を飾る火炎力はまだ十分すぎるほど残っている。

「タカちゃん!!」

「ダメよ！決闘の結末はあの二人だけしか決めることができないのよ……」

「誰も邪魔は出来ないわ。」

闘技場に入り込もうとしたミカをルルドが制止するとミカは涙を流しその場に座り込んでしまった。レンガで覆われた闘技場を見下ろすように観客席は配置されている。ミカは泥にまみれているタカヒトを見続ける事ができなかった。それはリナもポンマンも同じだった。しかし誰もタカヒトを助けることはできない。彼らはタカヒトがギガスに弄ばれながら殺されるのをただ見ている事しか出来なかった。ミカはもう二度と逢えないと思うとタカヒトの最後の姿を見られなかった。

「決闘の勝者はわたしのようね……さようなら……」

ギガスはすべての火炎力を大火炎玉に変え、タカヒトの頭上に創り出した。激しい大火炎玉が戦意を喪失しているタカヒトに襲い掛かる。その瞬間、恐怖で身がすくみ、死という現実を感じているタカヒトを爽やかな風が包み込んだ。そしてその風はミカにも届いた。

「風……今、私が諦めたら大切な人を失っちゃう！」

爽やかな風に教えられたかのようにミカは立ちあがるとタカヒトの姿が一番良く見える一階の闘技場入り口まで走っていく。

「僕はもうダメなのかな？あんな凄い大火炎を浴びたらダメだ・

あれ……この風は……」

包み込んだ爽やかなその風はギガスの大火炎玉からタカヒトを守った。そしてその緑色の風には懐かしい感じがする。

「タカちゃん！」

「ミカちゃん……」

大歓声の中、ミカの叫び声が聞こえてきた。声の聞こえた方向に視線を向けるとミカの姿があった。今にも泣き出しそうな表情を抑えながらタカヒトを見つめていた。

「……僕が諦めたら……ミカちゃんを連れてもこの世界に戻るんだ。」

まだ、死ねない……諦めて死ぬわけにはいかない！」

ミカを守りたい強い思いがギガスへの恐怖、大樹達への恐怖を打ち消していく。恐怖や緊張から開放されたタカヒトは本来の能力を発揮していく。タカヒトは再び闘気を高めるとギガスの大火炎玉を瞬時に吹き飛ばした。これにはギガス自身が最も驚いたようで身動きが取れなくなっていた。カオスが倒された時と同じ恐怖がギガスの脳裏に再び甦った。

「おのれえく……」

背中を冷たい汗が流れるほどの恐怖感をギガスは許せなかった。ギガスの身体は恐怖感から逃避を願っている。しかしそれが許せなかった。恐怖を押し殺し扇子を広げるとタカヒトに立ち向かっていく。

「私に二度も恐怖を与えるとは許せん！」

鋭い切れ味を誇る扇子をタカヒトはいとも簡単にかわしていく。今のタカヒトにはギガスの動きはスローモーションのように見えている。徳の水筒を使ったわけではない。これが今現在のタカヒトの力なのだ。斬撃を繰り返し、疲労を増していくギガスに対してすべてを受け流しているタカヒトは先ほどとは逆の立場となった。

「ぜえぜえぜえ、何故……」

「復讐を糧に戦うあなたと大切な人を守る為に戦う僕とでは力の開放に違いがあるんだ。だから、僕は負けない。」

「知ったような口を……その口も斬り刻んであげるわ！」

ギガスは両手の扇子を振り回していく。扇子から発生する真空の刃が斬撃とともに襲い掛かる。顔の皮一枚が薄っすら斬りつけられながらも扇子の斬撃をかわすとギガスの腹部深くに左拳を押し込んだ。

「ハグツ……グエエエ……」

呼吸をすることが困難なほど苦しみ、その場に膝をついたギガス。

ギガスから距離を取り闘気を開放すると赤色と紫色の輝きがタカヒトの身体を包んでいく。最大まで高めた闘気はタカヒトの身体から放たれる姿にギガスは戦慄を感じた。

「これが最後の攻撃。吸収しければ・・・あなたの勝ち。出来なければ・・・僕の勝ちだ！」

「フッフ、面白い。我が黒玉の力を思い知るがよい！」

「赤紫玉最大闘気複合技 テラアルティメットバスター！」

右腕から激しく巨大な火炎龍、左腕からは巨大なアレストの砲筒から粒子砲を放つ。ふたつの光はひとつになると紫色の火炎龍がギガス目掛けて襲い掛かっていく。するとギガスは黒い輝きを放ち迫り来る紫色の火炎龍を吸収していく。

「いいわ・・・力がみなぎってくる。」

この程度では私には勝てないわ。坊やの負けよ！！」

「違うよ、ギガス・・・僕にはもうひとつ力があるんだ。」

「・・・！」

赤と紫色の輝きを放っているタカヒトに白色の輝きが追加された。白色の混ざった紫色の火炎龍は高濃度エネルギー粒子体に姿を変えギガスを貫く。

「赤紫白玉最大闘気複合技 バーストテラアルティメットバスター」

「！！」

赤・紫・白の混じった高濃度エネルギー粒子体を吸収処理しきれないギガスの身体は風船のように膨れあがっていく。

「我は暗黒の力を持つ者！この程度で・・・

アバツ、バアツ〜〜、ギヤアアアア〜〜！！」

膨れあがった風船は激しい閃光とともに爆発した。激しい閃光による眩しさに目を覆っていたタカヒトは手を下ろし辺りを見渡した。コロシアムの闘技場にいたはずなのに真っ白な世界が広がっている。そこにはミカやりナ、ポンマンにルルド、コロシアムを埋め尽くすほどの観客の姿も見えない。ただ目の前に黒い炎がひとつあるだけだ。

「初めて敗北を味わったわあ〜〜・・・ねえ、坊や。」

「・・・！ギガス？」

「まさかこんな坊やに・・・私の感じた恐怖感間違いではなかったのね。私の負けよ。坊やには散々な目に遭わせてきた。おこがましいかもしれないけど頼み事があるの。聞いてくれるかしら？」

「頼み事？・・・てんとに聞かないとわからないけど僕に出来ることならいいよ。」

「ありがとう・・・やさしいのね。坊や達は破壊神様に逢いに行くのよね？」

「えっ、破壊神様？・・・僕、知らないよ。誰なの？」

「そう・・・でも、さっきの風。てんととか言ってたわね。あの風

からは苦悩も感じられたわ。私の勘が正しければ、逢いに行くはずよ。私の願いは我が主に黒玉と藍玉を渡してほしい事なの・・・渡してもらえるかしら？」

「よくわからないけど・・・その黒玉と違ってどこにあるの？」

タカヒトの返事を確認すると黒い炎は消えて代わりに黒玉と藍玉が現れた。ふたつの色玉はタカヒトの手に収まると同時に真っ白な世界は消えて闘技場に戻った。

十六善神

「タカちゃん！！」

闘技場の中央に立っているタカヒトにミカが走ってくる勢いよく抱きついた。急な出来事にタカヒトの顔は真っ赤になった。生きて逢えないと思っていたミカは涙を流しながらタカヒトにしがみついて離れない。

「……………」

タカヒトとミカの姿を確認したてんとは沈黙を保ったままコロシアムの最上部から姿を消した。勝利者のタカヒトにリナやポンマンも歓声をあげながら走ってきた。

「よくやった、タカヒト！」

「本当にあのギガスを倒したのね！」

「うん、ありがとう。みんなが応援してくれたおかげだよ。」

祝福をしてくれたふたりにタカヒトは嬉しそうに応えた。すると我を忘れてタカヒトに抱きついてたミカは急に恥ずかしくなっただカヒトから離れた。そんなタカヒト達の周りを観客が押し寄せてきた。誰が言うでもなくタカヒトを担ぎあげると胴上げが始まった。闘技場の中央で胴上げをされながら祝福されているタカヒトは今まで味わったことのない感覚に戸惑いを見せながらも次第に笑顔に変わっていった。

胴上げされているタカヒトを観客席からたばこをくわえながらル

ルドが見下ろしていた。ルルドがふと視線を移すとアレスが悔しそうな表情をしながらコロシウムを出て行くこととしていた。

「タカヒトか・・・面白い子だわ。アレスの坊やも計算が狂ったわね。」

さて、いよいよ乱世に・・・混乱の世界に突入しそうね。愉しみだわ。」

決闘が終わりタカヒト達のもとに来たルルドは彼らを連れて大叫喚地獄で最もうまいと言われる料亭で祝賀会を開いた。てんともすつかり体力を回復して祝賀会には同席した。相変わらずポンマンの食欲はある意味恐ろしく衰えることもなく、料亭の料理人が驚くほど食べている。

「アレ？・・・てんと・・・？」

料理を食べていたタカヒトは向かいの席に座っていたてんとながなくなつたことに気付くと辺りを見渡した。するとルルドと共にてんとなが部屋を出て行く姿が見えた。不思議に思ったタカヒトも部屋を出ていくとルルドとてんとなが何やら話をしていた。

「てんとちゃん達は破壊神に会いに行くつもりよね？」

「！ 何故それを・・・ルルド！おまえはいったい何者なのだ？」

「私？・・・私は十六善神のひとり、瞬撃のルルドよ・・・でも、勘違いしないでね。私は十六善神だけどピサロの陰謀も破壊神にも興味はないわ。」

「・・・では、私達の障害にはならないと解釈してよいのだな？」

「私はあんた達が好きなの。まあ、手助けをするつもりもないけどねー!」

ルルドは笑顔でそう答えた。てんとは破壊神に会いに行く事をどうやって知ったのかを問い掛けた。不思議がっているてんにルルドは言った。

「統括者同士の対立・・・特に徳寿とピサロのかしら。以前から十六善神の間でも有名な話だったわ。いずれ、徳寿が同じ統括者であるハデスと破壊神に助けを求めることは明らかだった。てんとちゃんとは徳寿と関係が深いことは知っていたし、間違いないって確信したのよ。」

「なるほどな。しかし同じ統括者のハデスはわかるが破壊神もそうなのか？」

「元よ、元。こんなことを話して私の身も危険だけどピサロの組織は相当デカイわよ。気を引き締めてちょうだいね。」

そう言い残すとルルドはその場から去っていった。てんともしばらくその場に残っていたが、険しい表情をしながら会場に戻っている。敵？十六善神？破壊神？組織？タカヒトは話をこっそり聞いていたが理解が出来なかった。わからない事だらけではあるが今はてんとを信じて着いて行くしかない。ギガスとの戦いで、てんとの風がなかったら今ここには存在していないのだから。「てんとを信じよう。」そう自分に言い聞かせるとタカヒトはミカ達のいる会場にひとりで戻った。

その後はルルドの計らいでコロシウム近くのホテルに一泊するこ

とが出来た。ホテルの最上階を貸切り、フロアをポンマンが舞うように飛び回っている。

「タカヒト、大浴場があるぞ！早く入ろう。」

ポンマンに強引に誘われてタカヒトは大浴場へ向かった。デカイ湯船にライオンらしき置物の口から大量の湯が滝のように流れていた。眼を輝かせたポンマンはタカヒトと滝のなかに入り「修行だ！」といって少しの間ふたりは滝に打たれていた。

「よし、タカヒト！次はあれだ」

滝に打たれるのに飽きたポンマンは洗い場の床に石鹸を泡立てると勢いをつけてヘッドスライディングをして滑った。その姿を見たタカヒトは急にうずうずしてきてポンマンに続いて滑った。

「これ楽しいね！」

ポンマン、あの桶を重ねてどっちが沢山倒せるか、競争しようよ。」

「オツケー、もちろん勝つのは私だぞ！」

ふたりは桶を集めるとそれを重ねてタカヒトから滑りだした。ボーリングのように勢いよく桶に当たると「カラカラン」と音を立てながら崩れていった。タカヒトが目を輝かせて喜んでいるとポンマンも続けて滑った。貸切の大浴場をタカヒトとポンマンの笑い声が響いている。隣の大浴場ではリナとミカが湯船に浸かっていた。

「なんか、楽しそうね。それにしても今日のタカヒトはカッコ良かったわね。ミカもいままで以上にタカヒトのことが好きになった

んじゃない？」

「なっ、……私は……。」

真つ赤な顔をしたミカは顔の半分を湯船に沈めてしまった。しかしリナの言ったことは当たっていた。人道の世界ではミカがタカヒトを守っていたのにこちらの世界に来てからのミカはタカヒトに助けてもらっている。守られる喜びとタカヒトへの想いがミカの意識の中に少しずつ芽生えていった。

「てんと？電気もつけないで……お風呂には入ったの？」

「いや……後で入る。」

タカヒト達が部屋に戻ると真つ暗な部屋にてんとがいた。照明電氣をつけたミカも心配をして声を掛けたがてんとは反応はいまいちであった。ミカ達もてんとが悩みを抱えているのはわかってはいたがてんとは悩みを打ち明けることはしなかった。沈黙が続く中、声をかけたのはタカヒトだった。

「ねえ、てんと。悩んでいるのって十六善神や破壊神の事？」

タカヒトの言葉にてんとは動揺してリナは顔を急に蒼くした。冷静沈着なりナが身体を震わせたその姿をミカは初めて見た。

「タカヒト……今、十六善神って言ったの？」

「えっ……うん。この前の祝賀会で偶然ルルドとてんとが話をしているのが聞こえちゃったんだ。そのことを悩んでいるのかなって思っ……それがどうかしたの？」

「わかるように説明してほしいわ。何も知らないまま、戦うのはゴメンよ！」

リナが普段は全く見せない険しい表情でしかも強い口調でてんとに言った。これにはミカもタカヒトも驚いた。リナがこれほどまで感情を出した事を見たことが無かったからだ。しかしそれだけ十六善神の存在が恐ろしいものだという事だ。リナに言われたてんとは少しの沈黙の後、口を開いた。てんとが話を始めて数分経ったのだがそれはあまりにも唐突で想像を絶する話だった。リナが驚愕の表情をする。

「地獄道の破壊神への密会、天道のピサロ、十六善神。危険が多すぎるわ！」

「・・・たしかにその通りだ。しかし私ひとりでも行かなくてはならない。」

「どうしてなの？ 徳寿さんに命令されたからなの？」

「たしかに命令ではあるがこれは六道の世界を混乱に導く恐れがある！」

てんとは地獄道と天道の間に戦争が勃発すればその波及はほかの世界にも及ぶ事を恐れていた。ピサロが何を企んでいるのかはわからないが破壊神の協力が両者の戦争開始を阻止するのに必要不可欠だった。てんとはたとえひとりでも破壊神に会いに行くと断言している。

「僕も一緒に行くよ！」

「タカヒト、今回はいままでは違う。ルルド級の使い手が次々と現れるのだぞ！」

「僕はてんとがいたからこそまで来れたんだ。僕はてんとを信じて一緒に行くよ。」

「タカちゃんの言う通りだよ。世界の混乱なら私達にも関係がある事なのよ。てんとはひとりじゃないんだからね。」

「そうだ、そうだ！ミカの言うとおりだ。及ばずながら力を貸そう。」

「ポンマン・・・タカヒト、ミカ・・・感謝する。」

「まったく・・・仲間って大変ね。私も行くわ。仲間だから。」

てんとはタカヒト、ミカ、リナ、ポンマンの四名の仲間を得て破壊神のいる大焦熱地獄へ向かうことを決意した。

門の鍵

「ふう〜、やっと着いたわね。デュポンのヤツ、ちゃんと留守番してたかしら？」

タカヒトやリナに敗北を喫したりディーネは破壊神によりその能力を高められ大手を振ってデュポンの待つ住処へ戻ってきた。もちろんここまで戻ってくるのにいくつもの魔物を相手にしてきたのだが力を得たりディーネの敵ではなかった。以前にも増して態度のデカくなったりディーネが住処のドアを開けるとディポンが驚いた。

「あつ、姉さん！お勤めご苦労様でやした！」

「あのさあ〜、別に出所してきた極道じゃあないんだからね。長旅で腹が減ったわ。」

「へい、姉さん！」

デュポンはすぐに料理の仕度を始めた。ひっそりしていたデュポンの住処からモクモクと煙が上がりはじめ。しばらくしてテーブルの上には沢山の皿が並べられてリディーネは美味しさそうに食べている。

「ちょっと、アンタ！腕上げたんじゃない？」

「へい、姉さんのお勤め中に料理の勉強をさせていただきやした。」

「お勤め中って……ま、まあいいわ。」

「ところで姉さん！姉さんのお勤め中にギガスの使いなる者がやってきてこの手紙を渡してほしいとのことでした。」

デュポンから手紙を手渡されると目を通した。その手紙にはタカヒトと呼ばれる少年と決闘をして敗れ去ったギガスの事が書かれていた。ギガスを失ったことによりヘルズ軍団は解体、屋敷も競売にかけられたらしい。この手紙を読んでいたリディーネの姿を見たデュポンはあの時をこう振り返った。

「あの時の姉さんは悲しむ表情もなく、いつものように感情を表さず……」

「いったいお勤め中に何があったのだらうと心配しやした。」

リディーネは立ちあがると手紙を燃え盛っている暖炉の中に投げ捨てた。燃えていく手紙をジッと見つめているリディーネの横顔は笑みを浮かべているようにも見えたとデュポンは語っていた。その日のリディーネは風呂に入って長旅の疲れを落とすすぐに就寝した。そして次の日、リディーネはデュポンに旅立ちの用意を言い付けた。

「旅支度でやすか？」

「そうよ！奴らは破壊神を倒し、地獄の支配を狙っている。奴らを止められるのはこの私だけよ！」

「姉さんひとりを行かせる訳には行きやせん。」

「今度はこのあつしもついて行きやす！」

「ふん……好きにすれば。」

デュポンは自ら火をつけて住処を燃やした。二度と戻らない、戻れないという覚悟を胸に一路大焦熱地獄目指して歩き始めた。

「ねえ、てんと。どうやって大焦熱地獄に行くの？」

「大焦熱地獄へ行くには門があるのだが鍵が必要らしい。」

「ふう〜ん・・・それでその門の鍵ってどこにあるの？」

「わからない。」

「・・・えっ、知らないの？」

タカヒト達が驚くのは無理もなかった。しかしてんども門の鍵がどこにあるのかわからなかった。ただ、大体的見当はついているらしい。

「一つ目は大叫喚地獄城、二つ目は蒸気の国、三つ目は大叫喚地獄海底の三箇所はどこかにあるらしいのだ。」

「三箇所・・・やはり、十六善神が関わっている可能性がありそうね。」

「大叫喚地獄城を支配しているのは十六善神のひとり豪傑のジャンス、蒸気の国を支配しているのは同じく十六善神のガル、そして大叫喚地獄海底を支配しているのもちろん十六善神の化鯨となっている。」

「簡単に渡してくれそうにないわね。」

「ねえ、どうして門の鍵を天道の十六善神が持っているの？」

破壊神を警護しているの？」

「警護しているわけではない。」

てんとは徳寿の話の思い返していた。それは地獄道を治めていた閻魔大王が敗れ破壊神に支配された時のことだ。当時、閻魔大王は天道より派遣され地獄道を治めていた。閻魔大王は圧倒的な力を誇示しており地獄道で逆らう者は誰一人といなかった。しかし破壊神は違った。地獄道の何処に存在していたのかは分かっていないが突然現れた破壊神は地獄道を攻撃すると閻魔大王を討ち取り完全に掌握した。

「閻魔は何をしていたのよ！ジャンスとガル、化鯨を呼びなさい！・・・早く！」

天道最高協議委員会で協議の最中だったピサロは激しい口調で配下の者を呼びつけた。指示を受けると配下の者は走って部屋を出ていった。それは天道最高機密機関で統括者達が集まっている一室での出来事だった。統括者は五名なのだが二名の欠員を出している上、ハデスは参加せずピサロと徳寿のふたりだけが部屋にいた。

「何をする気じゃ？」

「あの憎たらしい破壊神を地獄道の奥底に閉じ込めるのよ！」

「ピサロ様！ジャンス様、ガル様、化鯨様が到着されました。」

しばらくして、配下の者がジャンスとガル、化鯨の三名を連れてくるとピサロは大焦熱地獄の上に大叫喚地獄を造り、そして二つの地獄の間に門を設置するように命令した。大叫喚地獄の門はこうして出来あがったのだった。破壊神を天道や外敵から守る為ではなく破壊神を閉じ込めておくための門なのである。

「まあ、こんなものでしょう。上々だわ。」

地獄道の最深部である大焦熱地獄は乗っ取られたものの何とか全地獄支配を免れたことに快くしたピサロ。配下の者から受け取った門の竣工図と書類を眺めながらニヤリと笑みを浮かべた。門ができた理由など知るわけもなくタカヒトは納得したようにてんとに聞いた。

「門を通り抜けるにはやっぱり鍵が必要なんだね。
ところで何処から行くつもりなの？」

「何処からでもいいのだが・・・そうだな、大叫喚地獄城から捜索する。」

今回は別行動をせずに四名で行く！」

「何で大叫喚地獄城からなの？」

「・・・特に意味はない。」

豪傑のジャンス参上

「俺は負けねえよ！」

「ジャンス様、何も勝負していませんけど・・・」

「何？おまえは戦いを挑んできたのではないのか？」

「部下の私が何故、城主のあなた様に戦いを挑まなければならぬのですか。」

「なんだ・・・違うのか・・・」

「・・・」

この訳のわからない事を言っている男こそ大叫喚地獄城の王であるジャンスだ。十六善神の中で最も怪力を誇り、自慢の筋肉をプルプルさせているジャンスは脳みそも筋肉でできているようだ。汗をかきながら配下の者は説明をしたがジャンスにはなかなか理解出来なかった。

「よく、わからないんだが・・・」

「あああゝもう、だからピサロ様からの指令でこの城に敵が攻め込もうとしている可能性があるからそれを阻止しろってこと！」

「・・・！ 敵が来るって事か？」

「さっきからそう言ってるでしょ！」

「俺は負けねえよ！」

「わかった、わかった。じゃあ伝えましたからね！」

王座に座っていたジャンスだったが実は最近運動をサボり、酒を飲みまくっていたせいお腹の膨らみが気になっていた。鎧も身に着けず剣もここ何年も振っていない。腹の肉をつまみながらいろいろ考えた。

「よおしくし、運動でもするか！敵が来る前に身体を鍛えておかないとな。俺は筋肉も負けねえよ！」

王座から立ちあがりジャンスがトレーニングを始めた頃、タカヒト達は大叫喚地獄城を見下ろせる針山の頂に来ていた。大叫喚地獄城は城下町に囲まれるように建設されてその周囲は巨大な壁が張り巡らされている。

「どうやって侵入するつもり？」

「問題ない。すでに手はずは整えてある。」

リナはてんとの回答に少し疑問を感じていた。城はもちろん城下町も部外者の監視体制は整えられて夜間であろうと上空であろうと侵入者と判断されれば、確実に仕留められるであろう。

「暗くなるのを待って行動する。それまで少しの間、休むことにしよう。」

そう言い残すとてんとはタカヒト達から離れて何かの準備を始め

た。懐疑の表情を浮かべているリナの肩を軽く触れるとミカが口を開いた。

「リナ、てんとは何か考えがあるのよ。今はてんを信じよう。」

「……………」

ミカに促されてリナも休憩を取る事にした。陽は傾いて辺りが暗くなるとてんとはタカヒト達を呼び集めた。完全に闇の支配する世界に変わると城下町に明かりが灯る。

「さて、城下町への侵入を開始するぞ。」

「えっ？どうやって？……………！ なんだ！あれ？」

タカヒトが驚いて指をさした方向には沢山の花火が打ち上げられた。城下町に住む者達はその爆音と花火の輝きに驚き目を奪われている。タカヒト達もしばらくの間、花火に見惚れていたがこれがてんとの仕掛けた作戦だと後で気づいた。

「見惚れている場合ではない。行くぞ、緑玉理力 浮遊フワフワ！」

てんと達の身体が地上からフワリフワリと浮き上がっていく。花火の打ち上げられている方向と逆側にある針山の頂から一気に城下町へ向かって、てんと達は降下していく。打ち上げられている花火に夢中になっている城内の者達に気づかれることもなく無事、進入することができた。

「うまくいったね。でも急降下はちょっと怖かったね、ミカちゃん。」

「ねえ、タカちゃん。見て！」

町のはずれに降りたタカヒト達は物陰に隠れながら打ち上げ花火をずっと見つめていた。打ち上げ花火が輝く瞬間だけ見えるミカの横顔をタカヒトは花火のことなど忘れて見つめている。しかし不思議なことは何故、花火が打ち上げられているということである。その疑問をポンマンがてんとに問い掛けた。

「誰が花火を打ち上げているんだい？」

「花火か？・・・それは企業秘密だ！」

「企業秘密って・・・」

そんなこんなで花火の打ち上げが終了して暗闇が支配する世界に再び戻ると城下の町人達も家の中に入ってしまった。てんとは迷う事もなく、タカヒト達を連れて誰も使用していないらしき長屋のドアを開けた。

「とりあえず、今夜はここで休むことにしよう。町人にはれないように変装用の服も用意してある。明日からはそれを着て行動する。」

「ねえ、てんと。どうして教えてくれないの？花火に長屋、それに服まで用意してあるなんておかしいと思うわ！」

「リナ、我々の行く先には敵ばかりがいるわけではない。協力者

もいるということだ。もつとも今のところだけかもしれないがな。」

「……………」

静まり返った花火の打ち上げ現場では大叫喚地獄城の城下町をルルドが眺めていた。たばこを一本手にすると火をつけて一服した。

「てんとちゃん達は無事に侵入できたかしら？さて、花火も打ち上げたし私もお役御免ね。あゝあゝ…次は打ち上げ花火をイケメンと一緒に見たいわ。」

協力者のおおかたの検討がついたリナとミカは納得すると布団に入った。もちろん、タカヒトとポンマンは協力者のことなど考えることもなく、布団に入った瞬間眠ってしまった。そして夜が明けて城下町が明るくなってきた頃、ミカが心配そうな表情でタカヒトに言った。

「ねえ、タカちゃん…この格好って変じゃない？」

「別に…………変じゃないよ。」

ミカは城下町での変装用の服を着ることに物凄い抵抗感を感じていた。頭には鬼のような角をつけて裾が膝上の紫色のワンピースに黒色のブーツ姿。そんな格好をしたミカが恥ずかしそうにタカヒトに聞いてきたのだ。タカヒトはミカの姿に見惚れて問い掛けに答えるのに戸惑った。

「リナのもすごいなあゝ。」

ポンマンはリナの姿を見て声をあげた。ミカのワンピースに対し

てリナは黒いシャツにショートパンツ、それにブーツという服装であつた。

「どうしてこんな格好する必要があるのか説明してくれる？」

「説明って・・・リナ似合っているしいんじゃないか？」

「ポンマンはちょっと黙ってて！」

「・・・」

「落ち着いて外を見てみる。」

「外？」

てんとに言われリナとミカが長屋の窓から外を見た。確かに城下町を歩いている者は皆同じ格好をしていた。この大叫喚地獄城の城下町の城下町の者の間では今、頭に角、ミニスカートにブーツというファッションが流行っているらしい。最初、てんともルルドの話を疑って聞いていたがそれが事実だと知り、受け入れた。流行っているファッションだと信じたミカとリナは不満ではあつたが納得せざるえなかつた。

「ところでてんと・・・私達の服装もやはり流行っているファッションなのか？」

ミカとリナの服装は流行りのファッションのだがポンマンやタカヒトの服装は表が黒で裏が赤というマント姿でそれ以外に変化はない。

「その通りだ！ポンマンとタカヒトが身に着けているマントはこの大叫喚地獄城の主であるジャンスを尊敬している者が好んで身に着けているらしい。」

「僕、別に尊敬とかしてないけど・・・」

「タカヒト尊敬しろとは言ってはいいない。ただ、このマントを身に着けていればこの城下町で違和感がない・・・我慢してくれ。」

てんとの説得で何とか納得したタカヒト達は長屋の扉を開けると城下町を歩いていった。大叫喚地獄でこの城下町は規模が大きくタカヒト達を見て侵入者と疑う者はひとりもいなかった。流行のファッションをした若者達にしか見えならしい。

「腹が減った・・・」

不安と恐怖が安心に変わったポンマンは近くにあった食堂へ皆を連れて入っていく。食堂の中には屈強の肉体を持ったヘルズやデモンズが数匹いた。しかしこれらのヘルズやデモンズは三獣士に仕えていた者達では無いようでタカヒト達の姿を見ても気にも止めなかった。

「大叫喚定食を四人前お願い。」

「へい、しばらくのお待ちを。」

店主がすぐに作って定食を持ってきた。割と普通な感じの定食で量もそれほど多くはなかった。店主は最近、ヘルズやデモンズ達の肥満化が進んでいて、城の条例によりヘルシー志向が定着しつつあると語った。タカヒト達にとっては丁度いい量だが、ヘルズ・デモ

ンズ達からは不評らしい。タカヒト達は定食を食べ始めると後の席でヘルズ達がタカヒト達のことを話した。

「ホントに侵入者が入ってきたのか？」

「そうらしいぞ！なんでも屈強な肉体をした大男達らしい。ジャンス様もそいつらとの戦の為に身体を鍛えているらしいぞ。」

「俺たちもジャンス様のお力添えが出来るように鍛えようぜ！」

「おおよ！とりあえず5トンのバーベルから始めようぜ！」

ヘルズ達は定食を食べ終えて身体を鍛える為ジムに向かった。てんとうが笑みを浮かべたのはいうまでもなかった。城下町に出回っているタカヒト達の情報が全くのデタラメだったからである。これにより城下町の探索及び城への侵入が容易になった。食堂を出たタカヒト達にリナからひとつ提案があった。

「あんな情報が流れているならとりあえずは安心だわ。ねえ、てんと。二手に分かれて城と城下町を探索しない？」

「そのほうがより安全かもしれんな。日が沈む頃にここに集合しよう。」

「決まりね！それじゃあ・・・タカヒトとミカ、私とてんとにポンマンの二手に分かれましょう。」

リナはミカにだけわかるようにウィンクをして見せた。こうしてミカはタカヒトと城下町をデート・・・いや、探索することになった。

ふたりの時間

「えへっ・・・なんか楽しいね。」

「何か言った？」

「ううん・・・何でもない。」

ミカは嬉しそうにタカヒトの手を握るといろいろな店を見てまわった。最初はちよつと困惑したタカヒトだったがその嬉しそうな笑顔に次第に惹かれていった。それでも恥ずかしさだけは残り、会話も不器用な言い方しかできないタカヒトだった。

「そつ、そついえば幼稚園に通ってた頃は・・・こつやつてミカちゃんの手を握って一緒に家に帰っていたよね・・・。」

「うん？何か言った、タカちゃん？」

「ううん・・・何でもない。」

久しぶりに握ったミカの手は小さくて細かった。幼稚園の頃は大きかった身長も今ではタカヒトの方が大きい。気付かない内にミカはか細く、タカヒトにとって守るべき存在になっていった。そんなことをタカヒトは考えているとミカは急にショーウィンドウの前で立ち止まる。

「綺麗ねえ〜。」

ショーウィンドウには綺麗なドレスを着たマネキン人形が並べら

れてミカはそのドレスを見てウツトリしていた。ドレスを着たマネキンの隣にはバッチリ決まったスーツを身にまとったマネキンもいた。中には何組かのアベックが衣装を着ている。どうやらウェディングをサポートするシヨップのようだ。ウェディングに異常に反応したタカヒトは急に顔が真っ赤になった。

「デュポン、あれ見てよ！アベックがイチャついてムカつくわね！」

「そんな事言つて姉さん、羨ましいんでやすか？」

「ガツン」と頭を叩かれたデュポンはペコペコと頭を下げながらリディーネの後をついていく。タカヒト達を追つてリディーネとデュポンがこの城下町に辿りついたのはタカヒト達が潜入した次の日だ。タカヒトとミカはそんなことに気がつくこともなくシヨウウィンドウをずっと見つめていた。一方、てんと達はタカヒト達とは別の方向へ進んでいた。

「あれ見てよ！なんかマジックみたいなのやってるよ。あそこに行こう。」

ポンマンは町人達が騒がしく集まっているところに走っていく。目を輝かせてマジックを見ているポンマンに少しウンザリ顔のてんとであった。

「やれやれ・・・」

目に映るものすべてあの調子だと搜索など出来そうにないな。」

「たまにはいいんじゃないの。てんともいつも気を張り詰めていないでポンマンみたいに気楽に見てまわったら？」

「・・・そんなに私は気を張り詰めているように見えるか？」

「そうね・・・見えるわ。」

「そうか・・・」

てんとはいままで心の底から笑ったことがない。与えられた指令を達成してはまた次に与えられた指令を達成していく。物事を達成していくのに執着していてそのプロセスを愉しむことなどなかった。それは心に余裕がなかったからかもしれない。

もしかしたらジェイドはそれがわかっていたから友達のいないてんを誘っているいろんな場所に連れて行ってくれたのかもしれない。てんとはそんなことを考えていた。

「搜索に集中するようにポンマンを呼んでこようかしら？」

「いや・・・しばらくポンマンに付き合っことにしよう。」

「そう・・・わかったわ。」

リナとてんとはポンマンと一緒にマジックを見ることを決めた。以前、てんとはポンマンと共にヘルズ達にマジックを披露したことがあった。ポンマンことポリックのマジックは三流ではあったがヘルズ達はとても喜んでくれた。そんな事を思い出しながらしばらくマジックを眺める。

タカヒトとミカはショーウィンドウが立ち並ぶ街道をゆっくり歩いていた。小学校に入ってからミカは女子児童と行動するようになった。リタカヒトは嫌々ながらではあるが大樹達と行動するようになった。ミカとの心の距離が次第に離れていくのを寂しく思っていたタカヒ

トにとってこの瞬間はとても幸せに思えた。ミカも最初は恥ずかしかついていた服も街道を歩くアベック達が同じような格好をしていたのでそれほど恥ずかしくはなくなっていたようだった。

「本当に流行っていたんだね、この服。アレ？あの集団・・・何だろう？」

ミカが視線を向けた先にはヘルズ達が四列になって行進をしてきた。集団中央部には駕籠かしょを担ぐ四匹のヘルズがいる。タカヒト達の前にはヘルズの行列が近づいてくると近くにいたアベックがタカヒト達を街道の端に連れて膝をつくように座らせた。ヘルズの行列はタカヒト達の前を通り過ぎていくと頭を下げていたアベックが言った。

「あなた達、ダメじゃない！姫様の行列が通るのに頭を下げないなんて！」

「・・・姫様？」

アベックはタカヒト達が姫について何も知らないことに驚いたが最近こちらに来たことを伝えると詳しく教えてくれた。姫様とは大叫喚地獄城の主であるジャンスの一人娘で名をサクヤと言う。サクヤ姫は城で生活をしているのだがたまにヘルズを率いて大叫喚地獄草原に遊芸に向かうらしい。

「ポンマン、どんなお姫様だと思う？」

「タカヒト、お姫様って言うくらいだからおしとやかで・・・
やっぱり可愛い感じじゃないのか。」

「もしかしたらわがまま姫かもしれないわよ。」

「ええ、そんなあ……。」

リナの冗談まじりの一言に姫様への妄想をブチ壊されたポンマンはすっかり落ち込んでしまう。長屋に戻っていたタカヒト達は城下町の探索情報を話し合っていた。

タカヒト達の仕入れた情報ではジャンスは親バカで一人娘に物凄く甘いらしく姫様が遊芸に向かう時には城の兵士の半分を行列に加えるらしい。そしてなんと達が仕入れた情報ではジャンスは対侵入者のトレーニングのしすぎで筋肉痛が酷くベッドで寝たきりとのことらしい。

「兵士の数とジャンスの体調を考えると城への侵入にはいいタイミングだな。」

「そうね、警備が手薄な今がチャンスかもしれないわね。」

この考えに反対する者はいなかった。明朝、城への侵入を試みる事とした。侵入箇所はすでに決めてあり準備も出来ているとてんとは自信を持って言った。皆が寝静まった頃、タカヒトは少し不安でなかなか寝付けなかった。ヘルズはともかく十六善神とは初対面でありいくら筋肉痛が酷くてもその能力がどれだけあるのかは全く未知数だったからだ。隣にはミカが安心してきつた表情で眠っていた。考えてもなにも変わりもなさそうだと感じるとタカヒトはうつ伏せになり枕で頭を覆って瞳を閉じた……。朝日が昇り始めた頃、タカヒト達の作戦は決行された。

「案外、簡単に入れたわね。」

「リナ、油断するなよ！」

タカヒト達はすでに大叫喚地獄城内にいた。昨日でんと達が城周辺を探索した結果、南門からの侵入が可能なことがわかった。城は敵の侵入を防ぐため周囲に堀が掘られているがカラクリ橋が一箇所だけ設置されてヘルズが操作しているのをてんとが確認していた。それを操作すれば橋が水中から現れて渡れるようになっていた。操作するべく南門へ向かうといつもは水中に沈んでいるカラクリ橋が現れて通れるようになっていた。

猜疑心を感じながらも結果的にタカヒト達は城内へ侵入できたのである。城の内部はヘルズ一匹もおらずなり二階まで来る事が出来た。割と広い石畳の廊下がずっと続いている。タカヒトが先頭に立ち歩こうとするとポンマンがタカヒトの肩を掴んで制止させた。

「この廊下はたぶん・・・カラクリが仕掛けられているぞ！」

「カラクリ？」

「そうだ！この長すぎる廊下はカラクリが仕掛けられているはずだ。床を踏むとスイッチが入り壁から矢が出るか、床が抜けて針穴に落ちるかだ。こういう時、経験がものをいうんだぞ。皆、待っていてくれ。私が確認してくる。ことは慎重にだ！」

ポンマンはタカヒトを押し退けるとひとりだけで廊下を慎重に歩いていく。タカヒト達はその姿を、固唾を飲んで見守っている。一歩一歩ゆっくりと、しかも慎重にポンマンは廊下を進んでいくが床のスイッチにはまだ触れてはいない。

「まだまだ！いつスイッチに触れるか、わからない。そこで待っている！」

タカヒト達を制止させているポンマンは更に廊下を進んでいく。ポンマンの姿がタカヒト達から次第に小さく見えるとポンマンは廊下の端で立ち止まった。

「ただの長い廊下だったんだね。僕、すっかり騙されちゃったよ。」

「タカちゃん、ポンマンが気にしてるから駄目だよ。そんな事言っちゃあ。」

「……………いいんだ、ミカ。」

顔を赤くしながらポンマンは先頭を警戒して歩いていく。長い廊下の先に階段があり、それを駆け上っていく。するといくつも部屋がある場所に辿り着いた。

「すごいね、なんか高級なホテルみたい。」

「ミカ、ホテルって何？」

「ホテルって言うのはねえ……………」

ミカの説明にポンマンもリナも耳を傾けて聞いた。その説明通りの内装をしておりすべての部屋は重量感のある高価なドアが取り付けられていた。タカヒト達は慎重にひとつひとつの部屋を開けて確認したが誰もいない。

「誰もいないのかなあ？」

「気を抜くな、タカヒト！……………敵は近くにいるかもしれない。」

「だってさっきからポンマンそんなこと言ってるけど誰もいないじゃん！」

「……………」

「誰だ！騒がしいぞ！！」

一番奥の部屋から怒鳴り声が聞こえた。ビツクリしたタカヒトとポンマンは顔を見合わせて目をクリクリさせていた。

「誰かいるのか？大至急、俺の部屋にすぐに来い！」

「なんか怒ってるみたいだよ……いやだなあ。」

タカヒトとポンマンは廊下を恐る恐る進んでいくと一番奥の部屋のドアをゆっくり開けた。そこには全長三メートルくらいはあろう大男がうつ伏せになって寝ていた。

「おおお、来たか！んっ？お前等、誰だ？盗人か？俺は負けねえ〜！」

「別に盗人って訳じゃないんだけど……おじさんどうしたの？怪我してるの？」

「お穰ちゃん、良く聞いてくれた！実はな……」

涙を浮かべながらジャンスはうつ伏せのまま話を始めた。てんとも気にしていたが、この大叫喚地獄城に誰もいないのには理由があった。

「クーデター？」

「我が兵士どもはひとり娘のサクヤ姫を人質に城の明け渡しを要求してきおった。」

「それで兵士が誰もいなかったのか。だがクーデターなら自分の力で制圧できるのではないのか？」

「そのつもりだった・・・だが侵入者を退治しようとトレーニングをしていたらギックリ腰で腰を痛めてしまってこのザマだ！そこでお前達に頼みたいことがある。」

「頼みたい事？」

兵士宿舎のサクヤ姫

「・・・なんか変な事になっちゃったね。」

タカヒト達は城下町のはずれにある兵士宿舎に来ていた。宿舎は城に収まりきれず増えすぎた兵士が寝泊りをするために建設されたらしいのだがヘルズ達の姿は見えなかった。しかしあまりにも大喚地獄城と近すぎる場所での出来事にリナは懐疑心でいっぱいだった。

「本当にクーデターなんてあるのかしら・・・ねえ、ミカ。」

「うん・・・もしかしたら騙されているのかな？」

「どちらにしても行くしかあるまい。」

門の鍵の手がかりがあるかもしれないのだしな。」

「よし！それじゃあ、行こう。」

ポンマンの号令で宿舎内へと潜入していく。歩きながらタカヒトはジャンスに言われた事を思い出していた。それはジャンスが大喚地獄城で一人娘のサクヤ姫の救出を願った時の事だった。

「盗人であるお前達に兵士宿舎に捕らわれているサクヤ姫の救出を頼みたい。」

「盗人ではないのだが・・・まあいい。」

救出に成功した場合の報酬は用意してあるんだろうな？」

「もちろんだ！約束しよう。画家に書かせたサクヤ姫の肖像画があるからそれも確認しておいてくれ。サクヤ姫は人見知りをするウブな子だから事は慎重に頼むぞ！」

てんとはジャンスに渡された兵士宿舎の構造図を確認すると古い井戸を見つけた。蓋を開けると井戸は枯れていて構造図の通りの施工をされていた。この井戸は地下通路に空気を送り込む通気口となっている。兵士達が速やかに行動を起こせるように大叫喚地獄城と兵士宿舎を繋ぐ地下通路だったが今では大叫喚地獄城側の通路は破壊されて通り抜けは出来ない。

地下通路に降りたてんとはヘルズがないことを確認するとタカヒト達に降りるように命じた。地下通路は壁にたいまつが数本設置されているだけの薄暗い場所だった。歩いている途中でポンマンがタカヒトにサクヤ姫について語り出した。

「それにしてもサクヤ姫って可愛かったよね。なんか清楚な感じがしてさ！」

タカヒトもそう思っただろ？」

「うん、そうだね。」

「ふう〜ん・・・タカちゃんって清楚な感じが好みなんだ！」

「ちっ、違うよ、ミカちゃん！ポンマンに合わせただけだよ。」

「別に気にしてないわよ！」

「ミカちゃん・・・」

ポンマンが腹を抱えてゲラゲラと笑っている横でタカヒトはミカ

に必死になつて言い訳をしていた。そんなこんなで地下通路を歩いていくと牢屋らしき部屋についた。リナはいくつかの牢屋部屋を捜索したがサクヤ姫らしき姿は確認出来なかった。ヘルズ達のクーデターに巻き込まれたサクヤ姫が牢屋にいないことが確認されたことによりリナの懐疑心は確信へと変わり始めていく。

「騙されたかもしれないわね・・・あのジャンスとかいう十六善神の策略にまんまとのせられてしまったかもしれないわ。」

牢屋の先に設置されていたハシゴを登っていくとエントランスに出る事ができた。広いエントランスには豪華なシャンデリアが吊るされている。兵士宿舎というにはあまりに豪華すぎる建物なのだが、ジャンスの趣味なのだろうか。ここまで来ると数匹のヘルズがいたるところにいてなにやら深刻な表情をしながら話をしている。

「こんなことをして大丈夫なのか。」

あの方は問題ないと言っておられたがジャンス様を怒らせてしまった。」

「こうなってしまった以上、後にはもどねえ・・・やるしかねえよ!」

タカヒト達はヘルズ達に気づかれないようにエントランス階段を進むと二階書斎室へ入っていく。ヘルズ達が勉強に励むように造った書斎室は誰も使用したことがなくいつしかヘルズ達の間で開かずの間として封印されていた。書斎室の中でタカヒトは兵士宿舎の構造図を机に広げた。

「さっきの会話を聞くと、どうやらクーデターは本当らしいわね。」

「うむ、しかし問題はどこにサクヤ姫がいるかなのだが……」

構造図を見ていくと二階には書斎室のほかに食堂と居酒屋 男気があるだけで三階と四階はヘルズ達の寢床となっている。

「どこに居るんだろう……アレ？」

「ねえ、てんと。三階の端に来客室って書いてあるよ。」

「よく気がついたな、タカヒト！人質とはいえサクヤ姫をヘルズ達の寢床に連れて行くはずはない。三階の端の来客部屋にサクヤ姫がいる確率が一番高いな。しかしどうやってヘルズの寢床を越えていくかが問題……！ 外が騒がしいな。」

書斎室前の廊下をヘルズ達が勢いよく走っていく。一瞬、タカヒトは侵入したことがヘルズ達にバレたと覚悟を決めたがそうではなさそうだ。走っているヘルズ達はしきりに「あの方がお呼びだ！」と話している。

（あの方？……ジャンス以外に十六善神がこの件に関わっているのか？）

てんとの脳裏に様々な不安要素が広がっていく。二階の食堂には入りきらないくらいヘルズ達が集まっていた。書斎室から食堂に来たタカヒト達の姿を見てもヘルズ達は気にも止めない。ヘルズ達の注目は一箇所に集まっていた。主であるジャンスを裏切ってサクヤ姫を誘拐しクーデターを起こした首謀者が今、ヘルズ達の前に現れた。見たことがあるその者にタカヒト達は驚いた。

「リッ、リディーネ？」

「いいい、あんた達！あんた達がやるって言ったんだからね！途中で逃げたらただじゃおかないよ！」

「お前等、姉さんを怒らせると痛い目みるで！」

てんとは自分の目を疑った。首謀者はジャンス以外の十六善神であり、今回の破壊神への密命を妨害する為に起こした陰謀だと考えていたからである。とはいえリディーネも破壊神の娘なのだし、首謀者なのだから何か陰謀めいたことを企んでいるに違いないとてんとは確信していた。リディーネの激にヘルズ達は顔を蒼くしている。

「ちよつとおくく、いまさら後悔しましたみたいな顔するの止めてくれる！」

「しかし姉さん、ストライキはともかくサクヤ姫様まで連れてこなくても……。」

「何、言ってるのよ！大体あんた達がオヤジのワンマンな行動についていけないからストライキしたいって言ったんでしょ？サクヤだって本人が来たいって着いて来たんだからしょうがないでしょ！」

リディーネの言葉にヘルズ達は黙り込んでしまった。それを聞いていたてんとは肩透かしをくらった。大叫喚地獄城を巻き込んだの巨大な陰謀だと考えていたがジャンスのわがままについていけないと籠城決めた、ただのストライキだった。

「ねえ、てんと。ストライキって何？……てんと？どうしたの？」

「いつ、いや・・・何でもなし。私の心配が過ぎたようだな。とりあえずこの決起集会にサクヤ姫は来ていないようだ。今のうちに三階の来客室へ向かおう。」

少しづつ派手に盛りあがっていく決起集会をあとにしてタカヒト達は来客室へ向かった。ヘルズ達が決起集会を行っていたおかげですんなり辿り着く事が出来た。この部屋にサクヤ姫がいると思うとドキドキが止まらないポンマンはゆっくりドアノブを回した。ドアを開けると部屋の中に女の子が音楽を聴きながらノリノリで踊っていた。

「ウツ、ハ！ウツ、ハ！・・・あっ！」

呆然とするタカヒト達の姿に気がつく女の子は顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。女の子は聴いていた音楽を止めて平然を装おとしている。

「・・・どちら様ですか？」

「・・・サクヤ姫様ですか？」

女の子は軽く頷いた。サクヤ姫はタカヒトより少し背が大きかったがジャンスの言った通りの物静かな感じがした。さきほどの踊りさえなければ・・・。

「サクヤ姫様にお伝えする事が御座います。」

てんとはサクヤ姫にすべてのことを話した。兵士達のクーデターによりサクヤ姫が誘拐されて救出に来たことを話すとサクヤ姫は必

死の表情でそれを否定した。

「違います！彼らは悪くありません。

私が彼らにお願いをして連れてきてもらったのです。」

「しかし、ジャンス様はそうは思ってはおりません。」

「私・・・お父様の思うような娘にはなれません。でもお父様はそれを認めてはくれませんでした。それが息苦しくて・・・でもそれは私だけではありませんでした。兵士の皆さんも同じ思いをしていました。皆で我慢をする日々・・・そんなときにリディーネさんが現れたのです。あの方は本当に自由で・・・とても羨ましかった。この胸の苦しみをあの方に相談いたしました。最初は兵士の皆さんも反対されました。でも私が強引に誘ったのです。彼らは本当に悪くありません！」

涙を浮かべてサクヤ姫は必死に訴えた。サクヤ姫やリディーネそれにヘルズ兵士達の話を聞いてクーデターではないことが確信できた。サクヤ姫もこれほど事が大きくなっているとは考えていなかったようである。ストライキを止めて大叫喚地獄城へ戻ると言った。そしてすべての思いをジャンスに話すとも言った。

「気持ちを伝えないとわからない事もあると思うよ。

私も謝りに行くから一緒に大叫喚地獄城に戻る。」

「ありがとう・・・あなたは？」

「私はミカ。それからこっちがタカちゃんです・・・」

ミカは皆を紹介するとストライキを止めてみんなで大叫喚地獄城

へ戻ろうと促した。サクヤ姫に笑顔が戻るとリディーネを連れてくると言って部屋を出て行った。

「てんと、リディーネを連れてくるって言ってたけど大丈夫かな？」

「さあな、だが誤魔化す訳にもいかない。いちおう、戦闘体勢を整えておく必要はありそうだ。」

タカヒト達はドアから離れ窓際に戦闘体勢を取りリディーネが来るのを待ち構えた。しばらくすると廊下の方からサクヤ姫とリディーネらしき女の声が聞こえてきた。その声は次第に近づいてきてドアがゆっくりと開けられた。

「ちょっと、サクヤ！押さないでよ〜。」

「何なの〜、いつたい・・・あんな達は！」

「ひっ、久しぶり、・・・リディーネ元気だった？」

ボンマンの言葉とタカヒト達の姿を見たリディーネは瞬時に後退すると全身から紅色の輝きを放ち出した。

「何が元気だったよ！あんな達はギガスの仇なんだ！今、仇を取らしてもらっわ！」

「知り合い？」

「ちょっと、サクヤ！コイツ等は友達じゃないわよ。私の仇なの！邪魔しないで！」

「えっ？」

リディーネは紅色の闘気を最大限まで高めていく。サクヤ姫は訳もわからずにただ立ちすくんでいた。タカヒトはそんなサクヤ姫とミカ達の身の危険を感じとり赤色の闘気を高めていく。

次の瞬間、てんとは黒玉を取り出した。リディーネの両腕から部屋中を焼き尽くくほど激しい火炎が出されると、てんがタカヒトより預かっていた黒玉にすべての獄炎が吸収されていく。リディーネも負けじと闘気を全開に高め、火炎を放つが次々と黒玉に吸収されていく。

紅玉闘気業火のすべてを吸収されたリディーネは力尽きたように床に膝をついて座り込んだ。

「ちっ、ちつくしょうおゝ・・・ギガスの能力を使うなんて卑怯だぞ！」

「リディーネよ。ギガスを倒したのはたしかにタカヒトだがあれはギガスより申し出た決闘だった。十六善神のルルドが立会者のもとでな。まあ、信じる信じないはおまえの勝手だが私達はおまえと戦う気はない。十六善神のジャンスに頼まれてこの騒動を治める為にここに来た。」

「・・・・・・・・」

床に座り込んだリディーネは下を向いたまま微動だにしなかった。そんな姿を見たサクヤ姫はリディーネに近寄ると膝をついてリディーネの肩にやさしく触れた。涙を堪えながらサクヤ姫はうつむいているリディーネを見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3722u/>

未来のきみへ

2011年10月28日13時11分発行